本居豐穎　井上頼圀
木村正辭
小杉榲邨　落合直文　監修

國文大觀

10 索引

板倉屋書房

918.K0547M

國文大觀例言

一、本書は國文學著名の古書四十七部を收め、別に之が索引を附す。其の書名及び順序左の如し。

第一編　物語部壹　源氏物語上
第二編　物語部貳　源氏物語下
第三編　物語部參　竹取物語　伊勢物語　堤中納言物語　濱松中納言物語　落窪物語　とりかへばや物語
第四編　物語部四　大和物語　多武峰少將物語　住吉物語　宇治拾遺物語　唐物語　今物語　鳴門中將物語　鳥部山物語　松帆浦物語　秋夜長物語　吉野拾遺
第五編　物語部五　宇津保物語
第六編　物語部六　狹衣物語　古今著聞集
第七編　日記草子部　土佐日記　蜻蛉日記　枕草紙　紫式部日記　和泉式部日記　更科日記　讃岐典侍日記　方丈記　四季物語　艶詞　野守鏡　十六夜日記　轉

国立国会図書館
26.2.5
224495

寮記　東關紀行　中務內侍日記　徒然草　小夜寢覺　庵主　無名草子

第八編　歷史部壹　大鏡　水鏡　今鏡　增鏡

第九編　歷史部貳　保元物語　平治物語　平家物語　神皇正統記

第十編　索引

一、宇津保物語は我が國最古の大小說にして、文辭古雅、筆力雄健、結構壯大、思想健全、寔に王朝文學の巨擘なり。彼の源氏狹衣の如きは宇津保の摸擬のみ。然るに此の書世に傳はるもの錯簡甚だしく次第全く紊れ、從來學者をして讀過する勇氣無からしめたるは、惜みても餘有りといふべし。幸に本居家累代校合する所の善本を藏するあり。編者翁に請ひて借覽の榮を得、更に版本を校合して本書に收む。但し卷の順序未正鵠を得ざるものありと雖、姑く原本に從ふ。尙左の如く改むべきものなること著者の考へ得たる所なり。此の順序によるにあらざれば一讀その要領を得ざるべし。

俊蔭　忠乞　藤原君　春日詣　吹上上　祭使　吹上下　菊宴　貴宮　內侍督　沖津

白波　藏開上　藏開中　藏開下　國讓上　國讓中　國讓下　樓上上　樓上下

菊宴と嵯峨院とその前半は大同小異なるを玉琴の說に據れば嵯峨院の卷の大半は早く亡びしを、後人その殘片に菊宴の卷の異本を加へて今の嵯峨院の卷を成せるなりといふ。編者憶ふに然らず。嵯峨院の卷には源涼未現はれず。東宮、あて宮を思ふ者、傍に在つて之を聞き心深くする意あるを宮の父雅賴にいふ。藤原仲忠はあて宮を入內せしめむとす之を憂ふ。雅賴罷てゝ室大宮にあて宮入內の可否を諮る。菊宴亦同じ事を記す。唯源涼既に現はれ、嵯峨院嘗てあて宮を源涼に配せしむべきを雅賴に命ずる由前卷に見ゆ。當時東宮の言を聞き心密に憂ふる者涼決して仲忠に讓らず。雅賴嵯峨院の命と東宮の命とその孰れに順ふべきか、惑うて之を室大宮に諮る。兩者の差異此の如し。文辭相似たりと雖時と人と同じからず、異本として見むこと穩ならじ。編者案ずるに、宇津保の如き名作、稿を改むること蓋し數回なるべし。作者一たび嵯峨院の卷を書きしも、意滿たずして更に趣向を改め他人物を加へて訂正したるもの是菊宴なるべし。もとの嵯峨院の卷は事柄を改むるか、全然刪り去るか、その孰れにかすべかりけむを、そのまゝに世に傳はりけむ。改むべきものと見れば未定稿なり、刪るべきものと見れば菊宴の草稿なり。編者はその草稿なるべきを思ふ。此の物語此の如き大部にして若かも好く前後相適ひ年月好く合ひ、一點の矛盾を見ず。草稿の世に傳はるまでに苦心せる作にして始めて此の

如くなるを得べきなり。

一索引は本書收むる所の書中に現はれたる事柄の中、主として人名に據り又地理、書籍、官職、有職等の名稱をとり、之を五十音順に排列し、その各條下に之に關する事項を略記しその下に書名と丁數とを記載す。

一人物の別名また索引中に收め、その下に本名を記す。一名稱に據りてその事項を求めたらむ時事項を記せずして唯別に一名稱をあぐるあらば、更にその名稱に據りて再索引を試みるべきなり。

國文大觀索引

あいのみや 愛宮 藤原師輔の女なり多一 藤原高光の出家をなげく多三 藤原高光の北の方と消息を往返す多七 茂りまさりの歌を藤原高光の北方に贈る多七 なぞもかくの歌を源高光の北の方に贈る多九 尼ならでの歌を源高明の北の方に贈る多二 山の井の歌を詠ず多二 消息を源高明の北の方に贈る多二 衣服を藤原高光に贈る多八 きみがための歌を藤原高光におくる多八

あかがりたいふ 胝太夫 高千尾明神の神體なる大蛇の子、緒方惟義の五代の祖なり平家三四〇

あかさか 赤坂 源親行赤坂の宿にて別れぢにの歌を詠ず東七 一條兼良赤坂を越ゑむとしてたゝかひのゝ歌を詠ず藤六

あかし 明石 明石入道明石に於て源氏君を迎ふ源三六 源氏君明石に謫居す源三五 源氏君明石にて夕月夜に琴を彈ず源三五 源氏君、須磨明石に赴くあたりが、源氏物語中の哀なる節たることを女等打ち集ひて批評す無八 後醍醐天皇明石の浦を過ぐ增三〇三 源義經、平家一門の生擒を具して上京するの途次明石の浦に宿る平家五一三

あかしのあまぎみ 明石尼君 明石入道の北の方にして明石上の母なり源三三 中務の宮の孫なり源三六 明石上、明石中宮及び尼君を具して大井山莊に移る源三七 諸共にの歌を詠ず源三八 かのぎしにの歌を詠す源三〇 身をかへての歌を詠ず源三一 住みなれしの歌を、逆鱗に觸れて明石に來る源氏の君に詠みかく源氏いさらねはの歌を以て答ふ源三三 源氏君尼君に契りしにの歌を詠みかく源三四 明石上に源氏の姫君明石中宮を紫上の養女とせむとを勸む源三五 明石中宮と歌を詠ず源三〇 源氏君尼君にたれかまたの歌を贈る尼君源氏の君に住の江の歌を贈る源三二

あかしのうへ 明石上 明石の入道の女なり源八 源氏の君、明石の入道及び明石の上のことを、北山に趣ける時從者より聞く源八 明石の尼君は明石の入道の北の方にして明石の上

の母なり源三三　明石入道明石上を源氏に配せむの意あり源三三　源良清明石上に消息す源三三　明石入道明石上を源氏君に薦む源三三　明石入道詠むらむの歌を、明石上に代りて源氏君に贈る源三六九　源氏君明石上に遠近のゝ歌を贈る源三六九　源氏君明石上にいぶせくもの歌を贈る明石上思ふらむの歌を源氏の君に贈る源三七〇　源氏の君につきて考ふ源三七一　源氏君明石上を訪ふ源三七二　源氏君明石上と通ず源三七三　源氏君明石上にむつごとをの歌を詠みかく明石上あけぬよりの歌を源氏の君に詠みかく源三七三　源氏の君の無情を怨む源三七五　懐姙す是源氏の姫君後に明石中宮なり源三六六　源氏の君と別るゝに臨み琴を彈す源三七七　源氏君明石上にこのたびはの歌を詠みかく明石上かきあつめの歌を源氏の君に詠みかく源三七七　源氏君明石上と留別して京に歸る源三七七　源氏君明石上にうちすてゝの歌を贈る源三七八　なほざりにの歌を源氏君に詠みかく源三七八　明石上源氏の君にあふまてもの歌を詠みかく年經つるの歌を源氏の君に贈る源三七九　源氏の君京に歸る明石上別れを悲む源三八〇　源氏君明石上に歎きつゝの歌を贈る源三八二　源氏の姫君を生む

是後に明石中宮なり源三八六　源氏君、明石乳母をその姫君(明石中宮)の乳母として明石上のもとにつかはす源三八七　源氏君の厚遇を喜ぶ源三八八　源氏君北方紫上に、明石上が己が姫君(明石中宮)を生みたるとを告ぐ源三八九　ひとりしての歌を源氏君に贈る源三八九　源氏君明石上に海松やの歌を贈る源三九〇　紫上明石上がとを源氏君より聞きて暗に嫉妬の意を含む源三九〇　明石乳母、明石上が心に適ふ源三九一　かずならぬの歌を源氏の君に贈る源三九一　住吉に詣でゝ源氏君に邂逅す源三九四　源氏君明石上にみをつくしの歌を贈る源三九六　數ならでの歌を源氏の君に贈る源三九七　源氏君、明石上の繪日記を北の方紫上に示す源三九七　紫上、明石上の繪日記を見る源三九七　源氏君明石上に上洛を勸む源三九八　源氏の君に大井山莊に住せんとするとを告ぐ源三九七　明石中宮及び明石尼君を具して大井山莊に移る源三九七　明石入道その女明石上にゆくさきをの歌を詠みかく源三九八　明石入道明石上を訓戒す源三九九　いきてまたの歌を詠ず源三九九　源氏君明石上を大井山莊に訪ふ源四〇一　かはらじとの歌を詠す源四〇一　ふるさとにの歌を詠みかく源四〇三　源氏君明石上にを源氏の君に詠みかく源四〇三

消息をれ、る源四〇四　源氏君明石上に明石中宮を紫上の養女とせむとを圖る源四〇九　源氏の君明石上に二條東院に移らむとを勸む源四〇九　雪深きの歌を詠す源四〇二　源氏君明石上を訪ひて女明石中宮を二條院に迎ふ源四〇三　源氏君れひそめしの歌を詠みかく明石上末遠きの歌を源氏の君に詠みかく源四〇三　源氏君明石上を訪ひて箏を彈き明石上の琵琶と合奏す源四〇五　源氏君明石上に淺からぬの歌を詠みかく明石上いさりせしの歌を源氏の君に詠みかく源四〇六　源氏君、紫上と朧月夜内侍のかみ及び明石上等のことを物語す源四〇九　六條院に移る源四一四　源氏君、紫上玉蔓上花散里上末摘花明石上空蟬等に春衣を配與す源四一八　年月をの歌をろの女(明石中宮)に贈る源四一三　明石中宮引き別れのめづらしやの歌を詠む源四一四　源氏君年の初めに明石上を訪ふ源四一四　明石上に贈る源四一三　源氏君明石上を訪ふ源四一〇　大方にの歌を詠ず源四一一　源氏の姫君(明石中宮)今上尚春宮たるの時入内して妃となる由つて中宮の實母明石上明石中宮の付添として養母紫上と打ち代りて參内す源四一六　明石中宮實母明石上よりも却つて養母紫上に睦ぶ源四一二　世を捨てゝの歌を詠す源四一〇　明石入道明石上に消息を贈りて春宮の降誕を賀す源四一三　明石入道、住吉の社に祈りたる願文を沉の文箱に封じこめて明石上に贈る源四一四　明石入道ひかりいてんの歌を明石上に贈る源四一四　父明石入道よりの消息を披見してその恩に泣く源四一五　明石中宮を訪ひて父明石入道より贈りたる文箱を見す源四一七　源氏君、明石中宮を訪ひて明石上がもたらせる明石入道所贈の文箱を見る源四一六　源氏君に父明石入道の消息を示す源四一〇　「福地の園に種蒔きて」源四一二　源氏君、紫上明石上明石中宮を具して住吉社に詣づ源四一九　昔こその歌を詠ず源四一六　一明石上紫上とたちならびたるさま五月まつ花橘の花も實も具して押し折れる薫りにぼゆ源四一二　紫上をしからぬの歌を明石上に贈る源四一三　源氏君明石上薪こるの歌を紫上に贈る源四一四　源氏君明石上を訪ふ源四一三　かりが居しの歌を源氏の君に贈る源四一三　源氏君泣くなくもの歌を明石上に贈る源四一三

あかしのちうぐう　明石中宮　明石上源氏の君の姫君を生む是後に明石中宮なり源三八六　源氏君宰相宮内卿の女なる明石乳母を中宮の乳母として明石上の方に遣はす源三八七　源氏君

北の方紫上に明石上が明石中宮を生みたるとを告ぐ源三九　明石上、明石尼君及び明石中宮を具して大井山莊に移る源三七　父源氏の君を慕ふ源四四　源氏の君紫上に明石中宮を子養せむとを囑す源三八　源氏君明石上に明石中宮を紫上の養女とせむとを圖る源三九　明石尼君明石中宮を紫上の養女とせむことを明石上に勸む源三七　源氏君明石上を訪ひて明石中宮を二條院に迎ふ源三三　二條院に移る源三三　紫上明石中宮を迎へ取り子養して寵愛す源三三　袴着を行ふ源三三　紫上と睦ぶ源三三　源氏君明石中宮を訪ひて子日遊びす源四二　明石上年月をの歌を明石中宮に贈る源四二　引き別れの歌を母明石上に贈る源四三　源氏君、明石中宮の教育に注意す源四七　夕霧明石中宮に親む源四七　夕霧明石中宮を訪ひて野分を見まふ源四四　裳着の儀を行ふ源四六　今上尚春宮たるの時明石中宮入内してその妃となる由つて實母明石上、中宮の付き添ひとして養母紫上と打ち代りて參内す源五八　懷姙によりて里亭に下る源六〇　明石上よりも却つて紫上に睦む源六二　紫上と共に朱雀院の女三の宮に對面す源六三　明石の御坊の中の對に移る源六六　御產近きにより御修法をはじむ源六六　今上の春宮を生む源六七　鹽たるゝの歌を外祖母明石尼君に詠みかく源六七　明石尼君老の波の歌を明石中宮に詠みかく源六七　明石上、明石中宮を訪ひて明石入道が贈れる中宮安產の願文の入れる文箱を見す源六七　源氏君中宮を訪ひて明石上が齎せる明石入道所贈の文箱を見る源六六　源氏君、紫上明石上明石中宮を具して住吉社に詣づ源六九　神人の歌を詠す源六七　今上の女一宮の母君なり源六四　再懷姙によりて六條院に退出す源六六　容姿よく咲きこぼれたる藤の花の夏に懸りて傍に雙ぶ花なき朝ぼらけの如し源七一　三條殿に移り源氏の君と共に紫上を看護す源六三　今上のみこ匂宮を生む源七二　源氏君明石中宮及び玉蔓を許す源七五　養母紫上の病篤きにより二條院に退出す源八五　紫上養女明石中宮に遺言す源八六　秋風にの歌を詠ず源八六　內裡に歸る源八六　今上の五の宮は明石中宮の生む所なり源八七　匂宮を教訓す源九六　匂宮、今上及び中宮に、宇治八宮の中の君と通ぜるとを知られて禁束せらる源九一　匂宮に夕霧の六の君を娶らむとを勸む源一〇六　病む源一〇九　源氏君及び紫上のために御八講を行ふ源一一七　大納言の君、

中宮に宇治八宮の中の君の妹浮舟が投身せるとを語る源一二三　侍從、中宮に宮仕へす源一二五　宮の君を迎へ取る源一二五　小野僧都、宇治院にて浮舟を救ひしとを明石中宮に語る源一三三　薫君中宮を訪ひて浮舟の死亡せるとを語る源一三三　薫君に小宰相の君をして浮舟が小野尼君に救はれしとを告げしむ源一三三

あかしのにふだう　明石入道　明石上は明石入道の女なり源八八　近衛中將を捨てゝ播磨守に任せらる源八八　源氏君、明石入道及びその女明石上のとを北山に赴ける時從者より聞く源八八　明石尼君は明石入道の北方にして明石上の母なり源三三　女明石上を源氏の君に配せむの意あり源三三　源氏の君帝の怒を蒙つて須磨に來る明石入道之を明石に迎ふ源三六　源氏の君の前に琴を彈ず源三六　女明石上を源氏の君に薦む源三七　ひとりねのゝ歌を源氏の君に詠みかく源三六　源氏君明石入道に旅衣の歌を詠みかく源三六　詠むらむの歌を明石上に代りて源氏の君に贈る源三六　世を海とのの歌を源氏の君に詠みかく源三九　源氏の君ゆるされて京にかへる入道源氏に餞別の品を贈る源三九　寄る浪にの歌を源氏の君に贈る源三九　源氏君入道に形見にぞの歌をいふ源三九　源氏君入道に都出でしの歌を詠みかく源三九　大井山莊を修理す源三九　ゆくさきをの歌を明石上に詠みかく源三九　明石上を訓戒す源三九　邸宅を捨てゝ寺となし山の奥に籠居す源四三　明石中宮今上の春宮を生む入道乃明石上に消息を贈りて賀す源四三　住吉の社に祈りたる明石中宮安產の願文を沉の文箱に封し込めて明石上に贈る源四四　ひかりいでむの歌を明石上に贈る源四四　明石上、入道よりの消息を披見してその恩に泣く源四五　明石上、明石中宮を訪ひて、入道より贈りたる文箱を見す源四七　源氏君、明石中宮を訪ひて明石上が持參せる入道所贈の文箱を見る源四八　明石上、源氏君に入道の消息を示す源四〇

あかしのにようご　明石女御　あかしのちうぐう　明石中宮源

あかしのひめぎみ　明石姫君　あかしのちうぐう　明石中宮源

あかしのめのと　明石乳母　宰相宮內卿の女なり源氏君明石中宮の乳母として明石上の方につかはす源六七　うちつけのゝ歌を源氏の君に詠みかく源六八　源氏君明石乳母にかねてよりの歌を詠みかく源六八　明石上の心に適ふ

源元一 ゆきまなきの歌を詠す源三一

あかづめえもん 赤染衛門 大江擧周の母なり著九二 子大江擧周が重病の時かはらむとの歌を詠して平癒を貴布禰明神に祈る著九二 大江擧周の重病の時住吉に詣でゝかはらむとの歌を詠し平癒を祈る著一四四 大江擧周の母なり著一四四 「まつとはとまる人やいひけん」無五一 紫のゝ歌を詠す今鏡八 萬代の歌を詠ず今鏡九

あかひと 山部赤人 藤原道長の詩歌の才赤人に比せらる大鏡一四三

あき 安藝 藤原範長を還俗せしめて安藝に流す保八 藤原勝憲、父通憲の事に座して安藝に流さる平治二六 平時忠安藝に流さる平家一四四

あき 秋 夕暮をよしとす枕一

あきいへ 北畠顯家 阿部野にて戰死す芳二 後醍醐の北山の花見に陵王の入あやを舞ふ増一八八 陸奥守となる後村上天皇を奉じて任國に下る正一九九 後村上天皇を奉じて奥州より上洛し大に足利尊氏を破る後和泉に戰死す正二九

あきいへのきたのかた 北畠顯家北方 後の世のゝ歌を詠す芳三 さき立ちしの歌を詠す芳二 出家す芳二 別るれどの歌を詠す芳三 日野資相(朝光)の女なり芳三

あきか 藤原顯香 源有時を殺す後流さる増一六三

あきかた 顯方 後嵯峨上皇の宇治の行幸に供奉す増六九

あきくに 源顯國 源國信の子母は泰仲の女、歌人たり一九

あきこ 藤原彰子 產氣を催す乃加持を行ふ紫四 後一條天皇を生む紫六 受戒す紫六 女房を集めて草紙をつくる紫三 土御門殿より內裡に還る紫三五 藤原道長より物を贈らる紫三六 紫式部彰子に樂府を敎ふ紫四 法成寺に行啓す紫四五 「今はなきねの夢ならで」無二七 女等打ち集りて彰子の人物詞藻を許す無五 後一條後朱雀二帝を生む大鏡一三五 諸堂に詣づ大鏡一四 髮長し大鏡一六 大原に行啓す大鏡一八五 後一條帝、太皇太后彰子に朝覲す今鏡六 出家す今鏡七 上東門院と稱す今鏡七 後朱雀天皇の御母なり今鏡九 後朱雀帝後冷泉帝彰子に朝覲す今鏡二 高陽院に行啓す今鏡二 皇太后となる今鏡二五 太皇太后となる今鏡二五 後一條後朱雀二帝を生む今鏡二五 出家して清淨覺と稱す今鏡二五 道長の第一女なり母は倫子今鏡七一 一條天皇の皇后なり今鏡七二 藤原姞子彰子に比せらる増一六

あきこ 藤原詮子 撫子合を催す著七六 逢坂の關にてあまたゝびの歌を詠す東二 一條帝の母にして兼家の女なり大鏡一七 津の守藤原仲正詮子の外祖父たり大鏡一七 入內す大鏡四八 入道す大鏡二三 藤原伊周詮子を一條院に讒す詮子伊周と疎く道長と好し大鏡一四 藤原道長詮子に報恩す大鏡一五一 一條院に迫つて道長を關白とす大鏡一五二

あきこないしんなう 章子內親王 二條の院と稱す今鏡七 菩提樹院に後一條の御影を畫かしむ今鏡九 後冷泉の中宮となる今鏡一七 藤原威子の生む所なり今鏡一七 御冷泉の中宮となる今鏡七三 二條院と稱す今鏡七三 皇太后となる今鏡七四

あきさだ 源顯定 ㊐源雅俊の子幼名を摩尼君といふ今鏡一七七

あきさだ 藤原顯定 大將を得ずして出家す増六六 後嵯峨上皇の宇治行幸に供奉す増六九 後嵯峨上皇に朝賀す増七三

あきざね 顯實 後醍醐の朝覲の行幸に供奉す増一六七 後醍醐の石清水行幸に供奉す増一七一 正月十六日の節會に參す増一八三

あきしげ 源顯重 源雅俊の子なり母は爲家の女なり今鏡一七七

あきすけ 藤原顯輔 百首の歌の讀み樣に就きて藤原公行を難じ又崇德上皇の勅問に答ふ増九九 藤原重家季經清輔等の父たり著一〇五 うれしきといふ女に懸想す女つれなしの歌を贈る著一〇五 藤原顯季の子なり著一〇八 證尊と連歌す著三三 侍と連歌す著三三 詞花集を撰す増七野七

あきずみ 源顯純 雅賴の五郎なり廿六兵衛佐たり母大い殿の上宇津九九 良峰行雅密にあて宮を思ひ、顯純と親む宇津八二 雅賴、行雅を愛して顯純の居に居らしむ宇津八三 父雅賴の春日詣、題に由つて歌を詠す時に左衛門佐たり宇津三九 兵衛佐なり室は近江守橘某の女年十五子なし宇津四二 雅賴の命により、そん王の君と共に雅賴のあて宮を迎へむとて來れる旨を春宮に奏す宇津五三 あて宮の旨を承けて東宮に暇を乞ふ東宮聽かず宇津五三

あきすゑ 藤原顯季 六條東洞院の亭にて人丸供を行ふ著九三 人丸供に夕月夜の歌を詠ず著九五 藤原長實顯輔家保らの父たり著一〇八 白河天皇に宰相たらむことを請ふ帝許さず今鏡三 白河天皇の乳母の夫にして權勢あり參議たら

むとを望む天皇許さず正三

あきすゑのむすめ 藤原顯季女 藤原公宗公教公行らの母なり今鏡一四七

あきたか 藤原顯隆 詩を作らざるを以て辨官たるを得す今鏡三

あきたかのむすめ 藤原顯隆女 藤原公能の母なり今鏡一五〇

あきただ 藤原顯忠 儉約なり大鏡三五 四分一の家にて大饗す大鏡三五 藤原重輔の父なり大鏡三六

あきちか 源顯親 源雅俊の子母は爲家の女なり今鏡一七

あきちかのむすめ 源顯親女 藤原實長の母なり今鏡一四七

あきつしま 神武天皇國號を秋津島と名づく水七

あきつしまのみや 大和秋津島宮 孝昭天皇秋津島宮に居り正三五

あきつな 顯綱 有佐、顯綱の子となる今鏡七六

あきとき 藤原顯時 行隆は顯時の嫡子なり清盛、行隆の官を復し、顯時の舊誼に報す平一四六

あきとし 別當顯俊 撿非違使廳の揭焉經を行ふ著四九

あきとし 源顯俊 藤原育子の母は顯俊の女なり今鏡六九 源雅俊の子、母は爲家の女なり今鏡一七

あきとも 顯朝 後嵯峨上皇に朝賀す增七三

あきなか 源顯仲 人丸供に夕さればの歌を詠す著五五 山村友貞に舞を傳はる今鏡一五五 忠季覺豪 堀川の君 兵衛の君等の父なり今鏡一七六 顯房の子、雅俊國俊の兄、歌人にして笙笛の名手たり今鏡一七六

あきなが 藤原顯長 後白川院、仁和寺殿より八條堀川なる顯長の亭に移りて皇居となす平治七三

あきなり 後嵯峨上皇の五十賀の試樂に鞨鼓をうつ增鏡五五

あきのぶ 高階明順 冷泉院燒亡の時秀句を吐く大鏡九一

あきのぶ 藤原顯信 出家す大鏡七一 革堂にて入道す乳母之を悼む大鏡一三六 藤原實成、顯信の出家を相す今鏡一四〇 道長の子なり母は藤原明子今鏡七一 年十八にて出家す今鏡一四〇

あきのぶ 北畠顯能 後村上天皇の陸奥介鎮守府將軍となり後村上天皇を奉じて奥州に下らんとし海路風波の難にあひ伊勢に漂着す正三〇

あきひら 明衡 殃を免る宇治四〇

あきひろわら 顯廣王 和歌尙齒會に歌を詠す著一六六

あきふさ 源顯房 白河の時の歌合の判者たり今鏡三 賢子の父なり今鏡三五 藤原師實、顯房の女賢子を養女とす今鏡九九 藤原忠通の母は顯房の女なり今鏡九七 源師房の子にして歌人なり兄俊房と大臣の位を爭ふ今鏡一六〇 藤原隆俊、相人をして俊房顯房兄弟を占はしむ顯房好相なり乃ち女婿となす今鏡一六一 媞子內親王の菖蒲の根合に判者たり今鏡一六七 源雅定の父なり今鏡一七七 源雅實は顯房の嫡子なり今鏡一七一 雅俊國信は顯房の子なり今鏡一七 顯仲は顯房の子なり今鏡一七六 顯雅信雅家定雅兼ら皆顯房の子なり今鏡一七九 源定房を養ひて子となす今鏡一八〇 相覺、定海、隆覺、覺樹、覺雅、清定、雅光、季房、雅隆ら皆顯房の子なり今鏡一八一 源師忠の兄なり今鏡一八二

あきふさのきたのかた 源顯房北方 藤原隆俊の女なり今鏡一六一

あきまさ 源明理 競馬の皷をうち損す大鏡八七

あきまさ 源顯雅 豐原時元を挫く著三一 顯房の子、文筆に拙なり今鏡一七六 車の粧飾に意を用ゐる今鏡一七六 粗忽にしてよく言語を誤る 車ふる時雨さし入れよなど言ひて人に笑はる 母は藤原伊綱の女今鏡一七九

あきます 安西秋益 範賴に從ひ平家追討の爲西國に發向す平家四七三

あきみち 源顯通 公卿勅使奉りて下向の途に宸筆の宣命を紛失す著一〇 源基綱と相撲す著一五五 源雅通及び天台座主明雲の父なり今鏡一七四 源雅實の子なり今鏡一七三 顯通の子明雲無双の碩德天下第一の高僧たり平家五〇

あきみつ 藤原顯光 藤原道長を呪詛す宇治二四四 重家は顯光の一男たり大鏡九七 盛子內親王、顯光の室たり大鏡九七 惡靈となる大鏡九七

あきもと 源顯基 後一條天皇の崩御、追慕して剃髮す著七三 源俊實の父なり著一五九 罪なくて配所の月を見んとを希ふ徒三 「世は再びはそむかざらまし」無五五 時のまもの歌を詠ず大鏡一五五

あきよし 北畠顯能 後村上天皇の陸奥大守たりし時颶風にあひて伊勢に漂着し程なく

天位に繼き玉ひしは大神宮の御計らひなると
を松翁に物語りす考五

あきよしのちうぐう 秋好中宮 ひめぎみ
前坊姫君源

あきより 藤原顯頼 白河天皇顯頼の任官
の請を許さず今鏡三 平滋子の母は顯頼の女た
り今鏡七

あきよりのむすめ 藤原顯頼女 藤原公光
の母なり今鏡一五

あきらけいこ 藤原明子 大御息所たり伊
二四 藤原高子、明子の從妹なり伊二四 在原業平
藤原高子と通じて流されし時高子を宮中より
出して倉中に籠居せしむ伊二六 相應和尚、明子
に加持す宇治二九 文德の皇后となる大鏡七 物の
怪に犯さる大鏡七 智證大師を護持僧とす大鏡七
大みやけの世繼の妻明子のひすましを勤む大
鏡一七

あきらけいこ、藤原明子 道長の室なり頼
宗能信顯信長家の四人外二女子を生む今鏡七一

あくげんだ 惡源太 よしひら、源義平平治

あくさふ 惡左府 よりなが 藤原頼長保
元

あくし 横山惡次 横山惡五と共に源義朝
に隨うて白川城を攻む保六

あくしちびやうゑ 惡七兵衛 かげきよ
平景清平家

あくしちべつたう 隙間數惡七別當 須藤
家季の兄なり源爲朝に隨うて上洛す保三 須藤
家季と共に源義朝に從うて鎌田政清を擊退す
保三六 海老名季定と鬪ふ保四〇 齋藤實盛に打ち取
らる保四〇

あくぜんじ 惡禪師 ぜんしやう 源全成
平治

あくべつたう 惡別當 ときただ 平時忠
平家

あくりやうのさだいしん 惡靈左大臣 あ
きみつ 藤原顯光大鏡

あくゑもんのかみ 惡右衛門督 のぶより
藤原信頼平治

あげをのぬし 上緒主 金塊を得て富者と
なる宇治三二

あこぎ 阿漕 中納言の女落窪の君に仕ふ
落一中納言の三の君あこぎを召しつかふあこぎ
落窪君の許を去るを悲む落三 左近少將の家の
帶刀あこぎに通ふ落三 落窪の君、その侍婢を
あこぎと改稱す落三 その親しうする所の男帶
刀に落窪君の事を語る落三 落窪の傍に曹司す

落三 落窪の君の繼母に苦めらるゝを救はむと
欲す落三 帶刀、阿漕に左近少將の事を謀る落三
左近少將の落窪君に贈る所の消息を見る落三
落窪君に左近少將よりの消息を贈る落三 帶刀、
阿漕に落窪の返書なきを責む落七 帶刀に返書
す落八 左近少將、阿漕が帶刀に贈りし消息を
見る落八 けがれと稱して中納言の石山參詣に
從はず落八 帶刀の消息を受く落八 露といふを
童女とす落九 帶刀、菓物を阿漕に贈る落九 落
窪に左近少將の事を辨解す落一四 帶刀に返書を
贈る落一五 落窪の爲に苦心す落一六 帶刀に返書を
贈る落一六 帶刀阿漕に消息を贈る落一六 落窪のも
とに左近少將來る阿漕落窪におのれの袴をき
せてわづかにつくらふ落一七 和泉守の妻は阿漕
のをばなり阿漕之に消息を贈つて少將と落窪
との婚姻の料に調度器物を求む落一七 和泉守の
妻より返書あり落一八 左近少將に朝食を饗す落
一八 落窪の爲に三日夜の設を營む落一九 容姿瀟
洒なり落一九 和泉守の妻に消息す落一九 和泉守の
妻に三日夜の餅を乞ふ落一九 和泉守妻より返書
あり落二〇 和泉守の妻阿漕に三日夜の餅に添へ
て消息を贈る落二一 帶刀阿漕に消息を贈る落二三
帶刀に返書を贈る落二三 左近少將の大雨を冒し
て至れるを驚き喜ぶ落二四 左近少將に三日夜の
餅を進む落二五 帶刀より途上の物語を聞く落二五
落窪の繼母中納言の北方に罵らる落二六 北の方
の暴欲を憤る落二六 落窪が繼母北の方に呵責せ
らるゝを悲む落二三 北の方に放逐せられむとす
落二三 三の君に依つて罪を免る落二四 左近少將に
落窪の返事を語る落二五 落窪の君一室に閉せら
る阿漕深夜密に訪ふ落二五 三郎によつて落窪に
消息を通ず落二六 左近少將より消息を得且つ落
窪の守護を托せらる落二七 落窪に左近少將より
の消息を通ぜむと苦心す落二八 左近少將に返書
を贈る落二八 帶刀より謝罪の消息を得落二八 落窪
に消息を通ず落二九 三郎を介して左近少將の消
息を落窪に通ず落二九 典藥助より落窪の近狀を
聞く落二九 典藥助の事を聞きて驚く落三〇 落窪に
典藥助の事を告ぐ落三〇 典藥助を詰責す落三一 典
藥助落窪を犯さむとす阿漕計つて典藥助に腹
痛の醫料として燒石を持ち來らむとを乞ひ以
て暫く典藥助を遠ざく落三一 落窪の室より典藥
助を斥く落三二 典藥助の消息を傳ふるを口實と
し鍵を得て落窪の部屋に至る落三三 落窪を救ふ
策に苦心す落三三 帶刀より消息を得落三三 帶刀に
返書を贈る落三四 典藥助に返書を贈る落三四 典藥

助が落窪に贈れる消息を見る落四四 典藥助が落窪の部屋を開かむとするを窺ふ落五五 心を碎きて落窪を保護す落五五 落窪の部屋の戸を固む落五五 帶刀に典藥助の事を語る落六六 帶刀と落窪を偸まむとを約す落六六 落窪の意を安んず落六六 帶刀落窪を盗まむことを阿漕に迫る落六六 左近少將に中納言の家の人々不在の事を報ず落七七 左近少將帶刀らと共に落窪の君を幽室より盗み出し車に乘つて少將の許に至る落六八 左近少將に北の方の事を語る落六九 左近少將に北の方の性行を尋ねらる落七〇 をばに消息す落七〇 ゐもんと改稱す落七〇 れとなとなる落七〇 落窪に重用せらる落七一 兵部少輔の中納言の四の君と婚すと聞きて陽に歎く落七二 帶刀より兵部少輔のことを聞く落七三 落窪に左近少將の緣談を語る落七二 帶刀に左近少將の緣談のことを語る落八二 落窪の賀茂祭見物に從ふ落八六 左近少將に三條邸は落窪の有なることを語る落九五 祭の時少將北の方車爭の時に典藥助が打たれしを喜ぶ落九五 中納言方の家の女房を誘つて落窪に仕へしむ落九四 左近少將に、中納言移轉の期を報ず落一〇三 昔の朋輩に會す落九五 古鏡箱を所有す落一〇三 越前守に托して古鏡を中納言北方に贈る落一〇三

越前守に中納言の三郎の事を問ふ落一〇三 越前守に三條邸に遇ふ落一〇三 落窪より餞を受く落一〇三 落窪に絹を獻ず落一一三 夫帶刀の赴任に從ふ落一一三 子多し落一一三 典侍となる落一一三

あこぎみ 阿古君 たかいへ 藤原隆家大鏡

あこみや 朱雀第六子阿古宮 良峰行雅に文を習ふ宇津八三 行雅あこ君を介して歌をあて宮に送るあて宮答へず宇津八三 行雅、あこ君してあて宮に歌を贈る宇津九一 民部卿實雅、嵯峨の后宮の六十賀の用意に師を附してあこ宮らに舞を習はしむ宇津二三 行雅攝津有馬より使を以てあこ君を介して歌をあて宮に贈る返しなし宇津一九五 書を以て行雅に歸京をすゝむ行雅歸る宇津一九五 馬の手番ひに六番に忠純にかつ宇津二六 仲忠、嵯峨后宮の六十賀より仲純と共に歸る途すがらあこ君の舞を賞す宇津三六 陶英あこ君を介してあて宮に歌を贈るあて宮之を捨つ宇津三三 忠乞僧都、あこ君の物怪を加持して治す宇津三〇五 忠乞、あこ宮を介してあて宮に歌を贈るあて宮破りすつ宇津三〇五 雅賴、嵯峨の后宮の六十賀の用意として仲賴をしてあこ宮らに舞を敎へしむ宇津三七 嵯峨の后宮の六十賀にあこ宮落蹲をまふいへ宮陵王を舞ふ朱雀帝感してかはらけ給ふ宇津三四 左衞門丞に任ぜらる宇津三五 初めて冠す宇津三四 侍從に任ぜらる宇津三七

あこまろのだいなこん 安古麿大納言 むねとみ 藤原宗通今鏡

あこほふし あこ法師 御湯殿女官高倉の子なり天狗に捕はる著三五

あさかた 藤原朝方 安德天皇の降誕を賀し平清盛の六波羅邸に參す平家一五 木曾義仲、朝方以下四十九人の官職を停む平家三四

あさがほのさいねん 槿姫君源 ひめきみ 槿齋院 あさかほの

あさがほひめきみ 槿姫君 源氏の君に靡き隨はず源一四 桃園式部卿の宮の姫君なり源一四 秋霧にの歌を源氏の君に贈る源一八三 齋院となる源二〇三 源氏君、姫君に歌を贈る源一八三 歌を源氏の君に贈る源二〇 源氏君槿姫君に歌を贈る源二〇 齋院をやめて桃園宮に移る源三六 源氏君槿姫君を訪ふ源三六 源氏君歌を姫君に詠みかく源三七 歌を源氏君に詠みかく源三一 源氏君みしをりのゝ歌を朝顏に添へて贈る源三一 紫上、姫君のことによりて源氏君を怨む源三三 あさはてゝの歌を源氏の君に贈る源三三 源氏君姫君を訪ふ源三四 源氏姫君の邸にて源内侍のすけに逢ふ源三五 源氏姫君に切に情を訴ふ源三六 源氏と歌を詠ず源三六 源氏の君の戀を卻く源三六 藤衣の歌を源氏に贈る源三八 源氏歌を姫君に贈る源三八 先帝の女五宮姫君に源氏に從はんことを勸む姫君きかず源三八 源氏に薰物を贈る源五七 源氏歌を姫君に贈る源五六 歌を源氏に贈る源五六 女等打ち集りて姫君の人物を批評す無二

あさこ 藤原朝子 後白河天皇の乳母なり今鏡六一 すべらぎのゝ歌を詠す今鏡六一

あさくら 淺倉物語 女等打ち集りて淺倉物語を批評す無九

あさただ 藤原朝忠 たくへやるの歌を詠す大和三 人の妻に通ず大和三 肥滿にして大食す宇治一三 藤原定方の子なり宇治一三

あさぢがはらのないしのかみ 淺茅原尙侍物語 女等打ち集りて物語淺茅原尙侍を批評す無四

あさつな 大江朝綱 夢に白樂天と物語す著六一 前途程遠馳思於雁山之夕雲といへる秀句を作りて渤海人を感ぜしむ著六一 村上天皇の勅

命を奉し白氏文集中第一の詩を選す著三 悲之亦悲莫非於老後子云々の願文を作る著七一たらちねはの歌を詠す今鏡一五六

あさつね 藤原朝經 朝光の一男なり大鏡六六

あさづま 朝妻 一條兼良朝妻にてほのぼのとの歌を詠ず藤三

あさひしやうぐん 朝日將軍 後白川院木曾義仲に朝日將軍の院宣を賜ふ平家三四

あさなり 藤原朝成 肥満せり大食す著三四一 伊尹と臓人頭を爭ふ大鏡八四 朝成惡靈となると道長夢みる太鏡八五

あさましきもの あさましき物 さし櫛磨く程に物にさへて折れたる枕七九

あさまやま 在原業平淺間岳に烟立つを見て信濃なるの歌を詠ず伊四四 武田信光此の麓にて狩す著三一

あさみつ 藤原朝光 水晶の箸を用ゐる大鏡六六 和歌をよくす朝經は朝光の太郎なり大鏡六六 延光の寡婦を娶る大鏡九九 薨ず大鏡一三四

あしがらやま 足柄山 菅原孝標の女足柄山を越ゆ更五

あしかがさまのにふどう 足利左馬入道たかうぢ 足利尊氏徒

あしやのまつばら あしやの松原 後醍醐天皇この所を過ぐ増二〇三

あすかがは 飛鳥川 名河の一たり枕四六

あすかのかはらのみや 明日香河原宮 皇極天皇います正四六

あすかゐのひめぎみ 飛鳥井姫君 仁和寺威儀師姫君に懸想し之を誘拐せむとす狭衣中將之を救ふ狭三七 狭衣中將車を同じうして姫君を家に送る狭三九 帥平中納言の女なり狭三一 歌を狭衣中將に詠みかく狭三一 狭衣中將に想はる狭三三 狭衣中將姫君を訪ふ狭三六 歌を狭衣中將に詠みかく狭三七 道成に想はる狭四六 歌を狭衣中將に贈る狭四九 狭衣中將歌を姫君に贈る狭四九 乳母に貽かれ道成に具して筑前へ下向す狭三二 淀に着して乘船す狭三五 乳母に貽かれたるを知りて悲歎す狭三五 狭衣中將を思ひて海までは歌を詠す狭三六 入海せむとす狭六一 卒す狭一三五 常磐尼公に救はる狭一三〇 一品の宮(三)の母なり狭一四一 なほ頼むの歌を詠ず狭一七一 人知れぬの歌を詠ず狭三三五

あすだがは あすだ川 菅原孝標の女此川を渡る四四

あすら 阿修羅 波斯國のあたり大桐樹を伐つて琴を作る宇津三 俊蔭伐木の聲に索ねて阿修羅に逢ふ宇津三 俊蔭阿修羅に桐片を乞ふ宇津三 俊蔭阿修羅に食まれむとす宇津六 佛現して俊蔭に桐樹の一部を奉るべきを命す阿修羅乃俊蔭に奉る宇津六

あぜちのだいなごん(一) 按察大納言 兵部卿宮按察大納言の女と契りて紫上を生む源九三 北山尼は大納言の北の方なり源九三

あぜちのだいなごん(二) 按察大納言 姫君を五節の舞姫に出す源四〇二

あぜちのだいなごん 按察大納言 きんたふ 藤原公任大鏡

あぜちのだいなごんのむすめ 按察大納言女 少將に疎んぜらる堤三六

あぜちのきみ 按察君 薫君と互に歌をよみかく源一〇三五

あぜちのきみ 按察君 仲忠あぜちの君に水尾の事を語る宇津三七 仲忠、朱雀の女一の宮の爲にあぜちの君を召す宇津六九

あそび 遊 よる人の顔見えぬ程よし枕一四三

あたご 愛宕 平清盛を火葬す平家二六六

あたふ 渡邊與 源仲綱に從ひ六波羅を夜討せんとす曉に及ぶを以て中止す平家一八三

あぢきなきもの 味氣なき物 宮仕へに立ちたる人のものうがりしうるさげに思ひたる枕三三

あつあきらしんなう 敦明親王 こいちでうのゐん 小一條院大鏡

あつかげ 下野敦景 敦則の子なり著一八八 秦公景と五月會に競馬す著二八 秦兼國を藤原基房に讒す著三〇

あつかた 下野敦方 賀茂明神の冥助によりて大夫史となる著三〇 下野敦利の子なり著一八

あつかね 菅原敦兼 北の方と不和の時ませのうちなる白菊のゝ今樣を詠して其の心を釋く著一六二

あつげなるもの 暑げなる物 隨身の長の狩衣枕一〇二

あつこないしんなう 篤子內親王 後白河の四宮なり堀河の中宮となる今鏡三七 齋院となり准后となり堀河の后となる今鏡一三六

あつざねしんなう 敦實親王 藤原能子と通ず大和二六 出家して仁和寺にあり大鏡一八〇

あつしげ 藤原篤茂「昨日山中之木材取諸

己著三八二 源有房に試みらる徒西 本草學に通ず徒西

あつすゑ 下野敦末 源經信に愚弄せらる著二七六

あつすゑ 敦季 邦良親王の薨去によりて出家す著一八〇

あつたか 下野敦高 下野敦延の父なり著一八七

あつただ 藤原敦忠 右近に雉子を贈る大和四四 左大臣の女をよばふ大和七七 いかにして今そへにの歌を藤原實頼の女に贈る大和七七 物思ふとの歌を詠す大和七七 齋宮をよばふ大和七七 物思ふの歌を藤原實頼の女に贈る大和七七 いかにしての歌を詠ず大和七七 伊勢の海の歌を雅子内親王に贈る大和八八 和歌管絃に長ず大鏡四四 卒す大鏡四四 短命なることを豫言す大鏡四五 敦忠の男兵衛佐出家す大鏡四六

あつただのむすめ 敦忠女 藤原延光に嫁す大鏡四六

あつたのだいぐうじ 熱田大宮司 權勢國司を凌ぐ宇治六一

あつたのみや 熱田宮 阿佛尼此の祠にて祈るぞよの歌を詠ず十六夜六 大江匡衡願文を熱田の宮に納む東五五 源親行此所にて思ひ出ての歌を詠ず東六 神代より傳來せる神劍を奉祀す水七七

あつちか 大江敦周 藤原通憲の家にて詩會ありし時秀句を詠ず著六九

あつちか 下野敦近 秦頼次と競馬して勝つ著一八七 後白河天皇の勅により源頼朝の獻じたる馬を試みる著一八九

あつとし 下野敦利 下野敦方の父なり著一八七

あつとし 藤原敦敏 夭死す大鏡四一 實朝の三男なり大鏡四三

あつながしんなう 敦良親王 東宮となる今鏡四 元服す今鏡五五

あつなりしんなう 敦成親王 ごいちでうてんわう 後一條天皇大鏡

あつのぶ 下野敦延 仁和寺殿の競馬に秦兼弘に競うて勝つ著一八七 下野敦高の子なり著八七

あつのり 秦敦則 下野敦景のちゝなり著一八八

あつひとしんなう 敦仁親王 だいごてん

なう 醍醐天皇大鏡

あつぶみしんなう 敦文親王 賢子の父なり今鏡六六 白川院、皇后藤原賢子に皇子なきを憂ひ、頼豪に命じて祈禱せしめ敦文親王を生む頼豪その功により園城寺に戒壇を建立せんとを白川院に乞ひて許されず憤懣して親王を咒詛す平家二七 藤原賢子の腹なり父は白川院平家一七 親王薨す世以て頼豪の惡靈の祟となす平家一八

あづま 吾妻 在原業平吾妻に赴く伊三

あつまさ 篤昌 義助の役に催さる宇治八三

あつまき 敦正 源有仁を訪ひて秀句を作る著三三

あづまびと 東人 聖武天皇の勅を奉じて廣繼を討つ水六六

あづまやのきみ 東屋君 うきふね 浮舟源

あづまやのきみ(二) 東屋君 ちうしやうのきみ 中將君源

あつみちしんなう 敦道親王 歌を和泉式部に贈る和三 密かに和泉式部の許に通ふ和三 歌を和泉式部に贈る和四 歌を和泉式部に贈る和六 歌を和泉式部に贈る和七 侍從の乳母に諫めらる和八 和泉式部を誘なひて隱れがに赴く和八 歌を和泉式部に贈る和九 歌を和泉式部に贈る和一〇 歌を和泉式部に贈る和一一 よしやよしの歌を和泉式部に贈る和一二 我ゆゑにの歌を和泉式部に贈る和一三 荻風はの歌を和泉式部に贈る和一四 尋ねゆくの歌を和泉式部に贈る和一五 なげきつゝの歌を和泉式部に贈る和一六 秋の夜のゝ歌を和泉式部に贈る和一七 われならぬの歌を和泉式部に贈る和一八 うちすてゝの歌を和泉式部に贈る和一九 夢ばかりの歌を詠ず和二〇 和泉式部に隱れがに來らむとを勸む和二〇 時雨にもの歌を詠ず和二〇 寢ぬる夜のゝ歌を和泉式部に贈る和二二 妻こふとおきあかしつる霜なればといふ上の句を詠ず和二二 つゆむすぶの歌を和泉式部にれくる和二二 朝日さしの歌を和泉式部に贈る和二三 ことのはふかくなりにけるかなといふまもの句を詠じて和泉式部と連歌す和二四 見るや君の歌を和泉式部に贈る和二四 れてなひのゝ歌を和泉式部に贈る和二五 そよやそよの歌を和泉式部に贈る和二六 ねぬる夜のゝ歌を和泉式部に贈る和二七 山べにはの歌を詠ず和二七 枯れはてゝの歌を和泉式部に贈る和二九 ゆふぐれはの歌を和泉式部に

贈る和三　われひとりの歌を和泉式部に贈る和三　なほざりのあらましごとに夜もすがらといふ句を詠じて和泉式部と連歌す和三　我がやどにの歌を和泉式部に贈る和三　あなこひしの歌を和泉式部に贈る和三　あふみぢはの歌を和泉式部に贈る和四　和泉式部を自宅に伴ふ和三　和泉式部と同車す大鏡一三

あつみつ　敦光　人丸供の時風ふけばの歌を詠ず著五　往事渺茫誰共語といふ詩を詠ず著三七　みかのはらをやすぎてきつらんといふ下句を詠じて僧と連歌す著三四

あつもり　平敦盛　經盛の子なり宗盛等と共に都を落つ平家三四　美男子たり熊谷直實と闘うて討たる平家四四　平經盛の末子、笛の妙手たり小枝といふ名笛を經盛より相傳す平家四五

あつやすしんなう　敦康親王　失意にて薨ず大鏡一七　東宮に立つを得ず大鏡三五　母は藤原定子なり今鏡一〇　後見無くして位に卽かず今鏡一〇　藤原定子、出家して後敦康を生む今鏡一〇　後一條後朱雀共に兄敦康に先ちて卽位す今鏡一〇　藤原源子の父君なり今鏡七六

あつゆき　尾張敦行　尾張兼時と競馬す著一八六

あつより　藤原敦頼　和歌尙齒會の時まてしばしの歌を詠ず著一〇六

あつより　秦敦頼　敦久の父なり馬術に達す著一九

あてなるもの　貴なる物　うす色に白かさねのかざみ枕三六

あてみや　貴宮　源雅頼の室嵯峨帝の御妹女一宮(大宮)之を生む宇津六　十二にして裳着す宇津六　風資嬋娟思想當世風たり宇津六　源宰相實忠、密かにあて宮を思ふ宇津六　あて宮の乳母子兵衛君、實忠の消息をあて宮に傳ふ宇津六　右大將藤原兼雅年卅密にあて宮を思ひあて宮の兄輔純に語る宇津六　平中納言正明あて宮を戀ひ賴純に托して消息を送るあて宮答へず宇津六　實忠兵衛君を介して櫻花を贈るあて宮答へず宇津六　實忠、兵衛君を介し灶香を贈つて情をほのめかすあて宮解せざるを裝うて答へず宇津六　兼雅輔純を介して歌を贈るあて宮答へず宇津六　實忠、あて宮に洲濱を贈る宇津六　平中納言、歌を贈る答へず宇津六　實忠歌を贈るあて宮僅に歌に答ふ宇津六　兵部卿宮歌を贈る答へず宇津六　兵部卿宮再び歌を贈るに返しなし宇津六　同母兄仲純密にあて宮を戀ふ宇津六　實忠月夜あて宮の居に立ちよりて歌をいふにちご宮琴を彈いてひくくともの歌をうたふ宇津六　上野宮消息を贈る答へず宇津六　上野宮、諸人を召してあて宮を得んの策を諮ふ宇津六　比叡の大德そうけい上野宮に比叡中堂に常燈を挑げ四十九院に毎日各一合の米を奉りて神佛に祈らばあて宮の靡くべきをいふ宇津七　大學のすけ、上野宮に不遇の才を擧げ貧を惠まばあて宮靡くべきをいふ宇津七　上野宮、無賴の徒の策を用ゐ東山とうりう寺の會を催しあて宮見に來らば奪はむとす津字七　雅賴謀つて下蔦の女をあて宮に扮して上野宮の東山の會を見物せしむ上野宮計られて無賴の徒をしてあて宮に扮する下蔦の女を奪はしむ宇津七　上野宮、あて宮と信じ下蔦の女を北の方とす宇津七　三春喬基あて宮の女房宮内の君に由てあて宮に意を傳へむとす宇津七　三春喬基性奢侈あて宮を慕ひて俄に四條殿を修理して華奢を極む宇津七　兄仲純歌をあて宮に贈る答へず宇津八　實忠歌を贈る返歌なし宇津八　兵部卿宮歌を贈るあて宮返歌す宇津八　平中納言歌を贈る返歌なし宇津八　源實忠飾磨より歌を贈る返歌なし宇津八　良峯行雅、あて宮の甥あて宮を介して歌を贈る答へず宇津八　行雅密にあて宮を思ひあて宮の兄顯純と親む宇津八　朱雀の三の宮、戀ひて歌を贈る返しなし宇津八　滋野眞嘗、あてみやを得んとしれうなをして圖らしむ宇津八　滋野眞嘗、あて宮に贈る歌を子帶刀に代作せしむ宇津八　眞嘗、長門と其孫たてきして眞嘗の歌をあて宮に傳ふあて宮信ぜず宇津八　仲純妹あてみやと琴を弄す宇津八　眞嘗とのもりをしてあて宮に意を通ぜしめむとす宇津八　實忠再び兵衛君して歌を贈る返し無し宇津八　兼雅、歌を贈る返しなし宇津八　平中納言正明歌を贈る返しなし宇津八　兵部卿宮歌を贈る、答へず宇津八　仲純琴を彈きて歌を詠ず、あて宮聞きいれず宇津八　朱雀の二の宮かしがましの歌を詠ず、あて宮きゝ入れず宇津八　行雅、あて宮して　あて宮に歌を贈る宇津九　朱雀の三の宮あて宮及び仲純と琴を彈く宇津九　姉仁壽宮女御あて宮に歌を贈る宇津九　朱雀帝の東宮、加茂のみぐしすましに宮を思ふ歌を大宮に贈る宇津九　大宮、春宮の歌につけてあて宮に歌を贈る宇津九　加茂川に歌を詠ず宇津九　加茂のみぐしすましに琴をひく諸人爭うてきく宇津九　朱雀帝の春宮歌を贈るあて宮返しす

宇津四　實忠、加茂のみぐしすましにあて宮に歌をよみかく宇津四　行雅、加茂のみぐしすましにあて宮に歌を詠みかく、返し無し宇津四　朱雀の三宮加茂のみぐしすましにあて宮に歌をよみかく宇津四　朱雀の三の宮中のれとゞに琴を彈いてあて宮に歌をいふ聞き入れず宇津四　平中納言正明歌を贈る、返歌あり宇津四　兼雅歌を贈る返歌あり宇津四　實忠、歌を贈る返歌あり宇津四　仲純歌を詠みかく返しなし宇津四　行雅、歌を詠みかく返歌なし宇津四　兵部卿宮あて宮に歌を贈る宇津四　右大將兼雅の子侍從仲忠密にあて宮をゆかしうす宇津四九　左大將雅頼、右大將兼雅の相撲の還饗に仲忠に彈琴を求む曰くあて宮を以てかづけ物とせむと仲忠乃秘曲をひく宇津三　左大將雅頼右大將兼雅の相撲の還饗より歸つてその女あて宮の德に由て仲忠の琴を聞けるとを室大宮(女一宮)に語る大宮再あて宮に由て仲忠に琴を彈かしめむとを夫雅頼に勸む宇津三六　中の大殿にすむ宇津六　朱雀帝の春宮、歌をあて宮に贈る、あて宮返歌す宇津一八六　仲忠、そわうの君してあて宮に萩につけて歌を贈るあて宮之を見る宇津一八六　仲忠屢仲純を訪ふ蓋し仲純の妹あて宮に意あつてなり宇津一八六　兵部卿宮、歌を贈る、あて宮返歌す宇津一八六　諸人擧りてあて宮を思ふ宇津一八七　平中納言あて宮に歌を贈る宇津一八七　實忠、滋賀に行ひし紅葉につけて歌を贈るあて宮答へず宇津一八七　兼雅病んで歌を贈るあて宮答へず宇津一八七　行雅、攝津より歌を贈るあて宮答へず宇津一八七　仲純、あて宮を思ふとを姉八君に語る、八君傳へんとを諾す宇津一八九　雅頼の八君、仲純の心を妹あて宮に語る宇津一九〇　姉八君今宮(十君)と共に月夜琴をひく男君たち來る宇津一九〇　朱雀帝の三宮、一本菊につけて歌を贈るあて宮答ふ宇津一九一　式部卿宮、右大臣と共に月夜あて宮の琴を聞きて訪ふ宇津一九一　朱雀帝の三宮、月夜あて宮の琴を彈くを見て益戀々たり宇津一九二　仲純薄につけて歌を贈る、返しあり宇津一九四　行雅攝津有馬より使を以てあて宮を介して歌をあて宮に贈る返しなし宇津一九五　行雅有馬より歸つて歌をあて宮に贈る返しあり宇津一九六　平中納言あて宮に歌を贈る返しなし宇津一九六　仲純、あて宮と同じ家にあるを以て諸人に疑はる宇津一九六　兵部卿宮、あて宮に歌を贈る返しあり宇津一九七　仲忠仲純と共に終夜語り琴を彈きて歌ふ、あて宮、聞いて心動かざるに非ず宇津

一九六　兵部卿宮、雅頼の春日詣に從ひ梅に歌をかきてあて宮に奉るあて宮花にそへて返歌す宇津二九六　父雅頼の春日詣に從ひ故左大臣忠恆の北方より買ひたる都風の琴を彈ず宇津二九一　仲忠、雅頼の春日詣にあて宮の琴を聞き、その己の敎ふべき未來の思ふ宇津二九二　仲忠、春日詣にあて宮の都風の琴を乞ひて自ら彈く宇津二九二　忠乞僧都雅頼の春日詣の時修行して偶在りあて宮の都風の琴を聞いて走り來る宇津二九二　忠乞、春日詣の時都風を聞きあて宮を暫見して心大に惑ふ宇津二九六　兵部卿宮あて宮に歌を贈る返しあり宇津二九七　三の宮歌を贈る返歌なし宇津二九七　平中納言歌を贈る返しなし宇津二九七　實忠歌を贈る返歌なし宇津二九七　春宮仲頼を使として歌を贈る宇津二九七　雅頼返歌を作つてあて宮をして春宮に答へしむ宇津二九七　源少將仲頼曾ての弓のかへりあるじに垣間見てあて宮を思ひ爲に病み春日詣に見てやゝ慰む宇津二九八　仲頼歌を贈る、返しなし宇津二九八　仲忠藤のかゝれる松に歌を添へそわうの君を以てあて宮に贈るあて宮返歌す宇津二九八　行雅歌を贈る返しなし宇津二九九　兼雅桂の邸よりあて宮に歌を贈る幼き返しあり宇津二九九　仲純歌を贈る返歌なし宇津二九九　仲忠、すゞしよりの引出物金の舟に添へて歌をあて宮に贈る、あて宮寶々しき物なりとて返す宇津二九九　行雅、すゞしよりの引出物を右大辨、大宮に分ち又あて宮の下仕に分つ宇津二九九　實忠、病中あて宮に歌を贈る返しあり宇津三〇五　平中納言及び仲忠、あて宮に歌を贈る返しあり宇津三〇六　仲頼及び行雅あて宮に歌を贈る宇津三〇六　すゞし及び三の宮あて宮に歌を贈る返しなし宇津三〇六　仲純、五月五日菖蒲を見てあて宮に歌をよみかくあて宮聞き入れず宇津三〇七　すゞし、五月馬の手番の頃吹上より歌をあて宮に贈る宇津三〇七　五月馬の手番の頃、兵部卿のみこ、兼雅、平中納言、朱雀帝の三宮、仲忠、仲純、仲頼等歌をあて宮に贈る宇津三〇七　朱雀の春宮、五月馬の手番ひの頃歌をあて宮にれくる返しあり宇津三〇七　五月馬の手番の頃、寶忠病中に歌を贈る、あて宮哀と思へども答へず宇津三〇七　雅頼の釣殿の納涼に仲忠箏をひきて歌ひあて宮琴をひきて和す俄に内より召あり仲忠止むを得ずして參内す宇津三〇七　春宮、桂の邸の神樂の時あて宮に歌を贈る返しあり宇津三〇八　兵部卿宮、桂の邸の神樂の夜大宮にあて宮を妻はせむとを乞ふ宇津三〇九　實忠桂の邸の神樂の頃歌

をあて宮に贈る 返しなし宇津三九 兼雅桂の邸の神樂の後洲濱にそへて歌をあて宮に贈るかへしあり宇津四〇 實忠桂の邸の神樂の後暑き日盛あて宮に歌を贈る 返しあり宇津四〇 平中納言桂の邸の神樂の後歌をあて宮に贈る 返しあり宇津四〇 春宮桂の邸の神樂の後歌を贈る 返しあり宇津四〇 兵部卿宮桂の邸の神樂の後夕立に歌をあて宮に贈る 返しあり宇津四〇 仲忠桂の邸の神樂の後難波の浦より歌をあて宮に贈る返しあり宇津四一 すゞし桂の邸の神樂の後吹上よりあて宮に歌を贈れるを仲純はしに歌を書き加へてあて宮に奉る宇津四一 行雅桂の邸の神樂の後七月一日あて宮に歌を贈る宇津四一 仲賴桂の邸の神樂の後六月晦あて宮に歌を贈る宇津四一 三の宮桂の邸の神樂の後あて宮に歌を贈る宇津四一 喬基、宮内の君を呼んで滋野眞菅は勤儉よくあて宮の夫たるに適すといふ宇津四二 眞菅、子木工允にあて宮への歌を作らしめむとす木工允の兄右近少將之を作る宇津四五 陶英、雅賴に引出物を給はりて罷づ、あて宮を思うて心亂れ中のおとゞの東面の竹の柴に歌をかきつく宇津四三 春宮七月七日の頃歌をあて宮に贈るあて宮槇の板戸はさゝでのみなむと答ふ宇津四三 兵部卿宮初秋歌をあて宮に贈る返しなし宇津四四 三宮、あて宮に歌を贈る宇津四四 平中納言初秋歌をあて宮におくる宇津四四 兼雅歌をあて宮に贈る返しなし宇津四四 實忠ひぐらしのなくに歌をあて宮にいふ聞き入れず宇津四四 あて宮今宮琵琶箏を彈く仲忠隱れて立ち聞きし入つてそわうの君にあて宮の返しを求む宇津四五 仲忠白蓮にそへて歌をあて宮に贈るそわうの君のすゝめに從ひあて宮贈物にそへて 返歌す宇津四六 すゞし遙に吹上よりあて宮を思うて心亂る乃ち歌を贈る返 しなし宇津四七 仲純硯に歌をかくあて宮見ざるものゝ如し宇津四七 實忠あて宮を戀うて病重しはかなき歌をあて宮に贈る哀と思へど返しせず宇津四七 行雅思ひまどひてあて宮に歌を贈る宇津四六 神泉の紅葉の賀、仲忠すゞし琴をひく朱雀帝御感斜ならず女一の宮を仲忠に、あて宮をすゞしに賜はむとす雅賴贊す宇津四四 忠乞あて宮を介して歌を贈るあて宮破りすつ宇津四五 兼雅あて宮に歌を贈る宇津四五 三宮紅葉につけてあて宮に歌を贈る宇津四六 兵部卿宮あて宮に歌を贈る宇津四六 春宮歌を贈る返歌あり宇津四六 仲忠宇治より歌を贈る宇津四六

實忠鈴虫を贈つて歌を乞ふ宇津四六 平中納言歌を贈る宇津四六 すゞし初雪に歌を贈る雅賴道理なるを思ふ宇津四七 仲純時雨の日歌を贈る宇津四七 仲賴祭の使にたつとてあて宮に歌を贈る宇津四七 春宮、雅賴にあて宮を求む、雅賴諾す宇津四九 雅賴、春宮にあて宮を奉るべきかを室大宮と語る宇津四八 仁壽殿女御、懷姙にとよせ里亭に降つて母大宮と語るあて宮を春宮に奉るべしとなす宇津四一 兵部卿宮、十一月十三日神樂の夜雅賴の室大宮と語つて嵯峨院の病狀を告ぐあて宮の事を得言はず宇津四六 仲忠十一月十三日神樂の日の曉あて宮の琴を聞き得堪へずして醉に紛れて仲純に語る宇津四九 十二月の經の頃諸人皆あて宮に意を得ずして空しく年の暮るゝを狂しと思ふ平中納言乃歌を贈る返しなし宇津三三 十二月實忠歌を贈る返しなし宇津三四 雅賴の賭弓の還饗にあて宮、公達と共に盛裝して坐す仲賴見て戀々として忘るゝ能はず宇津三七 仲賴、あて宮を見て家に歸り數日頭も擡けずして思ひ煩ふ宇津三八 季明春宮に、仰せあらば雅賴必あて宮を奉るべきを答ふ宇津三九 菊の宴の夜遲く雅賴參内す春宮あて宮を入内せしめむとを圖る雅賴すゞしに奉るべき宣旨あるを以て辭すと雖許されずして諸す宇津三九 菊の宴の夜實忠、雅賴春宮にあて宮を奉るべきを奏するを見て色を失ふ宇津三〇 仁壽殿女御懷姙に事よせて里亭左大將殿に歸る、大宮、あて宮を春宮に奉るべきかを問ふ女御贊す宇津三三 春宮、嵯峨の后宮の六十賀の前年屢あて宮に歌を贈る返しあり宇津三八 兵部卿宮小忌に内よりあて宮に歌を贈る返しあり宇津三九 三宮歌を贈る宇津三九 仲忠臨時祭の使に立つとてあて宮に歌を贈る返しあり宇津三九 仲純十二月梅を折り歌を添へあて宮に示すあて宮見ぬやうにて言はず宇津三九 すゞし露おける朝歌を贈る宇津三九 仲賴十二月晦日歌を贈る宇津三〇 行雅正月朔歌を贈る宇津三〇 嵯峨の后宮の六十賀にあて宮琴をひく春宮仲忠もてはやし、雅賴涙を落してきく宇津三五 春宮、嵯峨の后宮の六十賀の頃大宮にあて宮を入内せしめむとを乞ふ宇津三六 春宮、后宮の六十賀の後大宮に歌を贈つてあて宮のとを云ふ宇津三六 諸人物忌をし大願をたて社寺に籠つてあて宮を得むと祈る宇津三九 實忠、淵河に入りなむ程に思ひ亂れてあて宮に消息を贈るに返しせず宇津三九 姉仁壽殿女御嵯峨の后宮の六十賀の後あて宮

に歌を贈る女御も雅頼も春宮をたのめり宇津三元 兼雅あて宮に歌を贈つて熱情を述ぶと雖矣つて答へず宇津三三 平中納言、歌を贈つて熱情を陳ぶあて宮答へず宇津三三 兵部卿宮歌を贈る宇津三三 仲忠實忠歌を贈る宇津三三 そちの宮、雨の日紅梅によそへて歌をあて宮に贈る返しなし宇津三三 行雅歌を贈る宇津三三 陶英、雅頼が春宮大夫を辭する表を書くとて雅頼の邸に招かるあて君を介してあて宮に歌を贈るあて宮之を捨つ宇津三三 忠乞加持したる水を硯水にして歌をかきてあて宮に贈る佛徳現はれず宇津三三 實忠、あて宮に 思ひつきてより妻子を忘れて顧みず實忠の三條殿漸く荒れ室三條の上貧に苦む子そて君まさご君父實忠を戀ひて泣く三條の上鶯の子の雨に濡れたるに歌をそへて實忠に贈る宇津三三 雅頼三月十日難波に祓へしに船にて下るあて宮等數人歌を詠ず宇津三三 父に從て難波にはらへするの時春宮歌を贈る乃返歌して使に裝束を賜ふ宇津三三 畿内山陽南海道の受領ども難波に赴きて雅頼の祓へに行くを迎ふ受領らあて宮輔純と贈答あり宇津三三 實忠雅頼のはらへに伴はれ難波にあて宮と贈答す宇津三元 あて宮難波の祓より歸つて後春宮歌を贈る乃返歌す宇津三四 兼雅長谷に詣て大願を立て丶七日籠り誦經してあて宮を得させ給はゞ金堂を建て金像を作り身を終るまで月に一斗の油を奉らんと祈るそれより御嶽に詣で山路を歩して足腫る時に暴雨大雷あり兼雅、京極上仲忠よりもあて宮の忘れ難きを覺つて涙止らず宇津四一 實忠、加茂に詣て丶あて宮を得むの大願をたて社より歌を贈るに答へず宇津四一 兼雅、あて宮を得むため長谷御嶽詣を思ひ立ち井出より歌を贈るにあて宮答へず宇津四一 兼雅、御嶽詣よりあて宮に歌を贈るあて宮見て言はず兄輔純返しを勸むと雖應ぜず宇津四三 兼雅、神佛も驗なきを思ひ輔純を三條殿に招いてあて宮を得ずんば命絶ゆべきを云ひ徹宵語つてあて宮に歌を贈る宇津四三 輔純、兼雅の邸より歸つてあて宮に返歌をすゝむ應ぜず 宇津四四 仲頼宇佐の使にさゝれてあて宮に歌を贈る返しなし宇津四四 兵部卿宮、平中納言、三宮等あて宮に歌を贈る返しなし宇津四四 行雅陶英忠乞等歌を贈る返しなし宇津四五 東宮歌を贈る仁壽殿女御亦あて宮に歌を贈る、あて宮 女御に答ふ宇津四五 實忠、兵衛君を召しあて宮の事を計る兵衛君あて宮の父母常に宮の傍にあるを

以て聞え難きを云ひ實忠に斷念すべしといふ宇津四六 實忠功なきを知ると雖亦あて宮に歌を贈る答へず更に復贈るに答へず宇津四六 實忠、兵衛君に懇請してあて宮に歌を贈り兵衛君に裝束を賜ふ兵衛君、あて宮 に返しを勸むれども應ぜず宇津四七 實忠、兵衛君 に黄金をたまひあて宮に歌を贈り返しなくんば戀死すべきをいふ兵衛君の勸めによりあて宮僅に答ふ實忠喜ぶ宇津四八 實忠、今一度あて宮の返しを得むとし兵衛君に計る 兵衛君、傍に父母あり人目殿にして聞え難きをいふ實忠身死すべきをいひ三千兩を給ひて懇請す宇津四九 實忠、比叡の四十九所に四十九人の阿闍梨二百九十四人の番僧を聘して自ら中堂に七日七夜の忌をなし以てあて宮を得むの祈をなす時に室三條の上浮かれ男の物言ふを避けて志賀の山本にあり庭に草木を植ゑたりそて君と共に琴を彈く宇津四九 實忠四十九所の修法に加持したる水を硯水にして歌を書き兵衛君に返しなくば愈死ぬべきを云ひあて宮に傳へしむ兵衛君湯殿にてあて宮に傳ふ宮かへしせむと思へども身春宮に參るべきを以て聞えを憚りて返しせず宇津五〇 春宮に參るの日十月五日と定まる宮に意ある人々惑ひ騒ぐ實忠仲純臥し沈みて死に濱す大宮、仲純に、輔純及び仲純を以てあて宮の後見たらしめむと思ふをかく心弱きが苦しき事といふ宇津五一 春宮に參るの設け嚴なり宇津五二 仲忠、あて宮の 春宮に參るの日定まると聞き贈物に歌をそへそわうの君を介してあて宮に奉る宇津五三 春宮に參るの頃かたちの盛りなり身長五尺にやゝ足らず姿あてやかに髮美はしく誠に是絶世の佳人なり宇津五三 雅頼大宮、且つ仲純の身を憂ひ且つあて宮の春宮に參るの設けを急ぐ宇津五三 實忠得堪へずしてあて宮に歌を贈る宇津五三 仲純あて宮の春宮に參るを人面も忘れて口惜し〳〵と云ひ騒ぐ宇津五三 大宮あて宮に、仲純の哀なるを一たび對面せずやと勸む乃ち兵衛の君そわうの君のみをつれて兄仲純を北の大殿に訪ふ宇津五三 仲純圖らずあて宮に訪はれ辛うじて、入内の御送りもし難く今生に再會の期し難きをいふあて宮慰めて歸る仲純歌をかき宮の懐に投げ入る宇津五六 實忠、あて宮の入内すと聞きて一時息絶ゆ宇津五六 仲頼あて宮を戀ひて病むこと久しと雖強ひて入内を送る宇津五六 仲忠及びすゝし人生のはかなきを知りあて宮今日の入内は亦

他日の期すべきありとなし心強く思ひて入内の送りに從ふ宇津三八 流石に兄仲純を哀に思ひ慰むる歌をかきて兵衛の君をして密に奉らしむ兵衛の君人目を憚り密に病臥せる仲純の掌中に入れ指を以てあて宮の書なるを書く仲純喜限なし宇津三九 十月五日あて宮、春宮の女御となる雅頼、大宮、願を立て、仲純の平復を祈ると雖効なし宇津三九 仲頼、あて宮入内の悔やしさをあて宮の女房木工君に語る、木工君これを慰む、かくて仲頼世をはかなみて法師となる宇津三七 春宮に參つてより春宮晝夜放ち給はず當時春宮に侍するもの宣輝殿女御、麗景殿女御、梨壺女御等あり、あて宮獨寵を專にす宇津三八 二月中の十月庚申すいと盛なり宇津三八 庚申にすゞしが奉れるわりご等を仁壽殿女御に奉る宇津三八 春宮の桃花殿女御年十六かたちをかし二月中の十日庚申の夜兄藏人並に式部丞と物語る 式部丞、あて宮に並ぶものなきをいふ宇津三四 仲頼、雅頼の公達の來訪せる時あて宮への歌を托すあて宮哀れに思ひて返歌す仲頼涙を流してその文を伏し拜む嘗て一行の返しに接せず今返しあるは佛德の致す所となす宇津三六 實忠、あて宮入内の後東坂本小野に大願を立て、宮仕もせず兵衛君に托して歌を贈るあて宮見て哀れに思へど物言はず三月晦更に長歌を贈るに返しなし宇津三七 仲純、あて宮の入内後病益重し歌を宮に奉る宮あはれに思ひて返しす 仲純返しを抱いて遂に死す、あて宮聞いて深く悼む、など嘗てつれなくしけむと悔ゆ請ひて里亭に罷らむとす宇津三八 治部卿眞菅、あて宮を迎へむとし大殿を作つて待つ、あて宮入内すと聞き憤怒禁ぜず、國王大臣と雖我妻がねを盗まれて豈默せむやと子少將らの諫むるを刀を拔いて追ひ拂ひ冠を逆に冠し衣を裏に着、走つて南殿に赴き訴へ文を朱雀帝に奉る、文理非を辨ぜず帝怒つて眞菅を伊豆權守に貶し子少將數雅を長門權のすけに貶す藏人亦罪を得宇津三九 基元、あて宮の入内を聞き我が願一なり今は要なしとて七條四條の家皆燒き盡して山に籠る宇津三〇 產養のため里亭に籠る春宮屢使を遣して歌を贈る 宇津三〇 十月里亭雅頼の家にあて宮春宮の一の宮を生む朱雀帝の后宮、春宮坐したり宇津三一 朱雀の后宮、あて宮が一宮を生みたる三日の夜產養の料を贈り大宮に消息を贈る大宮返しす宇津三一 兼雅仲忠すゞしみなあて宮一宮を生む

の時產養の料を上る宇津三三 一宮の誕生の時、大宮ほその緒を切り忠純の室乳つけす各かづけ物ありあて宮白き衾きて臥す宇津三三 產後春宮に歸る翌年二三月頃より復はらみて三宮を生む產養前の如し再春宮に歸つて寵を專にす宇津三四 兼雅、雅頼の邸に雅頼と語つてあて宮の入内前を懷ふ宇津三四 仲忠、嘗て藤壺に詣でしにあて宮の琵琶に巧なると天下の名手行雅に勝りきと雅頼の邸に雅頼兼頼等に語る宇津三三 朱雀帝、仁壽殿に渡りて仁壽殿女御と物語すあて宮等數人の身の上を談ず宇津三六 雅頼、仁壽殿より歸る大宮、あて宮の有樣を問ふ雅頼あて宮が仲忠と琵琶箏を合せて遜色なかりしをいふ大宮仲忠をいとほしがり語る雅頼仲忠の懷に見えし文のあて宮の文なるべきをいふ宇津三四 仲忠あて宮入内の後も文通すあて宮の文の懷にありしを雅頼に問はれ笑つて答へず宇津三五 雅頼大宮、相撲の節會の用意す國々より參れるきぬを見て仁壽殿女御あて宮等の裝束を清らかにせむとす宇津三七 仲忠、あて宮の局藤壺に隱れて兵衛君と語るあて宮辛うじて口を開く互に詠あり宇津三八 嵯峨の后宮、あて宮が一宮を生みたる五日の夜初產養の料を贈る宇津三三 朱雀帝、六月仁壽殿に仁壽殿女御と碁を圍む、雅頼參りて春宮の命により宣旨に反きあて宮をすゞしに配せしめずして春宮に奉れる由を奏す宇津三四 朱雀の女一宮の產所に使を遣す宇津四三 仲忠、あて宮が朱雀の女一宮に贈れる贈物を見むと欲す女一の宮わらひて拒む宇津四三 朱雀の女一の宮に消息並に物を贈る宇津四三 仲忠、室朱雀の女一の宮に代りてあて宮への返書を認む宇津四三 仁壽殿女御、仲忠に代りてあて宮への消息を認むあて宮乃ち仲忠に返書す宇津四一 仲忠の女犬宮、あて宮に似たり宇津四四 典侍、京極の上あて宮朱雀の女一の宮の容貌を許す宇津四六 仲忠、そわうの君を經てあて宮に任官の喜びを申す宇津四四 仲忠朱雀院より退出してあて宮を訪ふ宇津四五 春宮と共に仲忠のことを語る宇津四五 うきとのゝ歌を消息に認めはた宮をして春宮に奉らしむ 宇津四三 はた宮、東宮の書をあて宮に上る宇津四三 春宮、仲忠の筆を取りてあて宮への消息を認む宇津四八 仲忠、はた宮をしてあて宮に傳言せしむ宇津四五 そわうの君をして仲忠への返書を認めしむ宇津四六 仲忠、あて宮に山となるの歌を詠じて返書を贈る宇津四六 仲忠等の殿上に在る

に酒肴を贈る宇津四八七　仲忠等に贈る酒肴に添へて君がためのの歌を詠ず宇津四八八　仲忠にかぎりなくの歌を添へて消息す宇津四八八　仲忠、あて宮より贈物を得て衆と共に殿上に在りて相觀樂す朱雀院密に之を覗ふ宇津四八八　はた宮、あて宮より仲忠への書簡を持てさわぐ宇津四八八　仲忠うたをあて宮に贈る宇津四八九　春宮の四宮を孕む宇津五〇二　すゞし尚あて宮を慕ふ宇津五一五　病と稱して出てず宇津五一三　春宮に暇を乞へども許されず宇津五一三　雅頼、女達をしてあて宮に旨を傳へしむ宇津五一三　雅頼、あて宮を迎へむとして隨身多く率ゐて出て立つ宇津五一三　懐姙五つきとなる宇津五一四　東宮、あて宮を抱きて放たず宇津五一四　春宮あて宮の仲忠に意あるとを倩す宇津五一四　雅頼あて宮を迎へに行きし翌朝夙く馬頭の君をしてあて宮の許に書を寄すあて宮之を春宮に奉る宇津五一四　春宮、あて宮に兵衛の君そわうの君あこきのみを侍らしむ宇津五一五　仲忠盛裝してあて宮に參りそんわうの君を經て正を賀す宇津五一二　人々を遠ざけ唯そんわうの君兵衛の君あこきのみを侍せしむ宇津五一三　仁壽殿女御あて宮に百日の儀の物を奉り自ら書を裁して消息す宇津五一四　仁壽殿女御に返書を贈る宇津五一五　里亭に罷でむとを乞ふ春宮梨壺女御もそのほどすきて罷でたるをとて許さず宇津五一六　雅頼、殿ばら宮ばらの住める町をあて宮に奉る宇津五一六　宣耀殿女御父季明の病大漸に及び傍らに侍す女御あて宮ひとり寵を專らにするをいふ宇津五一五　季明薨したる後二月晦あて宮罷でむとす春宮こたびはゐ止めずして許す終夜語つて別を惜む雅頼迎へに來るに及んで漸く曉に罷るを得たり宇津五一六　里亭に下つて雅頼大宮仁壽殿女御と物語す時は一宮を生むの翌々年なり宇津五一九　里亭に在るの日すゞし三日の參り物す宇津五一七　里亭に在るの日東宮より歌を賜はる、仁壽殿女御その文をみて仲忠の手となすあて宮仲忠の手を習へるをいふあて宮返しす宇津五一七　里亭にあるの日すゞし來つて語る偶三宮來るを以て立つ宇津五一一　三宮等と朱雀の女一宮のうへなどを語る宇津五一三　朱雀の一宮、あて宮に文を奉つて見ゐむとすあて宮返しして宮を訪ふ宇津五一五　春宮、あて宮に戀々たり歌を里亭に贈るあて宮御返奉る宇津五一五　朱雀の女一宮の所に在るに仲忠來れり一宮亦來るあて宮仲忠に一宮の習字の手本を書かむとを乞ふ宇津五一七　すゞし贈物に歌をそへてあて宮に奉る宇津五一八　己のすま

ひより雅頼のすまひに至る實忠を憐み歌を贈つて慰む實忠泣く民部卿及宣耀殿女御傍にあり宇津五一二　實忠、民部卿に曾てあて宮と朱雀の女一宮と碁をうつをかいま見しを語る宇津五一二　使歸つて實忠の返書を奉るあて宮實忠の志淺からざるを思ふ宇津五一四　實忠らの志深きをいひ此の人たちによらば心安かりけむと大宮等に語る宇津五一七　春宮、里亭にあるあて宮に贈物幷に消息を贈るあて宮返しす宇津五一五　雅頼、唯今世は仲忠兼雅に歸せむと大宮あて宮等にいふ宇津五一八　あて宮己がすまひに移る庭内甚美なり寢殿は清涼殿の如し東は一宮西の對は二宮東の二の對はあこ君にあてたり宇津五一九　仲忠、一宮の習字の手本をあて宮に奉るあて宮消息を贈る宇津五一九　春宮、あて宮に消息を賜ふあて宮返し奉る宇津五一九　仲忠、あて宮の消息に答ふ宇津五二一　あて宮、女房そわうの君兵衛君木工君等と物語す談實忠等の身に及ぶ宇津五二三　三月廿八日朱雀の女一宮と車を同じうして渡る互に物語す宇津五二四　あて宮朱雀の女一宮同女二宮忍びて琴をひく仲忠女一宮を迎へに來つて立ちぎゝす仲忠入つて女一宮と語る宇津五二八　春宮、あて宮に消息ありあて宮使に春宮の有樣他の女御の事など問ふ宇津六〇一　四宮を產まむとす大宮大願をたてゝ安產をいのる宇津六〇七　仲忠限なく裝束きて大宮を拜す　あて宮、朱雀の女一宮が仲忠の北方として獨領するを幸福とす　宇津六〇二　產の日近し人々侍ふ輔純等あり宇津六〇二　實忠、あて宮の邸にて兵衛君にあひて往事を語るあて宮またみ簾をあげ對面して語る宇津六〇四　產の日今日明日となれり春宮より御文あり宇津六〇三　四宮を生むまた安產なり宇津六〇五　春宮、四の宮の七日の產養の料にあて宮に屏風おまし等を送る宇津六〇六　朱雀の女一宮さまこそ君四宮を生める產養の料をあて宮に奉る宇津六〇七　內侍のすけ、あて宮が四宮を生める御湯殿の行事す宇津六〇八　仲忠、あて宮が四宮を生める喜に贈物をれくる宇津六〇八　實忠、あて宮に消息を贈つて安產を祝し合せて感慨をのぶ返しあり宇津六〇九　東宮、里亭なるあて宮に消息を贈る宇津六〇六　春宮、あて宮の參りの遲きをわびて使を贈る宇津六〇八　あてみや辛崎に祓へす、雅頼大宮共に行く宇津六〇八　朱雀の女一宮御方々と桂にあるの時あて宮消息を贈る三の宮戯に之を聞く女一宮返しす宇津六〇三　實忠、あて宮に消息を贈つて小野に歸るを人の止むるとなどいふ返し

あり宇津六八　春宮、あて宮の參らざるを憂ひて病む、これかたを使として消息を贈る、返しなし、これかたに罪を得べきをいふと雖返しせず春宮甚だ憂ふ宇津六三　實忠、女そて君を見るにあて宮に多く劣らず宇津六三　春宮に歌を返す宇津六八　春宮、あて宮に歌を贈る、あて宮乃ち返しす宇津六二　女御となる御局は藤壺なり宇津六三　大宮式部卿　雅頼　兵部卿宮民部卿宮等、あて宮に參る宇津六四　實忠の女袖君を宮中に入らしめむと欲す宇津六六　すゞしより消息あり乃ち返書す宇津六六　仁壽殿女御に返書す宇津六七　朱雀の女一宮より消息あり乃ち返書す宇津六七　春宮、あて宮の參内なきを歎く宇津六三　朱雀院、あて宮及び朱雀の女一宮を召す宇津六四　あて宮の生める一宮をおきて梨壺女御のうめる二宮を春宮にたつるの議ありあて宮之を憂ふ宇津六七　一宮の春宮に定りたるを喜ぶ宇津七三　一宮春宮に定れるを人々あて宮に賀す宇津七三　雅頼、あて宮の殿に至る宇津七三　春宮、あて宮に二たび文を賜ひたつ雲をの歌を贈る宇津七九　春宮に返書を上る宇津七九　春宮、あて宮の參内なきを歎きて歌を贈る宇津七九　仲忠と物語す宇津七〇　春宮に返書を上る宇津七〇　參内の用意を調ふ宇津七二　仲忠に歌を見す宇津七二　實忠に返書を遣す宇津七二　實忠、あて宮に消息を贈るあて宮之に返しす宇津七三　仲忠、あて宮に返歌す宇津七四　一宮(時に春宮)にそひて參内す宇津七四　春宮(今上)と物語す宇津七六　禁中に至り着す宇津七六　あけぬれば歌を返しす宇津七七　春宮、あて宮に消息す宇津七七　春宮に寵せらる宇津七八　春宮に忠康を修理太夫にせんとを乞ふ宇津七九　花の宴にくちぬとての歌を詠ず宇津七九　宮君を愛す宇津七一　朱雀の女一宮の容姿、あて宮に勝る宇津七七　兼雅、あて宮に朱雀の女一宮の事を語る宇津八〇　兼雅、あて宮の藤壺に參上す宇津八〇　仲忠の家庭を羨望す宇津八〇　兼雅、あて宮の藤壺より退出す宇津八二　仲忠の邸に臨む宇津八六　いぬ宮の美貌あて宮に劣らず宇津八四

あなはのみや　穴穂宮　景行天皇都を穴穂宮に遷す水一四　安康天皇居す正六

あねいちひめ　姉市姫　孝靈天皇の母なり水九

あのつ　伊勢安濃津　平清盛安濃津より熊野に赴くの途鱸あり躍りて其の舟中に入る衆以て瑞兆となす平家七

あののはつけう　阿野法橋　ぜんしやう

源全成平治

あは　阿波國　藤原經宗流さる平治九二　源義經大風を冒し攝津國より阿波に渡る平家四八一　全眞、流さる平家三四〇　土御門天皇阿波に流され其地に崩ず正四　土御門上皇土佐より阿波に移る増二七　土御門上皇阿波に崩ず増三四

あはたぐち　粟田口　平維繁、後白川院の勅によりて警固す保一〇

あはたぐちのべつたうにふだう　粟田口別當入道　糸を女に贈る今物四

あはだでら　粟田寺　増基此所にて歌を詠ず庵一三

あはだどの　粟田殿　みちかね　藤原道兼大鏡

あはだのくわんぱく　粟田關白　みちかね　藤原道兼著

あはぢ　淡路　藤侍從此地に着く松一〇　宰相の君左大將に淡路國に逐はる松六　早良親王淡路に流さる水七六　淡路廢帝淡路に移さる正三三

あはぢのくわんじや　淡路冠者　よしひさ　源義久平家

あはぢのはいてい　淡路廢帝　じゆんにんてんなう　淳仁天皇水

あはづ　粟津　菅原孝標の女此のところに逗留す更八　今井兼平、木曾義仲をいさめ粟津の松原にて自害せんとを勸む平家三六〇　木曾義仲粟津原にて馬を深田に踏み入れ進退に窮せる時に石田爲久の矢にあたりて遂に死す平家三六二

あはのだいじん　阿波大臣　もろなか　源師仲平治

あはのないし　阿波内侍　平德子に具して小原山に隱棲し後白川院が行幸ありし時拜謁す平家五二　藤原通憲の女、母は紀伊二位なり平家五三

あはのねん　阿波院　つちみかどてんなう　土御門天皇増

あはれなるもの　哀なる物　孝ある人の子枕六六

あふぎあはせ　扇合　有樣著二五

あふぎのほね　扇の骨　あを、色はあかき枕七八

あふぎひき　扇引　有樣著二六

あふさか　逢坂　關の名所なり枕四四　阿佛尼此の所にて歌を詠ず十六夜四四　蟬丸の故事東一

藤原詮子此の地に歌を詠ず東二　源親行此の地にて歌を詠す東二　後醍醐天皇、逢坂を過ぐ増三五　増基此所にて歌を詠ず庵七

あふつに　阿佛尼　細川の庄を失ふ十六夜一　歌を藤原爲相に贈る十六夜二　領地恢復の訴訟の爲鎌倉に赴く十六夜二　歌を藤原爲相に贈る十六夜二　守山にていとゝなほの歌を詠す十六夜四　野路にてうちしぐれの歌を詠す十六夜四　きみをこその歌をむすめに贈る十六夜四　逢坂の關にてさだめなきの歌を詠す十六夜四　不破の關にてひまおほきの歌を詠す十六夜五　野州川にてたびゝとはの歌を詠す十六夜五　關の藤川にて歌を詠す十六夜五　笠縫の里にて歌を詠す十六夜五　醒か井にて歌を詠す十六夜五　熱田の宮にて歌を詠す十六夜六　熱田の宮にて歌を詠す十六夜六　熱田の宮にていのるぞよの歌を詠す十六夜六　洲俣川にて歌を詠す十六夜六　結ぶの神祠にて歌を詠す十六夜六　宮地山にてしぐれけりの歌を詠す十六夜七　八橋にて歌を詠す十六夜七　鳴海潟にて歌を詠す十六夜七　二村山にて歌を詠す十六夜七　高師山にて歌を詠す十六夜八　濱名橋にて歌を詠す十六夜八　宮地山にて歌を詠す十六夜八　濱松にて歌を詠す十六夜九　天龍川にて歌を詠す十六夜九　見付にて歌を詠す十六夜九　菊川にて歌を詠す十六夜九　歌を都へ贈る十六夜一〇　大井川にて歌を詠す十六夜一〇　手越に宿る十六夜一〇　宇都山にて山伏に逢ひ都への消息を托す十六夜一〇　息津の濱にて歌を詠す十六夜一〇　富士の山を見て歌を歌す十六夜一一　清見潟にて歌を詠す十六夜一一　田子浦にて歌を詠す十六夜一一　清見關にて歌を詠す十六夜一一　富士川にて歌を詠す十六夜一一　足柄山は道遠しとて箱根路を超ゆ十六夜一三　三島明神にて歌を詠す十六夜一三　箱根山にて歌を詠す十六夜一三　早川にて歌を詠す十六夜一三　箱根山にて歌を詠す十六夜一三　歌を都へ贈る十六夜一三　鎌倉に着す十六夜一三　歌を式乾門院の御匣殿に贈る十六夜一四　歌を藤原爲兼に贈る十六夜一四　歌を大宮院の權中納言に贈る十六夜一四　三位入道の妹なり十六夜一六　歌を妹に贈る十六夜一六　歌を大宮院の權中納言に贈る十六夜一七　病む十六夜一七　大宮院の權中納言より消息を得十六夜一八　歌を大宮院の權中納言に贈る十六夜一八　消息を大宮院の權中納言に贈る十六夜一八　歌を和德門院の新中納言に贈る十六夜一九　藤原爲相阿佛尼に和歌を贈る十六夜二〇　こひしのぶの歌を爲相に贈る十六夜二一　あきふかきの歌を爲相に贈る十六夜二二　しきしまや云々の長歌を詠す十六夜二三　歌を大宮院の權中納言の君に贈る十六夜二三　「ふししばの」轉一　「鳥はものかは」轉一　これやさはの歌を詠す轉二　人しれずの歌を詠す轉二　太秦に詣づ轉二　「君やこしとも」轉二　歎きつゝの歌を詠す轉五　あらし山を超ゆ轉六　嵯峨に着す轉六　北山の麓に宿る轉六　西山の麓に宿る轉七　病む轉七　陸奥のゝ歌を詠す轉八　捨てゝ出でしの歌を詠す轉八　病みて愛宕の附近に宿る轉九　消ねてはてむの歌を詠す轉九　れも ひ出づるの歌を詠す轉九　都に歸る轉一〇　はかなしやの歌を詠す轉一〇　おく露のゝ歌を詠す轉一〇　待ちなれしの歌を詠す轉一〇　消ねかへりの歌を詠す轉一一　東下りの爲に都を立つ轉一一　野路にてすみわぶるの歌を詠す轉一二　逢坂山にて歌を詠す轉一三　洲俣川を渡る轉一三　鳴海潟にて歌を詠す轉一三　息兒の病めるを聞きて都にかへる轉一四　心かあの歌を詠す轉一四　忘るなよの歌を詠す轉一五　不破關にて歌を詠す轉一五　鏡の山にて歌を詠す轉一五　都に歸る轉一六　我よりもの歌を詠す轉一六　きみもさはの歌を詠す轉一六

あぶつにのいもうと　阿佛尼妹　歌を阿佛尼に贈る十六夜一六

あふひのうへ　葵上　左大臣の姫君なり源一五　源氏の君と婚す源一五　源氏の君の君葵上に滿足せず源一六　源氏君葵上のもとに退出す源一六　源氏君方違のため葵上のもとより紀伊守の中川の邸に赴く源一七　源氏君葵上の無情を恨む源一八　源氏の君が紫上を迎へたるを嫉妬す源一四　源氏の君を恨む源一四　源氏君は葵上よりは四歳の弟なり源一四　桐壺帝、源氏君が葵上を疎んずるを戒む源一四　頭中將は之か同母兄たり源一五　懷妊す源一五　齋院御禊の行列を見に赴きて六條御息所と車所を爭ふ御息所乘車傷けらる源一五　生靈に惱む源一七　六條御息所の生靈に惱まさる源一七　六條御息所葵上を呪詛す源一七　夕霧を上と爭ふ源一七　六條御息所葵上を呪詛す源一七　死す鳥邊野に生む、父は源氏の君なり源一七　源氏君葵上の葬送に歌を詠む源一八　葬る源一七　六條御息所歌を源氏に贈りて葵上の死を吊ふ源一八　源氏物語中、葵上薨去の處の哀れなる節たるとを、女等打ち集ひて批評す無一七

あふひのにようご　葵女御　葵のまへ高倉

院に寵あり由て人呼んで之を葵の女御といふ平家三五一

あふひのまつり 葵祭 仲忠京極の上の簾に葵祭の桂をつけしむ宇津八三五

あふひのまへ 葵前 高倉院深く寵す人呼んで葵の女御と字す平家三五一 藤原基房、猶子として女御たらしめむとす高倉院恥ぢて納れず平家三五三 高倉院世の謗を憚りて召さず平家三五三 高倉院忍ぶれどの 古歌を書して賜ふ平家三五三 憂欝に病を發し遂に卒す平家三五三

あふみのきみ 近江君 内侍のかみたらんとを弘徽殿女御(一)に依頼す源三五六 夕霧に懸相し沖つ舟の歌を詠みかく源三五六 源氏君頭中將が近江君を養ふを笑ふ源四七七 頭中將近江君の曹子を竊かに覗ふ源四八六 頭中將、弘徽殿女御(二)に近江君を托す源四八六 頭中將近江君の輕躁を誡む源四八七 歌を弘徽殿女御(二)に贈る源四八七 弘徽殿女御(二)に消息を贈る源四九〇 中納言君(一)歌を弘徽殿女御(二)に贈る源四九〇 頭中將、近江君を愚弄す源五三一 夕霧、近江君に歌を詠みかく源五五六

あべの 阿部野 北畠顯家此所に戰死す考二

あべのみうし 安部のみうし かぐや姫に火鼠の裘を贈る竹二一 火鼠の裘空しく燒く竹二一

あほしんなう 阿保親王 伴健岑の亂兆を太后に告ぐ水八四

あま 尼 地藏菩薩に逢ふ宇治一六 博打に衣を與へて地藏菩薩の在所を問ふ宇治一六 世を厭ふの歌を詠じて大原里を去る著一六六 僧に誂らへられて說經の席にて泣く著三〇一 男山の峯の紅葉云々の歌を謠ふ枕空 よるは誰れと寢ん云々の歌を謠ふ枕空 うらやましの歌を詠ず枕六六 なみださへの歌を菅原孝標の女に贈る更一七 龍蓋寺及び泊瀨に詣づ水二 修業者と語る水三 水鏡の大鏡に及ばぬことを語る水八六 水鏡と名づけし故を語る水八七 清涼寺に詣づ増一 清涼寺に人と物語る増一 後鳥羽以後を物語る増三

あまがさき 尼ヶ崎 中務の内侍此所に趣く中一五 遊女あり中一六

あまがつ 天兒 紫上春宮(四)の爲めにつくる源六三一

あまぎみ 尼君 皇子の女たり秦のしん王が筑紫に來朝せる時其寵を受けて河陽縣の后を生む濱六 秦のしん王筑紫に來朝せる時尼君を愛して 河陽縣后を生む濱六 河陽縣后、母尼君を戀ふ濱八 河陽縣后、五歲の時 母尼君に別れて唐に歸る濱八 河陽縣后、母尼君の緣により日本の人を慕ふ濱九 河陽縣后の擧動言語等尼君に似て日本の人に異ならず濱九 河陽縣后濱松中納言に沉の文箱を托し日本なる母尼君に傳へんことを依頼す濱四一 出家して尼となる濱四一 濱松中納言、河陽縣后が尼君に贈れる消息を披見す濱五一 高陽縣后この世にもの歌を尼君に贈る濱七六 上野宮の女なり濱八〇 尼となりて吉野山に籠る濱八〇 帥の宮と通じて出家の後吉野姫君を生む濱八〇 河陽縣后より贈れる消息を披見す濱八一 濱松中納言、尼君を吉野山に尋ねて對面し河陽縣后のことなどを語らふ濱八二 濱松中納言にうつゝにはあらぬこととぞの歌を詠みかく濱八三 吉野姫君、尼君とともに吉野の山に籠居す濱八五 吉野姫君の生長を樂む濱八九 濱松中納言、尼君及び吉野姫君に衣更への裝束及び繪物語を贈る濱九三 濱松中納言尼君を吉野山に訪ふ濱一四 濱松中納言歌を尼君に詠みかく濱一五 歌を濱松中納言に詠みかく濱一五 濱松中納言、尼君を吉野に訪ふ濱一三 病む濱一三 濱松中納言、尼君の病を愁ひ僧をして讀經祈禱せしむ濱一三 卒するの時紫雲空にたなびく濱一三 吉野姫君尼君卒去せる時悲歎の餘りに氣絕す濱一五 濱松中納言、尼君を葬る濱一六 濱松中納言、尼君の七七日の法事を行ふ濱一三

あまぎみ 尼君 侍從より消息を受く佳三 まことに世をそむきて云々の文を侍從に贈る佳三 中納言の姫君を訪ふ佳三

あまつひこはほににぎのみこと 天津彦火々瓊々杵尊 葦原中州に降る正一六 降臨の時、天兒屋根命、天太玉命、天鈿女命、石凝姥命、玉屋命を從ふ正一六 天照大神の神勅を受く正一六 猿田彦神、命を奉迎す正一八 磐長姫、尊を詛ふ正一八

あまてらすおほがみ 天照大神 狹衣に神託す狹二九六 狹衣を卽位せしむべき旨嵯峨院に託宣す狹二九八 狹衣を卽位せしむべき旨堀川大臣に託宣す狹二九九 狹衣に讓位すべき旨後一條院に託宣す狹二九九 大倭姫命大神の宮所を求む正九 伊弉諾尊、大神を生む正一〇 天石窟に籠る正一三 素盞烏尊と誓ふ正一三 天津彦火々瓊々杵尊、大神の神勅を受く正一六 大汝命事代主神大神の勅に從ふ正一六 健御名方命大神の勅に抗す正一六 健甕槌神を召す正一三 大倭姫命、大神を伊勢に祭る正一七 八幡と並びて二所の宗廟とせらる正

あまとよつひめ　天豐津姫　孝昭天皇の母なり水九

あまのがは　天の川　在原業平、惟喬親王に從ひて狩し天の川に至れる時かりくらしの歌を詠ず伊三　中務の内侍天の川にて歌を詠ず中一六

あまのかるも　海人刈藻　女等打ち集りて海人刈藻物語を批評す無三九

あまのはしだて　天橋立　邦子内親王行啓す増八二

あまひめぎみ　尼姫君　たいしやうのひめぎみ　大將姫君濱

あまほふし　尼法師　花櫻折る少將の爲に源中納言の女と誤られて盜まる堤四

あまみや　尼宮　をんなさんのみや　朱雀院女三宮源

あまよのしなさだめ　雨夜品定　源氏君、左馬頭(二)頭中將(二)藤式部丞と品定す源八　雨夜のしなさだめに左馬頭批判の博士となる源三五　左馬頭(二)懺悔の物語をす源三六　頭中將(二)懺悔物語す源三一　藤式部丞懺悔物語す源三三　左馬頭(二)總評を下す源三五

あみだのみね　阿彌陀峯　峯の名所たり枕二

あんかうてんなう　安康天皇　允恭第二の皇子なり水三　皇兄の東宮(木梨輕太子)を殺す水三四　母は忍坂大中姫なり水三四　大草香を殺し、妃を奪ひ、妹幡梭皇女を大泊瀬に妻はす水三四　眉輪王に弑せらる水三四　大草香皇子を殺す正三八　穴穂宮に居り正三八　卽位す正三八　眉輪王に弑せらる正三八

あんかんてんなう　安閑天皇　二年位に在り水三四　母は尾張目子媛なり水三四　宣化天皇の御兄なり水三四　大和高市郡に遷都す水三四　卽位す水三四　繼體の御子なり水三四　欽明天皇の御弟兄なり水三一　勾金宮に居たまふ正四二　卽位す正二

あんかもんねん　安嘉門院　くにこないしんなう　邦子内親王增

あんきもんねん　安喜門院　ありこ　藤原有子增

あんし　悟子　よしこ　藤原悟子增

あんどうじ　桑原安藤次　宇野太郎、望月三郎、諏訪平五、進藤武者安藤三、木曾忠太、彌忠太、根津神平、靜妻小次郎、熊坂四郎等と共に奮戰して源爲朝に當る保四三

あんとくてんなう　安德天皇　入海す寶劍沈む増四　平時方の北の方、乳母となる平家二三　誕生の時甑を誤りて北へ落し更に南へ落し直す平家二四　御産の時不思議の事多し平家二四　藤原基房、同兼實、同實定等以下安德天皇の降誕を賀し平清盛の六波羅の邸に參す平家二四　守覺法親王、天皇降誕の時修法せる功により東寺修道の恩賞に預る平家二五　天皇降誕の時、師覺法親王修法せる功によりて弟子覺誓法師となり守覺法親王修法せるによりて弟子圓良法印となる平家二五　父は高倉天皇、母平德子たり平家三三　袴着及び眞魚初を行ふ平家二四　高倉院位を禪る平家二四　平清盛、高倉院をして强て安德天皇に讓位せしむ平家二四　紫宸殿にて卽位す平家二九　藤原兼實、天皇卽位の時、紫宸殿に於て行ふべきを主唱す平家二九　百官を率ゐて福原の新都に移り平賴盛の山莊を以て皇居とす平家三〇三　北山の邊、知足院に入らせ給ふ平家三三　福原の新内裏造營成りて遷幸す平家三九　福原の新内裏にて五節を行ふ平家四〇　新嘗會を舊都平安城の神祇官にて行ふ平家四〇　平德子と同輿宮中を出でゝ洛外知足院に入る平家三三　平宗盛、西國に安んじ奉らんとす平家三三　平時忠同時實同信基天皇の知足院行幸の時供奉す平家三三　平宗盛福原の内裡を火し天皇を奉じて海路より西國に走る平家三六　太宰府に遷幸あるの時岩戸種直の家を行在とす平家三六　宗盛、帝を奉じ一族を具し太宰府より箱崎の津に落つ平家四二　平宗盛帝を奉じ一族を率ゐて山賀城に入り更に豐前柳ヶ浦に渡る平家四三　平宗盛、源義經に鵜越に敗られ天皇を奉じて播州高砂より舟に乘じて屋島に走る平家四七　平宗盛、源義經が八島に攻め來りし時安德天皇を奉じ一門を率ゐて海上に浮ぶ平家四八　平知盛、檀浦の戰の時形勢の非なるを見、天皇の御座舟に乘じ船内を掃除す平家五〇六　平時子、天皇をいだき神璽寶劍を奉じて海に投ず平家五〇七　大納言の佐は天皇の乳母なり平家五二　平德子二十二歳の時、天皇を生む平家四六　御入水の際の有樣を平德子、後白川院が小原山に行幸ありし時物語す平家五九　平宗盛、天皇を奉じて西海に逃る正九一　福原の新都に幸し幾千もなくして又平安に都を復して還御す正九一　卽位す高倉天皇第一の皇子母は平德子たり正九一　平德子抱き奉りて海に投じて崩す正九一

あんねいてんなう　安寧天皇　母は五十鈴

依媛なり正八　綏靖の御子たり水八　太子となる水八　三十八年位に在り水八　即位す水八　懿德天皇は安寧第三の皇子なり水九　即位す正三五　片鹽浮穴宮に居り正三五

あんぷくでん　安福殿　後宇多院後醍醐天皇、安福殿にて歌合あり　公賢、公敏、爲藤以下御催に列す増一六九

あんやうに　安養尼　惠心の妹なり著三四一

盜賊を感せしむ著三四一

あんらくじ　安樂寺　菅原輔正菅原道眞の爲めに此に塔婆を建つ著六

あんろくさん　安祿山　亂を起す唐一九　藤原通憲、安祿山のことをしるしたる繪卷を献じて後白川院を諫止す平治五

あめのあかるたまのみこと　天明玉命　八坂瓊曲玉を作る正一三

あめのいはや　天石窟　天照大神之に籠る正一三

あめのうづめのみこと　天鈿女命　天孫に供奉す正一六　狹田彦神に遇ふ正一八

あめのこやねのみこと　天兒屋根命　天孫に供奉す正一六　中臣鎌足は命の裔たり正四六

あめのたぢからをのみこと　天手力雄命　天石窟戸を開く正一四

あめのたねこのみこと　天種子命　神事をつかさどる正一四

あめのとみのみこと　天福命　神事をつかさどる正一四

あめのぬほこ　天瓊矛　國常立尊、伊弉諾伊弉冊の二神に授く正八

あめのひこほほににぎのみこと　天彦火々瓊々杵尊　吾田長狹御崎に住む正一八　木花開耶姫をめす正一八

あめのふとたまのみこと　天太玉命　天孫に供奉す正一六

あめのむらくものつるぎ　天叢雲劍　素盞烏尊八岐の大蛇より得正一四　草薙の劍と稱す正三九　日本武尊劍を揮ひて野火を鎭む正三九　平家滅亡の時海に沈む、壇の御座の劍を以てこれに代ふ後神宮の神託により神劍を用ゐる正六三

あめのやすのかは　天安川　高皇產靈尊川邊に諸神を會す正一三

あめわかひこ　天稚彦　無名雉を射殺す正一五　高皇產靈尊の矢に當りて死す正一六　狹衣中將を誘ひて天上に昇る狹三

あやぎみ　あや君　藤原賴長の童名なり今鏡一〇

あやのこうぢのさんみ　綾小路三位　はれくもり花のひまもる村雨にといふ上の句を詠ず中七　かくばかりの歌を中務內侍に贈る中九　わすれいまこそはの歌を中務內侍に贈る中九　おもひいでゝしもの歌を大納言に贈る中九　おもひいでゝの歌を大納言に贈る中九

あやのこうぢのみや　綾小路宮　しやうゑほふしんなう　性惠法親王徒

あやめ　菖蒲　五月民戶に挿む四季一六

あやめ　菖蒲　老嫗、あやめと稱して紫式部に仕ふ今鏡三

あやめのぢもく　菖蒲除目　有樣四季一七

あやめのねあはせ　菖蒲根合　有樣著三八　後冷泉天皇之を行はせらる今鏡一八　媞子內親王寬治七年これを催す今鏡一六

あらうみのしやうじ　荒海障子　所在繪樣枕三　萩の戶の前にあり手長足長等を畫き裏に宇治の網代を畫く著三四

あらしやま　嵐山　阿佛尼これを超ゆ轉六

あらしよし　荒所司　よしすけ　義助宇治

あらじらう　三浦荒次郎　よしずみ　三浦義澄平家

あらも　滑海藻　元旦の儀式に用ゐる土三

ありあけのわかれゆめがたり　有明別夢語物語の名なり女等打ち集りて批評す無四三

ありいへ　藤原有家　新古今和歌集を撰す増七

ありかた　藤原成通有賢の女房の許に通ふ今鏡一三四

ありがたきもの　有り難き物　姑に譽められる丶婿枕三一

ありかね　藤原在兼　常在光院の鐘の銘を作る徒九三

ありくに　藤原在國　輔道の子なり父病むの時泰山府君の祭を行ひて効驗あり今鏡三〇七

ありくに　有國　平知盛に從ひ源賴政を平等院に襲ふ平家一八四　木曾義仲征討軍の侍大將なり平家一八四　木曾義仲の軍と戰つて死す平家一七七

ありこ　藤原在子　石淸水の社に神託を受く増四一　崩ず増四五

ありこ　源在子　通親の女、實は能圓法師の女、土御門天皇の母なり増六　土御門天皇の御母たり正四四　源道親の女なり承明門院と號す正四四　源通方の　薨後、孫後嵯峨天皇を養ふ

正九

ありこ　藤原有子　九條師教を教育す徒四三
後堀河の后となる増三

ありしげ　小山田有重　大番役として在京す平家二五　平宗盛の命によりて北國に向ふ平家二六　平知盛、平宗盛を諫めて有重等の罪を免ず平家二六

ありすけ　有佐　顯綱の子となる實は後三條天皇の御子なり今鏡七六

ありすけ　有資　後嵯峨上皇の五十賀の試樂に臨む増四四

ありすえ　橘有季　青侍の所有せる吹田庄の給物を押領す著三五

ありすえ　糟屋有季　木曾義仲追討の爲源義經に從ひ宇治橋に押し寄す平家毛一

ありただ　有忠　不平を抱く増一五　おほかたの丶歌を詠ず増一八　邦良親王の薨去により て鎌倉にて出家す増一八

ありつな　藤原有綱　從四位下に叙し院の昇殿を許さる平家一五

ありつね　紀有常　三代の帝に仕へて寵あり性温雅にして清貧に安んず伊七　手を折りての歌を詠す伊七　妻と離別す伊七　これやこの丶歌を詠す伊八　秋やくるの歌を詠す伊八　ならはねばの歌を詠ず伊一六　女、君によりての歌を有常に贈る伊一六　一年にの歌を惟喬親王に從ひて狩せる時天の川にて詠す伊三　れしなべての歌を詠ず伊四四

ありつぐ　阿部在繼　千手經の紛失したる時後鳥羽天皇の勅により其の在りかをトふ著一五

ありとき　源有時　花園天皇元服の宴に拍子を取る増一六　清暑堂の神樂の時殺害せらる藤原顯香、有時を殺す増一六

ありどほしのみやうじむ　蟻通明神　名稱の起原枕一五　なゝわだにの歌を詠ず枕一五

ありなが　菅原在良　侍讀となる著六

ありなほ　勅使河原有直　木曾義仲を鹽谷惟廣と共に追跡す平家毛五

ありのり　藤兵衛尉有範　平經正有範外七人を具して竹生島に詣づ平家二五

ありのりのはは　藤原有教母　月やむかしの丶歌を詠ず今鏡二〇

ありはる　源有治　郎等が狼藉せるに座して罪を得著四四

ありひと　源有仁　かげきよきのうたを詠

ず著三六　佐實敦正有仁を訪ふ著三一　子孫の絶ねんとを願ふ著三　鳥羽院の花の宴の歌の序を書く今鏡四三　崇德天皇の花の宴に琵琶を彈ず今鏡四七　輔仁親王の薨ぜる時喪に服せず白川院の崩御の時喪に服して悲歎す今鏡一八七　白川院の花見の行幸の和歌の序を草す今鏡一八七　琵琶、笙の笛をよくし又書に巧なり今鏡一八七　源姓を賜ふ世宮の大將と稱す今鏡一八七　衣紋を好み烏帽子をこはく塗るとなと始む今鏡一八八　歌を藤原實能に贈る今鏡一八八　女房越後乳母及小大進を召し仕ふ今鏡一八九　藤原公敎有仁と連歌す今鏡一八九　越後乳母有仁と連歌す今鏡一九〇　性質典雅百藝に達す今鏡一九〇　中將の御、歌を有仁に贈る今鏡一九一　田中光清、歌を有仁に贈る今鏡一九三　石清水八幡宮に七夜參詣す今鏡一九三　歌を越後乳母に贈る今鏡一九三　花園といふ處に山莊を造營す今鏡一九三　容儀を好む正八五

ありひとのきたのかた　源有仁北方　藤原實能の妹なり今鏡一八八　歌をよくし書をよくし源有仁と琴瑟相和す今鏡一九一　藤原璋子の姉なり今鏡一九一

ありひとのむすめ(一)　源有仁女　統子內親王に宮仕へす琴琵琶の名手たり今鏡一九三

ありひとのむすめ(二)　源有仁女　妹子內親王に宮仕へす今鏡一九三

ありひら　藤原在衡　尙齒會を行ふ著六四

ありふさ　藤原有房　書寫山に詣でゝ僧と歌道の物語す野一　僧と藤原爲兼の歌を評す野四　僧より心を種とし心を種とすべからざることを聞く野六　僧より歌道の話を聞く野六　僧より心をすなほにして心をすなほにすべからざることを聞く野二　僧より詞をはなれて詞をはなるべからざることを聞く野三　僧より風情を求めて風情を求むべからざることを聞く野六　僧より姿をならひて姿をならふべからざることを聞く野六　僧より古風をうつして古風をうつすべからざることを聞く野三　僧より古今集を以て本とすべきことを聞く野三　本歌を取るとの可否を僧より聞く野三　掄子の閑居を守護す増一四三　掄子に通ず増一四三　內大臣に昇る増一四三　龜山法皇の葬送に供奉す増一三三　藤原信賴に與し內裡の勢揃に參す平治三　解官せらる平治六　尾張川に戰うてこれを破る平治三五

ありまのゆ 有馬湯 名湯の一たり枕五五

ありむね 阿部有宗 吉田兼好をいさむ徒八八

ありむねのむすめ 有宗女 園行の母なり今鏡一九七

ありもり 有盛 藤原頼長の車を主上の車と誤解して下乗す著三七六

ありもり 平有盛 平宗盛等と共に都を落つ平治三四 平資盛に從ひ源範頼同義經の來攻をきゝ三草山の西の山口に押し寄す平家三九二 平資盛、三草山の西の山口に大敗し平有盛、同忠房等と讃岐屋島に走る平家三九三 平資盛に從ひ備前兒島に陣す平家四四四 檀の浦に入水す平家五〇九

ありゆき 有行 天變の時これを豫想す今鏡二六六

ありより 有頼 實衡の大臣の大饗に拍子をとる増一四四

ありわう 有王 俊寛の召仕なり平家二三三 俊寛の女の書を持して鬼界が島に俊寛を尋ぬ平家三三三 俊寛、有王に對面す平家二四四 俊寛の遺骨を高野に納め尋で出家して俊寛の後世を吊ふ平家二九九

あをのがはら 青野原 一條兼良此の地を過ぎて歌を詠ず藤六

あをはか 青墓 一條兼良此里にて歌を詠す藤一〇 源義朝着す平治四四 延壽は青墓宿の長者大炊が女なり平治四四 源重成、源義朝に代り一揆と戰うて討死す平治四五

いうぎもんゐん 遊義門院 れいしないしんなう 妍子内親王正

いうけい 祐慶 世の人いかめ坊と稱す平家五五 明雲を以て更に坐主に仰がんとを首唱す平家五五

いうちないしんなう 祐智内親王 嵯峨帝第三の皇女、祐智内親王を加茂齋院となす、齋院の始たり平家三〇二

いうゑん 祐圓 平宗盛等と共に都を落つ平家三四四

いうわう 幽王 褒似を愛して天下亂る保八五

いかしこめのみこと 伊香色謎命 崇神天皇の母なり水二

いかのぎしき 五十日儀式 有樣紫三〇 有樣紫四八

いがのつぼね 伊賀局 篠塚重廣の女なり

芳九 藤原基俊の怨靈に逢ふ芳一〇 大木を吉野川に架して藤原簾子を渡し奉る芳一〇 楠正儀に嫁す芳二一

いかめばう いかめ坊 世人、祐慶をいかめ坊と稱す平家五五

いかるがのみや 斑鳩宮 聖德太子斑鳩宮の夢殿に籠る水四三 入鹿斑鳩宮を燒く水四三

いきずたま 生靈 葵上惱む源一四〇

いくし 藤原育子 たちかへるべき心地こそせねといふ下の句を詠ず著八三 藤原忠通の女なり、六條天皇を養はる今鏡六六 母は源顯俊の女なり今鏡六九 出家す今鏡一〇八 藤原忠通の女なり、忠通、二條の女御とす今鏡一〇八 二條の女御となる今鏡一〇八

いくた 生田 後醍醐天皇、生田の里を訪はずして過ぐ増二〇三

いくたがは 生田川 凡べて同しやうなる二人の男に戀せられし女入水す大和五一

いくたのもり 生田杜 源範頼、昆陽野を發して生田森に押し寄す平家五九四

いくはうもんゐん 郁芳門院 ていしないしんなう 媞子内親王今鏡

いけだ 池田 熊野、池田宿の長者の女たり平家四四五

いけだわう 池田王 珍努 古麿、池田王を東宮に立てむとす水六一

いけづき 生食 名馬たり木曾義仲追討の時源頼朝これを佐々高綱に與ふ平家五九

いけどの 池殿 いけのぜんに 池禪尼平治

いけどの 池殿 よりもり 平頼盛平治

いけのぜんに 池禪尼 平頼盛の母、平清盛の繼母なり平治八二 平宗清、源頼朝を憐み禪尼に就きて助命のことを乞ふ平治八二 源頼朝を憐み助命のことを平重盛に就きて平清盛に請ふ平治八三 源頼朝を召して赦免の喜を陳ぶ平治八三 源頼朝伊豆へ下向するの際尋ね來る禪尼別れを惜み且訓戒す平治四四 源頼朝、平頼盛を扶助して禪尼の舊恩に報ず平治一〇三 源頼朝對面して赦免の恩を謝す平治八三 源頼朝、平治の亂に誅せらるべかりしを禪尼の請によりて流罪に宥めらる平家二五 源頼朝、平頼盛を扶けて池禪尼の舊恩に報ず平家四六八

いけのだいなごん 池大納言 よりもり 平頼盛平家

いけのちうなごん 池中納言 よりもり 平頼盛平家

いけ 池 猿澤の池枕三

いこう 懿公 鶴を愛して國を失ふ著三八一

いざなぎのみこと 伊弉諾尊 伊弉冊尊と木祖句々廼馳神を生む著四三 伊弉冊尊と草野姫を生む著四三 國常立尊の勅を受く正八 大八洲を生む正一〇 天照大神を生む正一〇 月神を生む正一〇 素盞烏尊を生む正二 蛭子を生む正二 伊弉冊尊を追ひて黄泉に到る正二 國常立尊に復命す正二

いざなみのみこと 伊弉冊尊 伊弉諾尊と夫婦となりし時鵲鴒の交尾するを見て男女の道を知る著一六 國常立尊の勅を受く正八 軻俱突智神を生む正二 伊弉諾尊、伊弉冊尊を追ひて黄泉に到る正二

いし 懿子 二條天皇の御母なり今鏡六 後白川天皇の皇后、二條天皇の母、藤原經實の女なり正六 贈皇后宮となる今鏡一七 二條天皇を生む今鏡一七

いしう 伊周 これちか 藤原伊周大鏡

いしないしんなう 怡子内親王 輔仁親王の女加茂の齋院たり今鏡一四

いしかはまろ 蘇我山田石川麻呂 はじめて右大臣となる大鏡三 中大兄を輔く正四六

いしこりとめのみこと 石凝姥命 鏡を鑄る正三 天孫に供奉す正一六

いしづくりのみこ 石作皇子 かぐや姫に鉢を贈る竹五 しら山にの歌を詠ず竹五 海山の歌を詠ず竹五

いしどうまる 石童丸 平維盛に具し密かに八島を出でゝ高野山に上る平家四三 十八歳にて出家す平家四九 平維盛が那智の沖に入水の時殉死す平家四六

いしばしやま 石橋山 源頼朝、大庭景親と石橋山に戰うて敗れ土肥杉山に走る平家二四

いしひめ 石姫 敏達天皇の御母なり水三

いしやまでら 石山寺 宇多天皇此山に詣づ大和七五 右大將道綱の母此所に詣づ蜻五 和泉式部此所に詣づ和一四 菅原孝標の女此所に詣づ更三六 五月に卷數を内裡に召す四季一七 一條乘良この所にて歌を詠ず藤二

いしやまのべん 石山辨 よしたゞ 藤原能忠今鏡

いすずがは 五十鈴川 垂仁天皇五十鈴川上に天照大神を奉祝す著四

いすずよりひめ 五十鈴依媛 安寧天皇の御母なり水八

いすずひめ 五十鈴姫 事代主神の女、綏靖天皇の母なり水八

いせのうみ 伊勢海 海の名所たり枕二

いせのかみのうなね 伊勢守のうなね 宇子と通ず大和三

いせのご 伊勢御 わかるれどの歌を詠す大和一 弘徽殿の壁に歌を書す大和一 あひも思はぬの歌を詠ず増六 はやくみしの歌を詠ず今鏡一五

いせのみやすどころ 伊勢御息所 ろくでうのみやすどころ 六條御息所源

いせのみやすどころ 伊勢御息所 影とのみの歌を詠ず大和三五 人しれずの歌を詠ず大鏡三九

いせへいし 伊勢平氏 平忠盛、伊勢に住するを以て世に伊勢平氏と稱せらる平家四

いせものがたり 伊勢物語 女等打ち集りて伊勢物語を批評す無四

いそぢのが 源氏君朱雀院の五十の賀の爲に準備す源六五 白河天皇五十賀を行ふ今鏡三 鳥羽法皇五十賀を行ふ今鏡四五 後嵯峨上皇五十賀を行ふ増九三

いそのぜんじ 磯禪師 靜御前の母、白拍子の鼻祖たり徒八 藤原通憲より敎を受けて男舞をはじむ徒八 靜御前は磯の禪師の女なり平家五四三

いただきもちひ 戴餅 大將、濱松中納言の姫君の爲めに行ふ濱二四九

いたる 源至 いとあはれの歌を崇子内親王の葬送を見に行きし時詠ず伊一六 天の下の色好みにして源順の祖父たり崇子内親王の葬送を見に赴ける時女車のあるを見て螢をとりて其車の中に投げ入る伊一六

いちえい 壹叡 圓善の髑髏と問答す著二六

いちごんほふだん 一言法談 聖僧の言說を錄したる書なり徒二九

いちじやうじのそうじやう 一乘寺僧正 ぞうよ 增譽宇治

いちでう 一條 おく山にの歌を詠ず大和一四

いちでうのせつしやう 一條攝政 これただ 藤原伊尹大鏡

いちでうてんなう 一條天皇 一條院に行幸して盃酌の興あり著三一 ひちの檢校豐平帝の秘藏の鷹を飼養す著三 清少納言御前にて歌を詠ず枕三六 笛に堪能なり枕三 藤原高遠を笛の

師とす枕三　藤三位戯れてこれをだにの歌を贈る枕二二　土御門殿に行年す紫一六　後一條天皇の産養を爲す紫一三　源氏物語を讀みて紫式部を評す紫四三　圓融第一の皇子なり大鏡一七　藤原詮子の所生なり大鏡一七　誕生、元服、立太子、卽位あり大鏡一七　五年位に在り大鏡一七　崩ず大鏡一七　後一條天皇は一條第二の皇子たり大鏡一九　一の宮を措いて二の宮を東宮とす大鏡二〇　惡疫流行し大臣公卿多く死す大鏡二二　春日の行幸始まる大鏡二四　藤原伊周、詮子及び道長を院に讒す大鏡二五　藤原詮子、院に迫り藤原道長を關白とす大鏡二五　院の時、吉田明神を官祭にす大鏡二七　卽位の日怪事あり大鏡二八　後一條は一條第二の皇子なり今鏡四　後朱雀天皇は院の第三の皇子なり今鏡九　藤原彰子、一條の皇后たり今鏡一二　藤原爲時、縣召の時淡路守に任じ不平の餘苦學の寒庭に紅涙襟を霑しといへる文を作りて一條院の叡感に預かり越後守に任ぜらる今鏡二〇　卽位す正元　道長攝政す正元

いちでうのおほぢ　一條大路　聖寶異裝して此を渡る宇治二〇八

いちでうのにゐのにふだう　一條二位入道よしやす　藤原能保著

いちでうのきたのかた　忠恒の室たり忠恒の死後千蔭を思ひ歌を贈る宇津九八　橘千蔭一條北方を後妻とす宇治九九　財を散じて漸く貧し宇津一〇〇　千蔭の子忠乞に親まむとす宇津一〇一　千蔭と贈答す宇津一〇一　忠乞に意を傳ふ忠乞應せず宇津一〇三　忠乞を怨み千蔭累代の名高き帶を隱して忠乞を千蔭に讒せむとす宇津一〇三　博徒をして名高き帶を忠乞の命と稱して賣らしむ宇津一〇四　輔宗に裝束を與へて事を計る宇津一〇六　輔宗に忠乞己に意ありと僞る宇津一〇七　輔宗をして千蔭に忠乞千蔭を讒奏すと讒せしめむとす宇津一〇八　大願をたてゝ千蔭をまつ宇津一一五　千蔭やう〳〵北方とかる宇津一一五　千蔭、帝に謁して北の方の忠乞を讒するを知る宇津一一五　千蔭北の方の文を返す北の方益愁ふ宇津一一六　家益貧し下仕よもぎ獨仕ふ宇津一一七　あて宮、父雅賴の春日詣に從ひ一條の北の方より買ひ得たる都風の琴を彈ず此の琴曾て俊蔭が忠恒に奉る所宇津一一八　零落して乞食す、忠乞嵯峨院に參るの道にあふ宇津一二四　前非を後悔して忠乞に懺悔す宇津一二五　忠乞、小屋を作つて養ふ宇津一二五

いちでうのさじきや　一條棧敷屋　妖怪出づ宇津一二〇

いちでうのだじうだいじん　一條太政大臣これただ　藤原伊尹蜻

いちでうのさだいじん　一條左大臣　まさのぶ　藤原雅信大鏡

いちでうのみや　一條宮　おちばのみや　落葉宮源

いちでうのみや　一條宮　兼雅かつて女三宮(一條宮)を思ふ宇津一一　一條宮生む所の梨壺女御、あて宮入内の頃春宮に侍す宇津一一　兼雅の北の方たり宇津一〇三　仲忠、衣を整へ髮を梳り、丹後の侍從を隨へて父兼雅の爲に一條の宮に赴く宇津一〇五　仲忠の來意を問ふ、仲忠乃ち父兼雅の使たる由を一條宮に告げ且つ父の書を致す宇津一〇六　身の薄運を歎ず宇津一〇六　兼雅の意を疑ふ宇津一〇六　意解け兼雅仲忠等の厚意を喜ぶ宇津一〇六　仲忠及び其從者を厚く饗し仲忠と献酬し兼雅への返書を認む宇津一〇七　箏を多く持す宇津一〇八　仲忠、一條宮を三條殿に迎ふる爲車の用意す宇津一一三　すゞし、一條宮に鳳車並に多くの隨身を遣す宇津一一四　兼雅、子仲忠と共に一條宮を迎へん爲多くの從者を率ゐて三條殿を訪ふ宇津一一七　中の君と同じく三條殿に在れども中の君の窮乏に引きかへ其生活依然として舊の如し宇津一一八　兼雅、一條宮に面し、久濶の物語をなす宇津一二九　仲忠、先驅して一條宮を三條殿に迎へ取らるゝを見、羨怨の情に堪へずして兼雅に書を贈る宇津一三一　京極の上、一條宮の容姿を稱す宇津一四〇　仲忠、一條宮に家の笏を奉る宇津一四〇　梨壺女御内へ歸る、生みたまへる朱雀の二宮は母一條宮の許にあり宇津一四一

いちでうのみや　一條宮　いつぱんのみや　一品宮(一)狹

いちでうのみやすどころ　一條御息所　朱雀院の更衣にして落葉の宮の母なり源七八　夕霧御息所に歌を詠みかく源七四　歌を夕霧に詠みかく源七四　歌を夕霧に詠みかく源七四　夕霧に相木君遺愛の笛を贈る源七四　夕霧、御息所に歌を詠みかく源七四　歌を夕霧に詠みかく源七四　物怪を煩ひて小野山莊に移る源七六　夕霧御息所を小野山莊に訪ひて病を見舞ふ源七七　阿闍梨、御息所に落葉宮が夕霧に通じたるとを告ぐ源七八　落葉宮が夕霧と通したるを聞きて悲歎す源七七　夕霧が落葉宮に贈りたる消息を見る源七八　夕霧に消息を贈る源七八　雲井雁御息所が夕霧におくりたる消息を奪ふ源七八一

歌を夕霧に贈る源七一　夕霧御息所に消息を贈る源七八四　落葉宮を訓戒す源七八五　薨す源七八六　落葉宮御息所の薨去を哀哭す源七八六　朱雀院、一條のみやすどころの薨去を聞き消息を落葉宮に贈りて吊詞をのぶ源七八七　夕霧、一條のみやすどころの薨去を聞きて落葉宮を訪ひて吊詞を述ぶ源七八七

いちでうゐん　一條院　堀河大臣の兄なり狭一　崩ず狭一六　一品宮(一)の父なり狭一七

いちでうのゐんのにようゐむ　一條院女院病む狭三五　崩ず狭三五

いちでうのゐんのひめぎみ　一條院姫君　狭衣中將に戀慕せらる狭九

いちねんのねんぶつ　一念念佛　善觀房より始まる徒八九

いちのささき　一后　大臣のむすめなり濱七

いちのきさき　一后　東宮(一)の御母なり濱七

いちのたに　平宗盛一の谷に城郭を搆ふ平家三五　源義經土肥實平に七十餘騎を授けて一の谷の西の木戸口に向はしむ平家三五　熊谷直實同直家と共に手兵を率ゐて一の谷西の木戸に奮戰す平家三七　源義經、鵯越に押し寄せ、女坂を下りて火を城に放ち、大に宗盛の軍を破る平家四六　平清貞、同清房、同經俊、一の谷の戰に討死す平家四六

いちのないしんなう　一內親王　をんないちのみや　朱雀女一宮宇津

いちのにようご　朱雀一女御　じじうてんのにようご　仁壽殿女御宇津

いちのべのおしはのわらじ　市邊押羽皇子　雄略天皇、皇子を殺す正元

いちのみや　冷泉院一宮　一宮生る、母は鬚黑君の大姫君たり源八六

いちのみや　今上一宮　とうぐう　春宮(四)源

いちのみや　桐壺帝一宮　すざくのゐん　朱雀院源

いちのみや　春宮一宮　朱雀后宮、あて宮が東宮の一宮を生みたる三日の夜初養の料を贈り大宮に消息を贈る大宮返しす宇津毛一　あて宮、十月里亭雅頼の家に一宮を生む　朱雀の后宮、春宮坐したり宇津毛一　嵯峨后宮、あて宮が一宮を生みたる五日の夜初養の料をおくる宇津毛三　東宮、あて宮が一宮を生みたる七日の夜典侍を使として大宮に御文あり大宮返しす宇津毛三　春宮の一宮の誕生、大宮ほその緒を切り、

忠純の室乳つけす各かづけものありあて宮白き襖きて臥す宇津毛三　雅頼の東のおとゝに春宮のみこ二人、一人は立ち歩き一人はまだはひ給ふ立ち給ふは一宮なり宇津四〇　あて宮、朱雀の女一の宮の所にあるに仲忠來れり春宮亦來る、あて宮仲忠に一宮の習字の手本を書かんとを乞ふ宇津五七　あて宮の住ひの東の對にいらせらる宇津五七　仲忠、一宮の習字の手本をあて宮に奉るあて宮消息を贈る宇津五七　雅頼、一宮東宮に定まりぬと聞きて歡喜す宇津七三　東宮となる宇津七三　東宮に定まれるにつき、あて宮人々より賀せらる宇津七三　讀經し給ふ宇津七〇　參內せむとし給ふ宇津七三　儀を整へて參內す宇津七四　禁中に至り着す宇津七六　宮君を藤壺に伴ひ給ふ宇津七〇　仲忠一宮と語る宇津七三　仲忠、一宮と琴のことを語る宇津七三　仲忠、一宮より退きて父に見ゆ宇津七四

いちのみや　嵯峨院一宮　とうぐう　春宮(二)狭

いちみや(二)　狭衣中將一宮　ひやうぶきやうのみや　兵部卿宮狭

いちのみや　上總國一宮　延久二年託宣あり著九

いちは　市は　辰の市枕二

いちまん　一萬　殺さる增三〇

いちらい　一來　源仲綱に從つて六波羅を夜討せんとし曉に及ぶを以て中止す平家一八二　平氏の軍と宇治橋に奮戰して死す平家一八六　慶秀の召仕として大力の剛の者たり平家一八六

いちゐん　一院　ごさがてんなう　御嵯峨天皇增

いちゐん　一院　とばてんなう　鳥羽天皇保

いちゐん　一院　ごしらかはてんなう　後白河天皇平治

いづ　伊豆　大中臣佐國此の國に流され荒祭宮の託宣によりて罪を免る著九　源頼朝、流さる平治六三　源頼政領す平家二〇　源頼朝、北條時政と謀り兵を伊豆に擧ぐ平家三四　文覺、狼藉の罪により再び捕はれて伊豆に流さる平家三七

いつきのみや　齋宮　前坊姫宮齋宮となる源一六

いつくしま　嚴島　藤原實定、藤原實國藤原實家を伴ひて嚴島に詣づ著一五　藤原實定明神に祈願して左大將に任ず著一五　高倉天皇行幸し親ら願文を草し藤原基通をして讀書せしむ著一六　藤原實定、藤原實兼の勸によりて詣づ平家八

九 平康頼が海に投じたる卒都婆漂着す平家九九

高倉天皇、嚴島明神に詣づ正九一

いつくしまのないし 嚴島内侍 後白川院の女御の母なり平家二

いつつをのくるま 五緒車 極官極位の人乗る徒六六

いつぺんぼう 一遍坊 頭を振り足を擧げて踊るを以て念佛の行義と爲す野六 貴賤に尊崇せらる野七 はねばはねの歌を詠ず野七

いつぽんのみや 一品宮 一條院の崩御により齋院をやむ狭二七 一條院の皇女なり狭二七 一品宮(二)を子養す狭二四 狭衣中將より消息を得狭二五 一品に叙す狭二五 狭衣中將夜密に宮をとふ狭二五 狭衣中將との浮名立ちたるを歎く狭二六 狭衣中將と浮名立てらる狭二六 狭衣中將の北の方となる狭二七 狭衣より後朝の文を受く狭二八 中將といふ女房の告げにより一品の宮(三)が狭衣中將の姫君たるを知る狭二八 狭衣中將に疎んぜらる狭二八 思ふよりの歌を狭衣中將に詠みかく狭二八 狭衣中將と一品宮(三)袴着のことを語る狭二八 入内すべきよしの勅命に應ぜず狭三三 出家して尼となる尋で薨ず狭三三

いつぽんのみや(二) 一品宮 生れて百日、一品宮(一)に子養せらる狭一四四 狭衣中將の姫君、母は飛鳥井姫君なり狭一四四 一條女院の方に住まふ狭一四四 狭衣中將深く愛す狭一四五 袴着を行ふ狭一四六 内裏に入りて弘徽殿に住居す狭三三 一品に叙せらる狭三七

いづみ 和泉 菅原孝標の女和泉に下る更級一五六 紀貫之、夏山繁樹を從へて和泉國に下る大鏡一五六 北畠顯家、後村上天皇を奉じて陸奥より西上し和泉國にて戰死す正三〇

いづみがは 泉川 一條兼良泉川にて歌を詠ず藤三

いづみしきぶ 和泉式部 小式部内侍の母たり著九二 男のかれ〳〵になりける頃貴布禰に詣て、歌を詠ず著九二 橘保昌の妻となり丹後に赴く著九七 稲荷に詣づる途中時雨に逢ひ田刈る童にあをといふものを借る著一四四 道命と同車す著一四五 紫式部、和泉式部を評す紫四四 かをる香にの歌を敦道親王に贈る和二 慰むとの歌を敦道親王に贈る和二 けふのまの〻歌を敦道親王と契る和三 敦道親王に贈る和二 またましもの歌を敦道親王に贈る和四 郭公の〻歌を敦道親王に贈る和四 世と共にの歌を敦道親王に贈る和五 まくるともの歌を敦道親王に贈る和六 ふれば世の〻歌を敦道親王に贈る和七 敦道親王に誘はれて隱れがに赴く和八 よひごとにの歌を敦道親王に贈る和九 一夜見しの歌を敦道親王に贈る和一〇 吾をこその歌を敦道親王に贈る和一一 袖の浦にの歌を敦道親王に贈る和一二 ながむらむの歌を敦道親王に贈る和一三 つれ〳〵との歌を敦道親王に贈る和一四 石山寺に詣づ和一四 こゝろみにの歌を敦道親王に贈る和一五 秋風はの歌を敦道親王に贈る和一六 君をおきての歌を敦道親王に贈る和一九 敦道親王に隱れがに來らむことを勸めらる和二〇 まどろまでの歌を敦道親王に贈る和二二 更けぬらむの歌を敦道親王に贈る和二四 しら露ははかなくおくとみしほどにといふ上の句を詠じて敦道親王と連歌す和二五 葛城の〻歌を敦道親王に贈る和二五 もみぢばはの歌を敦道親王に贈る和二六 その世よりの歌を敦道親王に贈る和二七 今の間の〻歌を敦道親王に贈る和二八 霜枯はの歌を敦道親王に贈る和二九 おきながらの歌を敦道親王に贈る和三〇 なぐさむるの歌を敦道親王に贈る和三〇 君は君の歌を敦道親王に贈る和三一 さゆる夜の〻歌を敦道親王に贈る和三二 しかばかりの歌を敦道親王に贈る和三三 落つるなみだは雨とこそふれといふ下の句を詠じて敦道親王と連歌す和三三 玉垂にの歌を詠す四季一四 朝まだきの歌を詠ず野一四 女等打ち集りて其人物詞藻を批評す無四五 敦道親王と同乘す大鏡一三 とをつらの〻歌を詠ず大鏡一三

いづみのかみ 和泉守 兵庫(女四)の從兄弟なり落六三

いづみのかみのめ 和泉守妻 阿漕のをばなり落一七 阿漕和泉の守の妻に消息を贈る落一七 阿漕に返書を贈る落一八 阿漕三日夜の餅を乞ふ落一九 阿漕、消息をおくる落一九 阿漕に返書を贈る落二〇 阿漕に三日夜の餅を贈る落二一 餅に添へて阿漕に消息を贈る落二一 阿漕に返書を贈る落二六

いづみのたいしやう 泉大將 さだくに藤原定國大和

いづも 後醍醐天皇隱岐を脫れ出て、出雲に着き、更に伯耆の稲津浦に着す增三七 藤原兼長流さる保八七 武甕槌神、出雲に到る正一六 經津主神出雲に降る正一六

いづものご 出雲御 いかばかりの歌を詠ず今鏡一三

いづもでら 出雲寺 大風にて倒る宇治三二

いではのご 出羽御 袂ともの歌を詠ず大和七

いとうむしや 伊藤武者 かげつな 伊藤景綱保

いとくてんなう 懿德天皇 安寧第三の御子なり水九 母は淳名底中媛なり水九 立太子即位す水九 即位三十二年に孔子歿す水九 三十四年位に在り水九 孝昭天皇は懿德第一の皇子たり水九 即位す正三五 輕の曲峽宮に居り正三五

いとないしんなう 伊登内親王 老いぬれば の歌を在原業平に贈る伊三五

いなばのかみ 因幡守 匂宮浮舟を携へて舟を宇治川に泛へ其夜因幡守の別墅に宿る源二三三 時方の叔父たり源二三三

いなばやま 因幡山 一條兼良此の麓を過ぐ藤八

いなめ 蘇我稲目 佛法尊信を主張す水三七

聖德太子に攻め殺さる水三六

いなりみやうじむ 稲荷明神 後醍醐天皇臨幸の道を照す芳三 延長八年託宣あり著三五 藤原重澄を兵衛尉となす著一九

いぬわうまる 犬王丸 山賊に逢ふ芳三六

いぬみや 犬宮 仲忠の室朱雀女一宮、犬を生む宇津四三 仲忠、犬宮を抱く宇津四三五 上の君、犬宮の臍の緒を切る宇津四三五 湯初の式あり宇津四三六 乳房につく宇津四四 仲忠、犬宮誕生の九日の夜の祝宴を開く宇津四四 當時絶世の佳人あて宮に似たり宇津四四 源實頼、犬宮の五十日の儀の物を人々に進む宇津四四 仁壽殿女御に抱かれて大宮に對面す宇津四四五 容貌秀麗なり宇津四四五 肥ゑたり宇津四四 仲忠五十日の儀式あり宇津四四五 典侍、御衣櫃に女の犬宮を抱きて臥す宇津四四五 裝束等種々の布帛を入れて犬宮の許に贈る宇津三三 祖母京極の上、犬宮の百日の儀を行ふ宇津四四 正月廿五日乙子の日百日に當る宇津四四 仲忠、兼雅、桂の邸に犬宮を抱く、犬宮怖ぢず宇津六六 母女一宮、いぬ宮と雛遊びす宇津七七 琴を習ふを喜ぶ宇津七七五 仲忠、いぬ宮に琴を教ふ宇津七七六 すゞし、いぬ宮の遊べるを見る宇津七七九 すゞし、いぬ宮の美を稱嘆す宇津七八 すゞし、その北方今宮に犬宮の美なるとを語る宇津七八 仲忠、いぬ宮を見る宇津七九三 雛遊をなす宇津七九三 京極の邸の樓にて琴を彈く宇津八〇五 穎敏にして自ら琴に通ず宇津八〇六 仲忠、いぬ宮に琴を教ふ宇津八〇六 女一の宮、侍從の乳母に消息していぬ

宮のとをいふ宇津八〇六 京極の上、いぬ宮の琴を感嘆す宇津八〇六 母朱雀女一宮との同居を欲す宇津八〇六 仲忠と琴を合奏す宇津八〇九 父仲忠の憂色を猜す宇津八一三 楓葉琴に散るを見て歌を詠ず宇津八一四 朱雀の女一宮、犬宮の故を以て仲忠を入るゝを肯ぜず宇津八一六 琴に上達す宇津八一七 京極の上、いぬ宮を慰む宇津八一八 うぐひすのゝ歌を詠ず宇津八一四 仲樓上に琴を彈じ鶯を聞いて歌を詠ず宇津八一四 忠に從ひて川原に祓す宇津八二五 人々よりもつくし宇津八二六 髮をすます宇津八二六 仲忠、源中納言と七夕に琴を彈く宇津八二七 仲忠七夕にいぬ宮、およびすゞしと琴をひく宇津八二七 すゞし、仲忠、いぬ宮の琴を密に聞く宇津八二七 すゞし、いぬ宮琴を習ひ了せる遊宴の用意を設く宇津八二五 すゞし、嵯峨院にいぬ宮、京極の上の琴を語る宇津八二五 成長するに從ひ琴に熟達す宇津八二五 雅頼、いぬ宮の艶麗に驚く宇津八二五 美貌あて宮に劣らず宇津八二五 遊樂にのぞむ宇津八二五 琴をひく宇津八二七 琴に妙にして人々を驚かす宇津八二六 朱雀院、いぬ宮の笛に合せて琴をひく宇津八二六 嵯峨院、いぬ宮の琴を激賞す宇津八二六 雅頼、いぬ宮の琴に堪能なるを喜ぶ宇津八二六 朱雀院、いぬ宮を榮せしむる道を嵯峨院に謀る宇津八二九 仲忠、いぬ宮の几帳の外にあらはるゝを戒む宇津八二九

いはうつなみ 岩打浪 物語の名なり女等打ち集りて批評す無三九

いはきみ いは君 よりむね 藤原頼宗大鏡

いはしみづ 石清水 後村上天皇行幸して願文を納む芳三五 明神御嵯峨帝に示現す著二六 增基此所に詣づ庵一 中務內侍臨時祭に使す中三三 圓融院、藤原實資源時中等を從へて石清水に行幸す大鏡一八二 源有仁、石清水八幡宮に七夜參詣す今鏡一九三 藤原在子、石清水の社に神託を受く增四一 後嵯峨上皇、石清水に籠る增七七 清和天皇の朝、八幡神宮を宇佐より石清水に移す正三三 清和天皇の朝、應神天皇を石清水に祭る正三三 土御門天皇、阿波にて願文を草し石清水八幡宮に納む正九九

いはしろのの 磐代野 增基此の處にて歌を詠ず庵三

いはながひめ 磐長姫 天津彦火々瓊々杵尊を詛ふ正一八

いはのひめ 磐之姫 履仲天皇の母なり水

元 反正天皇並に允恭天皇の母なり水三

いはもと 岩本 後醍醐天皇此所に幸す苔四

いはもるちうじやう 岩もる中將 かしはぎのきみ 柏木君源

いはれのたまほのみや 磐余王穗宮 繼體天皇居す正四一

いはれのわかざくらのみや 大和磐余稚櫻宮 神功皇后、稚櫻宮に居す正三

いひとよてんなう 飯豐天皇 忍羽皇子の女なり水六 億計、弘計互に位を讓る由つて飯豐青皇女政をきく水六 母は茅媛なり水六 顯宗天皇の御姉なり水七 顯宗天皇の位を攝す正四〇

いひにくきもの 云ひにくき物 人の消息仰事などのいと多かるを序のまゝに始より奥までいといひにくし枕一五

いひぬまのはらぐわん いひぬまの判官 久明親王の迎へに行く增一四

いぶきやま 伊吹山 一條兼良此地を過ぎてうたを詠ず藤一〇 光嚴院、伊吹山邊にて法師の宮に擁擊せらる增三一

いへあこ 家阿古 いへみや 家宮宇津

いへさだ 源家定 源顯房の子、源成雅の父なり今鏡一九

いへさだ 藤原家定 後二條卽位の行幸に御劍の役をあ損ず增一三 藤原內經と行列を爭ふ增一六 家定の女は師賢の室なり增三〇

いへさだ 平家定 平清盛に從うて白川殿を攻む保元 平清盛武具を納めたる長櫃五十合を獻す平治一九 源義朝、平重盛に從うて藤原信賴を內裏に攻む平治三 平貞能の父なり平治三 平重盛が清涼殿の前殿にて源義平と戰へる時これを勵ます宇治六 長田忠致の行爲を憎む平治四四 平忠盛、五節豐明節會の夜に、公卿が闘討にせんと謀れるを聞き、大なる鞘卷の太刀を帶し家貞を從へて參內し以て公卿を屈す平家三 平家房の子たり平家三 平忠盛を公卿等が闘討にせんと謀れるを聞き忠盛に供して禁中に入りこれを守る平家三

いへざね 藤原家實 關白を辭す增三 再び攝政となる增三

いへすゑ 須藤家季 源爲朝に隨うて上洛す保三 その兄隙間數惡七別當、源爲朝に從うて上洛す保三 隙間數惡七別當と共に源爲朝に隨ひ鎌田政淸を追擊す保六 深巢淸國の首を取る保元

いへたか 藤原家隆 鵲の渡すや何處の歌を詠す今物三 藤原良經に召されて秀歌を問ふ今物三 小宰相局の父なり鳴四 契あればの歌を詠ず著一〇三 藤原麗子の宮にて六事の題を出して思ふことを書かせられしとき有明のゝ古歌を認めて呈す著一五 長月のゝ歌鬼神を感せしむ著一五 七十七になりし時七夕にれゐひきやの歌を詠じて藤原良通に贈る著一六 悲しさのゝ歌を藤原定家に贈る著一四〇 出家す著一五一 薨ず著一五三 ひえ鳥をの歌を詠ず著一五五 藤原基家を訪ひ雪にあまづらをかけて饗せらる著一四〇 不食の病に罹る著一四〇 老の身にの歌を詠ず著一四〇 藤原隆祐の父なり著一三一 荻の葉といふ鳥を祕藏す著一三二 これもまたの歌を藤原隆祐に贈る著一三一 いかにせむの歌を詠ず野九 師通の子なり今鏡一三 新古今和歌集を撰す增七 ねざめしての歌を詠ず增三〇

いへただ 藤原家忠 堀河 天皇、宗通を排して家忠を大將とす今鏡一六

いへただ 金子家忠 源義朝に從ひて白川殿を攻む保六 高間三郎 同四郎 兄弟を討つて高名す保四一 源爲朝と戰ふ保四一 源義朝に與し內裡の勢揃ひに參す平治三 源義平に從ひ平重盛と淸涼殿の前庭に戰ふ平治三 源義平に從ひ平淸盛を六波羅に攻めて奮戰す平治四 近江國堅田に源義朝と別れて本國に歸る平治六 源義經に從ひ宗盛追討の爲小野原に着陣す平家三九二 源義經に從ひ大風を冒し攝津より阿波に渡る平家四八二 源義經に從ひ八島の城を攻む平家四八 源義經に從ひ八島の濱にて平景淸と戰ふ平家四九五

いへづく 藤原家繼 藤原家俊の子なり平治四二 平賴盛の危急を助けんとし郁芳門に於て源義平と戰うて討死す平治四二

いへつな 瀧口家綱 瀧口家次と共に源義朝に從うて白川殿を攻む保元

いへつな 家綱 行綱に貽かる宇治六二 行綱を貽く宇治九二

いへつね 家經 蓮華王院の行幸に供奉す增七 內大臣となる增八〇 大饗を行ふ增八〇 後嵯峨上皇の如法經供養齋會に列す增八〇 後嵯峨上皇の五十賀の試樂に臨む增九三

いへつね 富樫家經 燒が城に立て籠る平家二八七

いへとし 藤原家俊 藤原家繼の父なり平治四二 平重盛の危急を助けんとし郁芳門に於て源義平と奮戰す平治四二

いへとば 家遠 源爲朝の傳たり保三

いへなか 大江家仲 藤原信頼源義朝が三條殿ををかせるとき防ぎたゝかうて戰死す平治九

いへなが 家長 後嵯峨上皇の五十賀の試樂に臨む增四

いへなが 平家長 平知盛に從ひ播磨の國室山に於て源行家と戰うてこれを破る平家三六

いへなり 藤原家成 所領大和國にあり著毛 馬を下野武正に與ふ著毛 崇德天皇の御前にて鯉を料理す著三五 その子藤原隆季左馬頭より左京大夫に轉ず保四 藤原成親は家成の三子たり平治六 藤原忠宗の子藤原忠雅は家成の女婿なり平家五 藤原成親の父なり平家三

いへなり 大江家成 大江遠成、家成と共に平清盛よりの討手を受けて自殺す平家一四 源季定、及び盛俊、平清盛の命により大江遠成同家成を攻めて之を殺す平家一四 大江遠成の子なり平家一四

いへにありたきき 家にありたき木 松櫻 徒三六

いへにありたきくさ 家にありたき草 山吹、藤徒三六

いへのあこぎみ 家阿古君 いへみや 家宮宇津

いへのり 家敎 北山の准后貞子の九十の賀に赴く增二六

いへ 家 近衛御門枕三

いへひら 賀茂家平 藤原頼輔に鞠の故實を問はる著三九 蹴鞠の上手たり著三九

いへひら 近衛家平 下毛野武勝より鳥を枝につくる故實を聞く徒三七

いへひら 藤原家平 藤原家基、家基の北政所所生の家平を愛せず增二六 花園天皇の理髮をつとむ增三四 經忠の大臣の大饗に參る增三五 病によりて出家す增三四 忠朝、成定、頼基を寵す增三四 薨ず增三四

いへひろ 平家弘 崇德院が白川の前の齋院の御所の行幸の供奉す保一五 平光弘の父なり保一五 平正弘の子なり父と共に崇德院舉兵の時御方に參す保二〇 北殿の春日表の門を守る保二 崇德院に平光弘と共に敗軍のことを奏問す保四 崇德院源爲義平家弘平光弘等を從へて如意山に入る保四 出家す保四 源義康に捕へられて誅せらる保六 平康弘頼弘光弘は家弘の子な

り保六

いへふさ 家房 後醍醐の北山の花見に舞を舞ふ增二八

いへふさ 平家房 平家貞の父、平貞光の子なり平家三

いへまさ 藤原家政 三條の惡宰相と稱せらる今鏡一三

いへまさのむすめ 姸子內親王の御母なり今鏡一九

いへみち 藤原家通 二條天皇の使して承香殿の梅を中宮藤原忻子に祗候せる內侍に賜ふ著八三 いかでかはの歌を詠ず著四 重通に養はる今鏡一八 安德天皇の降誕を賀し平清盛の六波羅邸に參す平家一五

いへみつ 蓮池家光 源希義を殺す平治一〇 家光攻め來るの時源希義自盡す平治一〇

いへみや 家宮 民部卿實雅、嵯峨の后宮の六十賀の用意として師を附して自邸にいへの宮等に舞を習はしむ宇津三一 嵯峨の后宮の六十賀にいへ宮陵王を舞ふ、朱雀帝感じて盃を給ふ宇津三四 桂の邸に兼雅、三宮、仲忠らと歌を詠ず宇津六三

いへもと 宰相の女をめとる宇津七五 近衛家基 龜山の姫宮を娶る增六五 五條院の姫宮を寵す增二八 五條院所生の經平を愛す增二八 北政所所生の家平を愛せず增二八 北山の准后貞子の九十賀に赴く增二八 北山の准后貞子の九十賀に蹴鞠す增一三 伏見院の關白たり增一三 母北政所薨ず增一八六

いへもり 平家盛 平清盛の弟なり二十三歲にて卒す平治四

いへやす 藤原家保 藤原顯季の子たり著二六

いへやす 新藤家泰 平重盛に從うて源義朝藤原信頼を內裏に攻む平治三 重盛源義平に敗られ、家泰、景安と共に二條を東へ走る平治元 平重盛の危急を助けんが爲めに源義平と格鬪す平治四 鎌田政清家泰を討ち取る平治四 平重盛、源義平に追擊せられ家泰、景安が留まりて奮戰する際に乘じて僅かに免る平治四

いはぬし 庵主 ぞうさ 增基庵

いまきさき 今后 こきでんのにようご(二) 弘徽殿女御源

いまきみ 南院今君 巨城が牛を借る大和三六 大空はの歌を詠ず大和三六 源宗于の女なり大和三六 兵衛と通ず大和三六 歌を源巨城に贈る大和三六 歌を兵衛の君に贈る大和三六

いまけびと 佐伯今毛人 早良親王に重用せらる水七六

いまでかはのおほいとの 今出川大臣殿 かねする 菊亭兼季徒

いまでがはのだじやうだいじん 今出川太政大臣 きんすけ 藤原公相増

いまでがはのねん よしこ 藤原嬉子増

いまのをののみや 今小野宮 さねすけ 藤原實資大鏡

いまのおんかた 今御方 實衡の女なり光殿院之を寵せず増二六

いまひめぎみ 今姫君 太政大臣の姫君に子養せらる狭三五 堀川大臣の女なり狭三五 なほ親族なる女房を母代とす狭三九 中宮の妹たり狭四〇 狭衣中將今姫君を訪ふ狭四三 姙娠す狭四五 太政大臣の姫君の爲に後一條院に上げられんとす狭四四 祇候せる女房達の行儀頗る亂る狭一四五 狭衣中將今姫君をとふ狭一四五 母代を恐る狭一四六 詠歌技藝に未熟なり狭一四六 狭衣中將の前にて琵琶を彈ず狭一四七 内參りのこと近づき太政大臣など其準備を急ぐ狭一四七 宰相中將と通ず狭一四八 宰相中將(一)の密通により内參りのと止む狭一六一 宰相中將(一)と通ずるを恥ぢて尼とならんとす狭一六一 宰相中將(一)の姫君を兵部卿の宮に配せんとを希望す狭三三

いまひめぎみのははしろ 今姫君母代 吉野川の歌を狭衣中將に詠みかく狭四三 飛鳥井君の素性をときいふ水後のことを狭衣中將に語る狭一五一 宰相中將(一)が今姫君と通じたるを發見して悲歎す狭一五九

いままねり 今參 後宇多法皇の舞樂に參る増一六六

いままみや 今宮 さまこそきみ さまこそ君宇津

いみじくきたなきもの 鼠蛭枕一六〇

いんし 胤子 たねこ 藤原胤子大鏡

いんせい 印誓 平德子、印誓を戒師として出家す平家五六五

いんきようてんなう 允恭天皇 三韓朝貢を怠る正毛 即位す正毛

いんゆ 隱瑜 荀爽の女を娶る唐三

いもこ 小野妹子 聖德太子妹子を衡山に遣す水四一

いもこないしんなう 妹子内親王 二條天皇の后となる今鏡毛 高松院と稱す今鏡毛 藤原得子の姫君なり今鏡毛 出家す今鏡毛 二條天皇の女御にまゐる今鏡五九 二條天皇の中宮となる今鏡四〇 源有仁の女(三)内親王に宮づかへす今鏡一九三

いやしげなるもの 賤しげなる物 式部丞の爵枕一三

いやゆさ いやゆき 仲忠、紅葉の賀になん風をひき、すゞしいや ゆきが琴をひく天地鳴動し風雲起り星辰ゆらめき雷霆閃きて雪降り仙人降て舞ふ宇津三〇 嵯峨院、すゞしの琴の手がいやゆきが手なるを怪む、すゞし答へて曰く、いやゆき死して六年なり、嘗て熊野にいやゆきに習へりと答ふ宇津三三 いやゆきが琴に千といひて俊蔭がなん かぜ、はしかぜに等しきものあり宇津三七

いよ 伊豫 覺憲、父通憲のとに坐して流さる平家二六

いよしんなう 伊與親王 非望を企てむとす水七九

いよのご 伊豫御 南院の五郎に懸想せらる大和一九 源雅定、伊豫の御に通じ後情交絶ねし時、伊豫御が山城前司なる人と通じたるを聞きまことにやの歌を贈る今鏡一七六 の源雅定と通

いよのすけ 伊豫介 紀伊守は其子なり源毛 空蟬は其の後妻、紀伊守(一)の繼母なり源毛 源氏の君を訪ふ源六〇 源氏君空蟬が伊豫介に具して任國に下向するとき餞別の品に添へて逢ふまでのゝ歌を贈る源八五 空蟬を具して任國に下る源八五 常陸介となる源三九 空蟬伊豫介に具して常陸に赴く源三九 源氏の君と逢坂にて相逢ふ源三〇 任滿ちて上洛す源三〇 卒す源三三

いよのすけ 伊豫介 仲忠山下りの時大學丞所の衆たり宇津三四 仲忠の幼時兼雅に伴はれて山を出てし時馬添に立つ宇津三四 伊豫入道 繪畫の上手たり著三〇

いよのにふだう

いよのほふねん 伊與法印 藤侍從伊與法印を召して淡路國に赴かむことを計る松七

いるか 蘇我入鹿 聖德太子の後裔二十三人を殺す水四二 斑鳩宮を燒く水四二 大極殿にて刺さる水四四 中大兄皇子、藤原鎌足と入鹿を斃さんと謀り遂に入鹿を大極殿に斬る水四四 僧越のふるまひす水四四 中大兄、中臣鎌足と共に入鹿を誅す正四六 皇極天皇の時朝政を專にす正四六 聖德太子の王子を弑す正四六

うかしこめのみこと 髫色謎命 開化天皇

の母なり水一〇

うかはでら 鵜川寺 近藤師經、襲うて其坊舍を燒く平家吾 白山の末寺なり平家三八 衆僧近藤師經の館を襲ひこれを破り神輿を持して入京す平家三八

うがやふきあへずのみこと 鵜茅不合葺尊 神武天皇は尊の第四子たり水七 玉依姫を娶る正三〇 神日本磐余彦尊を皇太子に立つ正三〇 豐玉姫尊を生む正三〇 尊の時代釋迦印度に生る正三

うかれめ 遊女 宇多天皇召す大和四九

うきしま 浮島 島の名所たり枕一四三

うきしま 常陸浮島 藤原敎長、浮島に流さる今鏡二九

うきしまがはら 浮島原 源親行此の地にて歌を詠ず東二三 源頼朝二十萬騎を率ゐて着す平家三四

うきなみ 浮浪物語 物語の名隆信の作たり女等打ち集りて批評す無四三

うきふね 浮舟 宇治八宮の中の宮の妹なり源一〇四一 宇治八宮の中の君、薫君に浮舟のことを語り配せしめんとす源一〇四一 宇治八宮の女、母は中將の君(三)たり源一〇四六 辨君(三)薫君に浮舟の生ひたち並にその經歷を語る源一〇四六 中將の君(三)陸奥守の妻となり浮舟を具して任國に赴き後常陸に下る源一〇四七 中將の君(三)に具して上洛し二條院に宇治八宮の中の君を訪ふ源一〇四七 中將の君(三)に具して奥州に赴き更に又常陸に下る源一〇四七 薫君、宇治宮にて浮舟を垣間見る源一〇四八 薫君、辨の君(三)を召して浮舟のことを問ふ源一〇四四 薫君かほどりの、歌を贈る源一〇五五 中將の君(三)左近少將に浮舟を嫁せしめんと欲す源一〇五六 左近少將、浮舟に婚するの約を變じて陸奥守の女を娶るに決す源一〇五八 中將君(三)宇治八宮の中の君に消息して浮舟を托す源一〇五六 二條院の西の廂の局に移る源一〇七 宇治八宮の中の君、薫君に浮舟がわが邸に住せるとを語る源一〇五三 宇治八宮の中の君、中將君(三)に薫君が浮舟を戀ふることを語り相配せしめんとを勸む源一〇五五 匂宮、強て浮舟に對面す源一〇七 宇治八宮の中の君、浮舟の身の上を案ず源一〇五三 宇治八宮の中の君と物語りす源一〇五三 浮舟の乳母、中將君(三)に匂宮が強て浮舟に對面し懸想したるとを語る源一〇四 中將君(三)、浮舟を二條院より三條の里亭に移す源一〇五五 歌を中將の君(三)に贈る源一〇五九 中將君(三)浮舟に消息を贈る源一〇五九 薫君、辨君(三)に浮舟を媒介せんとを乞ふ源一〇〇 辨君(三)三條の里亭に訪ふ源一〇一 薫君浮舟に通ず源一〇三 薫君、浮舟を具して宇治宮に赴く源一〇四 薫君、浮舟の處置を案ず源一〇六 宇治八宮の中の君、匂宮に浮舟の素性姓名を秘す源一〇六 薫君、京に迎へむと欲し邸宅を營む源一〇七 宇治八宮の中の君に消息に卯槌を添へて贈る源一一一 匂宮、浮舟が宇治八宮の中の君に贈りたる消息を披見す源一一一 歌を宇治八宮の中の君に贈る源一一三 匂宮道定を召して薫君と浮舟との關係を問ふ源一一三 小野尼君ふる川の、歌を詠みかく源一一三 匂宮、薫君に扮して通ず源一一七 中將の君(三)が石山に詣うでむとて迎へしを事に托して謝す源一一三 歌を匂宮に詠みかく源一一三 匂宮、浮舟に歌を詠みかく源一一三 歌を匂宮に詠みかく源一一三 匂宮、浮舟に歌を詠みかく源一一三 薫君、浮舟を訪ふ源一一六 薫君、浮舟に歌を詠みかく源一一六 歌を薫君に詠みかく源一一六 中將君(三)ゆめ見あしきことあれば愼みて誦經すべきよしの消息をおくる源一一五 匂宮、浮舟を携へて舟を宇治川に泛べ其夜因幡守の別墅に宿る源一一五 匂宮年ふともの歌を詠みかく源一一三 歌を匂宮に詠みかく源一一三 歌を匂宮に詠みかく源一一三 匂宮浮舟に歌を詠みかく源一一三 匂宮及び薫君の二人に見ゆしことにつきて煩悶す源一一四 匂宮浮舟に歌を贈る源一一四 薫君、浮舟に消息を贈る源一一五 薫君浮舟に歌を贈る源一一四 薫君、今上の二の宮に浮舟を京に移さんとすることを語る源一一六 歌を匂宮に贈る源一一六 匂宮、薫君が浮舟を京に迎へんとして用意せるとを聞き受領の家を借りて急に浮舟を移さんとす源一一七 中將君(三)浮舟を訪ふ源一一七 道定匂宮に、薫君が浮舟を京に移さんと欲して其用意せるとを語る源一一七 中將の君(三)、辨君と浮舟が匂宮と通じたるを知らずして薫君に配せんことを物語りす源一一六 匂宮に通じたるとを苦悶し投身せんと欲す源一一六 薫君、波こゆるの歌を贈る源一一四 薫君、消息を贈りて慰問す源一一四 匂宮、消息を贈りて慰問す源一一四 隨身、薫君に匂宮が浮舟と關係あるとを語る源一一四 右近の君、浮舟を諫む源一一四 薫君に消息を贈る源一一四 内舍人、薫君の命を奉じて浮舟の居住せる宇治宮を警固す源一一七 苦悶して死を決し匂宮より贈れる消息等を破棄す源一一六 匂宮、日を期して京に迎へんとを告ぐ源一一九 匂宮、浮舟を訪ふ、内舍人

の警固せる爲意を達せずして歸る源二吾 歌を中將の君(二)に贈る源二吾 歌を匂宮に おくる源二吾 かねのねとの、歌を中將の君(二)におくる源二吾 右近の君(二)浮舟が投身せるを推察して悲歎す源二吾 匂宮、浮舟が投身せるとを聞きて時方を遣はして事情を詳しく探知せしむ源二六 浮舟の乳母、浮舟の投身せるとを推察して悲歎す源二吾 中將君(二)浮舟投身せるを推察して悲歎す源二六 中將君(二)浮舟の死骸なきを以て假に平生使用せる裝束調度を死骸に代へて之を葬る源二九 薫君 浮舟の投身を聞き、中將君(二)を吊す源二六 薫君、浮舟を回想して悲歎す源二六 匂宮、浮舟を回想して悲歎す源二空 薫君、匂宮に浮舟を宇治にかくまひれきしと及び其死亡せるとを語る源二空 侍從(二)、匂宮に、浮舟の投身前にれけ〻有樣を語る源二六 薫君、右近君(二)に投身前の浮舟の有樣を問ふ源二九 右近君(二)、薫君に匂宮が浮舟に通ひたる始末を語る源二七 薫君、宇治阿闍梨を召して浮舟の追善供養を命ず源二七 薫君、中將の君(二)に消息して浮舟の死を吊す源二七 陸奥守、浮舟の投身せることを中將の君(二)より聞きて悲歎す源二四 匂宮薫君、浮舟の爲に四七日の法事を行ふ源二七 宇治八宮の中の君、浮舟の法事の爲に誦經す源二六 大納言の君、明石中宮に浮舟が宇治八宮の中の君の妹なると及び投身せるとを語る源二八 宇治院の樹下に倒る源二九 小野僧都、浮舟が樹下に倒れたるを救ふ源二四 小野尼君浮舟を介抱す源二九 小野尼君と共に小野に移る源二九 小野尼君、小野僧都に消息して浮舟の物怪を調伏んとを托す源二九 蘇生す源二九 小野僧都、加持して浮舟の物怪を調伏す源二九 入水の意を達せずして物怪に襲はれ宇治院の樹下に倒る源三〇 頂の髮をそぎ五戒を受く源三〇 浮舟中將の君(二)右近君(二)並びに京、宇治等のことを想ふ源三〇 中將、小野尼君を訪うて浮舟を瞥見す源三〇 小野尼君、浮舟を中將(二)に配せんと欲す源三〇 中將(二)浮舟に懸想す源三〇 小野尼君、浮舟にかはりて歌を中將(二)に贈る源三〇 中將(二)浮舟に歌を詠みかくる源三〇 中將(二)の懸想せるにしたがはず源三〇 小野尼君歌を浮舟にかはりて中將(二)に詠みかく源三〇 尼にならむと欲し誦經を習ふ源三三 歌を小野尼君に詠みかく源三三 中將(二)を避けて小野の大尼君の曹子に遁る源三五

中將(二)、浮舟にうたを詠みかく源三五 歌を中將(二)に詠みかく源三三 小野の僧都を請じ出家受戒す源三四 中將(二)浮舟の出家せることを聞きて歎惜す源三三 中將(二)浮舟に歌を贈る源三三 歌を中將(二)に贈る源三三 小野尼君、浮舟が出家せるとを聞きて歎惜す源三三 小野僧都、明石中宮に宇治院にて浮舟を救ひしとを語る源三三 小野尼君、小野の僧都が浮舟を出家せしめたるを怨む源三四 中將(二)浮舟の尼姿を密かにのぞき見る源三六 中將(二)浮舟に歌を贈る源三七 行法誦經を事とす源三七 小野尼君歌に芹菜を添へて浮舟に贈る源三八 歌を小野尼君に贈る源三八 紀伊守(二)、小野の大尼君に薫君の近況及び浮舟との關係を語る源三九 薫君、明石中宮を訪ひて浮舟の死亡せるとを語る源三 明石中宮、薫君に、小宰相君をして、浮舟が小野尼君に救はれしとを告げしむ源三三 薫君、小野僧都に會して浮舟が救助せられしとを確知せんとし屢中堂に詣うづ源三四 薫君小野僧都に浮舟のとを問ふ源三五 小野僧都、薫君に浮舟を救助したる顚末を語る源三六 小君(二)薫君の命を奉じて浮舟を訪ふ源三四 薫君、消息を小君(二)に托して贈る源三四 薫君、法の師との歌を贈る源三四 薫君の贈れる消息を所違なりと稱し謝絕して返答せず源三五 薫君浮舟他人と通すと疑ふ源三六 女等打ち集りて其の人物を批評す無三

うきふねのめのと 浮舟乳母 匂宮が強ひて浮舟に逢ひたるを中將君に語る源一四四 浮舟の投身を思ひて悲む源二七

うぐひすのたき 鶯瀧 一條兼良此の所にて歌を詠ず藤四

うこん 右近 藤原季繩の女なり大和三 敦忠と絕ゆ大和三 歌を源保光におくる大和四 忘れじとの歌を藤原敦忠に贈る大和四 敦忠右近に雉子を贈る大和四 栗こまの、歌を藤原敦忠に贈る大和四

うこんのきみ(一) 右近君 夕顏の許に仕ふ源空 夕顏の死を哀悼す源七 源氏君之を二條院に祇候せしむ源九 夕顏の家系經歷を、はじめて源氏の君に語る源八 玉蔓初瀨にて右近に邂逅す源四四 ふたもとの、歌を詠す源四九 源氏の君に初瀨にて玉蔓に邂逅せるを語る源四一

うこんのきみ(二) 右近君 浮舟を諫む源二四 浮舟が投身せるを猜して悲歎す源二五 薫

君、右近に投身前の浮舟の有樣を問ふ源二六九　薫君に匂宮が浮舟に通ひたる始末を語る源二七一　浮舟、中將君(二)右近君(二)、並に京宇治等のことを想ふ源二七四

うこんのさくら　右近櫻　村上天皇の時重明親王家の櫻を移植す著四五

うこんのぢう　右近丞　引き連れての歌を詠す源三六　復官して靭負尉となる源三五　常世出でゝの歌を詠す源三六　源氏君故郷を回想し藤原惟光、右近丞等と海邊の樓にて詠歌して憂を散ず源三六　靭負となる源三九

うさ　豐後宇佐　欽明天皇の朝、肥前菱形の池に應神天皇神と顯はる、後に宇佐宮に鎮め奉る八幡宮是なり正三　稱德天皇、和氣清麿を宇佐に遣す正四　八幡明神桓武天皇の時託宣あり著四　八幡傳教大師に託宣す著三六　清麿神託を受く水五

うすかね　薄金　源家相傳の鎧なり保二六

うすぐものにようぬん　薄雲女院　ふぢつぼのにようご　藤壺女御源

うすみどり　薄綠　太刀の名、源朝長これを帶す平治三

うた　歌　素盞烏尊よりおこる著七五　藤原有房、僧より心を種とし心を種とすべからざることを聞く野六　藤原有房、僧より心をすなほにして心をすなほにすべからざることを聞く野二　藤原有房、僧より詞をはなれて詞をはなるべからざることを聞く野二五　藤原有房、僧より風情を求めて風情を求むべからざることを聞く野二六　藤原有房、僧より姿をならひて姿をならふべからざることを聞く野一八　藤原有房、僧より古風をうつして古風をうつすべからざることを聞く野三〇　藤原有房、僧より古今集を以て本とすべきことを聞く野三〇　仁義禮智信の五德をかね禮樂をたすけて國を治め民を和ぐる媒たり野三三　よく禮樂を調ふるが故に國治まりて異敵の爲に破られず野三五　昔は今よりも勝れたり源六

うだいじん　右大臣　弘徽殿の女御(一)は其の姫君なり源二　左大臣(二)と權を爭ふ源六　朧月夜の內侍の督は之が六の君たり源一九　我宿の〻歌を源氏の君に贈りて藤花宴に招待す源一六　四位少將は之が子なり源一六　藤花宴を開く源一六　源氏君之が招きに應じて藤花宴に赴く源一六　政權を專にす源二四　大納言(三)は之が子にして弘徽殿女御(一)の兄なり源三三　榮華を極む源三〇　源氏の君が朧月夜內侍のかみと密會せるとを發見して弘徽殿女御(一)に告ぐ源三四　朱雀院之が專權を憤る源三六　薨ず源三七　承香殿女御(三)は右大臣の姫君なり源三五　麗景殿女御(三)は右大臣の三の君なり源三三

うだいじん　右大臣(一)　左近少將に女を嫁せむと欲す落八一　左近少將の乳母に結婚の事を語る落八一　結婚の儀を急ぐ落八一　乳母に欺かる落八一　左近少將の緣談を斷念す落八六

うだいじん　右大臣　四女あり大い君は朱雀院の女御、中の君はみかど(春宮)の女御たり取六　大將の兄なり大將の姫君の男裝して元服する引入を行ふ取六　朱雀院位を春宮に讓り女一宮を次の春宮となす、時に大將の姫君、男を裝ひて中將となる右大臣の大い君計つて右大臣の四の君を大將の姫君に嫁せしめんとす右大臣之を諾す取九　四の君のはらめるを聞き父右大臣我が家の面れこしと喜ぶ取六　四の君のはらめるを女房をして中納言(姫君)に告げしむ中納言驚く、四の君耻づ取元　中納言(姫君)長く歸らざるに由て右大臣は憂ひて物もくはず四の君は我故夫のかく座すと悲む取四　四の君女子を生むや、右大臣の上、湯殿、大將の西の上、むかへ湯を行ふ取三　中納言(姫君)、乳母の家に宮の中將と起臥を共にす例よりも日數ふるに右大臣の憂へんとを思ひ消息して病尙怠らぬをいふ取四　中納言(姫君)、十二月晦に右大臣殿に參る右大臣中納言の心地例ならざるを見て御修法せんと騷ぐ取六　中納言(姫君)心地例ならざれど右大臣を哀れに思ひ强ひて物など食ふ右大臣喜ぶ取七　大將の姫君の供人ら曉に宣耀殿に姫君の迎へに行くに夜更けて罷でたりときゝて空しくかへる、大將右大臣四の君大に驚きさわぐ公私修法などして索む取八　四の君の生めるは宮の中將の子にて其にうんじて大將(男裝の姫君)隱れたるなりとの噂を父大將聞きて悲しく思ふ、右大臣覺つかなくて尋ねたり大將詳しく語るに右大臣呆れて歸る取八　四の君のめのとの心あはぬ一人、四の君の生めるは宮の中將の子なるを中納言(姫君)知らざりしを七日の夜中將の忍び入りしより知りて世をはかなくして隱れたるなりとかきて其文を落す右大臣見て大に怒り四の君を勘當して對面せず四の君心甚だ悲む取八　四の君、右大臣の勘事きびしく唯宮の中將を頼む心細さいはん方なし取二〇　四の君再び宮の中將の女子を生む、泣いて絕え入る母北の

方に向つて父右大臣を見ずして死ぬと泣く右大臣聞いて勘事を悔い來て泣く、四の君尼たらんといふ取二八　四の君、右大臣の勘事ゆりて殿に迎へらる取二三　四の君この度は大將(若君)の子を孕めり右大臣も喜び若君の父大將も喜ぶ吉野の大い君子なし若君、女一宮の若君を大い君にあづけんとすれど父大將愛して放たず取二三　父大將入道す右大臣太政大臣となり大將(若君)左大臣關白となり宮の中將内大臣兼大將となる若君たち皆中將少將となる取一八

うたいじんのにようご　右大臣女御　日ぐらしにの歌を詠ず大和八

うだいべん　右大辨　べん　辨(二)源

うだてんなう　宇多天皇　出家して諸國を歴遊す大和一　身一つにの歌を詠ず大和一　行脚す大和一　五十の賀を行ふ大和二　大空をの歌を刑部の君に贈る大和一四　行きて見ぬの歌を君子内親王に贈る大和一四　花の色をの歌を君子内親王に贈る大和一五　忠平大井河行幸を勸む乃行幸あり大和二九　遊女を召す大和四九　大江玉淵の女を愍む大和五〇　鳥飼院に幸す大和五〇　石山寺に詣づ大和七五　醍醐天皇卽位の時藤原時平菅原道實藤原定國藤原季長紀長谷雄の五人を以て顧問に備ふべきことを勸告す著二一　鳥養院にて御遊の時人々に鳥かひといふことを歌に讀ましむ著二〇　大井川に行幸す著二九　卽位す大鏡九　誕生す大鏡九　源氏となる大鏡九　太子となる大鏡九　十年位に在り大鏡九　藤原班子の御腹なり大鏡九　業平と相撲をとる大鏡九　光孝第三の御子なり大鏡九　出家す大鏡一〇　賀茂臨時祭をはじむ大鏡一〇　賀茂明神の託宣を受く大鏡一〇　陽成院に放言せらる大鏡二　醍醐天皇、宇多の第一皇子たり大鏡二　舞人となる大鏡二　下つて源氏に列す大鏡二　崩ず大鏡二　宮瀧に行幸す大鏡一三　河尻にしろめを召す大鏡一四　鳥飼の院に遊女を召す大鏡一九　業平と相撲をす今鏡八三　賀茂臨時祭を始む正七　卽位す正七　出家す正七　寛平遺誡を作る正七三

うたのだい　歌題　都枕四八

うぢ　宇治　右大將道綱の母此所に鵜飼を見る蜻八　中務内侍此所にて歌を詠ず中三　後嵯峨上皇、宇治に行幸す增一九六　後醍醐天皇行幸す增一九六

うぢあき　大舘氏明　後村上天皇に鷹を献す芳一九　詠草を吉野に送りて後村上天皇の勅判を辱くす芳四五

うぢあり　舟木氏有　放鷹樂を奏す著二〇

うぢうべん　右中辨　中納言の中の君の夫たり落七　落窪君右中辨の衣服を縫ふ落七

うぢかは　宇治川　菅原孝標の女此所にて音にのみの歌を詠ず更三三　源頼政、平知盛同重衡同忠度等と宇治川に戰ふ平家一八五　平知盛、軍を督して宇治川を渡る平家一八九　佐々木高綱、梶原景季と宇治川に先陣を爭ふ平家三三

うぢざね　藤原氏實　いはひおくの歌を詠ず增三七

うぢただ　氏忠　後醍醐の御遊びに和琴を彈ず增一七

うぢつね　藤原内經　家定と班次を爭ふ增一六三　後醍醐の朝覲の行幸に供奉す增一六三

うぢでのはま　大津打出濱　今井兼平、勢田の戰に敗れて入京するの途打出の濱にて木曾義仲に遇ふ平家三八

うぢとくまじきもの　打ちとくまじき物あしと人にいはるゝ人枕一八六

うぢとの　宇治殿　よりみち　藤原頼通今鏡

うぢのあくさふ　宇治惡左府　よりながが藤原頼長平家

うぢのあざり　宇治阿闍梨　宇治八宮を訪ふ源八八　冷泉院に宇治八宮の事を奏す源八八　宇治八宮に薫君を紹介す源八九　宇治八宮の葬事に奉仕す源九一七　宇治の大い君及び宇治の中の君に炭を贈る源九三五　宇治大君及び宇治の中の君に芹蕨を贈る源九三九　宇治八宮を夢み追善のために誦經を行ふ源九四〇　君にとての歌に蕨土筆を添へて宇治の八宮の中の君に贈る源九四一　宇治八宮の中の君、この春はの歌を贈る源九四一　薫君、宇治阿闍梨に命じ宇治宮の寢殿を毀ちて堂宇を建立せしむ源一〇四四　薫君、阿闍梨を召して浮舟の追善供養を命ず源一七三

うぢのかはなみ　宇治川浪　物語の名なり女等打ち集りて批評す無四二

うぢのさだいじん　宇治左大臣　よりながが藤原頼長宇治

うぢのさふ　宇治左府　よりながが　藤原頼長平家

うぢのだいしやうごく　宇治大相國　ただざね　藤原忠實保

うぢのちやうじや　氏長者　頼長補す保八

うぢのちやうじや　氏長者　藤原忠通氏の

長者となる保五〇

うぢながせらる 佐伯氏長　高島のおほね子に屈の君その寢處を犯す源四〇　源氏の君の語らひに應せずして貞操を守る源四一　身のうさをの歌を源氏の君に詠みかく源四二　源氏君空蟬につれなさをの歌を詠みかく源四三　小君(こ)、源氏の君の文を空蟬に取り次ぐ源四四　源氏君歌を小君に托して空蟬に贈る源四四　貞操を守つて源氏の君の語らひを卻く源四六　源氏君歌を空蟬に贈る源四七　歌を源氏の君に贈る源四七　源氏君、空蟬に面會すべき謀を小ぎみ(こ)に依頼す源四八　軒端の荻と碁を圍む源氏之をかいまみる源四九　源氏君、再び空蟬の寢所を犯す源五一　源氏君が寢所に入り來れるを覺りて脱れ出づ源五一　小君(こ)、源氏の君を空蟬の寢所に導く源五一　源氏の君空蟬の無情を恨む源五二　小君(こ)が源氏の君をその寢所に誘へるとを責む源五四　小君(こ)、空蟬に源氏の君が詠みたる空蟬のといへる歌を示す源五五　空蟬の丶歌を詠ず由つて空蟬の名あり源五五　源氏の君の病を洩れ聞きて歌を贈る源五六　伊豫介(こ)空蟬を具して任國に下る源五五　源氏の君、空蟬が伊豫介(こ)に具して任國に下向せるとき餞別の品に添へて逢ふまでの丶歌を贈る

うぢなり 和氣氏成　東宮御宇多の病に侍す増一〇五

うぢのひめぎみ 宇治姫君　うきふね　浮舟源

うぢのわきいらつこ 菟道稚郎子　仁德天皇、弟菟道稚郎子と皇位を讓りあふ水一九　仁德天皇に位を讓る正三六　自刃す正三六　仁德天皇、稚郎子を輔佐す正三六

うぢのわきいらつこのまつり 宇治稚郎子祭　祭あり沿革有樣四季一三

うちのわかぎみ 宇治若君　みやのわかぎみ　宮若君取

うぢばし 宇治橋　孝德天皇の朝道登始めて之を架す水四六　平通盛、同敎經宇治橋に出陣して木曾義仲の軍を拒ぐ平家三〇

うちまろ 藤原内麿　贈從一位左大臣たり大鏡一五

うつくしきもの うつくしき物　ふりにかきたるちごの顔枕二〇

うつせみ 空蟬　小君(こ)は空蟬の弟、衛門督(こ)の子なり源三一　伊豫介(こ)の後妻、紀伊守(こ)の繼母たり源三九　衛門督(こ)の女なり源三九　源氏の君の語らひに應せずして貞操を守る源四一　身のうさをの歌を源氏の君に詠みかく源四二　源氏君空蟬につれなさをの歌を詠みかく源四三　小君(こ)、源氏の君の文を空蟬に取り次ぐ源四四　源氏君歌を小君に托して空蟬に贈る源四四　貞操を守つて源氏の君の語らひを卻く源四六　源氏君歌を空蟬に贈る源四七　歌を源氏の君に贈る源四七　源氏君、空蟬に面會すべき謀を小ぎみ(こ)に依頼す源四八　軒端の荻と碁を圍む源氏之をかいまみる源四九　源氏君、再び空蟬の寢所を犯す源五一　源氏君が寢所に入り來れるを覺りて脱れ出づ源五一　小君(こ)、源氏の君を空蟬の寢所に導く源五一　源氏の君空蟬の無情を恨む源五二　小君(こ)が源氏の君をその寢所に誘へるとを責む源五四　小君(こ)、空蟬に源氏の君が詠みたる空蟬のといへる歌を示す源五五　空蟬の丶歌を詠ず由つて空蟬の名あり源五五　源氏の君の病を洩れ聞きて歌を贈る源五六　伊豫介(こ)空蟬を具して任國に下る源五五　源氏の君、空蟬が伊豫介(こ)に具して任國に下向せるとき餞別の品に添へて逢ふまでの丶歌を贈る源五五　歌を源氏の君に贈る源六〇　源氏君空蟬を懷ふ源二七　伊豫の介(こ)に具して常陸に赴く源三九　源氏君空蟬にの歌を贈る源三一　行くとくとの歌を詠ず源三二　源氏君空蟬に小君(こ)を使として消息を贈る源三二　紀伊守(こ)空蟬に懸想す源三二　歌を源氏の君に贈る源三三　出家す源三三　源氏君紫上玉蔓花散里上末摘花明石上空蟬等に春衣を配與す東四六　女等打ち集りて其人物を批評す無二

うつのやま 宇都山　阿佛尼此所にて山伏に逢ひ都への消息を托す十六夜一〇　源親行此のところにて歌を詠ず源三　梶原景時等の墓あり東三

うづまさ 太秦　菅原孝標の女此所に詣づ更四四　阿佛尼此所に詣づ轡二　三條天皇、太秦に籠る大鏡一九

うどねり 内舍人　薫君の命を奉じて浮舟の居住せる宇治宮を警護す源二四七　匂宮、浮舟を訪ひ、内舍人の警護せる爲、意を達せずして歸る源二五〇

うどねり 内舍人　大納言の女を盜みて奥州に下る大和六二　幼女と契る大和七三

うどの 宇土野　紀貫之此所に宿る土一九

うどんげのはな 優曇華花　仲忠、蓬萊に不死藥うどんげの華は求むべし琴は尙難しとて遂に朱雀帝に彈琴を固辭す宇津一六六

うねめ 采女　さるさはの池にて身を投ず大和九九

うのまる 鵜丸　白川院神泉苑に行幸あり鵜の丸と名づく保一七

うばくつた 優婆崛多　美人と化して弟子を懲戒す宇治三六

うばそくのみや 優婆塞宮　はちのみや宇治八宮源

うばそくのみや 優婆塞宮　へだてゝ見ゆるの歌を詠ず増七一

うぶやしなひ 産養　春宮(四)の爲めに冷泉院産養を營む源六三　すゞし、女一の宮の産養をなす宇津四三　すゞし三條殿に七日の産養をなす宇津五三

うへすぎのそうづ 上椙僧都　慳貪の罪により死後鬼となる著二六八

うまがたのしやうじ 馬形障子　朝飼の間の前にあり著二〇四

うまかひ 藤原宇合　宰相となる大鏡一三　家

を式家と名づく大鏡一四　藤原の廣繼の父なり平家三〇一　其の系を式家と稱す正吾

うまこ　蘇我馬子　聖德太子と共に佛法を崇拜す正三　佛堂を建立す水三五　佛法を興隆す水三五　東漢駒を殺す水三九　崇峻天皇に惡まる水三九　東漢駒をして崇峻を弑せしむ水三九　崇峻天皇、馬子に弑せらる正四四　厩戸皇子と共に守屋を滅す正四四

うましまみのみこと　宇麻志間見命　長髓彥を殺して降伏す正三四　長髓彥の命を奉ず正三三　神武天皇に十種の神寶を奉る正三四

うまのかみ　馬頭　網代よりの歌を修理の君に贈る大和二六　明けぬとての歌を詠ず大和二六　心をしの歌を修理の君に贈る大和二六　いかにしての歌を修理の君に贈る大和二六

うまのかみ　右馬頭　右大將道綱の母の養女に懸想す蜻二九　春雨にの歌を右大將道綱の母に贈る蜻二〇　問ふこゑはの歌を右大將道綱の母に贈る蜻二五　あはせぬをの歌を藤原道綱に贈る蜻三九　敷きつゝの歌を右大將道綱の母に贈る蜻三三

うまのきみ　馬頭君　實忠の室三條の上、容姿美なり　輔純、師純、兵部卿宮、馬のかみ等之を得んとす宇津三五　師純、輔純、蔭隆、行雅等と共に祭の使となる宇津三四

うまのじよう　右馬丞　左近少將に絹を奉る落七三

うまのすけ　右馬允　むしめづる姫君を窺ふ堤二　かはむしの、歌を詠ず堤三　かはむしにの歌を詠ず堤三

うまのすけ　入江右馬允　源義朝に隨うて白川殿を攻む保元

うまのてつがひ　馬手番　五月馬の手番あり宇津三三

うまのないし　馬內侍　成忠の子なり著一六〇　藤原道隆と契る著一六〇

うまやどのわうじ　厩戸皇子　しやうとくたいし　聖德太子正

うみ　海　伊勢の海枕二

うんけい　雲慶　七條院の越前の父なり著二九一

うんこじ　雲居寺　建立す秋三

うんれい　うんれい　濱松中納言唐に赴き

うんれいに着す源一

うめがえ　梅枝　龜山天皇の雜仕たり增八六

うめつぼのかういい　梅壺更衣　大將の姫君

九月十五日頃、更衣のまう上るを見我もかゝるべきをと世をはかなく思ひ塀のわたりに隱れて嘆息す式部卿宮の中將來りて女裝の若君のつれなきを恨む取三

うめつぼのかういい　梅壺更衣　忠乞、世を遁るゝに臨んで叔母更衣と贈答す宇津二三　仲忠に橘の果を投ぐ宇津吾九　橘千蔭の妹たり宇津吾九　兼雅より年齒遙に長ぜるも好色にして兼雅と契り終に其北の方となる宇津吾九　宰相上の移轉を羨む宇津七七　仲忠の邸にうつる宇津七六　仲忠に消息を贈る宇津七六　仲忠、更衣に返書を贈る宇津七六

うめつぼのにようご　梅壺女御　ひめみや前坊姫宮源

うめつぼのにようご　梅壺女御　そうし藤原琮子今鏡

うめのしま　梅島　後嵯峨上皇御舟にて御覽ぜらる增七一

うめわか　梅若　ふる雨にの歌を詠す秋三　花園左大臣の子たり秋四　瞻西に想はる秋五　たのまずよの歌を瞻西に贈る秋六　いつはりの、歌を瞻西に贈る秋七　瞻西と契る秋八　我袖にの歌を瞻西に贈る秋九　瞻西を尋ねて比叡山に登る秋一〇　延曆寺にて石の牢に押し籠められる秋一一　天狗の物語を聞きて園城寺の燒亡を知る秋一四　石牢を脫れて京に歸る秋一五　我が身さへの歌を瞻西に贈る秋一六　園城寺に赴く秋一六　投身して死す秋一七

うらしまのこ　水江浦島子　蓬萊に到る水二六　龍宮より歸る水二三

うらと　浦戸　紀貫之此のところにとまる土三

うれしきもの　嬉しき物　まだ見ぬ物語の多かる枕一六三

うゑもんのすけ　右衛門佐　藤原宗家との交情かれ〳〵になりし時逢ふことの、歌を詠じて贈る著一〇二

えいえん　永緣　樂園より伯母の歌を所望せらる宇治九　興福寺の別當たり寺の燒亡を憂ひ病を發して卒す平家二四　聞くたびにの歌を詠じ世に初音の僧正と稱せらる家平二六

えいがく　永覺　興福寺の僧たり平重衡の興福寺を攻めし時奮戰す平二四

えいかもんゐん　永嘉門院　ずゐしによわう　瑞子女王增

えいくわん　永觀　阿彌陀講式を作りて十

齊日世に修して薫修すると久し著四

えいし 藤原瑛子 恒明親王を生む増一三三 鐘子の妹なり、龜山法皇に寵を得、恒明親王を生む増一三三 龜山法皇の喪に服す増一四四 龜山法皇の崩御を悼みて出家す増一四四 よもはみなの歌を詠ず増一三三 量仁親王、瑛子の御所に行啓す増一八三 後醍醐の北山の花見に參す増一八七

えいじつ 叡實 藤原冬嗣を加持す宇治二五五

えいしないしんなう 叡子內親王 藤原得子の姫君なり今鏡五七

えいしやう 榮性 尼と契りて同宿す著三三 高倉茂通と戲る著三三

えいしやう 永成 いのちはことの數ならずの歌を詠ず今鏡八五

えいてう 永超 男より魚を受く宇治八五 魚食を好む宇治八六

えいふくもんゐん 藤原鐘子の院號たり正四四

えぐち 江口 一條兼良此所にてうかひ舟の歌を詠ず藤六 一條兼良此所にて鵜飼を見る藤九

えちかは えち河 一條兼良此所を過ぐ藤三三

えつしないしんなう 悅子內親王 ふたつもじの歌を詠ず徒二六

えんぎてんりやく 延喜天曆 賢君の例に引かる大鏡五〇

えんじやう 緣淨 山寺のゝ歌を詠ず著四一 白馬はの歌を詠ず著三七

えんじゆ 延壽 美濃國青墓宿の長者大炊が女にして源義朝の寵を受け夜叉御前を生む平治四四 出家す平治七九

えんせいもんゐん 延政門院 ねつしないしんなう 悅子內親王徒

えんたん 燕太子丹 始皇帝に捕はる平家二一六 荊軻を擧げて燕の大臣とす平家二一六

えんのぎやうじや 役の行者 文武天皇の爲に伊豆に流さる水三三 鬼神を使役す水三三 一言主神の爲に讒せらる水四四 伊豆に流さる水四四 富士山に修ひとことぬしの神を谷に投ず水四四 行す水四四 伊豆より召還せらる水三三 渡唐す水三三

えみし 蘇我蝦夷 自殺す水四四 皇極天皇の時朝政を專にす正四六

えんめいもんゐん 延明門院 のぶこ 延子內親王增

えんりやくじ 延曆寺 圓城寺と隙を生ず秋一 衆徒蜂起す秋三 燒く秋三 衆徒園城寺を攻む秋三 衆徒園城寺を燒く秋三

えんりやくじ 延曆寺 僧徒蜂起して朝廷に訴訟す著八 鳥羽院延曆寺に行幸あり大師修禪定の具足を御覽じ藤原通憲を召して其名字を問ふ平治一七 齋藤實盛、源義朝敗走の時に、延曆寺の僧兵を破りて道を開く平治三三 興福寺の僧徒と爭鬪す平家二五 額打のことによりて興福寺と爭ふ平家二五 堂衆と學生相爭うて戰ふ平家九二 園城寺より牒して以仁王の令旨を奉し平清盛を討たんとを議せる時これを拒む平家六六 僧徒京師に亂入して清水寺を燒く平家二六 僧徒蜂起して近藤師經の鵜川寺を燒きし罪を訴へ師經を禁獄し藤原師高を流罪に處せんとを奏請す平家二六 僧徒藤原師通を呪詛す平家四四 僧徒ら藤原師高、近藤師經を所罰せんとを訴へ裁訴なきを怒り神輿を擁して入京す平家四三 僧徒神輿を擁して蜂起せると永久より治承まで六箇度たり平家四五 僧徒等僉議して明雲を奪ひ返して寺に迫る平家三五 本曾義仲に加擔すべき返牒を送る平家三四五 平家、延曆寺三千の僧徒を味方にせんとして連書を送る平家三七 行兼、平通盛、同資盛、同維盛、同重衡、同清宗、同經盛、同知盛、同敎盛、同賴盛、同宗盛等連署の願書を延曆寺に送る平家三八 平宗盛等が連署して贈れる牒狀を見其請を卻けて應ぜず平家三九

おいそのもり 老蘇杜 源親行此の地を過ぎてかはらじなの歌を詠ず東四 一條兼良此所にて我が袖よゝわれこそはの二首の歌を詠ず藤二三

おうじんてんなう 應神天皇 百濟より博士經典を貢す著六 讒を信じて武內宿禰を討つ水二八 太子となる水二八 仲哀第四の御子たり水二八 四十一年位に在り水二八 卽位す水二八 仁德天皇、應神の第四皇子たり水二八 繼體天皇應神の第八皇子たり水二九 神功皇后、天皇を筑紫に生む正三三 輕島豐明宮に居り正三三 帝の時百濟の博士經史を傳ふ正三三 卽位す正三三 欽明天皇の時神と現る正三三 淸和天皇の朝男山石淸水に祭る正三三 仁德天皇、應神の旨を奉じ太子の位を菟道稚郎子に讓る正三六

おうてんもん 應天門 伴善男の爲に燒かる平治一六六

おき 隱岐國 小野篁隱岐に流さる水八四 藤

原信實、後鳥羽上皇を隱岐に流す増三五　藤原貞憲、父通憲の事に座して流さる平治三六　後鳥羽上皇、隱岐に崩ず増三九　後醍醐天皇流さる増二〇　後醍醐天皇、隱岐に着す増二〇六一　後醍醐院、隱岐にて密敎の秘法を修む増三七　後醍醐天皇、隱岐を遁れ出でゝ出雲につく増三七　文覺流さる平家五四　後鳥羽天皇流されて隱岐に崩ず正四　後醍醐天皇移さる正一〇六　後醍醐天皇隱岐を脫して伯耆に幸す正一〇七

おきしま　伊豆國興島　鬼此の地に漂着す著三九

おきつ　興津　阿佛尼此の濱にて歌を詠ず十六夜一〇　源親行此の地にて歌を詠ず東一四

おきな　白髮翁　仲忠に京極の故事を物語る宇津四八　衣料の錢にて近人を役し藏の周圍を掃除せしむ宇津四九　仲忠より得たる衣を賣る宇津四九

おきなまる　翁丸　勅勘せらる犬名なり枕七

おくら　山上憶良　遠つ人の歌を詠ず著六六　春くれば の歌を詠ず四季五　憶良が萬葉集を撰したりといふは非なり今鏡三〇

おこまのごんのかみ　おこまの權頭　强力あり著一五五

おしかつ　惠美押勝　稱德天皇の時押勝叛す正三三　稱德天皇に寵せられ惠美の姓を賜はる正三三

おしくまのみこ　忍熊皇子　鹿弭坂王と共に神功皇后に叛す正三一　神功皇后、忍熊王の叛を平ぐ水一七

おしさかのおほなかひめ　忍坂大中姫　安康天皇の御母なり水二四　雄略天皇の御母なり水二四

おしはのわうじ　忍羽皇子　飯豐天皇の父なり水二六

おそろしきもの　恐ろしき物　橡のかさ枕二九

おたぎ　愛宕　阿佛尼病みて此附近に宿る轉九

おちくぼのきみ　落窪君　容姿諸姉妹に讓らず實母は皇族たり父中納言(一)落窪を愛せずず侍婢僅に一人のみ長じて無常を觀ず繼母之を疎んじ落窪に住ませ居室の名によりて落窪の君と名けしむ帶刀、左近少將に落窪の君の事を語る落一　繼母中納言北方に裁縫を强ひらる落二　異母弟三郎に琴を敎ふ落三　源中納言の北方に虐待せらる落三　はかなさに物を縫ひつゝ、よのなかにの歌を詠す落三　性質穎敏なり落三　裁縫に長ず落三　琴に長ず落三　阿漕を召使ふ落三　阿漕、落窪君と別を惜む落三　阿漕、落窪君を救はんと欲す落三　左近少將、帶刀に、落窪君に會せしめんとを乞ふ落三　帶刀より左近少將の消息を受く落四　左近少將、帶刀に落窪君の事を屢責む落四　無常を觀して死をおもふ落四　阿漕より左近少將のことを聞く落四　左近少將より消息をうく落四　左近の少將の消息に意を留めず落五　源中納言落窪君の衣服粗惡なるとをその北の方に語る落五　阿漕より左近少將の消息を受く落五　左近少將ほにいでゝの歌を贈る、返しせず落六　左近少將くまもなきの歌を贈り來る、返しせず落六　左近少將、日々消息を落窪君に贈るに返し絶えて無し落六　左近少將あまのがはの歌を贈る返しせず落六　左近少將に返書せず落六　父中納言(一)の北の方落窪君に藏人少將の衣服を縫はしむ落六　父中納言(一)の北の方落窪君に古綿入を與ふ落六　左近少將に返書せず落七　左近少將、落窪君より返書なきを以て帶刀を責む落七　左近少將、落窪君に會せんとを帶刀に謀る落七　右中辨の衣服を縫ふ落七　父中納言(一)の中の君、母に落窪を石山に同伴せんとを勸む母聽かず落七　左近少將かきたゝての歌を贈る落七　左近少將、落窪君より絶えて返書なきとを帶刀に語る落七　左近少將つれなき石山參詣の留守を命ず落七　左近少將、中納言、をの歌を贈る落九　琴を彈く落一〇　左近少將落窪君を垣間見る落一〇　帶刀落窪君の琴を聽く落一〇　琴を彈く落一一　左近少將、落窪君の寢所に入る落一一　左近少將落窪の寢室に入るの時、衣服の粗惡なるを耻づ落一三　左近少將の不意に來たれるに驚く落一三　左近少將と通ず落一三　左近少將に迫られて止むなく初めてひとごゝろの歌を詠みかく落一三　左近少將返書せざるとを責む落一三　左近少將落窪君に後朝の消息を贈る落一四　阿漕、落窪君に左近少將の事を辯解す落一四　左近少將いかなれやの歌を贈る落一五　左近少將との事の露顯を恐る落一五　左近少將の消息を見る落一五　左近の少將こひしくもの歌を贈る落一六　阿漕、落窪の君の爲に苦心す落一六　明鏡を藏す落一七　阿漕、己れの袴をきす落一七　左近少將落窪君の家に至る落一八　左近少將に意漸く解く落一八　阿漕、落窪君の爲に三日夜の設を營む落一九　左近少將に初めて返書を贈る落二〇

餅の設けをあやしむ落三　左近少將、落窪君の許に行かんとして雨に沮まる落三　左近少將の消息を贈る落三　左近少將雨を冒して落窪君の許に赴く落三三　左近少將の事の露顯を恐る落三四　みをしる雨の丶下句を詠す落三五　母北の方に室内の異狀をあやしまる落三六　北の方の亂入に驚く落三七　母北の方に鏡を乞はる落三七　北の方の鏡を召しとらる落三八　北の方より消息を得落三九　左近少將より消息を給はる落三九　左近少將に返書を贈る落三〇　帶刀の爲に消息を失はる落三〇　左近少將に誥らる落三一　左近少將に消息の遺失を憂ふ落三一　左近の少將より四の君のことを問はる落三二　左近少將より移轉を勸めらる落三三　北の方に命ぜられて藏人少將の衣服を縫ふ落三三　中納言に責められる落三四　北の方の爲に中納言に訴へらる落三四　女房少納言に慰められる落三五　女房少納言に裁縫を助けらる落三五　少納言より四の君婿取のことを聞く落三五　少納言より辨の少將のことを聞く落三六　左近少將に辨少將のことにつきて揶揄せらる落三六　左近少將に教唆せられて裁縫を怠る落三九　左近少將より消息を得落四〇　左近少將に返書を贈り書にそへて笛を屆く落四〇　繼母北の方の爲に幽閉せられむとす落四〇　繼母北の方の爲に中納言に憎まる落四一　北の方に辱かしめらる落四一　北の方の爲に、帶刀と通ずとなし中納言に誣告せらる落四一　北の方に責められる落四二　中納言の面前にて北の方に呵責せらる落四二　北の方の爲に幽閉せらる落四二　中納言の心を疑ふ落四四　深夜阿漕に訪はる落四五　左近少將より消息を得落四六　阿漕の書を讀む落四七　左近少將の消息を得落四七　北の方に藏人少將の笛の袋を縫ふことを命ぜらる落四八　針の先にて消息を書く落四九　阿漕より消息を得落四九　典藥助の事を憂ふ落五〇　阿漕より典藥助の事を聞く落五〇　阿漕に典藥助に犯さるゝの難を救はる落五〇　阿漕に訪はる落五一　阿漕の助を得て典藥助を斥く落五二　典藥助の消息を得落五三　左近少將より消息を得落五三　左近少將に返書を贈る落五四　阿漕をして典藥助に返書を贈らしむ落五四　戸を固めて典藥助に備ふ落五五　阿漕に保護せらる落五五　左近少將に救ひ出さる落五六　左近少將に伴はれて二條邸に入る落五六　左近少將に返書を贈る落六〇　左近少將より消息を受く落六一　左近少將の復讐の企を制す落六二　左近少將と語る落六三

女房兵庫を召使ふ落六三　左近少將より中納言聟取のことを聞く落六六　左近少將に、中納言の聟は何人なるかを問ふ落六六　左近少將に依て兵部少輔のことを知る落六六　左近少將に寵せらる落七一　落窪甚時めく落七一　阿漕を重用す落七一　左近少將の裝束を縫ふ落七三　左近少將と清水に詣づ落七三　左近少將か中納言北方を辱しむるを制す落七七　きるひとの丶歌を詠ず落七七　藏人少將の婚儀の衣服を縫ふ落七七　女房少納言を召使ふ落七九　女房少納言より中納言のことを聞く落八〇　女房少納言より兵部少輔のことを聞く左近少將の婚を憂ふ落八一　阿漕より左近少將の婚儀を聞く落八一　左近少將の緣談を北方の意となす落八二　左近少將に慰められる落八二　左近少將を疑ふ落八三　意を安んず落八五　左近少將に慰撫せらる落八五　賀茂祭を見る落八六　懷妊す落八六　大將の邸より二條の邸に歸る落八七　左大將北方、中の君に對面す落八七　左近少將より姑北の方に對面せむことを勸めらる落八七　姑北の方より消息を得落八七　夫左近少將の妹中の君と親しく語る落八七　太郎を生む落八八　左近少將に父中納言に逢はむことを乞ふ落八八　次郎を生む落八八　三條邸所有の券を有す落九三　左近少將の車爭の事を心痛す落九三　三條邸所有權の爭を憂ふ落九九　三條邸に移らむことを、左近少將に勸めらる落一〇〇　古鏡箱に歌を記す落一〇三　左近少將と父中納言との對面を帳内より聽く落一〇六　父中納言に對面す落一〇八　父中納言に北方侮辱の事を謝す落一〇九　妹四の君に消息を贈る落一一三　北方に舊怨を含まず落一一三　中納言の三郎を愛す落一一三　母北方と交通す落一一四　左近少將と中納言の賀のことを謀る落一一四　繼母北方三四の君に對面す落一一五　父中納言の邸に入る落一一五　姑北の方より消息を受く落一一七　父中納言の病を憂ふ落一一八　帶刀阿漕が下向に餞す落一一三　左近少將が中納言の賀を行ふを感謝す落一一三　父中納言の希望を滿たしめむと欲す落一一四　中納言の病を訪ふ落一一五　中納言より遺族の保護を託せらる落一一七　父中納言の喪に籠る落一一八　左近少將より歸邸を促さる落一一八　繼母北方に孝養を怠らず落一一五　歸邸す落一一五　時人にその幸福を羨まる落一一五　任國に赴く人々に餞す落一一四　除服す落一一五　左近少將より帥中納言結婚のことを謀らる落一一六　帥中納言の婚を三郎に謀る落一一六

中納言の分配を辭す落一毛　四の君に同情を寄す落一六　四の君を厚遇す落一九　左近少將と昔語りをなす落一四二　三郎落窪に北方と四の君との對面のことを謀る落一四三　母北方に衣服を贈る落一四五　四君に餞す落一四七、四の君の女房に扇を餞す落一四七　遙々との歌を詠ず落一四七　四の君に消息を贈る落一四七　四君に告別の爲落窪を訪ふ落一四七　四の君の姫君に消息を送る落一四八　四君の姫君より返書を得落一四八　四の君より返書を受く落一四八　母北方を尼となす落一五〇

おちばのみや　落葉宮　朱雀の院の女二の宮、母は下藹の更衣たり源六四　朱雀院の御賀を奉獻す源七二　柏木君、病により落葉宮の邸より頭中將(一)の亭に移る源七六　柏木君を追懷して哀傷す源七七　夕霧、宮を訪ひて柏木君の薨去を追悼す源七七　一條御息所の姫宮なり源七八　夕霧宮を一條宮に訪ふ源七一　夕霧、落葉宮に歌を詠みかけて密に挑む源七二　夕霧、宮を訪ふ源七四　歌を夕霧に詠みかく源七九　夕霧、宮を訪ふ源七六　歌を夕霧に詠みかく源七九　夕霧、宮に歌を詠みかく源七九　夕霧、落葉宮の簾の中に强ひて入りて情を訴ふ源七二　歌を夕霧に詠みかく源七三　夕霧宮に歌を詠みかく源七三　夕霧、宮に消息を贈る源七四　夕霧、宮に歌を詠みかく源七四　歌を夕霧に詠みかく源七四　阿闍梨、一條御息所に落葉宮が夕霧と通じたるを告ぐ源七六　一條御息所、落葉宮が夕霧と通じたるを聞きて悲歎す源七七　一條御息所、夕霧が落葉宮に贈りたる消息を見る源七八　夕霧宮に歌を贈る源七八　柏木君宮を娶る源六四　朱雀院の女二の宮なり源六四　一條御息所宮を訓戒す源七六　朱雀院、一條御息所の薨去を哀哭す源七六　一條御息所の薨去を聞き消息を落葉宮に贈りて吊問す源七七　夕霧、一條御息所の薨去を聞きて落葉宮を訪ひて吊詞を述ぶ源七七　夕霧宮を屢慰問す源七九　夕霧、宮に歌を贈る源七四　雲井雁、落葉宮のことにより夕霧を怨む源七四　歌を夕霧に贈る源七四　源氏君夕霧が落葉宮に通へることを聞きて憂ふ源七五　朱雀院宮の出家を制止す源七七　夕霧、落葉宮を一條宮に移徙せしむ源七七　出家の許可を朱雀院に乞ふ許されず源七七　落葉宮、一條宮に移徙す源七九　雲井雁、夕霧が落葉宮を一條宮に移して同接せるとを聞きて驚く源八〇　夕霧宮に歌を詠みかく源八〇　夕霧を避けて塗籠の内に籠る源八〇　夕霧宮に通ず源八六　何ゆゑかの歌を頭中將(一)に贈る源八〇

頭中將(二)宮に歌を贈る源八〇　六條院の艮の町に移る源八四　夕霧、宮を六條院艮の町に移す源八四　女郎花の歌を夕霧の六の君に代りて薫君に贈る源一〇三

おとづるまる　乙鶴丸　安良殿に通ふ徒三六

おとなしがは　音無川　增基此所に遊びて歌を詠ず庵五

おとはる　乙春　總繼の女、藤原基經の母なり大鏡三七　藤原澤子と姉妹たり大鏡三七

おとむろ　乙牟漏　藤原良繼の女、平城天皇の母たり水七　嵯峨天皇の母たり水八

おに　鬼　身八九尺ばかり髪夜叉の如く色黑く眼丸くして猿の如し著三九

おにがしま　鬼ヶ島　源爲朝征服す保五

おにどの　鬼殿　二條の內裏、鬼殿に比す增一九　燒亡す平家四七

おにのま　鬼間　壁に白澤王を畫かく著三〇

おにやらひ　追儺　文武天皇の慶雲二年に始まる水五

おのころしま　磤馭盧島　天瓊矛の尖より滴り落つるうしほより成る正九

おほあらきのもり　大あら木の森　森の名所の一たり枕四

おほいきみ　宇治大君　生る宇治八宮の王女たり源八三　薫君、大君及び宇治八宮の中の君をお垣間見る源八四　薫君大君に歌を贈る源八九　歌を薫君に贈る源八九　薫君大い君に消息を贈る源八九　薫君、匂君を訪ひて、大君の有樣を語る源九〇　宇治八君、薫君に大君及び宇治八宮の中の君の後見を托す源九三　宇治八宮、大君及び宇治八宮の中の君に遺訓す源九三　薫君、宇治八宮の薨去により大君等を吊問す源九八　匂宮、宇治八宮の薨去により大君を吊問す源九九　涙のみの歌を宇治八宮の中の君に代りて匂宮に贈る源九〇　薫君、大い君を訪ふ源九三　薫君大い君に歌を詠みかく源九三　歌を薫君に詠みかく源九三　宇治八宮を追慕す源九四　薫君、大い君を訪ふ源九三　宇治阿闍梨、大君及び宇治八宮の中の君に炭を贈る源九三　薫君大い君を戀ふ源九六　歌を薫君に詠みかく源九七　薫君大い君に歌を詠みかく源九七　宇治阿闍梨、大君及び宇治八宮の中の君に芹蕨を贈る源九九　薫君、大い君を訪ふ源九〇　薫君、大君及び宇治八宮の中の君を几帳の隙より覗き見る源九三　薫君、大い君を訪ふ源九三　宇治八宮の一周の法事を宇治八宮の中

の君と共に行ふ源九三　歌を薫君に詠みかく源九三　薫君大い君に歌を詠みかく源九三　薫君に宇治八宮の中の君を配せんの意あり源九三　薫君、大い君に副ひ伏しす源九九　薫君大い君に歌を詠みかく源九四　とりのねもの歌を薫君に詠みかく源九四　薫君、大い君を訪ふ源九四　宇治八宮の中の君を己れに代へて薫君に配せんとす源九四　辨の君(二)大い君に、薫君に配従せんとを勧む源九四　辨の君(二)に宇治の八宮の中の君を己れに代へて薫君に配せんとを語る源九四　辨君、大君に、薫君に配従せんとを勧む源九四　薫君が寝所に來れるを知り中の君を殘して遁る源九四　辨の君(二)薫君を大君の寝所に導く源九四　薫君大い君に歌を贈る源九四　歌を薫君に贈る源九四　薫君、大い君の無情を恨む源九四　薫君、匂宮を導きて、大君及び宇治八宮の中君を訪ふ源九三　薫君、大君に對して無情を恨む源九三　薫君大い君に歌を詠みかく源九四　歌を薫君に詠みかく源九四　薫君、消息を贈る源九四　へだてなきの歌を薫君に贈る源九四　薫君大い君に歌を贈る源九四　薫君匂宮と同車して、大君及び宇治八宮の中の君を訪ふ源九三　薫君、大君の無情を恨む源九四　薫君、三條宮を新築して大君を迎へんとす源九六　憂欝して病を生ず源九七　薫君、大い君の病を訪ふ源九三「親のいさめし」源九三　薫君、爲めに僧を請じて修法讀經を行ふ源九六　薫君、大い君の病を訪ふ源九六　出家せんとす源九六　薫君、大君の薨去を悲歎す源九四　宇治八宮の中の君、大君の薨去を悲歎す源九五　薫君、大君の法事を行ふ源九五　薫君、追想して悲歎す源九六　薫君、大い君を追慕す源一〇七　薫君、大い君を追慕して憂欝す源一〇六　女ら集りて、宇治大君死するあたり源語中の哀なる節なるを批評す無三

おほいきみ　鬚黒君大姫君　藏人の少將(二)大いきみに懸想す源八六　鬚黒の君の中の君と碁を圍む源八四　さくらゆゑの歌を詠ず源八七　弘徽殿女御(二)玉蔓に消息を贈りて大い君の入内を勧む源八七　雲井雁、玉蔓に消息をれくりて大い君を藏人少將(二)に嫁せんとを請ふ源八六　藏人少將(二)中將のおもとを訪ひて大い君に對する失戀を愁訴す源八六　藏人少將(二)大い君が入内に決したるを聞きて失望愁歎す源八六　冷泉院の女御となる源八七　あはれてふの歌を藏人少將(二)に贈る源八七　藏人の少將(二)生ける世の、歌を贈る源八三　玉蔓、大い君の入内に具して

参内す源八三　懷妊す源八三　今上、兵衛督(二)を召して大姫君の入内せざる故をとふ源八三　冷泉院の女二の宮を生む源八六　冷泉院の一の宮を生む源八六　弘徽殿女御(三)大姫君と寵を爭うて隙あり源八九　里亭に下る源八〇　春宮(四)の妃となる源八九

おほいきみ　源中納言大君　源中納言(二)の長女たり落一

おほいきみ　右大臣大君　右大臣の女、朱雀院の女御たり取六　朱雀院、位を春宮に讓り女一宮を次の春宮となす、時に大將の姫君男裝す三位して中將となる大い君計つて右大臣の四の君を大將の姫君に嫁せしめんとす右大臣之を諾す取九

おほいきみ　宮中將大君　右大臣の四の君宮の中將と通じて大い君を生む容宛然中將の如し、さてこそと四君の夫中納言(姫君)歎息す歌を以て四の君を詰る然れども己が世づかぬ罪と自ら責む取四九　中納言(姫君)頻りに身の上を歎ず四の君ばらの宮中將の大い君慕ひ聞ゆるを人目は親子と見ゆらんと悲し取七　四の君ばらの宮の中將の大い君春宮の女御となり藤壺にをり取八

おほいきみ　吉野山宮大君　吉野山宮、大將の姫君の琴をきゝて我れと同じ手なるに感ず、二女大い君中の君を召して姫君に見えしむ取四二　大將の姫君、吉野山宮の大い君と親しく語つて起臥を共にす、中の君亦親しむ取四二　大將の姫君、吉野山宮及びその大い君中の君に贈物をやりて吉野よりかへる取四五　姫君、吉野に行きて吉野宮にあり吉野の大君、中君には恥ぢてあはず取二三　姫君、父大將の愛へ給はんとて吉野宮に別れてみやこにかへる吉野の大い君中の君をも放ちがたくてともなふ取二九　朱雀の女一宮の使宣耀殿に至りて元の大將今の内侍督なる姫君に、宮心地例ならず内侍督疾く參るべしといふ又人々取沙汰して曰く大將は四の君が宮の中將と通ぜるにうんじて吉野に隱れたるを吉野の大い君に思ひつき且父大將の命默し難く再び世に出てたるなりとみかど聞きて大將の佛に歸せざりしを喜ぶもとの内侍督今の大將たる若君の心地如何ありけん取三　若君、もとの大將の北の方なる四の君を思はざるに非ずと雖宮の中將あればゆかしげなし心密には女一宮を思ふまた吉野の大い君をゆかしくして大將の姫君にはかり消息

を贈る返しあり取二三　若君夕暮のまぎれなどには必ず四の君のがり行く吉野の大い君は遠ければ十一月十二月などに四五日訪ふその後は近くに迎へんとす取二元　大將の若君、大い君を迎へんとして二條堀河に大厦をかまふ四の君渡るべきなれど宮の中將の事の心やましければいかゞと思ふなり取二四　若君の二條殿成る、乃ち吉野におはして吉野の大い君を迎ふ大い君父吉野宮に別を惜んで出でたつ中の君亦共に出づ取二四　大將(若君)の二條殿廣し中の寢殿は吉野の大い君を迎ふ洞院おもては四の君を迎ふべし堀川れもては姫君の罷づる所又は女一の宮の若君などおはすべし取二三　四の君この度は大將(若君)の子を孕めり右大臣も喜び若君の父大將も喜ぶ吉野の大い君子なし若君、女二宮の若君を大い君にあづけんとすれど父大將愛して放たず取二三　宮中將怪しさの餘り大將を二條殿に訪ふ大將(若君)は四の君がり行きけん在らず、中將歸らんとするに琴の聲聞ゆ立ちとまりて窺へば月を見て琴箏などひく女どもありこれ吉野の大い君、中の君なり中將之に目とまりて哀に思ひ心亂ると雖立ちかへる取二六　七月十餘日內侍督(姫君)の御方に大將(若君)、吉野の大い君中の君を具して渡り月の出づる程に使をやりて宮の中將を招く中將來れば曩日見し姫君たちあり大將吉野の中君を中將に紹介す中將喜ぶ世人取沙汰して中將中の君に通ふにより四の君の事により疎かりし大將中將の御中なほりにけるなりと取二八　右大臣の四の君、大將の若君との間に男君三人引き續ぎ生む一宮の若君もおい立ちて童殿上す大い君子なければこの若君を養ひて子とす取二九

おほいきみ　故式部卿宮大君　しきぶきやうのみやのにようご　朱雀式部卿宮女御宇津

おほいきみ　季明大君　せんねうでんのにようご　春宮宣耀殿女御宇津

おほいきみ　忠雅大君　れいきやうでんのにようご　春宮麗景殿女御宇津

おほいきみ　雅賴大君　じじうでんのにようご　朱雀仁壽殿女御宇津

おほいとののうへ　大殿上　橘太政太臣の女なり雅賴に嫁し四男五女を生む宇津二八

おほえのうら　大江浦　菅原孝標の女此の所にて歌を詠ず更二九

おほえやま　大江山　平家の軍矢田義清大江山を越えて入洛せんとするを聞く平家三〇　矢田義清、大江山を經て入洛す平家三三

おほかはら　大河原　一條兼良此所にて歌を詠ず藤二五

おほき　巨城　南院の今君に牛を貸す大和三六

おほきおとど　大政大臣　宰相中將(二)の父たり狹一六　權大納言の父たり狹二四　少將(二)の祖父たり狹三〇三

おほきにてよきもの　大にてよき物　法師枕一四

おほぎまちのゐん　正親町院　かくしないしんなう　覺子內親王增

おほくさかのわうじ　大草香皇子　安康天皇大草香を殺して其妃を奪ひ、妃の妹幡梭皇女を大泊瀨に妻はす水二四　安康天皇大草香皇子を殺す正三六

おほくわんじや　大冠者　行騰の用法を知らずして失策す著三八

おほさいゐん　大齋院　せんしないしんなう　選子內親王大鏡

おほすみ　大隅國　元正天皇大隅の不逞を討つ水三七　清麿此地に流さる水六六

おほたらう　大太郎　大矢のすけたけのぶの武威に恐る宇治四九

おほつ　大津　一條兼良此地にて歌を詠ず藤二

おほつかなきもの　覺つかなき物　十二年の山籠りの法師の女親枕四九

おほつのみや　近江大津宮　天智天皇います正四八　源親行大津宮跡にてさゞなみやの歌を詠ず東二

おほつのわうし　大津皇子　始めて詩賦を作る著六二　天武天皇第三の皇子なり著六三

おほつぼね　大局　歌を陽成天皇に獻る大和六

おうどうし　大童子　鮭を盜む宇治一五

おほとののこぎみ　大殿小君　民部卿實雅嵯峨の后宮の六十の賀の用意として師を附して自邸に小君等に舞を習はしむ宇津三二

おほともしんなう　大伴親王　嵯峨天皇、東宮高岳親王を廢して大伴を立つ水八

おほとものわうし　大友皇子　天武天皇と戰ふ宇治三九　はじめて太政大臣となる大鏡三　太政大臣となる水五〇　天智のいみな無し大鏡三四　天武天皇に攻めらる水五一　自殺位をつぐ水五二　天智天皇、皇子を滅す正四九

おほとものわうじのみこ　大友皇子御子
三井寺を建立す水三五
おほなむちのかみ　大汝神　天下を經營す正一五
おほにでらどの　天照大神の勅に從ふ正一六　大二條殿　のりみち　藤原敎通今
おほにでうのくわんぱく　大二條關白　のりみち　藤原敎通今鏡
おほにふだらどの　大入道殿　かねいへ　藤原兼家大鏡
おほはつせ　大泊瀬　安康天皇、大草香の妃の妹幡梭皇女を大泊瀬に妻はす水二四　眉輪王を誅す水三五
おほはなのくらうど　大鼻藏人　ゑいん　惠印宇治
おほはら　大原　延曆寺の僧相覺大原に住す今鏡一八　藤原高子、行啓に業平を具す大和五五　中務內侍此所に使す中四七　醍醐天皇、大原野に行幸す大鏡一七三　藤原彰子、大原野に行啓す大鏡一五五　藤原氏の氏神を祈る大鏡一七七　鴨長明草庵を大原山に結ぶ方丈
おほひこのみこと　大彦命　北陸道を巡察す正一七

おほみなと　大湊　紀貫之此所に泊す土三
おほみね　大峰　行尊此地にて修業す著三五
おほみや　大宮　雅頼の室となる嵯峨帝の御妹たり宇津三七　嵯峨院、女一宮(大宮)を雅頼に賜ひ岩の上にの御製あり宇津三七　八男九女を生む宇津三八　雅頼との間にあて宮生る宇津三八　雅頼、女一宮と共に北の大殿に住む宇津六八　春宮の歌につけてあて宮に歌をおくる宇津六三　あて宮、母大宮の歌を姉女御大い君に奉る宇津六三　朱雀院の春宮、加茂のみぐしすましに、あて宮を思ふ歌を大宮に贈る宇津六三　雅頼、兼雅の相撲の還饗より歸つてその女あて宮の德に由て仲忠の琴をきけるを室女一宮に語る宇津三五　再あて宮に由て仲忠に琴をひかしめむとを夫雅頼に勸む宇津三六　女宮たちと同車雅頼の春日詣に從ふ宇津三五　行雅、すゞしよりの引出物を、右大辨及大宮に頒ち又あて宮の下仕に頒つ宇津三九　子輔純らの祭の使としていてたつを見物す宇津三五　雅頼、その室大宮等と共に兼雅のかつらの邸の神樂に行く宇津三七　夫雅頼、女大い君等と共に兼雅の桂の邸の神樂に行く宇津三七　兵部卿のみこ、桂の邸の神樂の夜、大宮に、あて宮を妻さんとを乞ふ宇津三九　雅頼、東宮にあて宮

を奉るべきかを室大宮と語る宇津二〇〇　仁壽殿女御、懷姙によせ里亭に降つて母大宮と語る、あて宮を春宮に奉るべしとなす宇津二〇一　兵部卿宮、十一月十三日神樂の夜、雅頼の室大宮と語つて嵯峨院の病狀を告ぐあて宮のとを得言はず宇津二〇六　嵯峨の后宮の六十の賀を行はむとし兵部卿宮および雅頼と語る宇津二〇九　雅頼、正月賭弓のかへりあるじのとを大宮に語る宇津二四　雅頼、菊の宴の夜、春宮の御所より歸つて春宮にあて宮を奉るべきを答ふるの辭し難かりしとを大宮に語る宇津二一〇　朱雀仁壽殿女御懷姙に事よせて里亭左大將殿に歸る、大宮、あて宮を春宮に奉るべきかを問ふ、女御贊す宇津二一二　雅頼あるじの十一月の神樂の夜兵部卿のみこ、大宮と語つて、嵯峨院の病狀を告ぐ宇津二一三　嵯峨の后の宮の六十賀を行はむとして雅頼と語る宇津二一六　嵯峨の后の宮の六十の賀に嵯峨の后宮と語る宇津二一一　朱雀帝の春宮、嵯峨の后宮の六十賀のころ、大宮にあて宮を入內せしめんとを乞ふ宇津二一六　朱雀帝春宮、嵯峨后宮の六十賀の後、大宮に歌を贈つてあて宮のとをいふ宇津二一六　雅頼三月十日、難波に祓へしに船にて下る大宮等數人歌を詠む宇津二一七　あて宮の兄仲純あて宮を戀ひて病あつし大宮仲純に、輔純及び仲純を以てあて宮の後見たらしめんと思ふをかく心弱さが苦しき事といふ宇津二一五　雅頼に仲純の病めるを憂ひて語る宇津二一五　すずし、あて宮の春宮に參る日定まると聞き贈物に歌をそへてあて宮に贈る雅頼大宮贈物の美を稱す宇津二一六　雅頼、大宮、且つ仲純の身を憂ひ且つあて宮の春宮に參るの設けを急ぐ宇津二一七　あて宮に仲純の哀なるを一たび對面せずやと勸むあて宮、兵衛の君そわうの君のみをつれて兄仲純を北の大殿に訪ふ宇津二一七　十月五日あて宮春宮にまゐる雅頼大宮願を立て、仲純の平復を祈ると雖効なし宇津二一九　春宮の一宮の誕生の時、大宮ほその緒を切る宇津二一三　雅頼、仁壽殿より歸る、大宮、あて宮の模樣を問ふ、雅頼、あて宮が仲忠と琵琶等を合せて遜色なかりしをいふ、大宮仲忠をいとほしがり語る雅頼仲忠が懷にありし文のあて宮の文なるべきを云ふ宇津二一四　大宮雅頼と共に女さまこそ君、そて君、ちご宮等の聟取を議す仲忠、すゞし、兵部卿宮兼雅等議にのぼる仲忠に最も好意あり宇津二一五　雅頼大宮、相撲の節會の用意す國々より參れるさぬを見て仁壽殿

女御、あて宮等の裝束を清らにせむとす宇津三七 朱雀の后宮、あて宮が春宮の一宮を生みたる三日の夜産養の料を贈り大宮に消息を贈る大宮返しす宇津三七 朱雀の春宮、あて宮が春宮の一の宮を生みたる七日の夜典侍を使として大宮に御文あり大宮返しす宇津三七 雅頼、仁壽殿より罷り出て、大宮と、あて宮に思ひ聞ゑたる人々に十の君以下を配せしめんとを議す大宮、實忠は我が生める子に配せんとを乞ふ宇津三九 雅頼に向つてあて宮に聞えたる實忠、兵部卿宮、兼雅、平中納言を女君達のむこにすべきをいふ、雅頼公達に使として人々に消息を贈つて聟たるをすゝむ宇津四三 雅頼、大宮共に實忠の書を憐れむ季明の實忠を顧みよとの言もあるものをと思ふ宇津四六 雅頼、大宮、八月廿八日公達に聟どりす宇津四七 雅頼、大宮共に北のれとゞに住む宇津四一〇 朱雀の女一宮の産所に赴く宇津四三 仲純の爲めに雅頼の布施に絹帛を加ふ宇津四三 仁壽殿女御の問合により、大宮の五十日の儀式のことを女御に敎ふ宇津四四 仁壽殿女御、大宮に犬宮を抱きて對面せしむ宇津四五 彈正の宮、仁壽殿の女御と語る宇津四六 雅頼と共に北殿の東おもてに出でゝ公達姫君達の朝賀を受く宇津四一 大將の上大宮に對面す宇津四一 あて宮、里亭に下つて雅頼大宮等と物語す、時は一宮を生むの翌々年たり宇津五九 三の宮、大宮等と共に朱雀の女一の宮の上を語る宇津五三 あて宮、實忠等の志深きをいひ此の人たちに頼らば心安かりけんと大宮等に語る宇津五七 雅頼、唯今世は仲忠、兼雅にあて宮、四宮歸せんと大宮などにいふ宇津五八 を生まんとす大宮大願を立てゝ安産を祈る宇津六〇 兼雅大宮を訪ひて雅頼の左大臣となりたるを賀す宇津六〇 仲忠限なく裝束きて大宮を拜す宇津六一 大宮雅頼、仲忠があて宮の産養に贈れるものを見る宇津六九 四宮は今宮ときこゆ、大宮抱いて我が子にせんといふ宇津六八 あて宮を訪ふ宇津六四 雅頼と共に塗籠に入る宇津七一

おほみや(一) 大宮 ささのさいぐう 前齋宮狹

おほみや(二) 大宮 くわうたいこうぐう 皇大后宮狹

おほみやのうたいじん 大宮右大臣 としいへ 藤原俊家今鏡

おほみやのだいなごむ 大宮大納言 きん

すけ 藤原公相鳴

おほみや 大宮院 きつし 藤原嬉子正

おほみやゐん 大宮院 きつし 藤原姞子增

おほみやゐんのごんちうなごんのきみ 大宮院權中納言君 はるゝとの歌を阿佛尼に贈る十六夜一四 藤原爲敎の女たり十六夜一四 消息を阿佛尼に贈る十六夜一八 歌を阿佛尼に贈る十六夜一八 消息を阿佛尼に贈る十六夜三

おほものぬしのかみ 大物主神 ちのかみ 大汝神正

おほろづくよのないしのかみ 朧月夜尚侍 源氏の君と密通す源一五六 源氏君、内侍督に歌を詠みかく源一五六 右大臣(一)の六の君たり源一五九 源氏君内侍督に歌を詠みかく源一五九 歌を源氏君に詠みかく源一五九 朱雀院の妃たるに決定す源一六〇 歌を源氏の君に詠みかく源一六〇 源氏君内侍督に歌を詠みかく源一六〇 源氏の君を慕ふ源一六一 内侍のかみとなり朱雀院の寵を蒙る弘徽殿を以て曹子とす源二〇三 源氏君内侍督に歌を詠みかく源二〇四 源氏君と通ず源二〇四 歌を源氏の君に詠みかく源二〇四 歌を源氏の君に贈る源二〇四 源氏君内侍督に歌を贈る源二三五 癒病によりて里亭にくだる源二三三 源氏の君と屢密會す源二三三 右大臣(二)源氏君が之と密會せるとを發見して弘徽殿女御(一)に告ぐ源二三四 弘徽殿女御(二)源氏君が内侍督と密通せるとを聞きて源氏君を憎む源二三四 歌を源氏の君に贈る源二三六 源氏君内侍督に歌を贈る源二三六 源氏君内侍督と通ずる罪により須磨に流され出でたつにのぞんで内侍督と告別す源二三六 源氏君須磨より使を出して紫上、藤壺女御(一)及び内侍督等に消息をおくる源二四一 源氏君内侍督に歌を贈る源二四三 歌を源氏の君に贈る源二四三 内裡に歸參す源二四六 朱雀院内侍督に物語す源二五三 源氏君内侍督を想ふ源二五三 源氏君、紫上と内侍のかみ及び明石上等のことを物語りす源二九九 朱雀院、内侍督を寵す源六二五 源氏君二條宮に内侍督を訪ひて密通す源六二六 源氏君内侍督に歌を詠みかく源六二七 歌を源氏の君に詠みかく源六二七 歌を源氏の君に詠みかく源六二八 源氏君内侍督に歌を詠みかく源六二八 源氏の君に消息を贈る源七〇六 歌を源氏の君に贈る源七〇六 出家す源七〇六 源氏君内侍督に歌を贈る源七〇六 女等打ち集りて其人物を批評す無二〇

おほゐ 大井 後嵯峨天皇此の山庄に仙宮

を造營す著一六八

おほぬがは 大井川 宇多天皇大井川に行幸す大和元 圓融天皇此川に逍遙す著八八 藤原道長此川に遊覽す著八八 白河天皇此川に逍遙す著八八 平滋子此の川に紅葉を賞す著二九 宇多天皇此の川に幸す著三九 菅原孝標の女此の川を渡る更六 渡船場たり十六夜二〇 阿佛尼此の川にて歌を詠す十六夜二〇 源親行此所にて歌を詠ず東二 藤原公任、大井河にて川遊遙す大鏡四八 醍醐天皇、大井川に行幸す大鏡一三 紀貫之、大井河行幸の和歌の序を作る大鏡一四 白河天皇、大井河に行幸す今鏡三 道長公任等大井川に詩歌管絃の遊びす大鏡四八

おんし 藤原隱子 五十の賀を行ふ著四三 保明親王を生む大鏡一三 朱雀、村上を生む大鏡一三 女御となる大鏡一三 大后と稱せらる大鏡一三 藤原姞子、穩子に比せらる增二六 くれ竹のゝ歌を詠ず大鏡一五

おもしろのこま ひやうぶのせふ 兵部少輔落

かいくわてんなう 開化天皇 太子となる水一〇 卽位す水一〇 孝元第二の御子たり水一〇 母は鬱色謎命なり水一〇 崇神天皇は開化の第二子たり水一〇 六十年位に在り水一〇 率川宮に居り正二六 卽位す正二六

かいしないしんなう 愷子內親王 爲定、內親王の准后の宣旨の使者となる增八一 齋宮となる增八一 准后となる增八一 齋宮より上りて衣笠殿に住す增二〇 龜山院、內親王に對面す、藤原實兼、藤原隆顯等、其席に侍す增二三 龜山院、龍す增二三 君をはじめて見る時はの今樣を誦す增二三 藤原實兼、內親王に通ず增二四 師忠、內親王の家に忍び行く增二四 懷姙す增二五 薨ず增二六

かいせう 戒仙歌 ことならばはれすもあらなむの歌を詠ず大和九 今はわれの歌を親の許に贈る大和九

かいせうのまらうど 戒せうの客人 朝霧のゝ歌を詠す大和九

かいせん 戒仙 雲ならでの歌を詠ず大和一四

かいゑ 海惠 山王より賴めつゝの歌を給はりしを夢む今物一七 心をばの歌を詠す今物一七

かうあんてんなう 孝安天皇 孝昭第二の御子たり水九 母は世襲足姬たり水九 孝靈はその第一皇子たり水九 太子となる水九 卽位す水九

百二年位にあり水九

がうらん 豪雲 延曆寺中第一の僉議者たり平家四

かうげんてんなう 孝謙天皇 卽位す水五九 母は光明后宮なり水五九 八幡宮を筑紫より京都に移す水五九 東大寺大佛供養に行幸す水五九 聖武の御女なり水五九 讓位して、太上天皇と稱す水六〇 東宮を選定す水六一 東宮道祖王を廢す水六一 仲麿を寵す水六二 道鏡を寵す水六二 仲麿を討殺す水六三 重祚して稱德天皇と稱す水六四 道鏡を大臣禪師とす水六四 淳仁天皇を廢して淡路に流す水六四 弓削 法皇 孝謙の朝に出づ大鏡一四

かうげんてんなう 孝元天皇 大和輕の境原宮に居り正二六 卽位す正二六 母は細媛なり水一〇 五十七年位に在り水一〇 開化天皇、孝元第二の皇子なり水一〇 太子となる水一〇 卽位す水一〇 孝靈の御子なり水一〇 卽位三十九年大雪降る水一〇

かうし 孔子 童と問答す宇治三三 盜跖と問答す宇治三三 柳下惠と問答す宇治三三

かうしん 二月中の十日あて庚申す宇津三三

かうせうてんなう 孝昭天皇 孝安天皇は孝昭第二の皇子なり水九 太子となる水九 卽位す水九 八十三年位にあり水九 卽位す正二五 秋津島宮に居り正二五

かうそ 漢高祖 太子を廢して戚夫人の子隱王を立てむとす唐一四 王陵、項羽の招に應ぜずして高祖の臣となる平治四四 項羽と位を爭ふ平家四四

かうたうのないし 勾當內侍 源貞行の室にして經朝の女たり增三〇 今ははやいかになりぬるの歌を詠ず增三一 出家して高島に居り增三三

かうとくてんなう 孝德天皇 八省百官を置く大鏡三 母は吉備姬なり水四四 卽位す水四四 百官を定む大鏡一五 卽位す正四七 皇極の弟なり水四四 長柄豐崎宮に居り正四七 左右大臣を置く正四七

がうない 淀の鄕內 ただとし 淀忠利平家

かうにね 高二位 高階成忠の女、道隆の室となる大鏡二七

かうのすけ 督內侍 藤原忠季と契る著一四 藤原親平の母なり著一四

かうべん 高辨 文覺の弟子となる著四四 岩

の上の丶歌を詠ず著四五　暗夜火をともさずして物の綾目を辨す著四五　入天竺の志あり、春日明神の託宣により中止す著四五　春日明神の託宣を蒙る著四六　往生の時異相あり著四六　男の馬洗ふを見て感涙を催す徒六一

かうやうけんのきさき　河陽縣后　三の皇子、河陽縣后と諸共に住み給ふ濱二　三の皇子の母君たり濱三　二十歳ばかりにして容貌秀麗なり濱五　濱松中納言、河陽縣后及び三の皇子を訪ふ濱六　濱松中納言、故郷の丶歌を后に詠みかく濱六　かれてさはの歌を濱松中納言に詠みかく濱六　秦のしん王筑紫に來朝せる時尼君を愛して河陽縣后を生む濱六　秦のしん王、后が帝(一)の后となりて後宮の寵を專らにするを以て人々の妬みを受けしを愛ひ大臣を辭して隱捿す濱七　帝(一)の后となり十六歳にして三の皇子を生む濱七　帝(一)の寵を專らにするを以て人々の妬みを受く濱七　帝(一)、后が人々の妬みを受けしを愛ひ河陽縣に宮をいとなみて移す濱八　五歳の時尼君に分れて唐にゆく濱八　尼君を戀ふ濱八　三の皇子、母かうやうけんのきさきに己れは前世日本人にて濱松中納言は吾が子たりしを語る濱九　尼君の緣により日本の人を慕ふ濱九　擧動言語等尼君に似て日本の人と異ならず濱九　濱松中納言を慕ふ濱二　濱松中納言、菩提寺に詣で丶河陽縣后に見ゆる機會あらんことを祈る濱一六　物忌の爲三の皇子を內裡に移し自らさくさんいうといふ處に移る濱一七　濱松中納言、月夜散策して后の隱れがに到りて相通ず濱一八　濱松中納言と通ず濱一九　濱松中納言我が世にもの歌を后に詠みかく濱一九　うしと思ふの歌を濱松中納言に詠みかく濱二〇　濱松中納言に通じて懷姙せるを愛ひそくさんに籠居す濱二一　唐帝(一)、后を戀ふ濱二五　濱松中納言、二の皇子の消息を持して后をそくさんに訪ふ濱二六　濱松中納言をちこちの丶歌を后に詠みかく濱二七　世の愛さにの歌を濱松中納言に詠みかく濱二七　をに立つやの歌を濱松中納言に詠みかく濱二八　松濱中納言の若君を生む濱二八　濱松中納言朝霧の丶歌を后に詠みかく濱二八　三の皇子、后を慕ふ濱二九　濱松中納言の若君を乳母を求めて私かに養育す濱二九　帝(一)后にそく山より歸るべき宣旨を下す濱三〇　そく山より河陽縣に歸り再び帝(一)の寵を專にし復人々の妬を受く濱三〇　帝(一)の濱松中納言の爲めに離別の宴を張り月の宴を催せる時召さる濱三一　帝(一)、濱松中納言の日本に歸るを惜み八月十五夜月の宴を催して離別をなすの宴河陽縣の后をも召す濱三一　帝(一)の月の宴を催せる時帝の命により琴を彈ず濱三二　女王の君に囑して濱松中納言の若君を養育せしむ濱三三　女王の君より濱松中納言が今一度對面せんと欲するよしを聞き情を制して之を拒む濱三七　濱松中納言、后に今一度對面せんとし其媒介を女王の君に托す、女王の君、其意を后に告ぐ濱三七　濱松中納言が濱松中納言の若君を具して歸國せんとするを聞き別れを惜む濱三九　濱松中納言、后に面して歸國の別をいふ濱四〇　濱松中納言に沉の文箱を托し日本なる尼君に傳へんことを依賴す濱四一　夢とだにの歌を濱松中納言に詠みかく濱四二　濱松中納言二たびとの歌を后に詠みかく濱四三　濱松中納言、大將の姫君に唐大和のとども皆打ち明けて語る唯獨り河陽縣后との關係のみは之を秘す濱四三　濱松中納言、后が尼君に贈れる消息を披見す濱四四　尼君に消息を贈る濱四四　この世にもの歌を尼君に贈る濱四六　しらずともの歌を消息に添へて吉野尼君に贈る濱四六　濱松中納言高陽縣后よりの消息を聖僧に托す聖僧之を尼君に贈る、尼君その消息を披見す濱四八　濱松中納言、后を想ふ濱四七　吉野姫君、濱松中納言より后のことを聞き益これを慕ふ濱四四　濱松中納言后を想ふ濱四五　濱松中納言、后を忍びて繼しさの增される夜后の病めるを夢み尋で空中に聲ありて后の死して天上に生れたりといふを聞きて悲歎す濱四五　濱松中納言、后の爲に十日の精進し且萬部讀經を行ふ濱四七

かうやのやま　高野山　後醍醐天皇行幸す芳九　鳥羽法皇此所に幸す著一八六　文覺此所にて猿の鳥を捕へて鵜飼のまねするを見る著二六

かうやうゐん　高陽院　順德天皇此所にて蹴鞠す著三〇　狛助信此所に競馬あるの時落馬して死す著二六　下野助友亦競馬し落馬して死す著二六　尾張種武亦競馬に落馬して死す著二六

かうれいてんなう　孝靈天皇　太子となる水九　卽位す水九　母は姉市姫なり水九　孝安第一の御子なり水九　孝元天皇の父たり水一〇　孝靈の時始皇帝不死の藥を求む又書籍を日本に贈る水二五　黑田盧戶宮に居る水二五

かうゑんゐん　香園院　もろただ　藤原師忠增

かが　待賢門院加賀　兼ねてよりのうたを

詠す今物二　源有仁に捨てられて秀歌を贈る今物二

かがのくわんじや　加賀冠者　よりかね　源頼兼保

かがみのしま　鏡島　一條兼良此所に宿る藤六

かがみのしゆく　鏡宿　源親行此の所にて立ちよらての歌を詠ず東三　源義經、深栖頼重及び金商人吉次に具して奥州に下らんとしまづ鏡宿に着す平治九

かがみのせ　鏡瀬　菅原孝標の女此の地に宿る更三

かがみやま　鏡山　増基此の山に雲の昇るを見て歌を詠ず庵三　阿佛尼此所にて歌を詠ず轉一五

かきまさりするもの　書き勝りする物　松の木枕九五

かくいう　覺猷　國俊覺猷を訪ふ覺猷國俊を待たせて面會せず戯れに其車に乘じて外出す宇治五三　國俊に苦めらる宇治四四　繪畫の上手にして法勝寺金堂の扇にゑがく著三九

かくうち　額打　延暦寺、興福寺の僧徒等爭鬪す平家三五

かくうん　覺雲　龜山院の御子大納言典侍の腹なり増二九　龜山法皇の喪に服す増一四四

かくが　覺雅　源顯房の子歌人たり今鏡一八

かくがう　覺豪　源顯仲の子なり藤原忠通大に仰信す今鏡一七

かぐぎやうほふしんなう　覺行法親王　出家の後親王宣下ある時、藤原師通先例なきを以て白川院をいさむ用ゐられず今鏡一六　白川院の皇子たり、出家の後親王の宣下を蒙る法親王のはじめなり今鏡一六　覺法法親王の兄たり今鏡一六

かくくわいほふしんなう　覺快法親王　堀川院の皇子母は田中光清の女たり今鏡一六　天台座主となる行玄の弟たり平家四九　平德子懷姙の時變成男子の法を修す平家一〇五　平德子御產平安の爲七佛藥師の法を修す平家二一　安德天皇降誕の時、修法せる功により弟子覺誓、法印となる平家二五　天台座主を辭す平家一五

かくけん　覺憲　藤原通憲の子たり父の事に座して伊豫國に流さる平家三六

かくさん　覺讃　山川のゝ歌を若王子に獻る著一八　先達の山伏たり著一八

かくじつ　覺日　蓮忍の弟子たり平治九

源義經、鞍馬寺に入りて其弟子となり遮那王と稱す平治九

かくしないしんなう　覺子內親王　正親町院と稱す増五〇　富小路殿に舞樂を觀る増六六

かくしん　覺信　忠通の子たり今鏡一〇五　奈良の僧正たり今鏡一〇五

かくじやう　覺靜　說法をよくす今鏡二七

かくしやうほふしんなう　覺性法親王　二條天皇、覺性の弟子となる今鏡九七　夏の夜はの歌を詠す今鏡一五　金泥の一切經を書寫し高野山にて供養の時澄憲を以て導師とす今鏡一五　母は藤原璋子たり幼より出家して仁和寺に入る詩歌書道に達す今鏡一五　元性うきながらの歌を覺性に贈る今鏡一〇一　平經正都落の時、法親王を仁和寺に訪ひて別れを叙し且つ青山といふ琵琶を返納す平家三九　鳥羽院の五の宮にして仁和寺の座主たり保五五

かくじゆ　覺樹　源顯房の子東大寺の僧たり今鏡一八

かくじよほふしんなう　覺助法親王　後嵯峨上皇の五十賀の試樂に臨む増九三

かくせい　覺誓　安德天皇降誕の時師覺性法親王が修法せる功によりて法印となる平家二五

かくだうしやうにん　覺道上人　後嵯峨法皇に法を說く増一〇三

かくちう　覺忠　よはひをばの歌を詠ず今鏡五六　三井寺の大僧正たり今鏡一〇五　忠通の子たり今鏡一〇五

かぐつちのかみ　軻俱突智神　伊裝諾尊之を生む正二

かくてう　覺超　「萬のことをゆめと見るかな」今鏡一九

かくへん　覺遍　源師忠の子母は政長の女東寺の長者たり今鏡一八三

かくほふほふしんなう　覺法々親王　白川院の皇子覺行法親王の御弟なり御母は源顯房の女たり眞言を學習し又書をよくす今鏡一六　定めなきの歌を詠ず今鏡一九

かくみやう　覺明　藏人通廣といひて勸學院に候す出家の後西乘坊信救といふ平家二〇　木曾義仲右筆大夫坊覺明に命じ八幡社に納むる願書を書かしむ平家二〇　平清盛入道は平氏の糟糠と書きて罪を清盛に得北國に遁れて義仲の右筆となり大夫坊覺明と名のる平家二〇　木曾義仲に延暦寺の僧徒は皆平氏の一味に非ざる

べしと告ぐ平家三〇三　木曾義仲、牒狀を書かしめて延暦寺の僧徒に致す平家三〇三

かぐやひめ　赫哉姫　竹取に發見せらる竹一　多くの人に思はる竹二　結婚の條件を提出す竹四　れく露にの歌を詠ず竹五　石作皇子より鉢を贈らる竹五　車持皇子より玉枝を贈らる竹六　まことかとの歌を詠ず竹九　安倍のみうしより火鼠の裘を贈らる竹二　名殘なくの歌を詠ず竹三　帝の叡聞に達す竹八　年を經ての歌を詠ず竹八　帝の召に應ぜず竹一九　帝より召さる竹一九　葎はふの歌を詠ず竹三　竹取に素性を明す竹三　月を見て悲む竹三　月の都より迎來る竹三五　昇天す竹三七　帝に不死の藥を奉る竹三七　今はとての歌を詠ず竹三七　大將、殿廣々とつくり若君、および姫君をその母と共に住はしむ若君の女裝せる東の對に行くにわか君はたれこめて忍びやかに箏をひけり、髮長く形美しくしてかぐやひめ亦及ばずと見ゆ取三　朱雀帝、京極上故事をひいて答へんと宣ふ京極上かぐや姫のにこの十五日に迎ふ子安貝の事どもいふ宇津一公

かぐやひめ　赫哉姫　千日講を行ふ大鏡四四　實資の女たり大鏡四四　藤原實資、かぐや姫を鍾愛す大鏡四四

かぐら　神樂　雅賴忠純に十一月の神樂の設けを圖る宇津三四　雅賴の命により廻らし文を作りて神樂に舞樂の逸物左近松方等を呼ぶ宇津三四　十一月十三日神樂の夜何の朝臣何の才か侍ると問答す宇津三八

かくれみの　隱簑　物語の名なり女等打ち集りて批評す無三六

がくわう　峨皇　堯帝の崩を歎く唐一〇

かくわん　家寛　水精の錫杖を持して九條錫杖を誦す野三六　聲明を後白川法皇に傳ふ野三七

かくわん　加冠　藤原兼平、後宇多の加冠を行ふ、基顯理髮の役、藤原信嗣總角の役を勤め、藤原實兼琵琶を彈じ、藤原信嗣和琴を彈じ兼忠笙を吹く拾一六

かくゑむ　覺圓　藤原賴通の子たり宇治八三　泰憲より房を得今鏡七九

がけい　雅慶僧正　賢人と稱せらる大鏡一八一

かげいへ　梶原景家　源範賴に從ひ平宗盛追討のため攝津昆陽野に着陣す平家三九一　梶原景時に從ひて生田森に奮戰す平家四四　梶原景時の三子たり平家五〇一

かげかた　大神景賢　笛の上手たるを以て五位將監に叙任す著三四

かげかど　加藤景廉　源爲朝の骨を擧ぐ保一〇〇

かげきよ　平景清　平知盛に從ひ源賴政を平等院に襲ふ平家一八五　平知盛に從ひ播磨國室山に於て源行家と戰うてこれを破る平家三五六　熊谷直實、同直家と共に一の谷西の木戸口にいて平盛嗣同景清と戰ふ平家四〇一　平資盛に從ひ備前兒島に陣す平家四七四　八島にて舟より上陸し美尾の屋の十郎と戰ふ平家四四四　田代信綱、後藤實基、同基清、金子家定、同近範等、源義經に從ひ八島の濱にて景清と戰ふ平家四五五　檀の浦の戰に敗れて脫走す平家五二二

かげしげ　大神景茂　豐原龍秋が横笛の五の穴を難せし語を評す徒八六

かげしげ　片桐景重　源義朝に從うて白川殿を攻む保二六　手取の興次と鬪ふ保二六　源義朝に隨ひ內裡の勢揃ひに參す平治三　源義平に從ひ平重盛と清涼殿の前庭に戰ふ平治三七　平維盛か那智の沖に入水するの時殉死す平家四六六

かげずみ　源かげずみ　ゑちぜんのかみ越前守落

かげずみ　志內景澄　源義平、其下人となり六波羅に出入し密かに平清盛を害せんとす平治一五

かげすゑ　梶原景季　源賴朝景季に、木曾義仲追討の時、名馬磨墨を與ふ平家三九九　佐々木高綱と名馬生食の事によりて差し違へんとす平家三七〇　木曾義仲追討の爲源義經に從ひ宇治橋に押し寄す平家三七一　佐々木高綱と宇治川に先陣を爭ふ平家三七二　源義經に從ひて後白川院に拜謁し且御所を守護す平家三九　源範賴に從ひ平宗盛追討の爲攝津昆陽野に着陣す平家三九一　梶原景時に從ひて生田森に奮戰す平家四四　平重衡が生田森の戰に敗れて脫走せるを追擊し射て其馬を傷く平家四二　梶原景時の嫡子たり平家五〇一

かげたか　蔭高　師純、輔純、行雅、うまの君らと共に祭の使となる宇津三四

かげたか　平景高　木曾義仲征討軍の侍大將なり平家六四

かげたか　梶原景高　源範賴に從ひ平宗盛追討のため攝津昆陽野に着陣す平家三九一　ものゝふのゝ歌を生田の森の戰の時梶原景時に詠みかく平家四四　梶原景時に從ひて生田森に奮戰す平家四四　梶原景時の二子たり平家五〇一

かげちか 大庭景親 大庭景義の弟なり、兄と共に源義朝に從うて白河殿を攻む保元 大庭景義と共に源爲朝と戰ふ保元 鎌倉權五郎景正の末葉たり保四 源頼朝、景親と石橋山に戰うて敗れ土肥杉山に走る平家三四 平清盛に源頼朝擧兵のことを告ぐ平家三四

かげつな 伊藤景綱 伊藤忠清、伊藤忠直と共に平清盛に隨つて白川殿を攻む保元 伊藤忠清、伊藤忠直と共に二條河原の東境より進んで白川殿を攻め源爲朝と戰ふ保元 鈴鹿山の强盜小野七郎を捕へし功により副將軍の宣旨を蒙る保元 平清盛の命により、二條院を六波羅の邸に迎ふ平治元 源義朝藤原信頼を內裏に平重盛に從うて攻む平治元 平重盛に從ひ源義平と清涼殿前に奮戰す平治元 伊勢守に任す平治元

かげつね 景經 檀の浦の戰の時平宗盛父子が和田義盛に生擒せられしを見奮戰して堀親經の爲めに討たる平家五九

かげとき 梶原景時 渡邊番を預かる著一七 源頼朝に讒言して多くの人を損す小七 たゞそまやまの、下の句を詠ず增八 源義經、其讒により源頼朝に忌まる平治一四 長谷部信連源氏一統の後景時につきて源頼朝より恩賞を受く平家一六 源範頼に從ひ平宗盛追討の爲攝津昆陽野に着陣す平家三九 梶原景高ものゝふのゝ歌を詠みかく平家四四 梶原景季、同景高、同景家を率ひ生田森に於て奮戰す平家四四 平景政の五代の孫たり平家四五 平重衡、景時に具せられて鎌倉に下る平家四四 源義經に逆櫓の策を進め用ゐられずして相爭ふ平家四八 八島に着す平家四九 源義經景時と先陣を爭うて將に鬪はんとす平家五〇 三浦義澄土肥實平、源義經か景時と檀の浦にて爭鬪に及ばんとせるとき之を諫止す平家五一 梶原景高、景時の二子たり平家五一 源頼朝に義經を讒す平家五三

かげひさ 股野景久 石橋山合戰の時逃げ上りて平家の味方となる平家二五

かげひろ 佐伯景弘 從五位上に叙し院の昇殿を許さる平家一五

かげまさ 鎌倉權五郎景正 大庭景義、大庭景親は其末葉たり保四

かげまさ 平景政 梶原景時は景政の五代の孫たり平家四五

かげむね 長田最致 長田忠致の子たり平治六六 長田忠致と源義朝を討たんことを謀る平治六六 兵衛の尉に任じ恩賞の少きを稱して不平たり平治七四 長田忠致、子景致と共に源頼朝に應ず平治一〇三 源頼朝、長田忠致及び長田景致を土禦にす平治一〇三

かげやす 景安 平清盛に隨うて白川殿を攻む保元 平重盛に從うて源義朝藤原信頼を攻む平治三五 平重盛、源義平に破られ新藤家泰、景安と共に二條を東へ走る平治三元 平重盛の危急を助けんが爲に鎌田政清と戰ふ平治四〇 源義平景安を討ち取る平治四〇 平重盛、源義平に追擊せられ、新藤家泰、景安が留まりて奮戰する隙に乘じて免る平治四〇

かげよし 大庭景親 大庭景親と共に源爲朝と戰ふ保元 源爲朝、鏑矢を射て之を傷く保四 鎌倉權五郎景正の末葉たり保四 源義朝に從つて白川殿を攻む保元 源義經、景清と八島の濱に戰ひあやまりて弓を海中に流し危險を冒して之を拾ふ平家四九

かける 源翔 弓術に達す著一四 藥師寺を氏寺とす著三七

かげろふのしきぶきやうのみや 蜻蛉式部卿宮 薨ず源二六三 宮の君は、蜻蛉式部卿宮の姫君なり源二八五

かこかは かこ川 後醍醐天皇、かこ川を過ぐ增二〇四

かごさかわう 鹿弭 坂王 神功皇后、鹿弭坂王の叛を平ぐ水一七

かさぎ 笠置 藤原師賢、笠置に參す增一九三 後醍醐天皇、藤原藤房同具行同師賢を具して、笠置を遁れ出づ增一九五 一條兼良笠置川を渡りて歌を詠ず藤一六 後醍醐天皇笠置寺に行幸す正一九

かさぬひ 笠縫邑 崇神天皇此の地に天照大神を祭る著四 阿佛尼此の里にてたびゝとはの歌を詠ず十六夜五 豐鍬入姫命笠縫邑に神器を祭る正三七

かざまつり 風祭 生贄を供ふ宇治八一

かざみ 汗衫 春は躑躅枕一九三

かし 賈氏 美人を娶りて三年言を交へず唐三 聞かましやの歌を詠ず唐三

かしないしんなう 佳子內親王 富小路の齋院と稱す今鏡一三八

かしはぎのきみ 柏木君 思ふともの歌を玉藻に贈る源四六 源氏の君、柏木の君夕霧等と篝火を燒きて樂を翫ぶ源四九三 頭中將(この使

として玉蔓を訪ふ源五六　玉蔓柏木君に歌を詠みかく源五九　歌を玉蔓に詠みかく源五九　夕霧の盃に藤花の色濃く房長きをとりて加ふ源七五
二　頭中將(二)、柏木君に朱雀院の女三宮を配せんことを望む源五五　朱雀院の女三の宮を戀ふ源六四　源氏君、螢兵部卿宮、夕霧等と六條院にて蹴鞠す源六四五　朱雀院の女三の宮を暫見す源六六　歌を夕霧に詠みかく源六九　夕霧柏木の君に歌を詠みかく源六九　夕霧と同車、六條院を退出し、途に朱雀院の女三の宮のことを物語る源六九　小侍從に消息を贈りて朱雀院の女三宮を挑む源六〇　小侍從、柏木君の爲に朱雀院の女三宮を說く源六〇　歌を小侍從に贈る源六〇　小侍從柏木に歌を贈る源六二　今上の御方に參りて朱雀院の女三宮にて見たる唐猫のことを物語る源六三　今上より朱雀院の女三の宮の方に居りし唐猫を請ひ受けて寵愛す源六四　中納言に任ず源六三　落葉の宮を娶る源六四　朱雀院の女三の宮の媒介を小侍從に依賴す源六四　朱雀院の女三の宮に密通す源六七　歌を朱雀院の女三の宮柏木の君に歌を詠みかく源六九　朱雀院の女三の宮に詠みかく源六九　紫上薨去の風說を聞き吊ひの爲二條院に赴く源六四　朱雀院の女三の宮に消息を贈る源六八　源氏君、柏木君が朱雀院の女三の宮に贈りたる艶書を發見す源七〇　源氏君、柏木君が朱雀院の女三の宮に贈れる艶書を見て懊惱す源七一　朱雀院の女三の宮に贈りたる艶書を源氏の君が發見したるとを小侍從よりきゝて大に畏る源七四　源氏君、六條院の試樂に柏木君を召す源七二　病により落葉宮の邸より頭中將(二)の亭に移る源七六　今はとての歌を朱雀院の女三の宮に贈る源七九　朱雀院の女三の宮に消息を贈る源七七　頭中將(二)柏木君の病を加持せん爲葛城山より行法僧を請ず源七〇　小侍從に會し密かに朱雀院の女三の宮の返書を見る源七三　朱雀院の女三の宮立ち添ひて息を贈る源七三　朱雀院の女三の宮、消の歌を贈る源七三　行くへなきの歌を朱雀院の女三の宮に贈る源七三　朱雀院の女三の宮薫君を生む父は源氏君、實は柏木君たり源七三　朱雀院の女三の宮の出家せるを聞きて悲歎す源七六　俄に權大納言に任ず源七九　夕霧、柏木君の病を訪ひ且つ權大納言に昇進せるとを賀す源七九　朱雀院の女三の宮に通ぜるとを源氏の君に謝せんとを夕霧に托す源七三　薨す源七三　朱雀院の女三の宮、薨去を聞きて密に哀悼す源七三　夕霧

柏木の君を追懷す源七六　落葉宮、追懷して哀傷す源七七　夕霧、落葉宮を訪ひて柏木君の薨去を吊ふ源七七　頭中將(二)柏木君を追懷す源七七　夕霧、頭中將(二)を訪ひて柏木君の薨去を吊ふ源七〇　源氏君追悼し、追善供養の爲黃金百兩を施入し且誦經す源七四　一條御息所、夕霧に、柏木君遺愛の笛を贈る源七五　夕霧、柏木君が笛竹のゝ歌を詠みかけしとを夢みる源七二　夕霧、追善を營む源七三　夕霧、源氏君に柏木君が臨終の際にれける遺托を語る源七五　夕霧源氏君に柏木君を夢みしとを語る著七五　源氏君柏木を追想す源七二　薫君、父は柏木君たるをほの聞きて思に沈む源八四　辨の君、薫君に柏木君の事を語る源八七　辨の君、薫君が柏木君の子たるを語る源八四　辨の君、薫君に柏木君の遺書を呈す源九五　薫君、柏木君の遺書を披見す源九六　女等打ち集りて柏木の人物を評す無二五　柏木薨去の處、源氏物語中に於ける哀れなる節なるとを女等打ち集ひて批評す無一九

かしはぎのゑもんのかみ　一柏木衛門督　かしはぎのかみ　柏木君源

かしはばら　柏原　源親行此所を發す東四一條兼良柏原にて歌を詠す藤三　源具行關東下向の時柏原をすぐ增三二　源具行、柏原にて斬らる增三三

かしはばら　大和櫃原　神武天皇櫃原に都を奠む正四四

かしはばらのみささぎ　柏原御陵　名陵の一たり枕二

かしひのみや　香推宮　源爲朝、香推宮の神人等の訴へにより京に召さる應ぜず保三

かしま　常陸國鹿島　藤原鎌足、鹿島に生る因て鎌足此地に氏神の社を建つ大鏡一七

かずひとしんなう　是仁親王　陽德門院媓子の御所に行啓す增一八二　六波羅の北方に移る增一四四　後醍醐の東宮となる增一八二

かすがのおほいらつめ　春日大娘　武烈天皇の御母たり水元

かすがのみやうじん　春日明神　藤原氏の氏神を祀る大鏡二七

かすがのみゆき　春日行幸　一條天皇の時に始まる大鏡一四三

かずまさ　右近少將數雅　眞菅の子なり宇津八五　滋野眞菅、子木工允をしてあて宮への歌を作らしめんとす、木工允の兄右近少將かずまさ之を作る宇津二四五　治部卿眞菅の子なり、眞

菅あて宮を迎へんとし大家を作つて待つあて宮入内すと聞き憤怒禁せず少將らの諫むるを刀を援いて追ひ拂ひ訴へ文を朱雀帝に奉る帝怒つて眞菅を伊豆權守に貶す、少將かずまさ長門守のすけに貶せらる宇津三九

かぜは 嵐 枕一四〇

かた 伽多 羅刹國に漂着す宇治一四 羅刹國を征服す宇治一七

かたしはひめ 堅鹽姫 用明天皇の御母なり水三七

かただのうら 堅田浦 一條兼良此の所にて歌を詠ず藤三

かたののせうしやう 交野少將 撰の少將の例に引かる落三六

かたはらいたきもの 傍痛き物 思ふ人のいたく醉ひて同じとしたる枕七九

かちこ 橘嘉智子 仁明天皇の母たり水八三

かつみ 中臣勝海 物部守屋と共に崇佛に反抗し蘇我馬子と爭鬪す著三

かつもと 細川勝元 卒去す藤八

かつらがは 桂川 貞保親王此の山莊にて五常樂を奏す著二九 中務內侍此所にて歌を詠ず中元 葉室光賴の子行慶、平經正が都落の時桂川まで見送る平家三七

かづらき 葛城 行尊此の地にて修業す著三五

かづらきのからひめ 葛城韓姫 淸寧天皇の御母たり水二六

かづらきのおほぎみ 葛城大君 後醍醐天皇、葛城の大君に比す增二七

かづらきのたかぬかひめ 葛木高額姫 神功皇后の御母たり水一五

かつらのみこ 桂皇女 ふしないしんなう孕子內親王大和

かつらのみや 桂宮 久方のゝ歌を詠ず大和七 それをだにの歌を詠ず大和九 喜種と通ず大和三

かつらのみやのうなゐ 桂宮のうなゐ 式部卿宮より螢を賜はる大和二 敦慶親王より螢を賜はる大和二 つゝめどもの歌を詠ず大和二

かづらゐしんなう 葛井親王 幼にして射を善くす水八一

かつを 鰹 鎌倉の名產たり徒四七 高貴の人食はず徒四八

かつをか 勝岡 重茂と相撲す著二四 常正と相撲す著二五

かどのまろ 葛野麿 遣唐大使となる正五六

かどべのふしやう 門部府生 射て海賊を退く宇治二六三

かどわきのさいしやう 門脇宰相 のりもり 平敎盛 平家

かなをか 巨勢金岡 馬形の障子を繪く著二四 巨勢公茂公忠の曾祖父たり著二五 淸涼殿のくわとの障子の遠山の有明の月を畫く平家二二

かねあきらしんなう 兼明親王 なかつかさのみや 中務卿宮 大鏡

かねいへ 藤原兼家 君がすむの歌を詠す多二 九月十三夜の月に東北院の念佛に赴く著二四 葬送の夜騷動あり著二四 右大將道綱の母の許に通ふ蜻一 しかのねもの歌を北の方右大將道綱の母に贈る蜻五 しのゝめにの歌を道綱の母に贈る蜻三 歌を右大將道綱の母に贈る蜻四 藤原道綱の父なり蜻六 歌を道綱の母に贈る蜻六 歌を道綱の母に贈る蜻八 歌を道綱の母に贈る蜻一〇 歌を道綱の母に贈る蜻一二 歌を道綱の母に贈る蜻一三 從四位に叙す蜻一六 病む蜻一〇 昇殿を聽さる蜻一二 歌を道綱の母に贈る蜻一三 病む蜻一七 歌を道綱の母に贈る蜻一九 歌を道綱の母に贈る蜻二〇 きみがつらさを今日こそは見れといふ下の句を右大將道綱の母に贈る蜻二三 東宮亮より藏人頭に轉ず蜻二三 歌を道綱の母に贈る蜻二九 歌を道綱の母に贈る蜻二一 歌を道綱の母に贈る蜻二四 金峯山に詣づ蜻四七 病む蜻五二 大將となる蜻五三 歌を道綱の母に贈る蜻五〇 道綱の母を鳴瀧に訪ふ蜻七二 道綱の母に破子等を贈る蜻七五 鳴瀧に赴き右大將道綱の母および子道綱を伴ひて下山す蜻八二 歌を道綱の母に贈る蜻九二 大納言に任ず蜻九三 歌を道綱の母に贈る蜻一〇五 歌を道綱の母に贈る蜻一〇六 歌を右大將道綱の母に贈る蜻一〇七 歌を藤原道綱に贈る蜻一一 歌を道綱の母に贈る蜻一二 歌を道綱に贈る蜻一二四 歌を道綱の母に贈る蜻一三五 歌を道綱の母に贈る蜻一三六 歌を道綱の母に贈る蜻一三七 藤原源氏の武者をして兼道を護せしむ大鏡一六 藤原道長、兼家の第五子たり大鏡一七 薨ず大鏡一〇 長歌を圓融院に奉る大鏡一〇一 藤原兼通と和せず大鏡一〇三 村上天皇、兼家に謹愼を命す大鏡一〇四 圓

224495

融院いなふねの丶歌を兼家に賜ふ大鏡一〇一　藤原兼通、兼家の官位を奪ふ大鏡一〇一　殿舍を清涼殿づくりにす大鏡一〇九　巫女を召す大鏡一〇九　諡號なし大鏡一〇九　法興院に參る大鏡一一〇　雲形の帶を東宮に上る大鏡一一一　げにやげにの歌を詠ず大鏡一一四　太政大臣となる大鏡一一五　祈雨のため加茂詣す大鏡一八〇

かねかた　秦兼方　藤原通俊を罵る今物三　去年みしにの歌を詠す今物三

かねかた　藤原懷方　三條天皇に後れ參らせていにしへにの歌を詠ず散二六

かねきよ　秦兼清　秦公春と共に源有治の郎等の狼藉を鎮む著二七三

かねくに　秦兼國　藤原基房の春日詣に供奉す著二九　下野敦景の爲めに藤原基房に讒せらる著二九

かねこ　藤原懷子　花山の母、伊尹の女たり大鏡一五

かねこないしんなう　金子內親王　賢子の姫君たり今鏡二六

かねさだ　治部卿兼定　おもつらはけて野放ちにせんといふ下の句を詠して增圓と連歌す著二七

かねさだ　藤原兼定　藤原正光の男たり大和一〇二

かねざね　藤原兼實　諸公事を再興す著二九　女任子後鳥羽の后となる增一五　藤原基房左大將として、兼實右大將として同時に兄弟相並んで左右の大將たり平家一〇　安德天皇の降誕を賀し平清盛の六波羅の邸に參す平家二四　安德天皇の卽位紫宸殿に於て行ふべきを主唱す平家一九

かねすけ　藤原兼輔　白雲の丶歌を詠す大和二　仁和寺に宇多天皇を訪ふ大和二　呉竹の丶歌を柔子內親王に贈る大和二　人の親の丶歌を詠ず大和一四　人の親を醍醐天皇にたてまつる大和一四　咲きにほひの歌を詠ず大和三　きみがゆくの歌を詠ず大和三　別るべきの歌を詠ず大和三　宿近くの歌を詠ず大和三　藤原定方の女に通ふ大和四四

かねすけのむすめ　伊豫守兼輔女　源成信と契る枕一九

かねずみ　源兼純　廿五兵部大夫たり雅賴の六郎母橘大政大臣の女宇津九　父雅賴の春日詣題に由て歌を詠ず時に兵部卿少將たり宇

津二九　正月七日加階して四位に叙せらる宇津四三　兵部大輔に任せらる宇津五七

かねすゑ　藤原兼季　牧馬を彈せむとせる時柱の落ちければ懷中の續飯をとり出でゝつく徒二九　隨身爲敎を叱す徒四四　淸暑堂の神樂に琵琶を彈ず增二五　龜山法皇の葬送に供奉す增一五三　花園天皇元服の宴に笛を吹く增一六〇　後醍醐の朝覲の行幸に供奉す增一七七　後宇多法皇の舞樂の後宴に陪膳を勤む增一六六　後宇多法皇の御前に笛を吹く增一六六　後醍醐の北山の花見に樂所の奉行す增一八七　後醍醐の北山の花見に琵琶を彈ず增一八七

かねたか　藤原兼隆　小一條院の東宮を退かしむ大鏡一三

かねたか　兼高　實衡の大臣の大饗に筆簗を吹く增一七三

かねたか　山木兼隆　源頼朝、北條義政とはかりて兵を伊豆に擧げ、山木兼隆を殺す平家三四

かねただ　藤原兼忠　後宇多加冠の時笙を吹く增一二六　北山の准后貞子の九十賀に琴を彈ず增一三〇　伏見院の關白たり增一五五　いとゞ又の歌を詠ず增一四九

かねたふ　源兼任　色はかざしの花にまかひてといふ下の句を詠じ左馬權頭と連歌す今物一〇　從者を折檻す著二〇　後白河天皇の時召次の長となる著二〇

かねつな　藤原兼綱　檜網代の車を造る大鏡一三三

かねつな　源兼綱　平清盛、兼綱光長をして高倉宮を圍ましむ平家一六五　源頼政の次子たり平家一六五　源頼政、兼綱等三百餘騎を率ゐて園城寺に入る平家一七三　源仲綱、兼綱等を率ゐ大手の大將として六波羅を夜討せんとし曉に及ぶを以て中止す平家一八二　平忠綱、兼綱を射て傷く平家一九〇　戰死す平家一九〇

かねつね　藤原兼經　隅田川の歌を詠ず著二六〇　關白を良實に讓る增四四　後嵯峨上皇に手本、和琴、馬を奉る增七一　後嵯峨上皇、兼經の宇治の第より還御す增七一　後嵯峨上皇、兼經に馬を賜ふ增七一　百官の朝賀を受く增七一　後嵯峨上皇に朝賀す著二三　惟康親王の母は兼經の女たり著四六

かねつね　源兼經　左衛門のしように任ず平治一二

かねとき　尾張兼時　尾張敎行と共に競馬

す著一八六

かねとし 筑前守兼俊 笙を吹きける際管中の平蛛を喉に呑み入れて吹き惑ひけるより昇殿沙汰留まる著二四

かねとも 秦兼友 秦久清と争論す著二七五

かねとほ 中原兼遠 木曾義仲を奉し兵を信濃に擧ぐ平家二六〇 木曾義仲、兼遠に養育せらる平家二六〇 木曾義仲、兼遠と謀り、根井行親を誘うて兵を信濃に擧ぐ平家二六〇

かねなが 藤原兼長 れのが影をやの歌を詠ず今鏡八五 流罪に處せらる今鏡二一 藤原頼長の嫡子なり保七 出雲國に流さる保八 藤原頼長の子なり保元の亂の時配所にて誅せらる平家一四五

かねながしんなう 懐良親王 いかにせむの歌を後村上天皇に贈る芳四九 れとまがふの歌を後村上天皇に贈る芳四九 尺八を能くす芳四四

かねなほ 卜部兼直 にごりなきの歌を詠ず著三八〇

かねなり 坂上兼成 藤原成憲を預けらる平治一〇

かねのぶ 板垣兼信 木曾義仲追討のため源範頼に從ひ近江國篠原に押し寄す平八三一

かねひさ 秦兼久 藤原通俊を罵る宇治一三 去年みしにの歌を詠す宇治一三 秦兼弘の父たり今物三一 秦兼弘の父たり著一八七

かねひら 秦兼平 秦頼次の父たり著一八七

かねひら 藤原懐平 濟敏の二男たり大鏡四三 藤原經通の父たり大鏡四三 鷹司家の祖となる増四三 朝日影の歌を詠ず増四四 從一位となる増七一 後嵯峨上皇に朝賀す増七三 御北方の法事を行ふ増七九 後嵯峨上皇の如法經供養齋會に列す増八〇 龜山殿に歌合をなす増八八 後宇多の加冠を行ふ増二六 伏見山の歌を詠ず増二三 北山の准后貞子の九十賀に赴く増二六 北山の准后貞子の九十賀に蹴鞠す増二三

かねひら 今井兼平 瀬尾兼康を備前國福隆寺繩手の城に攻めてこれを破る平家三三五 木曾義仲が後白川院の御氣逸に適はざるのみならず諸國の武士等が皆背反せるを見て院の御所に降伏せんとを勸む 義仲きかず平家三三八 木曾義仲に後白川院の御所法住寺殿を襲ひ火を放ちてこれを燒く平家三三九 木曾義仲に從ひて法住寺殿を襲へる時、清原親成を射殺す平家三三〇 木曾義仲、源範頼同義經等の來攻を聞き、

兼平に八百餘騎を與へて勢田橋に防がしむ平家三六八 勢田の戰に敗れて入京するの途打出の濱に木曾義仲に遇ふ平家三六八 木曾義仲を諫めて粟津松原にて自害せんとを勸む平家三六〇 木曾義仲の乳母子たり平家三六一 太刀を口に含み馬より倒に飛び落ちて死す平家三六一 木曾義仲、兼平を遣して源頼朝に和を圖る平家三六三 鷲の瀬を渡り日の宮林に陣す平家三九九 畠山重能と戰ふ平家三九六

かねひら 樋口兼平 樋口兼光の兄弟たり兼光、源行家追討の爲河内紀伊に發向し洛中の合戰を聞きて急に馳せ上り途に兼平の下人にあひ、木曾義仲及び兼平の戰死せるを聞く平家三八二

かねひろ 秦兼弘 秦兼久の子今物三一 下毛野武正に鳩ふく秋の意義を敎ふ今物三一 仁和寺殿の競馬にれいて下野敦延に負く著一八七 秦兼久の子たり著一八七 馬術に達す著一八七

かねふさ 兼房 夢想によりて柿本人丸の像を畫く著九三 藤原顯季が人丸供を行へる時柿本人丸の畫讃を作る著九三 夢想によりて柿本人丸の像を畫く著一八

かねまさ 藤原兼雅 藤原太政大臣の四郎なり若小君といふ宇津一七 忠雅、父の願により、父に從て弟兼雅と共に賀茂に詣づ宇津一七 父の願により幼時父に從つて賀茂社に詣づ宇津一八 賀茂社に行くの途次俊蔭の女(京極上)の家の前を過りて俊蔭の女を瞥見す宇津一八 知るひとのゝ詠祭の歸途俊蔭女の家の薄を折る宇津一八 賀茂の歸途俊蔭の女を訪ふ宇津一八 むしだにもの歌俊蔭の女をおもひやる宇津一八 俊蔭女に父母の名を問ふ宇津一九 俊蔭女と始めて一夜を語る宇津一九 俊蔭女、父母の名を云はずして兼雅の前に琴を彈ず宇津一九 俊蔭女、兼雅の前に泣く宇津二〇 葉末だにの歌俊蔭女に誓ふ宇津二一 父母の己を索ぬるを察し再會を約して俊蔭の女に別る宇津二一 俊蔭女あさぢふにの歌を詠じて兼雅と別を惜む宇津二一 兼雅俊蔭女をとふの時兄忠雅、兼雅歸らざるにより父の嚴命を受けこれを索ねて三條京極の辻に逢ふ宇津二一 父大臣愛して片時も放たざるを以て俊蔭女を訪ふと能はず宇津二二 俊蔭の女を思うて獨詠めやる宇津二四 俊蔭の女兼雅の胤を宿す宇津二四 俊蔭の女、身孕めるも知らず幼く故父母を慕ひ又兼雅を思ふ宇津二四 俊蔭の女(京極上)出産す是兼雅の子後に仲忠なり宇津二六 右大將たり宇

津三六　忠雅と共に嵯峨帝の行幸に從つて北野に行き遙に俊蔭の女の琴を聞く宇津三六　琴聲をとめてうつぼに至る之より先仲忠母子山に移りてこのうつぼにあり兼雅俊蔭女に再會し始めて子仲忠にあふ宇津三七　仲忠にその來歴をとふ仲忠乃之を語る宇津三八　仲忠に都住ひを勸む宇津四〇　仲忠兼雅に山を出づることを辭す由て一まづ仲忠母子に別れてかへる宇津四一　俊蔭の女及仲忠を訪ふ宇津四二　女(後に梨壺女御)を朱雀帝の春宮に奉らむの料に三條堀河のほとりに大殿をつくる乃仲忠をこの所に迎へむとす宇津四三　始めて仲忠にその父たるを告ぐ宇津四三　忠乞が繼母に計られたるを俊蔭の女にいふ宇津四四　俊蔭の女にうつぼを出でむことを勸む宇津四四　俊蔭の女を三條の北堀河の西に据ゑ宇津四五　年卅密にあて宮を思ひあて宮の兄輔純に語る宇津四六　輔純を介して歌をあて宮に贈るあて宮答へず宇津四七　あて宮に歌を贈る返しなし宇津四八　あて宮に歌を贈る返しあり宇津四九　相撲のかへりあるじし人々にかづけ物す宇津五〇　雅頼、兼雅の相撲の還饗に仲忠に彈琴を求む、曰く、あて宮を以てかづけ物とせむと宇津五三　源仲頼、兼雅の相撲の還饗に萬歳樂を舞ひ良峰行雅、琵琶を彈く宇津五五　仲忠、兼雅の相撲の還饗に琴を彈きて衆を感ぜしむ宇津五三　雅頼の子仲純、兼雅の相撲のかへりあるじに落蹲を舞ふ宇津五四　雅頼の七郎仲純兼雅の相撲の還饗の夜仲忠と語る宇津五五　北方(京極上)と共に仲忠の才を喜ぶ宇津五五　雅頼、兼雅の相撲の還饗より歸つてその女あて宮の德に由て仲忠の琴をきけるとを室大宮(女一宮)に語る宇津五五　仲忠、兼雅の相撲の還饗に仲純を訪ふ宇津一八五　病んで歌をあて宮に贈るあて宮答へず宇津一八七　雅頼の春日詣題あり兼雅ら之を詠ず宇津一七七　桂に大家を造つて室京極上(俊蔭女)と花を樂む宇津一八九　桂よりあて宮に歌を贈る幼げなる返しあり宇津一九〇　嘗て先帝の女三宮を思ふ宇津一九一　桂の家に室京極上と往事を語る宇津一九六　仲忠、吹上行のかへるさ仲頼、行雅に別れて忠康の邸より桂に歸り、すゞしよりの引出物を嵯峨院、父兼雅、母京極の上に奉る、金の舟は思ふ心ありて殘せり宇津二〇六　輔純の祭の使に出てたつに仲忠を使として馬を贈つて歌を添ふ宇津二〇四　馬の手番ひの試に一番に式部卿宮に勝つ宇津二〇六　五月馬の手番の頃あて宮に歌を贈る宇津二〇三　雅頼神樂すべき所を諮ふ、忠純、兼雅の

邸を指定す宇津二〇六　雅頼、その室先帝の女一宮(大宮)女大い君(仁壽殿女御)等と共に兼雅の桂の邸の神樂に行く宇津二〇七　神樂に、桂の邸に雅頼來る兼雅雅頼共に歌ふ宇津二〇六　桂の邸の神樂の後洲濱にそへてあて宮に歌を贈る返しあり宇津二〇九　あて宮に歌を贈る返しなし宇津二一〇　神泉に紅葉賀あらむとす兼雅室京極上をして秘琴なん風を出さしむ宇津二一九　紅葉の賀、兼雅なん風の琴を仲忠に與ふ宇津二一一　歌をあて宮に贈る宇津二一六　雅頼の神樂の日、兼雅等在り宇津二一五　十一月十三日、雅頼の神樂の夜、諸人樂を奏す時に兼雅琵琶を彈ず宇津二一六　嵯峨の菊の宴の夜、兼雅等諸人、朱雀の春宮の傍に侍す宇津二一〇　嵯峨の后宮の六十賀に兼雅等數人屏風の歌を詠ず宇津二一二　あて宮に歌を贈つて切情を述ぶ笑つて答へず宇津二一〇　長谷に詣でゝ大願を立て七日籠り誦經してあて宮を得させ給はゞ金堂をたて金像を作り身を終るまで月に一斗の油を奉らむと祈る其より御嶽に詣で山路を歩して足腫る時に暴雨大雷あり京橋の上仲忠よりもあて宮の忘れ難きを覺つて涙止らず宇津二一一　あて宮を得むが爲に長谷御嶽詣を思ひたち井出より歌を贈るにあて宮答へず宇津二一一　神佛も驗なきを思ひ輔純を三條殿に招いてあて宮を得ずんは命絶ゆべきをいひ徹宵語つてあて宮に歌を贈る宇津二一二　御たけ詣でよりあて宮に歌を贈るあて宮見て言はず輔純返しを勸むと雖應せず宇津二一三　梨壺女御、あて宮入内の頃朱雀の春宮に侍す女御は兼雅の大い君、母は先帝の女三宮なり宇津二一六　仲忠と共に雅頼を三條邸に訪ふ宇津二一九　雅頼、自邸に兼雅と相撲節會の物語す、力士の上京の少なきをいひ献酬數次たり宇津二一九　雅頼と語つてあて宮の入内前を懷ふ雅頼、兼雅に、朱雀帝の承香殿の女御を稱贊して且つ女御との舊情を語る宇津二二〇　雅頼に、雅頼の長女仁壽殿女御、承香殿に劣らずとなし女御との舊情を語る宇津二二二　雅頼と各子女仲忠あて宮を賭して當年の情人仁壽殿女御承香殿女御の書の優劣を競ふ持なり宇津二二三　仲忠を遣して仁壽殿女御の當年の書を我家より齎し來らしむ宇津二二三　仲忠、嘗て藤壺に詣でしに、あて宮の琵琶の巧みなるとゝ、天下の名手行雅に勝りたりしとを雅頼の邸に雅頼兼雅等に語る宇津二二三　雅頼、廐馬を賭して兼雅等に鶏を射しむ宇津二二四　雅頼、兼雅に馬を贈らむとし兼雅と共に馬と鷹とを賭して鶏を射る

宇津二四　雅頼の邸に射て鶏に中て賭馬を得別當、馬にそひて兼雅の邸に來る兼雅別當を饗す宇津二五　雅頼に鷹を贈る雅頼の子輔純使を饗す宇津二五　京極上をして相撲の節會に力士に與ふべきかづけ物を用意せしむ宇津二六　京極上に雅頼を訪ひ馬を賭して鶏をを射たる頓末を語る宇津二六　仲忠、父兼雅にあて宮に參るを辭む宇津二七　仲忠にあて宮に參るを勸む宇津二七　相撲の節會の準備をなす宇津二七　相撲の節會の裝束を準備す宇津二七　雅頼、大宮と共にさまこそ君、そで宮、ちご宮等の聟どりを議す、兼雅、すゞし、兵部卿宮、仲忠等議にのぼる仲忠に最も好意あり宇津二五　朱雀帝、相撲の節會に仁壽殿女御の盛裝せるを見て以爲へらく兼雅會てこの女御と情交あり若し二人を並べばふさはしからん哉と乃ち歌を詠じ諸人をして其の意を忖度せしむ兼雅帝の知れるを覺らずして歌を詠ず宇津二四　相撲の節會に、朱雀帝諸人をして仲忠を求めしむ兼雅藤壺に見つけて伴ひかへる宇津二五　朱雀帝、仲忠の隱れたる故を問ふ兼雅曰く醉ひて葎に隱れたるを笛に聞きとめて伴ひ來れりと宇津二四　仲忠内裏より歸つて母京極上を伴ひ來り燈を暗くして母を導く朱雀帝の御前なり兼雅亦その誰たるを知らず宇津二六　朱雀帝、相撲節會に京極の上の琴に感じ内侍督となし上達部をして名をかゝしむ兼雅等、其の誰なるを知らずして各皆官位並に姓名を署して歌を詠す宇津二七　相撲の節會に室京極上内侍督となるの時從三位守大納言兼行右近衛大將春宮大夫たり宇津二七　新内侍督に物參りなとする時始めてその己れが妻京極の上なるを知る宇津二七　心密に京極上が内侍督たるにより朱雀帝の宣ひかくる事あらむを恐る宇津二七　京極上の送りに參りたる左京督橘元行に京極の上が内侍督となりたるあるじの用意を命ず宇津二七　朱雀帝、京極上に宣はく女官の任免は汝の自由たるべし、私の后と思はむ寮所に清涼殿をも讓るべし兼雅何ぞ之を制せんと宇津二九　京極上、仲忠がとらへて朱雀帝に奉れる螢を見て歌を詠ず帝その才に感ず兼忠亦侍す終夜物がたりし夜明けてまかづ宇津二八　季明一生に一度の美をつくして京極上に贈物す女は俊蔭がむすめ男は名たかき兼雅なればなり宇津二八　朱雀のみかとのきさいの宮の兄君たり宇津三一　兼雅、仲忠、すゞし皆あて宮が春宮の一宮を生むの時産養の料を春宮に奉る宇津三三　雅頼、そて君源中将を兼雅に配せしめむとす宇津三六　仲忠すゞし聟どりの三日の夜、帝勅して右大將兼雅を左大將に任ず宇津三九　仲忠、すゞし聟どりの三日の夜朱雀帝盃を仲忠に賜ひ仲忠より、雅頼、すゞし、兼雅、式部卿宮季明、忠雅、兵部卿のみこ、民部卿とめぐる宇津三九　仲忠、父兼雅に兼雅の左大將となりたるを賀す宇津三九　雅頼より聟にすべき由の書を得たるも、あて宮に志淺く思はれじとて辭す宇津四五　子仲忠の室なる朱雀の女一の宮の產所に赴く宇津四三　馬の舞を舞ふ宇津四六　京極の上と物がたりす宇津四三　たちゐてもの歌を詠ず宇津四六　雅頼兼雅に上馬二頭鷹二羽を贈る宇津四四　雅頼、兼雅に消息す宇津四四　靫負の乳母の許に文通す宇津四三　仲忠、兼雅に對面して疎濶を謝す宇津五〇　仲忠、兼雅に梨壺女御懷姙のことを物語る宇津五〇　仲忠朱雀院より賜はりし帶を父兼雅に献じ自ら俊蔭の唐より齎らしゝ帶を着用せんとす、兼雅諾せず賜はりし帶を永く紀念として着用すべきを諭す宇津五〇　仲忠、兼雅に朱雀院に侍して俊蔭の集を講ぜしことを語り且つ其の賜はりし帶を示す宇津五〇　仲忠、父兼雅の北方、一條宮等を一所に集めんことを父に勸む宇津五〇　一條宮に贈るべき消息を認め仲忠に示す宇津五四　一條殿は梨壺女御の爲に兼稚の設けし邸宅たり宇津五四　仲忠、父兼雅の爲に丹後の侍從を隨へて一條の宮に使す宇津五〇　一條宮、兼雅及び仲忠等の厚意を喜ぶ宇津五〇　一條宮、兼雅の意を疑ふ宇津五〇　仲忠、一條殿より歸り來りて父兼雅に有りし事どもを復命す宇津五〇　梅壺更衣兼雅より年齒遙に長ぜるも好色にして兼雅と契り終に其北の方となる宇津五〇　宮の君十三歲の時に見染む宇津五〇　宮の君及び少將君に返書を遣す宇津五〇　京極の上と物語す宇津五一　京極の上に戲る宇津五一　仲忠より雅頼の病めるよしを聞きて雅頼の容體を氣づかふ宇津五一　すゞしと失戀の物語す宇津五一　すゞしに同情して大に其心を慰む宇津五一　胸襟を披きてすゞしと語る宇津五六　すゞしと財寶を賭し碁を圍みてあそぶ、すゞし敗れて兼雅に多く金銀を取らる宇津五八　すゞしの若君の產養に列してすゞしの琵琶を彈く宇津五三　すゞしの許を辭して歸らむとし兵衛の君に止めらる宇津五三　すゞしの儀式に席に堪へずして忍びて庭の下に立ち出てしをすゞしに抑止せらる宇津五三　その子仲忠と共に

多くの従者を率ゐて一條宮等を迎へん爲三條殿を訪ふ宇津五七　中の君、兼雅の歌を見て返歌を認めたれど使とすべきものなければ押し揉みて遙に兼雅を見送る宇津五八　中の君の樣を見るに忍びず密に懐紙に歌を認め置きて去る宇津五九　中の君のわひずまひを見て泣く衣の袖涙滴るばかりなり宇津五九　一條の宮に面して久濶の物語をなす宇津五九　一條宮の許に在りて仲忠等と酒食を共にす宇津五二　京極の上に中の君の身の上を語りて彼の投げ出したる文を示す宇津五七　京極上、兼雅に勧めて右大將より贈りし絹帛を中の君に贈らしむ、兼雅乃ち消息に添へて金銀布帛を贈る、中の君兼雅に返書を贈る宇津五八　仲忠と物語して中の君を家に迎ふることを議す宇津五九　宰相の上との間に二子を擧ぐ宇津六〇　北の方を一條殿より迎へ取りて跡に誰を住はしめんを仲雅にとふ仲忠曰はく宰相中將の女を住まはしむべしと宇津六一　正月七日加階して正二位に進む宇津六三　仲忠、一條宮に家の券を贈りしことを兼雅に語り合せて其目錄を呈す宇津六七　二月五日夜更けて忍びて一條殿に中の君に有し三條の東なる小邸に移らんとを勧む、中の君其言に從ふ宇津六八　中の君に仲忠より奉りし家の券に目錄を添へて贈り、且つ中の君を慰めて其心を安んぜしむ宇津七〇　京極の上と物語して後仲忠の北の方朱雀の女一の宮を訪ひ之と物語す宇津七一　故式部卿の宮の菩提を吊はむとして一條殿に中の君を訪ふ宇津七二　夜更けて私かに一條殿を訪ひ宰相の上に面して物語をなす宇津七三　式部卿の早世を悲み昔を忍ぶ宇津七三　宰相の上を三條邸の西の對に迎へ移す宇津七三　仲忠と共に一條殿に行き中の君の在らざるを訝る宇津七三　仲忠を誘ひて一條殿に花を賞す宇津七三　中の君の上を忍び、得堪へずして花だにもの歌を泣きつゝ詠ず、仲忠、中の君に同情して年をへての歌を兼雅に示す宇津七四　仲忠に故式部卿宮の中の君の在處を問ふ、仲忠二條殿に迎へれきしことを語る宇津七四　仲忠と共に一條殿に在り花の爛熟たるに式部卿の宮を偲びて人世の果敢なきを悲む宇津七四　北の方京極の上に中の君のことを物語る、京極の上之を聞きて身の往事を追懐しまつとてはの歌を兼雅に示す宇津七五　梨壺女御、三條邸に兼雅に對面す宇津七五　世上の言の葉にかゝるを怖れ中の君を迎へとる宇津七五　故式部卿の中の君、

書翰を梅花に添へて兼雅に贈る、兼雅見て初めて意を安んじ、其使に物など賜ひて之を勞ふ宇津七七　中の君に返書をれくる宇津七七　梨壺女御ともの語る宇津七七　兼雅等季明のとふらひに行く宇津七八　仲忠内より罷でゝ室朱雀の女一の宮があて宮と共にあるを迎へに行きて彼處に寢ぬ夜兼雅より使あり梨壺女御が春宮の二宮(實は三宮)を生めるをいふ仲忠行く宇津八〇　春宮の二宮を深く愛して抱く坊に据ゑむの下心あるか宇津八〇　朱雀帝、在位の中に兼雅を右大臣となす宇津八〇　大宮をとひて雅頼か左大臣となりたるを賀す宇津八〇　右大臣となりたる大饗を行ふ宇津八八　朱雀の女一宮惱むときゝ來り訪ふ雅頼と語る宇津八九　仲忠、朱雀女一宮、犬宮、京極上、雅頼等、兼雅の桂の邸に行く宇津八九　仲忠、兼雅の桂の邸に犬宮を抱く犬宮怖ぢず宇津九〇　桂の邸に鮎をとり梨壺女御などに奉る宇津九一　桂の邸に兼雅、仲忠、朱雀の三の宮、八の宮等と歌を詠ず宇津九二　后宮より召されて參内す宇津九四　后宮より二宮を春宮に定むべきことを謀らる宇津九五　忠雅、朱雀帝の后宮への答に窮して之を兼雅に謀る兼雅爲に后の宮に答ふる所あり、且つ一族の事情を啓す、后宮其答に聲色を激す宇津九六　后の宮に答ふ宇津九〇　朱雀后宮、兼雅を召して二宮の意向を語る、兼雅對ふる所あり宇津九〇　朱雀后宮より退出す宇津九一　朱雀の后宮、兼雅に消息したまふ宇津九五　后宮に返書を上る宇津九九　仲忠に后宮の消息を見す宇津九九　立太子の事により て閉居す宇津九七　二宮東宮に立たずと雖も甚だしく失望せず宇津一〇三　女一宮の産を訪ふ宇津一〇五　花の宴にちりぬとての歌を詠ず宇津一〇六　ふるさとにの歌を見る宇津一〇三　宰相の上、宮君の行方を思ふ宇津一〇三　仲忠、兼雅に宰相の上にあへるとを語る宇津一〇七　仲忠、兼雅に宰相の上を迎へんとを勧む宇津一〇八　京極上と宰相の上の事を語る宇津一〇九　宰相の上を訪ふ宇津一〇三　宰相の上に移轉を勧む宇津一〇四　宰相の上、兼雅の邸に移る宇津一〇五　ちぐさにはの歌を詠ず宇津一〇七　京極の上、兼雅の他泊多きを歎く宇津一〇八　仲忠、兼雅に嵯峨院の事を語る宇津一〇七　京極上を慰む宇津一〇〇　朱雀帝の使者を饗應す宇津一〇一　ろの子仲忠と京極邸の往事を語る宇津一〇三　あて宮の藤壺に參上す宇津一〇九　あて宮に朱雀女一宮の事を語る宇津一〇九　あて宮より退出す宇津一一一　仲忠、父兼雅を訪ふ宇津一一二　京極の上、兼雅に對

面せず宇津八六　仲忠、兼雅の邸を退出す宇津八九人々を率ゐて六月秡に川原に出づ宇津八三五　女御に五月の節句を遣る宇津八三五　子仲忠と共に六月秡に川原に出づ宇津八三五　老いて羸羸たり宇津八四三　仲忠の邸に人々を率ゐて來る宇津八四三　雲のうへの丶歌を詠ず宇津八五九　やゝもすれば の歌を詠ず宇津八六三

かねまさ　源兼雅　源雅綱、同雅頼、同頼房　同定房、同通能の父たり今鏡一八〇

かねまさ　藤原兼雅　三位中將となる今鏡一七　北の方平清盛の女たり平家一〇　安德天皇の降誕を賀し平清盛の六波羅邸に參す平家二五

かねまさのきたのかた　藤原兼雅北方　平清盛の女たり平家一〇

かねみ　宮内卿かねみ　京極の邸に往事を追想す宇津八六五　ひきうゑしの歌を詠ず宇津八六三　嵯峨院、かねみの歌に感じて民部卿に任ぜんと欲す宇津八六五

かねみち　藤原兼通　孰處へもの歌を詠ず多二三　起請を破りてあがなひの酒宴を開く宇治一八四　極樂寺を建つ宇治二六五　僧に加持を求む宇治二六五　霜がれの丶歌を右大將道綱の母に贈る蜻一三三　藤原兼家、源氏の武者をして兼道を守護せしむ大鏡一六　村上天皇兼通等に謹慎を命ず大鏡一四　中納言より直に内大臣となる大鏡一三　太政大臣となる大鏡一四　手車の宣旨を賜る大鏡一四　關白となる大鏡一四　薨ず大鏡一四　藤原安子、遺書を兼通に與ふ大鏡一四　關白となる大鏡一四　容貌清秀なり大鏡一五　後夜に雉子を食す大鏡一六　藤原正光、兼通の男たり大鏡一〇一　兼家の官位を奪ふ大鏡一〇一　關白を頼忠に讓る大鏡一〇一　兼家と不和なり大鏡一〇三　藤原信頼に與し内裡の勢揃ひに參す平家三一

かねみつ　藤原兼光　謀略を以て盜賊を捕ふ著三三

かねみつ　樋口兼光　木曾義仲、北陸の境に遣す平家二六八　高橋長綱と戰うてこれを破る平家二九六　齋藤實盛の首を見て其人に相違なきことを義仲に證言す平家二九九　木曾義仲に源行家が京にありて義仲を讒奏せることを告ぐ平家三五五　木曾義仲の命により今熊野より迂回して後白川院の御所法住寺殿を襲ふ平家三五六　木曾義仲が法住寺殿を襲へる時藤原正賢を生擒す平家三五〇　今井兼平の兄弟たり源行家追討の爲河内紀伊に發向し洛中の合戰を聞きて急に馳せ上り途に兼平の下人にあひ木曾義仲、及兼平

の戰死せるを聞く平家二八二　茅野光廣、兼光に從うて上洛し奮戰して死す平家二三二　兒玉黨に就きて源義經に降り尋で斬らる平家二四四

かねもり　平兼盛　花ざかりの歌を詠す大和一六　遠こちの丶歌を詠ず大和一六　黑塚の女を得むと欲す大和一六　みちのくの丶歌を源兼信の女に贈る大和一六　夕されば の歌を兵衛の君に贈る大和一六　年をへての歌を源兼信の女に贈る大和一七　式部卿の宮を追懷す大和二　秋深きの歌を詠ず著九九

かねもり　伊岐兼盛　六條天皇の御母は兼盛の女なり正八九

かねやす　兼泰　後醍醐の御遊びに笙を吹く增一二〇

かねやす　瀨尾兼康　平清盛に隨うて白河殿を攻む保二九　平重盛に從ひ源義平と清涼殿前に奮戰す平治二六　平重盛に從つて源義朝藤原信頼を内裏に攻む平治二六　平清盛、難波經遠妹尾兼康に命じて藤原成親を拷問せしむ平家二二　藤原成親を守護して備前に赴く平家八四　平清盛の殺害せられしことを夢みて重盛に語る平家一三五　平清盛、兼康を奈良に遣はし興福寺の僧徒を鎭撫せしめしが僧徒等益狼籍して命を奉ぜず平家二四二　倉光成澄之を生擒す平家二四四　瀨尾宗康の父なり平家三五一　北國の戰に於て倉光成澄に生捕らる木曾義仲其人物を惜み倉光成氏に預けて守らしむ平家三五一　倉光成光を貽さてこれを殺し備前國福隆寺繩手に城を搆ふ平家三五二　今井兼平兼康を備前國福隆寺繩手の城に攻めて之を破る平家三五二　倉光成澄と板倉川に組討してこれを斬る平家三四四　今井兼平に破られ事の不可なるを見て子瀨尾宗康を斬り奮戰して死す平家三五五　木曾義仲、兼康宗康父子の首を備中國鷲が森に梟す平家三五五

かねゆき　兼行　後嵯峨上皇の五十賀の試樂に篳篥を吹く增九五　龜山院愷子内親王對面の席に侍す增一三　北山の准后貞子の九十賀に篳篥を吹く增一三〇　後深草龜山西園寺に幸するの時篳篥を吹く增一三三

かねゆき　落合兼行　高橋長綱と戰うて之を破る平家二九六

かねより　藤原兼頼　頼宗の一男たり　今鏡三三

かねら　一條兼良　三日原にてかぞふれば の歌を詠す藤一　奈良を出て丶東國遍歷の旅程に就く藤一　泉川にて渡し舟の歌を詠す藤二　大

津にてくらほねはの歌を詠す藤二　さもこそは
の歌を詠す藤二　石山寺にて騒き立つの歌を詠
す藤三　坂本宿に宿りて老が身もの歌を詠す藤
二　朝宮に宿りて歌を詠す藤三　朝妻、堅田浦、醒
が井、柏原にて歌を詠す藤三　伊増峠、藤河、く
ろぢの橋、鷺の瀧、藤河にて歌を詠す藤四　垂井、
山中、野上の行宮の舊跡、不破關にて歌を詠す
藤五　正法寺に宿る藤六　江口、青野が原、垂井に
て歌を詠す藤六　鏡島に宿る藤六　赤坂にて歌を
詠ず藤六　持是院に齋藤妙椿を訪ふ藤六　齋藤妙椿
の居城にて饗を受く藤七　正法寺にて詩會を開
く藤八　鷲峰正法遍塵々の七言絶句を賦す藤八　因
幡山にて歌を詠ず藤八　江口にて鵜飼を見る藤
九　江口にて歌を詠ず藤九　歸國の途に就く藤九
垂井民安寺に宿る藤九　因幡山にて歌を詠ず藤
九　青墓の里、南の宮、小島行宮の舊跡、美江寺
伊吹の明神にて歌を詠ず藤一〇　番馬にて歌を詠
ず藤二　磨針峠にて南行數里下陽坡の七言絶句
を賦す藤三　小野に宿して歌を詠す藤三　四十九
院、磨針峠、高宮にて歌を詠ず藤三　老蘇森、四
十九院、觀音寺、武佐、たが宮河原にて歌を詠
ず藤三　新宮の馬場にて憶得三生石上緣の七言
絶句を賦す藤四　武佐に宿りて南來北望漢宮天

の七言絶句を賦す藤四　河井にて歌を詠す藤四
新宮の馬場に宿る藤四　新宮馬場、水口、玉瀧
寺、北川にて歌を詠す藤五　菩提寺に宿りて菩
提樹下古精藍の七言絶句を賦す藤五　大河原に
て歌を詠す藤五　島の原川にて歌を詠す藤五　奈
良に歸る藤六　笠置川にて歌を詠す藤六

かのこじじう　かのこ侍從　みついへ　藤原光家今鏡

かはかつ　秦河勝　はちをか寺を建つ水四一

かばのくわんじや　蒲冠者　のりより　源範頼平家

かはごえぐろ　川越黑　名馬たり後白川院より平宗盛に賜ひ宗盛より平知盛に與ふ知盛か生田森に敗れし時川越重房これを捕へて後白川院に獻す平家四七

かはじり　河尻　宇多院、河尻に白女を召す大鏡一巻

かはち　河内　楠木正成、河内に兵を擧ぐ増一四

かはづるみ　和氣清麿神願寺を河内に建つ正四

かはちのかみ(一)　一生不犯の僧白狀す宇治三

かはちのなにがしのひじり　河内守　きのかみ　紀伊守源　河内某聖僧

堅固なる道心を起す大鏡一六

かばねたづぬるみやのものがたり　尸尋ぬる宮の物語　藤原孝標の女之を讀む更三

かばのたんざうし　蒲御曹子　のりより源範頼平家

かはらのゐん　河原院　源融の家たり宇治三

かはゐ　河井　一條兼良此地を過る藤四

かへどの　柏殿　朱雀院の女三の宮裳着を行ふ源五九

かへりあるじ　還饗　夕霧大將六條院の賭弓に之を行ふ源八四

かへるべん　かへる辨　男、通じたる女の死せるを悲み暫し山に隱れしが二たび出でゝ朝に仕へしより世にかへる辨と稱せらる今鏡二九

かまくら　鎌倉　阿佛尼領地恢復の訴訟の爲此地に赴く十六夜二　源親行此地に着す東七　鰹の名産地たり徒四七　賴朝幕府を鎌倉に開く增一八　新田義貞鎌倉に入りて北條高時を滅す正一〇八

かまくらのだいぶつ　鎌倉大佛　定光上人建つ東一八

かまくらのちうしよわう　鎌倉中書王　むねたかしんなう　宗尊親王徒

かまこ　中臣鎌子　かまたり　藤原鎌足大鏡

かまたり　藤原鎌足　はじめて內大臣となる大鏡三　內大臣となる大鏡一三　天智天皇、女御を鎌足に賜ふ、鎌足、女御との間に藤原不比等を生む大鏡一三　姓を藤原と改む大鏡一三　藤の繁榮にたとへらる大鏡一四　維摩會を行ふ大鏡一五　氏神を常陸國鹿島に建つ大鏡一七　常陸國鹿島に生る大鏡一七　多武峰に葬る大鏡一七　女二人を天武天皇にすゝむ大鏡一八　中大兄皇子と興に入鹿を殪さむす水四　中大兄皇子と深くちぎる水四　始めて內臣となる水四八　法明、鎌足の病を祈る水四八　山階寺を建立し維摩會を開始す水四八　太政大臣となる水四九　病篤し水四九　藤原の姓を賜はる水四九　大織冠となる水四九　薨す水四九　蘇我入鹿を殺す正四六　祖業を起す正四七　天智天皇より藤原の姓を賜はる正四八

かみそぎ　髮曾木　紫上かみそぎを行ふ源一六

かみは　神は　松の尾枕一六

かんしん　韓信　漂母の恩に報す小八

かんしん　鑒眞和尚　招提寺を建つ水六二　聖武天皇の朝、來朝す正五

かんしゆ　桓守僧正　如法尊勝法を修す增

かんせんでん　甘泉殿　漢武帝殿内に李夫人の畫像を掲げて思をやる唐一

かんだちめ　上達部は　春宮大夫枕一毛

かんつけのかみ　上野守　中將乳母の弟少將の父たり濱三

かんつけのかみのむすめ　上野守女　せうしやう　少將濱

かんつけのみや　上野宮　雅頼の女あて宮をこひ聟たらむと欲す雅頼顧みず宇津六九　諸人を召してあて宮を贈るあて宮答へず宇津六九　あて宮に書を贈るあて宮を得むの策をとふ比叡大德そうけい比叡中堂に常燈を挑け四十九院に毎日各一合の米を奉り神佛に祈らばあて宮のなびくべきをいふ大學のすけ不遇の才をあげ貧を惠まばあて宮なひくべきをいふ宇津七一　大德そうけいに常燈の料を賜ふ大學のすけの言により不遇をあげ財を散じて貧を惠む宇津七一　東山とうりう寺の會を催しあて宮見に來らば奪はむとす宇津七二　無頼の徒東山に會をなしあて宮見に來らば奪ふべしと勸む宇津七二　雅頼、謀つて下蔦の女をあて宮に扮して上野宮の東山の會を見物せしむ宇津七三　東山とうりう寺の會無頼の徒をしてあて宮に扮する下蔦の女を奪はしむ宇津七三　あて宮と信じて下らうの女を北の方とす宇津七四

かんつけのみや　上野宮　尼君の父たり筑紫に流されし時尼君を具して配所にあり遂に其地に薨す濱八〇　聖僧、濱松中納言に河陽縣后の生立、及び尼君は上野宮の女たると等を聞く濱八〇

かんてう　寛朝僧正　賢人と稱せらる　大鏡一八一

かんなびのやま　神南備山　增基此の山にて歌を詠ず庵八

かんなびのによくらうど　神南備女藏人　嵯峨の皇子すゞしを生みて尋いで死す宇津二五八　神南備種松と源常在の女との間に生る宇津二五八

かんにち　坎日　忌む紫三

かんのおとゞ　督大殿　きやうごくのうへ　京極上宇津

かんのとの　督殿　よしこ　藤原嬉子大鏡

かんばら　神原　源親行此の宿にて歌を詠ず東一五

かんら　甘羅　藤原基實、甘羅に比せらる今鏡一〇五　十二歲にて大臣となる今鏡一〇五

かんねんのおとど　閑院大臣　ふゆつぐ　藤原冬嗣大鏡

かんねんのおほいきみ　閑院大君　歌を藤原眞樹に贈る大和三六

かんねんのおほきおとど　閑院太政大臣　きんすゑ　藤原公季大鏡

かんねむのご　閑院御　歌を平貞文に贈る大和一四

かんねんのさだいじん　閑院左大臣　ふゆつぐ　藤原冬嗣平家

かんねんのさだいしやう　閑院左大將　あさみつ　藤原朝光大鏡

かんねんのだいなごん　閑院大納言　あさみつ　藤原朝光大鏡

かんねんのとうぐうのだいぶ　閑院東宮大夫　よしのぶ　藤原能信今鏡

かめぎく　龜菊　後鳥羽天皇白拍子の歌を作りて敎ふ徒八六　物

かめやまてんなう　龜山天皇　藤原實氏の女佶子を女御とす增四四　藤原姞子の御子たり增六〇　後深草の東宮となる增六四　笛を吹く增六七　元服す增六八　蓮華王院の供養に行幸す增七七　淨金剛院にて涅槃の儀式を行ふ增七九　大風稻荷の中の宮を損す增八三　大風、明堂を倒す增八三　大風、陰陽寮の守護神の社を倒す增八三　西國に大風起る增八三　大風延曆寺の文殊樓を損す增八三　大風により占トす增八三　卽位す增八四　後深草天皇、龜山に讓位す增八四　藤原嬉子、女御たるを得ず增八四　藤原佶子を女御とす增八四　雜仕貫川を寵す增八六　青柳、梅枝、高砂、貫川等龜山の雜仕たり增八六　藤原嬉子中宮となり佶子皇后となる增八七　龜山殿に觀櫻す增八七　後嵯峨上皇、延喜帝御筆の手本を上る增八八　後嵯峨法皇の法華經供養に行幸す增八九　後嵯峨法皇、龜山の後を皇統とすべきことを遺詔す增一〇四　後深草上皇、龜山と不和を生ず增一〇四　御深草上皇、田村將軍傳來の寶劍を龜山に奉る增一〇四　東宮御宇多に灸治を行ふ增一〇五　東宮御宇多御病の祈をなす增一〇五　しば〳〵地震あり增一〇六　二の對より失火す增一〇六　塗籠の戸を踏み破る增一〇六　押小路殿に火を避く增一〇六　藤原公守、忠家、天皇讓位の式に臨む增一〇七　二條門裏に行幸す增一〇七　東宮後宇多に讓位す增一〇七　押小路殿に行幸す增一〇七　姞子の住する實俊中將の第に行幸す增一〇七　官廳に行幸す增一〇八　布衣にて北白河殿に行幸す增一〇八　嵯峨殿にて佛事を行ふ增一〇八　諸所に行幸

す増一〇八　院政を執る増一〇八　後字多上皇と親和す増二〇　愷子内親王を寵す増二三　ばいたんの翁はあはれなりの今様を誦す増二三　愷子内親王に對面す、藤原實兼、藤原隆顯、なかすけ、爲方、兼行、すけゆき、其席に侍す増二三　任子を女御とす増二六　藤原基平、その女任子を院の女御に奉る増二六　後嵯峨の姫宮五條院を寵す増二七　藤原任子に寵衰ふ増二七　二條内裏燒けて萬里小路殿に渡る増二七　故皇后佶子の妹中の君をめす増二七　二條内裏燒く増二七　田樂法師玄駒の女下野を寵す増二八　御子甚だ多し増二九　讃岐を寵す増二九　持明院殿の花の宴に蹴鞠す増二九　爲經の女帥典侍を寵す増二九　後深草上皇と共に伏見殿に行幸す増三三　後深草上皇、院と相親和す増三三　蒙古討伐の祈のため八幡に行幸す増三四　藤原經任を勅使として蒙古襲來を大神宮に告ぐ増三四　身命に代へて蒙古軍を退けむとを大神宮に祈る増三四　北山の准后貞子の九十賀に赴く増三七　北山の准后貞子の九十賀に蹴鞠す増三三　西園寺の諸堂を拜す増三三　雲の浪云々の上句を詠す或女房ゆくすゑとほき云々の下の句を詠して連歌す増三三　誓狀を北條氏に賜ふ増三四　北條氏が後嵯峨の遺詔にそむけるを憤る増三四　藤原公衡、院を六波羅に移さんとす増三四　出家して金剛覺と稱す増三四　如法經を書寫す増三四　宗尊親王の姫宮掄子を寵せず増三四　崩ず増三五　順助、慈道、藤原公衡、同公顯、同師重、同實躬、源有房、宗氏、重經、爲雄、經守、賴俊、忠氏、爲藤、國房、經世、泰忠、光忠、後宇多院、藤原師信、同兼季、源親定、同親實、藤原公實　等法皇の葬送に供奉す増三五　その葬送あり増三五　錦子の妹瑛子を寵す増三五　藤原忠子、法皇の崩御を嘆く増三四　後醍醐天皇、法皇の寵を受けたれば、法皇の崩御を悼む増三四　藤原瑛子法皇の崩御を悼みて出家す増三四　後宇多院、藤原瑛子、喜子内親王、良助法親王、覺雲、順助、慈道、性惠、行仁、性融法親王等、法皇の喪に服す増三四　喜子内親王寵を受く増三七　大覺寺に寵居す増三六　後深草天皇と兄弟權を爭ふ正一〇〇　即位す後深草天皇の同母弟たり正一〇〇　後深草天皇、龜山に讓位し暫く院政を聽く正一〇〇　讓位の後院中に政を聽く五十七歳にて崩す正一〇一　後宇多天皇の父君たり正一〇一　其流と後深草天皇の流と兩統更立の例を開く蓋し北條氏の謀る所たり正一〇四

かめわか　源龜若　秦野延景、源義朝の命によりその諸弟源乙若、同龜若、同鶴若、同天王等を斬る保六　後白川院源義朝に勅して源乙若、同龜若、同鶴若、同天王等の諸弟を誅せしむ保六　源爲義の子にして源乙若の弟鶴若の兄たり保六　吉田二郎、源龜若の傅たり保七　圓覺寺に葬る保四

かも　賀茂　右大將道綱の母此所に詣づ蜻二七　增基此所にて歌を詠ず庶八　祭の有樣四季三三　祭の有樣徒三六

かもがは　賀茂川　河原に死人を棄つる風あり蜻三九

かものいはもとのやしろ　賀茂岩本社　在原業平を祭る徒六

かものくらべうま　賀茂競馬　吉田兼好五月五日之を見る徒二六

かものくわんじや　賀茂冠者　よしつぐ源義嗣平家

かものはしもとのやしろ　賀茂橋本社　藤原實方を祭る徒六

かものみやうじん　賀茂明神　天下の政不法なるにより日本國を去るとを託宣す著三五

かものりんじのまつり　賀茂臨時祭　宇多天皇臨時祭を始む、藤原時平、祭使となる大鏡

かやつ　萱津　源親行此所にて歌を詠ず東五

かやのみこ　賀陽親王　男吾通へる女に賀陽親王が通へるを聞きて郭公の歌を其女に贈る伊八　女、我許に賀陽親王が通へるを恨みたる男に名のみたつの歌を贈る伊八

かやのゐん　高陽院　やすこ　藤原泰子今鏡

かやひめ　茅媛　飯豐天皇の母たり水六

かゆづえ　粥杖　正月十五日餅粥の節句に用ゐる狹二八

からかは　唐皮　平貞盛以來平家重代の鎧にて嫡子相傳す平家四九

からぎぬは　唐衣は　赤ぎぬ枕一六三

からさき　唐崎　崎の名所の一たり枕一九　平家の軍勢山沿道を追服す平家二八

からぎぬは　狩衣は　香染の薄き枕一七

かるのさかひばらのみや　大和輕境原宮　孝元天皇、境原宮に居り正六

かるのしまのとよのあかりのみや　大和輕島豐明宮　應神天皇、豐明宮に居る正三

かるのまがりをのみや　大和輕曲峽宮　懿德天皇曲峽宮に居り正三

かをるきみ　薫君　薫君生る、父は源氏の

君、母は朱雀院の女二の宮、實は柏木君の子なり源七三　源氏君、朱雀女三宮が薫君を生みたるを聞きて訪ふ源七四　源氏君薫君を見る源七五　源氏君、五十日餅を贈る源七五　從四位に敍し侍從に任じ右中將を兼ぬ源八〇　元服す源八一　冷泉院寵愛す源八一　前妨姫宮寵愛す源八一　冷泉院の猶子となる源八一　柏木君が實の父たるをほの聞きて思ひに沈む源八二　夕霧薫君を寵愛す源八三　世に勢望あり源八三　匂宮と友情密なり源八四　三位に敍し參議に任ず中將元の如し源八四　冷泉院の女一の宮を戀ふ源八四　夕霧、匂宮及び薫君を婿とせんの意あり源八四　中納言たり源八五　玉蔓、聟と爲さんの意あり源八六　玉蔓を訪ふ源八七　よそにてはの歌を宰相君(二)に詠みかく源八八　宰相君、薫君に歌を詠みかく源八八　藤侍從を訪ふ源八八　竹川のゝ歌を玉かつらに贈る源八九　藤侍從に消息を贈る源八九　藤侍從薫君に歌をれくる源八九　歌を藤侍從に贈る源八九　手にかくるの歌を藤侍從に詠みかく源八九　冷泉院、寵して常に御前に侍せしむ源八九　藤侍從薫君に歌を詠みかく源八九　男踏歌の歌頭を勤む源八九　女薫君に歌を詠みかく源八九　宰相中將に任ず源八九　中納言に任ず源八〇　宇治阿闍梨、薫君を宇治八宮に紹介す源八九　宇治八宮を訪ひて法文を學ぶ源八九　宇治八宮を訪ふ源八九　宇治大君及び宇治の中の君をかいま見る源八九　辨の君、柏木君の事を薫君に語る源八九　橋姫のゝ歌を宇治大君に贈る源八九　宇治大君に消息を贈る源八九　宇治大君薫君に歌を贈る源八九　匂宮を訪ひて宇治大君の有樣を語る源九〇　宇治八宮と管絃を合奏す源九〇　宇治八宮を訪ふ源九〇　宇治八宮、二女宇治大君及び宇治の中の君の後見を托す源九〇　辨の君(二)、柏木の君の子たるとを語る源九〇　辨の君(二)、柏木の君の遺書を呈す源九〇　柏木君の遺書を披見す源九〇　匂宮を誘ひて宇治八宮を訪ふ源九〇　宇治八宮山風にの歌をれくる源九〇　匂宮歌を薫君に代りて宇治八宮に贈る源九〇　宇治八宮を訪ふ源九〇　宇治八宮、宇治大君及び宇治八宮の中の君の後見を托す源九〇　いかならんの歌を宇治八宮に詠みかく源九〇　宇治八宮薫君に歌を詠みかく源九〇　宇治八宮の薨去により宇治大君等を吊問す源九〇　宇治大君を訪ふ源九〇　色かはるの歌を宇治大君に詠みかく源九〇　辨の君(二)と語る源九〇　宇治大君色變るの歌を薫君に詠みかく

源九〇　秋ぎりのゝ歌を詠ず源九〇　宇治大君を訪ふ源九〇　宇治大君を戀ふ源九〇　宇治大君薫君に歌を詠みかく源九〇　歌を宇治大君に詠みかく源九〇　宇治大君を訪ふ源九〇　宇治大君及び宇治八宮の中の君を几帳の隙より覗きみる源九〇　宇治大君を訪ふ源九〇　あげまきにの歌を宇治大君に詠みかく源九〇　宇治大君薫君に歌を詠みかく源九〇　辨の君(二)に宇治大君の無情を訴ふ源九〇　宇治大君、薫君に宇治の中の君を配せんの意あり源九〇　宇治大君に對面して情を訴ふ源九〇　山里のゝ歌を宇治大君に詠みかく源九〇　宇治大君薫君に歌を詠みかく源九〇　宇治大君を訪ふ源九〇　宇治大君、その妹宇治の中の君を己れに代へて薫君に配せんとす源九〇　辨の君(二)宇治大君に、薫君に配從せんとを勸む源九〇　宇治大君、辨の君(二)に宇治八宮の中の君を己れに代へて薫君に配せんとを語る源九〇　辨の君(二)宇治大君に、薫君に配從せんとを勸む源九〇　宇治大君、薫君が己が寢所に來れるを知り宇治の中の君を殘して遁る源九〇　辨の君(二)宇治大君の寢所に導く源九〇　宇治大君の無情を恨む源九〇　歌を宇治大君に贈る源九〇　宇治大君薫君に歌を贈る源九〇　匂宮を訪ふ源九〇　六條院に移る源九〇　匂宮を訪ひて宇治に遊ぶ源九〇　匂宮薫君に歌を詠みかく源九〇　歌を匂宮に詠みかく源九〇　匂宮を導きて宇治大君及び宇治八宮の中君を訪ふ源九〇　宇治大君に對して無情を恨む源九〇　歌を宇治大君に詠みかく源九〇　宇治大君に消息を贈る源九〇　宇治大君薫君に歌を詠みかく源九〇　歌を宇治大君に贈る源九〇　宇治大君薫君に歌を贈る源九〇　匂宮と同車して宇治大君及び宇治の中の君を訪ふ源九〇　宇治大君の無情を恨む源九〇　三條宮を新築して宇治大君を迎へんとす源九〇　匂宮を誘ひて宇治の紅葉を觀る源九〇　宇治大君の病を訪ふ源九〇　宇治の大君の病を訪ふ源九〇　宇治大君の爲めに僧を請じて修法讀經を行ふ源九〇　歌を宇治八宮の中の君に詠みかく源九〇　宇治の中の君曉のゝ歌を薫君に詠みかく源九〇　宇治大君の薨去を悲歎す源九〇　宇治大君の法事を行ふ源九〇　宇治大君を追想して悲歎す源九〇　匂宮を訪ひ歌を匂宮に詠みかく源九〇　匂宮、薫君に歌を詠みかく源九〇　匂宮、宇治八宮中の君を京に移さんと欲するとを薫君に語る源九〇　歌を宇治八宮の中の君に贈る源九〇　宇治八宮の中の君を訪ふ源九〇

君、見る人もの歌を詠みかく源九六　袖ふれしの歌を宇治八宮の中の君に詠みかく源九七　辨の君(二)さきにたつの歌を詠みかく源九八　歌を辨の君(二)に詠みかく源九九　宇治八宮の中の君を二條院に迎ふ源九九　匂宮を訪ふ源一〇〇一　夕霧、夕霧の六の君を配せんとす、薫君應ぜず源一〇〇一　今上、今上の女二の宮を配せんとす源一〇〇四　今上、薫君を召して碁を圍む源一〇〇五　歌を今上に詠みかく源一〇〇六　今上、霜にあへずの歌を詠みかく源一〇〇六　今上、今上の女二宮を配せんとをほのめかす源一〇〇六　宇治大君を追慕す源一〇〇七　宇治の中君を匂宮に讓りしとを悔ゆ源一〇一〇　宇治八宮の中の君を二條院に訪ふ源一〇一二　歌を宇治八宮の中の君に詠みかく源一〇一四　宇治八宮の中の君消えぬまにの歌を詠みかく源一〇一四　宇治大君を追慕して憂欝す源一〇一六　朱雀院の女三の宮、戒む源一〇一六　落葉宮女郎花の歌を夕霧の六の君に代りて贈る源一〇一三　夕霧、夕霧の六の君の三日の夜の儀式を六條院にて行ひ薫君を招待す源一〇一三　深からずの歌を按察の君(一)に詠みかく源一〇一五　按察の君うち渡しの歌を詠みかく源一〇一五　容姿艶麗性質温雅にして世の婦女子に慕はる源一〇一五　宇治八宮の中の君に消息を贈る源一〇一七　宇治八宮の中の君を薫君に贈る源一〇一七　宇治八宮の中の君を訪ひて慰籍す源一〇一八　宇治八の宮の中の君を戀ひ強て簾中に入りて情を訴ふ源一〇一九　歌を宇治八宮の中の君に贈る源一〇二一　歌を宇治八宮の中の君に贈る源一〇二一　宇治八宮の中の君を訪ふ源一〇二六　宇治の中の君、浮舟のとを語りて相配せしめんとす源一〇二一　宇治の宮を訪ひ辨の君(二)に對面す源一〇二三　宇治阿闍梨に命じ宇治宮の寢殿を毀ちて堂宇を建立せしむ源一〇二四　辨君(二)、浮舟の生立經歷の事を語る源一〇二六　宇治八宮の中の君に宇治の宮にて折りたる蔦に消息を添へてたくる源一〇二八　宇治八宮の中の君、消息を贈る源一〇二九　權大納言に任じ右大將を兼ぬ源一〇二二　任大納言の饗を行ふ源一〇二二　今上の女二宮と婚す源一〇二四　宇治八宮の中の君を訪ふ源一〇二五　浮舟を宇治宮にて垣間見る源一〇二六　辨の君(二)を召して浮舟のとを問ふ源一〇二六　歌を浮舟に贈る源一〇二五　宇治八宮の中の君を訪ふ源一〇二二　宇治八宮の中の君に歌を宇治八宮の中の君に詠みかく源一〇二三　宇治

八宮の中のきみ薫君に歌を詠みかく源一〇二四　宇治八宮の中の君、中將君(二)に薫君が浮舟を戀ふるとを語り相配せんとを勸む源一〇二五　宇治に赴きて新造の御堂を見る源一〇二九　辨の君(二)を宇治宮に訪ふ源一〇〇　〃辨の君(二)に出京せんとを勸む源一〇〇　辨のきみに(二)浮舟を媒介せんとを乞ふ源一〇〇　今上の女二の宮に宇治の紅葉を贈る源一〇一　浮舟と通す源一〇一三　浮舟を具して宇治宮に赴く源一〇四　今上の女二の宮に消息を贈る源一〇六　浮舟の處置を案ず源一〇六　歌を辨のきみ(二)に詠みかく源一〇六　辨君やどり木はのうたを詠みかく源一〇八　浮舟を京に迎へんと欲し邸宅を營む源一〇九　匂宮道定を召して薫君と浮舟との關係を問ふ源一一一　匂宮、薫君に扮して浮舟に通ず源一一七　匂宮を訪ふ源一一五　浮舟を訪ふ源一一六　歌を浮舟に詠みかく源一一六　浮舟、匂宮及び薫君の二人に見ゆしとにつきて悶憂す源一一四　浮舟に消息を贈る源一一五　水まさるの歌を浮舟に贈る源一一五　今上の二の宮に浮舟を京に移さんとするとを語る源一一六　浮舟薫君に歌を贈る源一一六　道定、匂宮に、薫君が浮舟を京に移さんと欲して其用意せるとを語る源一一七　匂宮薫君が浮舟を京に迎へんして用意せるとを聞き受領の家を借りて急に浮舟を移さんとす源一一七　中將の君(二)辨の君(二)と、浮舟が匂宮と通じたるを知らずして薫君に配せんとを物語る源一一六　浮舟に消息を贈りて慰問す源一一〇　隨身匂宮が浮舟と關係あるとを語る源一一一　歌を浮舟に贈る源一一四　浮舟、薫君に消息を贈る源一一四　内舍人、薫君の命を奉じて浮舟の居住せる宇治宮を警固す源一一七　朱雀院の女三の宮の爲めに石山に參籠して病の恢復を祈禱す源一一八　浮舟の投身を聞き中將のきみ(二)を慰問す源一一八　浮舟を回想して悲歎す源一一八　匂宮に浮舟を宇治に隱まひおきしと及び其の死亡せるとを語る源一一九　歌を匂宮に贈る源一一九　匂宮薫君に歌を贈る源一二〇　「人木石にあらざれば皆なさけあり」源一二〇　右近君(二)に投身前にれける浮舟の有樣を問ふ源一二一　右近君(二)匂宮が浮舟に通じたる始末を語る源一二一　宇治阿闍梨を召して浮舟の追善供養を命ず源一二一　中將の君(二)に消息して浮舟の死を吊ず源一二一　浮舟の爲めに四七日の法事を行ふ源一二一　小宰相の君に懸想す源一二六　小宰相の君あはれしるの歌を贈る源一二七　歌を小宰相の君に贈る源一二七　今上の女一の宮を暫見して懸想す源一二八　宮の君に懸想す

源一八五　やどかさばの歌を辨の君(三)に詠みかく源一八七　辨の君(三)に戯言す源一八七　辨の君(三)たびねしての歌を詠みかく源一八七　女、薫君に歌を詠みかく源一八七　宮の君を訪ふ源一九〇　紀伊守(三)、小野大尼君に、薫君の近況、及び浮舟との關係を語る源二三九　明石中宮を訪ひて浮舟の死亡せるとを語る源二三一　明石中宮、薫君に小宰相の君をして浮舟が小野尼君に救はれしとを告げしむ源二三二　小野僧都に會して浮舟が救助せられしを確聞せんとし屢中堂にまうづ源二三四　小野僧都に浮舟のとを問ふ源二三五　小野僧都、浮舟を救助したる顚末を語る源二三六　小君(三)薫君の命を以て浮舟を訪ふ源二四一　歌を浮舟に贈る源二四四　小君(三)に托して浮舟に消息を贈る源二四四　浮舟、贈り來れる消息を所違へなりと稱し謝絶して答へず源二四五　浮舟他人に通じたるかと疑ふ源二四六　女等打ち集りて其人物を批評す無二六

かをるたいしやう　薫大將　かをるきみ

薫君源

きいのにゐ　紀伊二位　藤原通憲の妻たり平治三　藤原範國の女にして藤原通憲の妻たり從二位に叙せらる平治三　後白河院が鳥羽の北殿に幸せられし時供奉す平家一四八　阿波內侍の母なり平家五七二

きう　灸　神事に穢あり徒六二　四十以後の人三里を燒かされば上氣の事あり徒六三

きうせいぼさつ　救世菩薩　聖德太子は救世の化身なり水三二

きかいがしま　鬼界島　平清盛、俊寬を流す平家八六

ぎがく　義覺　百濟寺に住す水四八　口より光を放つ水四八

ききにくくみぐるしきもの　聞き惡く見苦しき物　老人の若き人に交りて興あらんと物云ひたる徒四五

ききん　飢饉　京都被害の有樣方四

きくかは　菊河　藤原宗行菊河に誅せらる著三四　阿佛尼此所に留りて歌を詠ず十六夜九　親行此の地にて歌を詠ず東二　中御門宗行此所に宿りて昔は南陽縣の菊水云々の句を家の柱に題す東二

きくていのおとど　菊亭大臣　かねすゑ

藤原兼季徒

きくのえん　菊宴　朱雀帝十一月一日の頃菊宴あり宇津三〇八　後冷泉、菊の宴を行はせらる

今鏡一八

きくわうまる　菊王丸　平通盛の子にして平敎經の侍童たり平家四九　佐藤忠信、菊王丸を射殺す平家四九

きさいのみや　嵯峨后宮　俊蔭、琴を嵯峨帝、后宮、東宮、東宮女御および左大臣源忠恒、右大臣橘千蔭に奉る宇津一三　大宮、后宮の六十賀を行はんとし兵部卿宮及び夫雅賴と語る宇津三〇九　雅賴、后宮の六十賀のまうけす宇津三一〇　民部卿實雅、后宮の六十賀の用意として、師を附して自邸に、あこ宮、いへ宮、大殿の小君、忠純の太郎君に舞を習はしむ宇津三一　大宮、后宮の六十賀を行はんとして雅賴と語る宇津三六　正月廿七日六十賀あり宇津三〇　大宮、嵯峨の后宮の六十賀に后宮と語る宇津三二　仲賴、后宮の六十賀に諸人の屛風の歌を書す宇津三三　朱雀の春宮、后宮に謁す宇津三六　あて宮が春宮の一宮を生みたる五日の夜產養の料を贈る宇津三三　朱雀院に祇候す宇津四〇　俊蔭の文を聽講する能はざるにより仲忠を怨む宇津四〇　朱雀院に不平を語る宇津七一　春宮、后宮に對面して物語す宇津七四　仲忠の邸に行く宇津八四　仲忠の遊宴に行かむとす宇津八三

きさいのみや　朱雀后宮　行雅、仲賴に別れて忠康の邸より歸りすゞしよりの引出物を嵯峨院、朱雀后宮、朱雀春宮に領つ宇津二六　忠雅兼雅等の妹君なり宇津三一　あて宮、十月里亭雅賴の家に春宮の一宮を生む　朱雀后宮、朱雀春宮座したり宇津三一　あて宮が春宮の一宮を生みたる三日夜產養の料を贈り大宮に消息を贈る大宮返しす宇津三一　朱雀帝、朱雀后宮、仁壽殿女御皆京極上が內侍督となりたる喜びの贈物をいかめしうせんとす宇津一九　京極上に內侍督となりたる喜びの贈物す裝束等善美を盡せり宇津一六三　太政大臣忠雅、右大臣兼雅、右大將仲忠、大納言、宰相等を召す宇津六四　太政大臣忠雅、右大臣兼雅、右大將仲忠、大納言、宰相等に、二宮を東宮に立てむことを謀る宇津六五　二宮を春宮に立てんとして之を忠雅等に謀る、忠雅思召に從はんとを啓す、后宮其答を誠とせず、忠雅窮して之を兼雅に謀る、兼雅爲に后宮に答へ、且つ一族の事情を啓す、后宮、兼雅の言に聲色を激す、忠雅乃ち后宮を宥む宇津六五　二宮を召して意向を問ふに春宮たるの意無きを對ふ后宮、兼雅を召して二宮の意向を語る、兼雅之に對ふる所ありて、退出す宇津六九　兼雅を召して

二宮の意向を語る宇津六〇　朱雀帝、朱雀后宮の方に渡る、皇后乃ち譲位の期を問ひ、譲位と共に二宮を東宮に定むべきことを奏す朱雀院これに答へて春宮を急ぎ定むるに及ばざる由を仰せらる宇津六一　朱雀帝に其言の用ゐられざるを怨ず宇津六二　今上に梨壺を女御に上せむことをせまる宇津六三　國譲と同時に東宮を定められざりしを不満とす宇津六四　雅頼の病を見まはしむ宇津六九　雅頼の召に應せぬをいぶかる宇津六九　雅頼、后宮の消息を見、之か返事を上る宇津六〇　みやのすけ、后宮に復命す、后宮雅頼の事を問ふ宇津六〇　みやのすけに雅頼の事を問ふ宇津六〇　雅に消息を給ふ宇津六五　兼雅后宮に返書を上る宇津六一　二宮の東宮に立たざるを恨む宇津七一　仁壽殿女御、后宮を惡む宇津七一　朱雀院に出づ宇津七五　志を得すして人々を憎む宇津七六　今上、母后宮を安んぜん爲二宮を親王とす宇津七八　朱雀院の女一の宮を尋ねんとするを止む宇津七七

きさいのみや　後村上后宮　なき名さへの歌を洞院公行に贈る芳三五　洞院公行后宮を戀慕す芳三五

きし　藤原貴子　重明親王の北の方となる大鏡三四　保明親王の御息所たり大鏡三四　藤原忠平のむすめなり保明親王の御やすどころとなる大鏡三九

きしによわう　徽子女王　飛香舎にて藤花の宴ありし時箏譜及貞保親王の用ゐたる笛螺鈿箏を村上天皇に獻す著三三　藤原貴子の御腹なり大鏡三四　齋宮の女御、徽子を生む大鏡三四　さらぬだにの歌琴を彈ず大鏡一七六

きし　嬉子　よしこ　藤原嬉子大鏡

きしうもんゐん　宜秋門院　にんし　藤原任子増

きしないしんなう　喜子内親王　龜山法皇の喪に服す増一四四　臨川寺に住す増一四七　龜山法皇の寵を受く増一四七

ぎしないしんなう　曦子内親王　後嵯峨の皇后宮となる増七四

きしやうもん　起請文　慈惠より起る著三三　近代より世に行はる徒八一

きせい　基勢　醍醐天皇と銀の笙を懸物として碁を圍みて勝つ著三三

きそのちうだ　木曾忠太　宇野太郎、望月三郎、諏訪平五、進藤武者、桑原安藤次、安藤三、彌忠太、根津神平、静妻小次郎、熊坂四郎等と共に奮戰して源爲朝に當る保四三

きそふ　渡邊競　渡邊省、同授、同連等と共に源頼政に隨うて白河殿の東門を攻む保四三　偽りて平宗盛に仕へ源仲綱の轡憤を散す平家一七三　源頼政の家臣たり平家一七三　源仲綱に從ひ六波羅を夜討せんとし曉に及ぶを以て中止す平家一八二　戰死す平家一九一

ぎたいれい　義大領　園城寺はもと義大領か私設の寺なりしが後天武天皇に寄せ奉りて法願寺と爲す平家二〇一

きたかば　北川　一條兼良此地にて歌を詠ず藤一五

ぎだたいし　祇陀太子　祇園精舎を再興す水二〇

きたなげなるもの　穢げなる物　鼠の住家枕一九

きたの　北野　右大將道綱の母此所に詣づ蜻一〇三　菅原道眞、北野の宮に祀らる大鏡三三　北野天神永觀六年託宣あり著七

きたやま　北山　阿佛尼此の麓に宿る轢六　藤原公經、西園寺を北山に建つ増四四

きたやまのあま　北山尼　源氏君、紫上及び北山尼の隠れがをのぞきみる源九　まくらゆふの歌を源氏君に贈る源九五　北山僧都、尼を訪ひて源氏君が北山に來れるとを語る源九一　紫上の祖母たり源九三　按察大納言(一)の北の方たり源九三　北山僧都は其兄たり源九三　源氏君、尼君に紫上の後見たらんと請ふ尼君辭す源九五　源氏尼君に歌を贈る源九五　源氏君尼君に歌を贈り紫上の後見せんと請ふ源一〇一　源氏君歌を藤原惟光を使として尼君に贈る源一〇一　歌を源氏の君に贈る源一〇一　歌を源氏の君に贈りて紫上の後見せんといふを辭退す源一〇一　京に歸る源一〇四　源氏君尼君を訪ふ源一〇四　卒す源一〇六

きたやまのそうづ　北山僧都　北山尼を訪ひて源氏君が北山に來れるとを語る源九一　源氏君僧都を訪ふ源九三　僧都源氏の君を訪ふ源九三　北山尼の兄たり源九三　紫のうへの身の上を語る源九三　源氏君紫上を執りなさんとを僧都に請ふ源九四　歌を源氏君に詠みかく源九六　源氏君僧都に歌を詠みかく源九七　源氏僧都に歌を詠みかく源九七　奥山のゝ歌を源氏の君に詠みかく源九七　優曇華のゝ歌を源氏の君に詠みかく源九七　源氏の君を加持す源九七　歌を源氏の君に詠みかく源九八　源氏君、參内して僧都の行德を奏聞す源九九　源氏君の歸京せんとを祈念す源一〇三

きちじ　金商人吉次　源義經、深栖頼重及び吉次に具して奥州に下らんとす平治九　源義經具して奥州に行かんとを請ふ平治九

きぢよ　妓女　有名なる白柏子にして祇王の妹たり平家二　祇王、平清盛の召に應じ妓女を具して西八條殿に赴く平家一六　祇王の尼となりしをきゝて亦尼となり祇王の草庵に同棲す平家一八　長講堂の過去帳に祇王、祇女、佛御前の名あり平家二

きつし　藤原佶子　後宇多天皇を生む増四四　龜山天皇の女御となる増八五　龜山天皇の皇后となる増八七　後宇多天皇を生む増九二　崩ず増二四

きつすゐのさきのだいそうじやう　吉水前大僧正　じちん　慈鎮今物

きつすゐほふゐむ　吉水法印　花咲かむの歌を後醍醐天皇に上る芳五

きつすゐをしやう　吉水和尚　じゑん　慈圓徒

きどうさんし　儀同三司　これちか　藤原伊周著

きどうまる　鬼同丸　源頼信に縛せらる著一四四　源頼光を討たんとす著一五　源頼光に殺さる著一七六

きとく　歸德　柞を用ゐると故實たり著二〇

きなしのかるのたいし　木梨輕太子　安康天皇、皇兄の東宮木梨輕太子を殺す水二四

きのかみ(一)　紀伊守　伊豫介(一)の子たり源毛　源氏君方違の爲葵上の宿所より、その中川の邸に赴く源毛上　空蟬は伊豫介(一)の後妻、紀伊守(一)の繼母たり源元　源氏君再紀伊守の中川邸に赴く源四五　軒端荻は其妹たり源五一　河内守となる源三三　空蟬に懸想す源三三

きのかみ(二)　紀伊守　小野大尼君に薫君の近況及び浮舟との關係を語る源三三九　小野大尼君の孫たり源三三八

きのかみ　紀伊守　すゞし、仲頼、仲忠、行雅と共に吹上の藤井の院に花の宴す、紀伊守尋ね來る宇津二四　仲頼に前の守の惡政の整理に苦むをいふ宇津二五　仲忠、行雅、仲頼、四月一日吹上より歸る紀伊守送る、酒宴あり、すゞし歌を詠ず、各人皆詠ず宇津二三　紀伊守、すゞし仲頼らをせきのもとまで送る宇津二五

きのかみのきたのかた　紀伊守北方　すゞしの若君の產養に鯉、海苔等を奉る宇津五九

きのご　紀御　あさこ　藤原朝子今鏡

きは　木は　橘枕五

きはう　義寶　源頼政にまたがひて六波羅を夜うちせんとし曉にれよぶを以て中止す平家二八

きはち　打手紀八　源爲朝に從うて上洛す保三

きびつひこのみこと　吉備津彦命　西海道を巡察す正七

きびつひめ　吉備津姫　皇極天皇の母なり水四三

きぶね　貴布禰　和泉式部男のかれがれになりたるとき此所に詣でゝ祈る其驗ありとぞ著九一　增基此所にて歌を詠ず庵九

きへいじだいふ　三町礫喜平次大夫　源爲朝に從ひて上洛す保三　山口六郎と戰ひ傷けられて退く保四二

きほふばう　義法坊　ためよし　源爲義保徒四七

きみこ　藤原公子　西園寺實氏に戒めらる増六三　後深草の女御となる増六四　熊野に詣づ増八〇　東二條院と稱す増八五　龜山殿に櫻を觀る増八七　二條富小路殿に御遊をなす増九一　後嵯峨上皇の五十賀の試樂に臨む増九三　後嵯峨上皇と龜山殿に行啓す増九七　皇女を生む増一〇〇　後嵯峨法皇と龜山殿に行啓す増一〇一　北山の准后貞子の九十賀に赴く増一三七　崩ず増一三三

きみこないしんなう　君子内親王　わが宿にの歌を宇多天皇に奉る大和一四　れなしねをの歌を宇多天皇に奉る大和一五

きみひとしんなう　君仁親王　行尊、君仁の病を加持す今鏡一三七　母は藤原璋子たり足なえて立たず十七歳にて薨ず今鏡一五六

きみを　藤原公雄　後嵯峨上皇の五十賀の試樂に臨む増九四　心あらばの歌を詠ず増一〇三

きんあき　藤原公顯　龜山殿に笙を吹く増九九　後嵯峨上皇の五十賀の試樂に笙を吹く増九五　龜山法皇の葬送に供奉す増一三三　いくしほかの歌を詠ず増一三五　花園天皇の元服宴に琵琶を彈ず増一六〇

きんあきのむすめ　公顯女　尊良親王との間に姫宮を生む増一九七

きんあきら　藤原公明　謎を作る徒四一　後醍醐の朝覲の行幸に供奉す増一六七　後醍醐の北山の花見に參す増一八七　六波羅に捕へらる増一九三　中納言を免ぜらる増一九六　その女藤原璋子は鳥羽天皇の中宮たり正八五

きんえふしふ　公葉集　藤原公任撰す女等

打ち集りてこれを批評す無四五

きんかげ 秦公景　下野敦景と五月會に競馬す著一八

きんかぜ 秦公正の子たり著一八

公風　邦良親王の薨去によりて出家す増一八〇

きんかた 公賢　安福殿にて歌合をなす増一六六　後宇多法皇の御前に琴を彈す増一九九　後醍醐の御遊に箏を彈ず増一七〇　正月十六日の節會に參す増一八五

きんきよ 公清　賀茂の祭の使たり増一七五

きんさだ 秦公貞　採桑老を多近方に傳ふ著一三七

きんざね 藤原公實　薨ず讃三〇　和歌を善くす今鏡三六　藤原璋子は公實の第三女なり崇德天皇を生む今鏡三六　右近の馬場に郭公を尋ぬ今鏡一四一　思ひ出づやの歌を詠ず今鏡一四三　山ほとゝぎすの附句をゆりばなに贈る今鏡一四三　藤原實行は公實の三子たり今鏡一四五　藤原實行同通季の父なり今鏡一四四　藤原實行が久しく四位の中納言にして昇進せざるを歎く今鏡一四四　藤原通季、公實の四子たり今鏡一四五　藤原實能、公實の六子たり今鏡一四五　藤原季成、公實の末子たり今鏡一四五

きんし 藤原忻子　長樂門院と號す増一九九　藤原公孝、その女忻子を後二條の女御に奉る増一九九　宮中を退出す増一九九

きんし 藤原忻子　後白河の皇后藤原公能の女、母は俊忠の女今鏡一三一　容貌美麗たり今鏡一三四

きんしげ 巨勢公茂　金岡の曾孫たり著二〇五

きんしげ 藤原公重　後嵯峨上皇の五十賀の試樂に臨む増九四　後醍醐の隱岐に行幸あるの時御車寄に侍す増二〇〇

きんじやう 今上　朱雀院の皇子にして母は承香殿女御(二)たり源三六　冷泉院の春宮となる源三四　元服す源五六一　東宮のとき、麗景殿女御(二)入内して妃となる源五六一　朱雀院の女三の宮の後見を源氏の君に托すべきことを朱雀院に奏す源五六　東宮たりし時、明石中宮入内して妃となる源五八　承香殿女御(二)と共に朱雀院に謁す源五六　春宮(二)を生む、母は明石の中宮たり源六三　柏木君、今上より朱雀院の女三の宮の方に居りし唐猫を請ひ受けて寵愛す源六四　柏木君、今上の御方に參じて朱雀院の女三の宮に居たる唐猫のことを物語りす源六五　冷泉院、今上に位を禪る源六七　句宮を生む母は明石中宮たり源六二　常陸宮(二)は第四皇子たり源八七　兵衛督(二)を召して鬚黑君の大姫君か入内せさるとを詰問す源八五　衛門督(二)、句宮が宇治八宮の中の君と通ぜるとを奏聞す源九一　句宮、今上及び明石中宮に宇治八宮の中の君と通ぜるとを知られて禁足せらる源九一　今上其の女二宮を薫君に配せんとす源一〇四　薫君を召して碁を圍む源一〇五　薫君今上に歌を詠みかく源一〇六　薫君に今上の女二の宮を配せんとを諷す歌を薫君に詠みかく源一〇六　今上の女二の宮が三條宮に移らんとする前夜に今上藤壺にれいて藤花宴をもよほす源一〇七

きんじやう 今上　大將の姫君、男子として生ひたち才名天下に高し、朱雀院及び今上之を殿上せしめんとす取六　春宮たるの時右大臣の女中の君を女御とす取六　大將の若君の女裝せるが美名高きをきゝ召さむとすれと物耻にとよせて大將辭す取七　中納言(大將の姫君)三月みかど南殿の花を御覽せらるゝ時難き題の文を作る博士文人の上にあり父大將涙を落す取七一　中納言(姫君)、三月南殿の花の宴に笛を吹く帝いよ〳〵御感斜ならず中納言(姫君)を右大將となす宮の中將亦權中納言となる取七三　朱雀女一宮の使宣耀殿に至りてもとの大將今の內侍督なる姫君に宮心地例ならず內侍督疾く參るべしといふ又人々取沙汰して曰く大將(姫)は室四の君か宮の中將と通ぜるにうんじて吉野に隱れたるを吉野の大い君に思ひつき且父大將の命默し難く再ひ世に出てたるなりとみかど聞きて大將(姫)の佛に歸せざりしを喜ぶもとの內侍督今の大將たる若君の心地如何ありけん取三　女一宮に內侍督の近く添ひ侍るがゆかしくて忍びて梨壺に渡り給ふに宮白きふすまかづきてあり傍に內侍督なる姫君あり取三五　大將なる若君、女一宮の御惱にことつけて殿居がちなり帝若君に內侍督(姫君)を奉らんとを求む若君まかでゝ父大將に今は奉るも眞の女子なれば差支なしと勸む宮の中將との關係もありぬれば公然奉るべきに非ず自然に覺しつきて女御后ともなるべしとなす取一九　朱雀の女一宮產後世に生きとまらんの心もなく今一たび朱雀院に見えん尼にならんといふにさらばとて院の方にむかふみかど內侍督なる姫君が宮に從ひて院の方に行くかと憂へて姫君の父大將に問ふ、さにもあらじときゝて喜ぶ取一四　內侍督を忘れ難く宣耀殿の前をたゝずむに姫君(內侍督)琴をひけり調べ大將のと異ならず帝哀なる姉妹と思ふ帝その

寢ぬるに及んで忍び入る姫君始め宮の中將と思ひ妬く思ふその然らざるを知るに及んで遂に抗するの力なし乃ち行く末をちぎる帝未明にかへる取一四　曉に宣耀殿より歸り大將(若君をめして消息を密に內侍督(姫君)に傳へしむ大將(若君)近づき給ひしかと猜す取一四　若君(大將)、みかどの姫君に近づき給ひしを父大將に告ぐ大將喜ぶ取一四　大將の姫君、春よりみかどのみこを孕む儲貳なき時とて帝及父大將以下皆喜ぶ取一三　姫君、みかどの二の宮、三の宮、姫宮と引きつゞき生む取一五　中宮(姫君)の宮の若君を撫でゝなくを偶おはし見て疑を起し曾て數月中宮の病と稱して女一宮に參らざりし事、宮の若君の年など思ひ合せてその母子なるを知る大將(若君)の若君は女一宮のなりと人のいふも誠かと思ひ知る帝乃ち之を中宮に語るに中宮語なし取一六　帝位を春宮に讓り二の宮を立てゝ太子となす取一六

きんしやう　今上　とうぐう　朱雀帝春宮宇津

きんすけ　藤原公相　後深草天皇と花德門の壺にて蹴鞠す嗚一　後嵯峨上皇の宇治行幸に供奉す增七　後嵯峨上皇に朝賀す增七三　藤原嬉子公相の喪に服す增八三　薨ず增八三　父實氏に先ちて死すべしと豫言す增八三　死後頭を盜み取らる增八四　龜山殿に歌合をなす增八八　龜山殿にて琵琶を彈ず增八九　龜山殿にて朗詠す增八九　二條富小路殿にて御遊をなす增九一　薨ず增九一　父實氏に先ちて死ぬべしと豫言す增九一　藤原嬉子、父公相の喪に服す增九三　藏原實俊、父公相の喪にて胡飯酒の舞をなさず增九六

きんすけ　秦公助　隨身秦公則の子なり著一九八

きんすゑ　藤原公季　藤原義子の父たり枕一三〇　藤原公成、公季の養子となる大鏡一〇五　幼時禁中に養はる大鏡一〇七　その孫なる公成を愛す大鏡一〇七

きんたか　藤原公孝　女忻子を後二條の女御とす增一九九

きんただ　源公忠　たまくしげふたとせあはぬの歌を小野好古に贈る大和三　消息を小野好古に贈る大和三　季繩を哀悼す大和三　思ふらむの歌を詠ず大和三四　春はたゞの歌を詠ず大和四三　ゆきやらでの歌を詠ず大鏡一〇五　鷹狩を好む大鏡一七三

きんだちは　君達は　頭辨枕一九八

きんたふ　藤原公任　春來てぞの歌を詠す宇治一三　法師を罵りて殃に逢ふ宇治一七　藤原道長が大井川に遊覽するの時和歌の船に乘りて朝まだきの歌を詠す著八　藤原頼通と春秋の花の中最も勝れたるものを論ず著一四　藤原齊信と共にすこし春ある心地こそすれといふ句を書して清少納言に贈る枕九三　聲明の德によりて才能人に勝れたり野一六　公任の撰金葉集を女等打ち集りて批評す無四五　藤原歡子の祖父たり無一七　和歌に長ず大鏡一四　進の內侍に嘲らる大鏡一八　大井川に川逍遙す大鏡一八　大井川の逍遙に和歌の船に乘りてをぐら山の歌を詠す大鏡一八　四大納言の一人に算へらる大鏡一八三　さゞなみやの歌を詠ず今鏡一一四

きんちか　藤原公親　後白河院の高松殿に移徙あるの時供奉す保三七　藤原實能の子、母は藤原宗忠の女なり今鏡一五五　久明親王の母は公親の女なり增一四七

きんづく　藤原公繼　藤原實定の子なり著一三　幼時相人ありて大臣の位に昇るべきことを相す著一三　內裡の女房と契り本意遂けたる時我願既滿衆望亦足といふ句を誦す著一五五　牛犬雞に唐人烏帽子等を中原師季に與ふ著一三三

きんつね　西園寺公經　園別當基氏が百日の鯉を料理せるをあざける徒九〇　藤原公經後鳥羽上皇の討幕の舉にくせず增一三　西園寺を北山に建つ增四五　山さくらの歌を詠ず增四五　熊野詣てす增五一

きんつね　公經　河內守に任し某寺を修理せんとせる時佛壇の下より沙門公經と書きて來世此國の守となり此寺修理せん云々と認めたる文を見出し自己の前世を知る今鏡二一五

きんつら　洞院公行　松翁大安寺に公行を訪ふ芳一四　よし野川の歌を後村上天皇の后の宮に贈る芳一五　洞院實世の子なり芳一五　洞院實世に訓戒せらる芳一五　後村上天皇の后の宮を戀ふ芳一五　大安寺に遁世す芳一六

きんつら　藤原公貫　龜山法皇の葬送に供奉す增一五四

きんとき　坂田公時　源頼光の四天王の一人たり著一七五

きんとし　藤原公敏　安福殿にて歌合をなす增一六六　後醍醐の朝覲の行幸に供奉す增一九一　下野國に流さる後醍醐に奈良に供奉す增一九一　小山秀朝之に從ふ增二〇

きんとも　公朝　藤原時成と共に鎌倉に下

向し京都の形勢を源頼朝に訴ふ平家三四

きんなが 公修 安福殿にて歌合をなす増一六六

きんなが 橘公長 平家相傳の家人たり平家三五元 源義經の命によりて平宗盛を斬る平家三元

きんなり 藤原公成 公季の養子となる大鏡一四五 藤原公季に愛せらる大鏡一四七 藤原茂子の父たり今鏡二九 末流相次いで外戚たり今鏡一四一

きんのぶ 公信 藤原隆家、道長の酒宴に公信を怒る大鏡二四四

きんのり 隨身公則 公助の父たり著一六六

きむのり 藤原公敬 君が代のゝ歌を鳥羽法皇に奉る著八二 記錄所の上卿となる今鏡六四 藤原實行が老體にて後白河院の内宴に列せんとするを諫む今鏡一四四 藤原實行の子、母は藤原顯季の女なり容姿を粧ふを喜び笛に堪能にして且政治の才あり今鏡一四七、 藤原琮子及基房の北方の父たり今鏡一四六 三條内大臣又は高倉大臣と稱す今鏡一四六 梅壺女御藤原琮子の父たり今鏡一四六 藤原實綱、同實房の父たり今鏡一四七 藤原實國の父たり今鏡一四七 藤原實房の父たり今鏡一四七 藤原實行の子、藤原公行の兄たり今鏡一四七 實重月はも

れ時雨は止れとたもふにはといふ上の句を詠じて公敬と連歌す今鏡一八九 源有仁八重櫻秋の紅葉や如何ならんといふ下の句を詠じて公敬と連歌す今鏡一八九 奈良の都をたもひこそやれといふ下の句を詠じて源有仁と連歌す今鏡一八九 ふきぞわづらふ賤のさゝやをといふ下の句を詠して實重と連歌す今鏡一八九 藤原光頼、公敬と共に勅によりて藤原得子を訪ひ鳥羽院の遺戒を拜す保三四

きんのりのはは 藤原公敬母 「常磐の山は春を知るらん」今鏡一四五 歌人たり其勅撰集に載れる歌多し今鏡一四五

きんはる 秦公春 沓のうちにも飛ふ衙かたといふ上の句を詠じ藤原頼長と連歌す今物七 強力なり著一九 藤原頼通を諫む著一九 秦兼清と共に源有治の郎等の狼藉を取りしづむ著二五

きんはる 公春 實衡大臣の大饗に琴を彈ず増一六 後醍醐の北山の花見に琴を彈ず増一六

きんひら 藤原公衡 太政大臣たらずして出家す徒三 藤原公能の子なり藤原實守の養子となる今鏡一四五 西行に疎んぜらる増二六 北山の准后貞子の九十賀に赴く増二六 後深草龜山西園寺行幸の時笙を吹く増二三 北山の准后貞子

の九十の賀に笛を吹く増一四七 龜山院を六波羅に移さんとす増一四三 龜山法皇の葬送に供奉す増一五五

きんひらのむすめ 橘公平女 信明と通ず大和三六 こち風はけふ日くらしにふくめれどの歌を藤原庶忠に贈る大和三七 逢ふことのゝ歌を詠す大和三七 大空もの歌を詠す大和三七 昔きての歌を藤原庶忠に贈る大和三七 のどけくもの歌を詠す大和三八 この世にはの歌を源信明に贈る大和三七

きんふさ 藤原公房 出家して高野山に入る今鏡一三

きんふぢ 公藤 蓮華王院の行幸に供奉す増七七 後嵯峨の如法經供養齋會に笛を吹く増八〇 後嵯峨上皇の如法經供養齋會に列す増八〇 後嵯峨上皇の五十賀の試樂に臨む増八四

きんまさ 秦公正 秦公景の父なり著一八

きんみち 藤原公通 近衛帝の東宮たるの時その女房の使をなす今鏡一〇六 藤原實宗の父たり今鏡一四七 實明の父たり今鏡一四七 藤原通季の子たり今鏡一四七 平清盛に緒形惟義及び松浦黨等平家に背けるとを告ぐ平家二六二 平宗盛、安德天皇を奉じて宇佐八幡宮に赴き大宮司公通の家を

行在所とし尋て又太宰府に歸る平家三六

きんみつ 藤原公光 藤原季成の子、母は藤原顯頼の女、詩歌に長し神樂歌をよくす今鏡一五五 後嵯峨上皇に朝賀す増一五

きんむね 藤原公宗 藤原實行の子、伺公行の弟、母は藤原顯季の女たり今鏡一四七

きんむね 藤原公宗 薨ず増一〇四 後醍醐の北山の花見に參す増一八 後醍醐の北山の花見の和歌披講の序を書く増一八六 後醍醐の廉子の腹の御子の後見となる増二〇六 六波羅より北山に遁る増二二〇 誅せらる正二六

きめいてんなう 欽明天皇 聖德太子の祖父たり著二 佛法始めて渡來す著二 百濟國より始めて金銅釋迦の像經論幡蓋を貢す著二 即位の十三年百濟より佛經を貢す水二 安閑の兄弟なり水二 母は手白香なり水二 敏達天皇欽明の第二皇子たり水三 用明天皇欽明の第四皇子たり水三 崇峻天皇、欽明の第十二の皇子たり水三 推古天皇の父たり水四 應神天皇、欽明の朝、神と現る正三 即位す正四二 磯城島金刺宮にいます正四二 帝の朝佛教傳來す正四二 群臣佛教を排す正四二 帝の時難波堀江に佛像を投ず正四五

きんもち 公望 藤原實頼の囑により僧子

にゑかく 著二六

きんもと 藤原公基 北山の准后貞子の九十賀に拍子をとる 増一三〇 大將に任ず 増六六

きんもり 藤原公守 龜山天皇讓位の儀に臨む 増一七七 北山の准后貞子の九十賀に赴く 増一三六 伏見天皇、母后の兄公守の女を寵す 増一三六 花園天皇元服の宴に篳篥を吹く 増一六〇

きんやす 德大寺公保 德大寺實能の子、母は廊の御方たり 今鏡一四八 藤原通季の女 藤原實能の子、母は藤原通季の女 藤の御方たり 今鏡一五五

きんやす 公泰 大納言典侍を後醍醐より賜はる 増一六五 後醍醐の朝覲の行幸に供奉す 増一七七 後宇多法皇の舞樂の宴にやくそうを勸む 増一六六 後醍醐の石清水行幸に供奉す 増一七三 正月十六日の節會に參す 増一八三 後醍醐の北山の花見に參す 増一八七

きんゆき 藤原公行 藤原實行の子、藤原公宗の兄たり 今鏡一四七 藤原實長の父たり 今鏡一四七 藤原實行の子、藤原公敎の弟、母は藤原顯季の女たり 今鏡一四七 長德四年播磨守に任す 今鏡二〇八

きんよ 藤原公世 良覺の弟たり 徒一八

きんよし 藤原公能 藤原實能の子たり 著二四 藤原實能の子、母は藤原顯隆の女、管絃詩文の才に富む 今鏡一四〇 後白河の皇后藤原忻子の父たり 今鏡一四四 藤原多子、公能の養女たり 今鏡一五三 實全の父たり 今鏡一五五 藤原實定及同實家の父たり 今鏡一五三 藤原公衡の父たり 今鏡一五五 後白河院高杉殿へ移徙ある時供奉す 保元 藤原多子、公能の女にして近衞院の后たり 平家三 五月闇名をあらはせる今宵かなといふ上の句を源頼政に詠みかく 平家二〇〇 源頼政たそがれ時も過ぎぬと思ふにの句を詠みかく 平家二〇〇

きんよしのむすめ 藤原公能女 後白河院の宮人、惇子親王の母たり 今鏡一五五 惇子內親王の御母たり 今鏡二〇三

きんわうまる 金王丸 源義朝、常磐が許に遣して身を隱さしむ 平治六 源義朝堅田にて從兵と別れ金王丸外六騎を從へて東國に走る 平治六 源義朝が長田忠致に殺されし時奮鬪の後都に歸る 平治六 源義朝が長田忠致に殺されしことを常磐に告ぐ 平治七 出家して源義朝の後世を弔ふ 平治七

ぎやうい 行意 赤痢病にて重體の時志賀の毗沙門天の加護を受けて全快す 著一四

ぎやうが 行雅 廣橋雅清の子なり 徒一七

奇病に罹る 徒一七

ぎやうかく 行覺 みちなが 藤原道長 大鏡

ぎやうき 行基 武庫山中にて病者を療養す 著三五 かりそめのゝ歌を詠ず 著三六 昆陽寺を建立す 著三六 山崎の橋を造る 水六 四聖の一人なり 正五二

ぎやうくわい 行快 海賊を威服す 著三三

ぎやうくわん 行觀 みちなが 藤原道長 大鏡

ぎやうけい 行慶 夕暮にの歌を詠す 今鏡一九七 白河院の皇子、母は政長の女、藤原忠通の戒師たりこまの僧正と號す 今鏡一九七 葉室光賴の子なり、平經正が都落の時 桂川まで見送る 平家三〇 あはれなりの歌を平經正に詠みかく 平家三二 平經正旅衣の歌を行慶に詠みかく 平家三二

ぎやうげん 行玄 鳥羽院の御信任を受く 今鏡二三 鳥羽院のわらはやみを祈る 今鏡二三 その弟覺快法親王、天台座主となる 平家四九

ぎやうごくどの 京極殿 もろざね 藤原師實 今鏡

ぎやうごくのうへ 京極上 長じて容貌天下に比なし 宇津一四 父俊蔭琴を敎ふ 宇津一四 悉く琴の秘曲を傳はる帝嵯峨東宮朱雀幸せむとす 宇津一四 俊蔭、女を人に許さず 宇津一五 俊蔭、なん風、はし風二琴を與へて女に遺言す 宇津一五 十五歲母に別る 宇津一五 乳母の婢嵯峨野獨仕ふ 宇津一六 父及乳母と死別す 宇津一六 家貧しく或は食ひ或は食はず 宇津一七 わびゝとはの詠秋ひとりながめやる 宇津一七 兼雅祭の歸途、京極上の家の薄を折る 宇津一八 兼雅、賀茂社に行くの途次、京極上を訪ふ 宇津一八 兼雅、賀茂の歸途、京極上の家の前を過りて瞥見す 宇津一八 兼雅京極上を思ひやりて歌を詠す 宇津一八 かげろふのゝ歌兼雅に始めて答ふ 宇津一九 兼雅、京極上にその父母の名を問ふ京極上これをいはずしてたゞ琴を彈ず 宇津一九 兼雅、京極上と一夜を語る 宇津一九 兼雅の前に泣く 宇津二〇 兼雅、葉末だにの歌を詠じて京極上に誓ふ 宇津二 兼雅父母の己を索ぬるを察し京極上に再會を期して別る 宇津二 あさぢふにの歌兼雅と別を惜む 宇津二 兼雅の父太政大臣、兼雅を愛して片時も放たざるにより兼雅、京極の上を訪ふと能はず 宇津三 兼雅、京極上を思うて獨り詠めやる 宇津四 身孕めるも知らず幼く亡父母を慕ひ又かねまさを

思ふ宇津三四　兼雅の子を孕む宇津三四　婢の言に山つて始めて其身の孕めるを知る宇津三五　嵯峨野能く仕ふ宇津三六　仲忠を生む宇津三六　嵯峨野、夢を解きて慰む宇津三七　婢嵯峨野死す宇津三九　仲忠五歳、魚を釣りて母を養ふ宇津三九　仲忠果實を拾ひ草根を堀つて母を養ふ宇津四〇　仲忠、母を養ふべき所を山に索め杉のうつぼを得宇津四〇　涙川の詠仲忠の孝に感泣す宇津四一　琴を仲忠に教ふ宇津四二　仲忠、琴を母に習ふ宇津四三　東國の兵亂をなしうつぼの近傍に陣す宇津四五　父の遺言を追懐し秘琴なん風をひくに天地鳴動し山谷崩れ東國の兵皆死す宇津四五　兼雅、忠雅と共に嵯峨帝の行幸に從うて北野に行き遙に俊蔭の女の琴聲を聞く宇津四六　兼雅、琴の聲をとめて、うつぼに至り俊蔭の女に再會す宇津四七　兼雅、再び俊蔭の女及び仲忠を訪ふ宇津四八　兼雅、忠乞が繼母に計られたるを京極上に告ぐ宇津四九　兼雅、京極上にうつぼを出てむとを勸む宇津四九　兼雅、京極上を三條の北堀河の西にすう宇津四九　兼雅と共に仲忠の才を喜ぶ宇津五〇　兼雅、桂に大家を造りて京極上と花を樂む宇津五〇　兼雅桂の家に、京極上と往事を語る宇津五〇　朱雀帝、仲頼を使として桂の里なる京極上に歌を賜ふ、行雅、輔純、仲純從ふ宇津五〇　仲忠吹上よりかへり朱雀帝の歌に勅答す宇津五〇　仲忠吹上よりかへり仲頼、行雅に別れて忠康の邸よりかつらに歸り、すゞしよりの引出物を、嵯峨院、父兼雅、母京極上に頒つ、金の舟は思ふ心ありて殘せり宇津五六　神泉に紅葉の賀あらんとす兼雅乃ち室京極上をして秘琴なん風を出さしむ宇津五九　兼雅、京極上をして力士に與ふべきかづけ物を用意せしむ宇津六〇　兼雅、京極上に、雅頼を訪ひ、馬を賭して鞠を射たる顛末を談ず宇津六〇　朱雀帝、仲忠琴を辭する代りとして、母京極上を參内せしむ宇津六六　仲忠、朱雀帝の命辭し難く、母京極の上を參内せしめんとして父大將の車に乘り三條殿に到る、京極の上相撲の勝負を問ふに左勝つと聞き夫兼雅の右大將たるに由て嘆息す仲忠我は左中將にあらずやといふ宇津六九　仲忠、母京極上に左近の相撲に勝ちたる盛なるさまを物見せんとを勸む宇津七〇　仲忠、うまの佐國時をして母京極の上參内の馬車を用意せしむ宇津七〇　國時馬くるまを用意す馬はすゞしの贈れるつるぶちなり京極の上唯物見するとと思ひ十數人の伴人ひきゐて出でたつ美いふかぎりなし仲忠見て

母たるを忘れては天女かと疑ふ宇津七〇　仲忠、京極の上を車に止めてまづ獨り御前に參りまた妹梨壺女御に參りて物語す、女御、たよりなきを折々は訪はれよといふ宇津七〇　仲忠、梨壺女御より几帳を請ひて再び京極の上の車に至り車を下りしむ宇津七〇　仲忠燈を暗くして母京極の上を導く朱雀帝の御前なり、兼雅亦その誰たるを知らず宇津七〇　唯物見と思ひて御前にとは思はざりしを朱雀帝に奏す宇津七六　朱雀帝京極の上に昔俊蔭在世の時召さんとせしも果さず後ち行方を知らざりきと宣ふ宇津七〇　朱雀帝、仲忠の代りとして京極の上に琴を彈かんとを勸む、京極の上琴といふ名も知らずとて辭す宇津七〇　朱雀の命辭し難くして琴をひく嘗てうつぼを出てゝより琴に手をふれず今ひいて往事を追懐す宇津七六　京極の上の琴に朱雀帝心止まりて、哀れと思ほす、兼雅以下諸人仲忠以外、亦此の名手あるを知らずして怪む、仲忠亦佯り怪む宇津七七　京極上の琴に合せて仲頼、行雅、唱歌、すゞし、仲忠詩を誦す宇津七三　朱雀帝相撲節會に京極上の琴に感し内侍督となす上達部をして名を署せしむ　季明、忠雅、雅頼、兼雅、民部卿、平中納言、左衛門督文雅、誰なるを知らずして各官位姓名を署して歌を詠す宇津七三　琴を彈じ終るや、朱雀帝感じて節會毎に琴仕う奉るべき由いふ宇津七五　朱雀帝、楊貴妃が七月七日長生殿にて聞え契りし例をひき京極の上に歌を賜ふ宇津七七　兼雅、新内侍督に物參りなとする時始めて己が妻京極の上なるを知る宇津七七　實頼、朱雀帝の命により京極の上内侍督となれる夜みづから人を使役して菓子を調じて京極の上に奉る宇津七七　朱雀帝、朱雀后宮、仁壽殿女御皆京極上が内侍督となりたるよろこびの贈物をいかめしうせんとす宇津七九　朱雀帝、京極上に宣はく女官の任免は汝の自由たるべし、私の后と思はむ寢所に清涼殿をも讓るべし兼雅何ぞ之を制せんと宇津七九　朱雀帝、京極上にこの十五日に迎へんと宣ふ京極上、かぐや姫の故事をひいて答ふ、子安貝のことゞもいふ宇津八〇　仲忠がとらへて朱雀帝に奉れる螢をみて歌を詠す帝その才に感ず兼雅亦侍す終夜語つて夜あけて罷づ宇津八一　季明一生に一度の美をつくし京極の上に贈物す、女は俊蔭か女、男は名高き兼雅なればなり宇津八三　朱雀后宮、京極の上に内侍督となりたるよろこびの贈物す裝束等善美を盡せり宇津

一八三 仁壽殿女御、京極の上に内侍督となりたるよろこびの贈物す善美を盡せり異公達はゐ贈らず女御は左大將の女なるを以てよく贈れるなり宇津一四四 仲忠、京極に第を起して母京極の上を迎へんとす宇津四七 仲忠三條に赴き藏開のことを京極上に物語る宇津四二〇 往事を追懷す宇津四三 仲忠と共に古文書の目錄を見る宇津四一〇 仲忠の室女一宮、京極の上及仲忠の琴によりて產後の疲勞を慰めらる宇津四六・琴を彈ず宇津四六 兼雅と物語す宇津四二 笙を奏す宇津四七 ないしのすけ、京極上あて宮及女一の宮の容貌を評す宇津四五 仁壽殿女御より、犬宮の五十日の儀式あるを報ぜらる宇津四四 仁壽殿の女御に返書を贈る宇津四六 仲忠、三條に赴きて京極の上に對面す宇津五〇 仲忠に消息す宇津五〇 兼雅、京極上と語つて戲れかく宇津五二 髮長くして九尺に餘る宇津五二 仲忠、京極の上に一條宮を迎へ來りし旨を告げて退く宇津五三 仲忠、母京極上に米一石、炭二荷を奉る宇津五六 兼雅、京極の上に宮の中の君の身の上を語りて彼の投げ出したる文を示す宇津五七 兼雅に勸めて右大將より贈りし絹帛を中の君に贈らしむ宇津五六 一條宮の容姿を賞す宇津五〇 正月七日三位に加階す宇津五四 いぬ宮の百日の儀を行ふ宇津五四 盛裝せる樣なほ處女の婚姻の式に臨めるが如し宇津五〇 贈兼雅、北の方京極の上に中の君のことを物語る、京極上之を聞きて身の往事を追懷しまつとてはの歌を兼雅に示す宇津五五 仲忠、朱雀女一宮、犬宮、雅頼等と共に兼雅の桂の邸に行く宇津六九 朱雀女一宮、女二宮、女三宮等と桂の邸に祓へす夜更けて管弦の興あり十九日の月山の端に見ゆ、歌を詠ず宇津六五 仲忠、京極の上を訪ひて物語す宇津七三 雅頼、京極の上の許に來りて物語す宇津七三 女一宮の難產を歎く宇津七九 女一宮の產室に侍す宇津七四 女一宮に朱雀院に參るへきよしをすゝむ宇津七四 宰相の上、宮君の行方を仲忠に探らしむ宇津七五 仲忠、京極上に宰相の上のことを語る宇津七七 宰相上、京極上に返書す宇津七八 宰相の上に消息を贈る宇津七八 兼雅と宰相の上のことを語る宇津七九 仲忠に宰相の上のことを語る宇津七六 兼雅の他宿多きを歎ず宇津七六 仲忠、京極の上を慰む宇津七九 宰相の上京極の上に返書す宇津七三 宰相の上に消息す宇津七三 仲忠、京極の上と往時を語る宇津七四 嵯峨院、京極上の琴を聞かむと思す宇津七四 仲忠、京極の上に移轉の裝束を上る宇津七五 京極邸に移りて往事を懷ふ宇津八〇 朱雀院より消息を賜はる宇津八〇 京極邸に移りて往事を懷ふに兼雅之を慰む宇津八〇 朱雀院に返書を奉る宇津八〇 仲忠に輔けられて新築の樓に昇る宇津八五 いぬ宮の彈琴を感嘆す宇津八〇 參佛す宇津八二 秋風に昔時を憶ひて歌を詠ず宇津八四 過去を顧みて仲忠の幼時を憶ふ宇津八五 經文を修す宇津八六 兼雅に對面せず宇津八六 雪を見て往事を憶ふ宇津八七 いぬ宮を慰む宇津八八 すゞし、仲忠に京極の上の琴をゆかしがる宇津八八 すゞし、仲忠に京極の上の琴を聞かしめんとを乞ふ宇津八三 仲忠に葵祭の桂を見て歌を贈る宇津八五 仲忠、京極の上の簾に葵祭の桂をつけしむ宇津八五 仲忠、母京極上に返歌す宇津八五 俊蔭を夢む宇津八九 仲忠に俊蔭を夢みしことを語る宇津八九 すゞし、嵯峨院にいぬ宮、京極の上の琴を語る宇津八五 遊樂にのそむ宇津八四 雅頼、京極上を見て美となす宇津八四 朱雀院に答ふ宇津八八 すゞし、京極の上に彈琴を勸む宇津八八 嵯峨院に彈琴を勸めらる宇津八四 嵯峨朱雀兩院の彈琴の切望に當惑す宇津八四 二葉までの歌を詠じて嵯峨院に答ふ宇津八四 りうかく風の琴を彈く宇津八五 琴の音內裏にひゞく宇津八三 琴聲天地を感動す宇津八三 琴を固辭す宇津八四 琴を彈いて人々を感ぜしむ宇津八四 嵯峨朱雀兩院、京極の上の琴に感嘆す宇津八四 朱雀院に返歌す宇津八四 嵯峨朱雀兩院、京極の上の琴を賞して歌を賜ふ宇津八四 琴を彈いて再び人々を驚嘆せしむ宇津八四 はしふの琴を彈く宇津八六 仲忠、京極の上の琴に驚く宇津八六 朱雀院、京極の上の琴を激賞す宇津八六 嵯峨院、京極の上に二位を加へんと欲す宇津八九 朱雀院京極の上を榮せしむる道を嵯峨院に計る宇津八九 俊蔭贈位の宣旨に感泣す宇津八六 正二位に叙せらる宇津八六 嵯峨院、京極の上其他に物を賜ふ宇津八五

きやうごくのおほとの　京極大殿　もろざね　藤原師實平家

きやうごくのげんだいなごん　京極源大納言　まさとし　源雅俊宇治

きやうごくのそうづ　京極僧都　そせい　素性大和

きやうごくのだじやうだいじん　京極太政大臣　藤原宗輔今物

ぎやうごくのちうなごん　京極中納言　さだいへ　藤原定家今物

きやうごくのにふだうちうなごん　京極入

道中納言　さだいへ　藤原定家徒

きやうごくのみやすどころ　京極御息所　藤原褒子大和

きやうごくのねん　京極院　増基此所にてげにぞ世はの歌を詠ず増

きやうごくのねん　藤原政子の院號たり正101

ぎやうさん　行算　梶井宮の命により柚を料理す著三七

ぎやうせん　行宣　唐土は律の香なく日本は呂の音なきことを吉田兼好に語る徒八〇

ぎやうそん　行尊　一條天皇の孫侍從宰相の子たり著三四　大峰葛城等諸靈驗の名地にて修業す著三五　草の庵の歌を詠ず著三六　堀河天皇を加持す眼八　宗通の家に獨鈷を忘る今鏡二六　君仁親王の病を加持す今鏡一三七　白河院、源雅實が病の時、行尊を遣して祈禱せしむ今鏡一三五　源基平の子白河鳥羽兩院の護持僧にして藤原璋子の病の時祈禱して驗あり今鏡一八四　書法に達し假字の手本等世に行はる今鏡一八四　常陸乳母花よりもの歌を行尊に贈る今鏡一八五　おもひきやの歌を常陸乳母に贈る今鏡一八五

ぎやうにん　行仁　鳥羽法皇の喪に服す増一四四

きやうのしま　攝津國經島　平清盛の遺骨を納む平家二六六　平清盛攝津福原に歸りこれを築く石の表に一切經を書き人柱に代へて築けるより經の島といふ平家二六六

きやうのつぼね　卿局　後鳥羽天皇遊興に耽りて政を卿の局に委ぬ平家五七三

きやうは　經は　法華經枕一四三

ぎやうほふ　行法　行の字を濁りて讀むと故實たり徒五五

きよいう　許由　瓢の風に吹かれて鳴りたるをかしがましとて取り捨つ徒七

きよいへ　平清家　平資盛に從ひ源範頼同義經の來攻を聞き三草山の西の山口に押し寄す平家三四三

きよかげ　源清蔭　藤原褒子より宇多天皇御賀の捧物を誂へらる大和二　青柳の〻歌を詠す大和二　昭子内親王に通ふ大和五　東の方に通ふ大和五　あくといへばの歌を昭子内親王に贈る大和五　住の江の〻歌を東の方に贈る大和五　久しくはの歌を詠ず大和五　あくとしもの歌を詠ず大和五　亭子院の若宮に通ず大和五　俊子等と物語す大和二　いひつ〻もの歌を詠ず大和二

きよくすゐのえん　曲水宴　顯宗天皇、曲水宴を始む水六

きよくに　深巣清國　源爲朝深巣清國を射て之を斃す保元　須藤家季深巣清國の首を取る保元

きよくに　平清國　正四位下に叙す平家一九九

きよざね　齋藤清實　出家して西實と號す平治一三

きよし　渡邊清　源仲綱に從ひ六波羅を夜討せんとし曉に及ぶを以て中止す平家一八二

きよしげ　別府清重　源義經に從ひ平宗盛追討の爲小野原に着陣す平家三九二　別府義重の子たり源義經に從ひ鵯越に向へる時老馬を追ひ立てゝ嚮導となすの策を献して用ゐらる平家三九五

きよしとみゆるもの　清しと見ゆる物　土器枕一九

きよすけ　大中臣清佐　大中臣佐國の孫たり著九

きよすけ　藤原清輔　藤原顯輔の子たり著一〇五　寶莊嚴院にて和歌の尚齒會を行ふ著一〇五　和歌尚齒會の時ちる花はの歌を詠ず著一〇六　和歌尚齒會の時老らくの〻歌を詠ず著一〇六　和歌尚齒會の時かぞふればの歌を詠ず著一〇六　和歌尚齒會の時老いぬとての歌を詠ず著一〇六　和歌尚齒會の時おもひやるの歌を詠ず著一〇七　和歌尚齒會の時つるのはねの歌を辨阿闍梨に贈る著一〇七　むかし見しの歌を詠ず今鏡六九

きよずみ　源清純　雅頼の九郎母は橘太政大臣の女たり年廿二式部丞たり宇津一九　仲純、馬の手番の試に九番に清純に勝つ宇津三六　父、雅頼の春日詣に題に由つて歌を詠ず宇津三七〇

きよたかのむすめ　藤原清隆女　梅壺女御藤原琮子の母たり今鏡一四六　藤原實房の母たり今鏡一四六

きよたきがはのひじり　清瀧川聖　水瓶を飛ばして水を汲む宇治三七

きよただ　渡柳清忠　源義經に從ひ平宗盛追討の爲小野原に着陣す平家三九二

きよつね　足立清恒　源頼朝の近習となる平治一四

きよつね　平清經　平知盛に從ひ源行家と尾張川に戰うてこれを破る平家三五　平宗盛等と共に都を落つ平家三四　豐前國柳が浦に投して薨す平家四三

きよつら　藤原清貫　寛蓮と碁を圍みて唐

綾四段を懸けものとす著三

きよなか 清仲 二條大宮の柱立部を毀ちて燒火す宇治九三 春日祭の乘尻を勤む宇治九三

きよなが 藤原清長 船岡に遊べる時怪異のとあり著三五

きよのぶ 戸部清延 笛の上手たり著一四 戸部清正の子たり著一四

きよはらのおほきみ 清原大君 俊蔭の父なり宇津一

きよふさ 平清房 木曾義仲征討軍の副將軍なり平家二八四 木曾義仲追討の時搦手の大將軍なり平家二八 平宗盛等と共に都を落つ平家三四 一の谷の戰の時奮戰して討死す平家四一六

きよまさ 左衛門督藤原清雅 雅賴の春日詣題に由て歌を詠す宇津三六 いはのうへにの歌を詠ず宇津四三六 元旦北の方の許に籠り居て愛兒の撫育に餘念なし宇津四三 中宮より召されて參內す宇津六四 中宮より二の宮を東宮に定むべきことを謀らる宇津六五 花の宴にたちよればの歌を詠ず宇津七四九

きよまさ 戸部清正 戸部清延の父たり著一四

きよます 原清益 源義經に從ひ平宗盛追討の爲小野原に着陣す平家二九一

きよまろ 和氣清麻呂 宇佐に使す水六四 八幡宮の神託を復奏す水六六 弓削道鏡清麿を大隅に流す水六六 高雄に神護寺を建立す平家三三 稱德天皇、清麿を宇佐に遣す正四四 神願寺を河內に建つ正四四

きよみがせき 清見關 菅原孝標の女過ぐ更六 阿佛尼此の地にて歌を詠ず十六夜二 源親行此の地にて歌を詠ず東一四

きよみがはらのてんなう 淨見原天皇 てんむてんなう 天武天皇宇治

きよみがはらのみや 飛鳥淨御原宮 天武天皇います正四九

きよみち 藤原清通 伊實の子たり今鏡一三三

きよみづ 清水 右大將道綱の母此所に詣づ蜻一四四 坂上田村麿觀音堂を建つ水七七 菅原孝標の女母と共に此所に詣づ更一六

きよむね 平清宗 平宗盛の子なり源賴政追討の賞によりて三位に叙す平家一九六 平宗盛等と連署して延曆寺に牒狀を贈りて之を誘ふ平家三八六 平宗盛等と共に都を落つ平家三四 檀浦に入水し死せずして和田義盛に生擒せらる平家五四九 入洛して大路を渡さる平家五五 京師にて梟

首せらる平家五三〇 堀親經、源義經の命により清宗を斬る平家五三〇

きよもり 平清盛 慈惠僧正の化身たり著四〇 福原に持經者千僧を集めて法華經を轉讀す著四二 藤原定家に命じて其駒の曲を嚴島內侍に傳へしむ著三三 維衡六代の孫增一七 平忠盛の子、基盛の父たり保二 清盛の弟賴盛、敎盛、經盛、嫡子重盛、二子基盛等清盛に從うて白河殿を攻む保二九 藤原得子、後白河院に勸めて清盛を召さしむ保三〇 後白河院、得子の勸めにより清盛を召して內裡を守護せしむ保三〇 鳥羽院、變の起らんとを慮り、內裏に召すべき武士の姓名、源義朝同賴政以下を記して遺詔す、平清盛獨りあづからず保三〇 源義朝源賴政とともに勅命を奉じて白河殿に向ふ保三六 源義朝と共に白河殿を攻む保三一 源爲朝の武勇に恐れ退きて北の門に向ふ保三一 平重盛、嫡子たり、父の退軍を諫めて用ゐられず轉じて春日表の門に向ふ保三〇 源義朝と共に內裏に凱旋す保四八 播磨守に任す保五〇 勅を奉じて源爲義父子等を搜索す保五七 平忠正、清盛につきて降る保六一 勅を奉じて平忠正、同長盛、同忠綱、正綱、通正等を斬る保六一 平忠正と不和たるを以てこれを斬り以て源義朝をして父爲義を斬らしめんとす保六三 源義朝と戰ふとの風聞ありて洛中騷動す保八一 後白河院を鳥羽離宮に幽す保八三 平重盛、嫡子たり平治六 藤原信親、婿たり平治六 平重盛と共に熊野に詣づ平治六 藤原信賴計つて源義朝、藤原經宗、同成親、同惟方等と兵を擧げて藤原通憲、及清盛を除かんとす平治六 清盛熊野に赴ける不在に乘じて 藤原信賴、源義朝と兵を擧げんとを謀る平治六 藤原成憲は通憲の次子にして清盛の婿たり平治九 源義平、清盛の歸途を安倍野に擁擊する策を立つ 藤原信賴之を用ゐず平治一〇 切部にて藤原信賴源義朝等擧兵のことを聞き急に京師に歸る平治一〇 京師の變を聞きて驚く平治一九 平家貞、武具を納めたる長櫃五十合を獻ず平治一九 湯淺宗重加勢す平治二〇 湛增加勢す平治二〇 紀州よりの歸途、源義平が安倍野に擁擊すとの風聞をきゝて躊躇し子重盛に諫められ意を決して京に入る平治二〇 六波羅に着す平治二六 伊藤景綱、命により二條院を六波羅邸に迎ふ平治二六 二條院內裡を脫して清盛の六波羅の邸に幸し行在と爲す平治二六 館貞康、命により二條院を六波羅の邸に迎ふ平治元 平重盛、同賴盛、同經盛等を遣して二條院の駕を六

波羅邸に迎ふ平治元　源頼政、源義朝を捨てゝ清盛に與す平治三　源光泰、源義朝を捨てゝ清盛に與す平治三　源光基、源義朝を捨てゝ清盛に與す平治三　二條院召して藤原信頼、源義朝誅伐の事を勅す平治三　抜丸相傳のことにより平頼盛、清盛と不和たり平治四　源義朝か六波羅を攻めし時驚き慮し兜を逆に着す平治四　源義朝、六波羅に襲ふ平治四　源頼政、心變りして源義朝に背き清盛に黨す平治四　源義平、金子家忠、足立遠元を率ゐ清盛の軍と六波羅に奮戰す平治四　源義平清盛を六波羅に責め奮戰し利あらずして敗走す平治四　平重盛、藤原成親の爲に哀訴して成親の死罪を赦す平治七　藤原信頼を六條河原に斬る平治七　松浦重俊清盛の命によりて藤原信頼を六條河原に斬る平治七　源師仲清盛に陳謝す平治五　正三位に叙す平治五　藤原經宗、藤原惟方、平清盛に勸めて藤原通憲の子僧俗十二人を流罪に處せしむ平治六　長田忠致、清盛か其行爲を憎めるを聞き尾張に逃げ下る平治七　源義平志内景澄の下人となり六波羅に出入して密かに害せんとす平治七　病により出家し淨海と稱す平治七　攝津國布引瀧に遊ぶ平治七　義經、圓成、全成を捜索す平治七

平宗清、源朝長の墓を發き其首級を斬りて獻ず平治七　常磐清盛が源義經、源圓成、源全成を捜索せるを聞き、三子を携へて大和國字多郡龍門といふ處に隱る平治八　地禪尼、源頼朝を憐みて助命のことを重盛に就きて清盛に請ふ平治八　池禪尼、清盛の繼母たり平治八　平重盛、池禪尼か再度の命により頼盛と共に源頼朝助命のことを清盛に請ふ平治八　常磐の母を捕へて常磐の所在を訊問す平治八　源義經、源全成、源圓成を宥免す平治八　後白河院、藤原惟方、同經宗の無道を憎み平清盛に命じて捕縛せしむ平治九　藤原經宗、藤原惟方を捕ふ平治九　弟家盛、三十三歳にして卒す平治四　常磐を寵し納れて妾と爲す平治九　毘切は、清盛の手にあり後ち後白河殿の御許にあり源頼朝上洛の時院より返し賜ふ平治一四　平忠盛の嫡子たり平家二　保元の亂の功により播磨守に任じ尋で太宰大貳に轉す平家七　伊勢安濃津より熊野に赴くの途鱸あり躍りて其の舟中に入る衆以て瑞相となす平家七　平治の亂の功により正三位に叙し尋で累進して從一位太政大臣となる平家七　出家して淨海と稱す平家八　平時忠、小舅たり平家八　一門繁榮す平家九　嫡子平重盛、内大臣左大將たり

次子平宗盛、中納言右大將たり三子平知盛、三位中將たり平家九　童兒三百人を選びて京中を往來せしめ平家に平かならざるものを探索せしむ平家九　その女藤原基實の北の方、後准三宮の宣旨を蒙る平家一〇　その女平德子、建禮門院と稱す平家一〇　女子八人あり後白河院の女御、高倉院の皇后、並びに藤原兼雅、同基實、同基通、同隆房、同信隆の北の方及び花山院上﨟女房たり平家一〇　その女廊の御方、母は常磐なり平家二　知名の白拍子なる祇王を寵す平家二　一門の領地三十餘個國に及ぶ平家二　佛御前清盛の西八條殿に推參して舞踏し清盛の寵を受く平家三　佛御前召されし時きみをはじめて見る時はの今樣を謠ふ平家三　祇王平清盛の寵を失ひて西八條を出づる時もゐ出づるの歌を障子に書きつく平家四　佛御前を寵し祇王を逐ふ平家四　祇王を召す平家五　祇王召に應じ妓女を具して西八條に赴く平家六　祇王めされし時佛も昔は凡夫なりの今樣を謠ふ平家七　平重盛、清盛が後白河院を恨むを聞きて之を諫む平家七　後白河院が延曆寺の僧に命して平家を討たんとする風聞を聞きて後白河院を恨む平家七　藤原帥光清盛に平ならず平家七　後白河院、其專權を憤る平家八　天下の政權を專らにせるより世の人平關白と稱す平家八　平資盛が藤原基通に凌轢せられしを怒り武士に命じ基道を途に擁して辱かしめ且藤原高範、府生武基等隨身十人の髻を切らしむ平家三四　政權を專らにす平家三四　源行綱、清盛に返り忠して藤原成親、同師光、平康頼、俊寛等の陰謀を告ぐ平家七　源行綱の密告をきゝ、急に平宗盛、同知盛、同重衡、同行盛等を西八條の邸に召す平家八　阿部資成を後白河院の御所に遣し藤原信成に就きて謀反人捕縛のことを奏す平家八　藤原成親を捕ふ平家九　平貞能景家等に命じて陰謀の徒を追捕せしむ平家九　藤原師光を捕へて面責してこれを罵る平家一〇　源成雅、俊寛、平康頼、平資行、基兼、正綱、宗信房を捕ふ平家一〇　藤原師光を松浦重俊に命して斬らしむ平家一一　藤原師高を小胡麻維季に命して斬らしむ平家一一　藤原成親を難波經遠、妹尾兼康に命じて拷問せしむ平家一二　平重盛、父清盛が藤原成親、同師光、俊寛等を捕へしを聞き其子維盛を從へて清盛を訪ふ平家一三　平重盛諫めて藤原成親の死罪を免ず平家一四　藤原成親の死罪を平重盛の諫めによりて宥す平家一六　平重盛、清盛の從兵を戒む平家一六　平敎

盛、平清盛の命により藤原成經を召喚す平家六 成經が清盛に召喚せられし時乳母の六條別を惜む平家六 平敎盛、藤原成經を預からんとを清盛に請ふ平家六 後白河院を幽せんとし平貞能等を率ゐて法住寺殿に赴かんとす平家七三 後白河院を幽せんとするを平重盛諫止す平家七四 藤原成親を備前國兒島に流す平家八〇 福原、清盛の別業たり平家八二 藤原成經を福原の別業に召す平家八二 宗信房を阿波に流す平家八三 源成雅を佐渡に流す平家八三 平資行を美作國に流す平家八三 藤原成經を備中に流す平家八四 平康頼を鬼界が島に流す平家八六 俊寛を鬼界が島に流す平家八六 藤原成親を殺す平家八八 後白河院の院宣を奉じ湯淺重宗に兵を授け延暦寺の大衆と協力して延暦寺の堂衆を討たしむ平家九二 平重盛の左大將たりしを辭せしめ藤原實定を以てこれに代ふ平家九一 藤原成經、平康頼の罪を免し歸京を許す俊寛獨り與からず平家一〇六 平重盛、藤原成經を赦免せんとを乞ふ平家一〇六 後白河院が平德子御産の時誦經し給ひしを謝し黄金千兩、綿二千兩を獻ず平家一一三 藤原基房、同兼實、同實定、源定房、藤原實房、同國綱、同資國、同資賢、同宗家等清盛の六波羅の邸に參す平家一一四 空海の示現をかうむりて嚴島明神を修理し且つこれを信仰す平家一一六 平重盛熊野に詣で、一命を捧げて清盛の惡心を和げんとを祈る平家一一〇 平重盛、清盛が殺害せられしを夢む平家一一四 瀬尾兼康、清盛が殺害せられしを夢み、平重盛に語る平家一一五 後白河院、清盛が朝家を恨む由を聞き澄憲を遣して辯疏せしむ平家一一六 澄憲に朝廷に不滿なる條を語る平家一一六 後白河院を恨む平家一一九 澄憲、清盛の威に屈せず平家一一一 月卿雲客四十三人の官職を停む平家一一二 藤原基房の官職を停め太宰帥に左遷し備前國に流す平家一一二 藤原師長の官職を停む平家一一二 藤原師長を尾張國に流す平家一一三 藤原基親の官を停む平家一一四 高階康經の官を停む平家一一四 藤原資賢の官を停め都外に逐ふ平家一一四 藤原資時の官を停め都外に逐ふ平家一一四 源季定、及盛俊、清盛の命により、大江遠成、同家成を攻めて之を殺す平家一一五 大江遠成、同家成と共に清盛よりの討手を受けて自殺す平家一一五 藤原行隆の官を復し藤原顯時の舊誼に報す平家一一六 後白河院を鳥羽の北殿に幽す平家一一七 藤原行隆、清盛の推舉により左少辨に復任す平家一一七 後白河院が平清盛の爲に鳥羽の

北殿に幽せられし時靜憲清盛の許可を得て左右に侍す平家一四九 高倉院後白河院が平清盛の爲に鳥羽の北殿に幽せられしを憂ひ伊勢大神宮に祈る平家一五〇 高倉院に宗盛を以て親政し給ふべきを奏す平家一五一 高倉院をして强ひて位を安德天皇に讓らしむ平家一五四 准三宮の宣旨を蒙り年官年爵を賜はる平家一五五 後白河院の幽屏を解き八條烏丸なる美福門院の御所に移す平家一五四 平宗盛、清盛に後白河院の幽屏を許さんとを勸む平家一五四 堪增、清盛に以仁王擧兵のとを告ぐ平家一五五 長谷部信連を伯耆に流す平家一六〇 延暦寺に米絹を寄贈して僧徒の意を收攬す平家一六一 園城寺、延暦寺に牒し、以仁王の令旨を奉じて清盛を討たんとを僉議す、延暦寺之を斥く平家一六六 興福寺、園城寺に返牒し以仁王の令旨を奉じ清盛を討たんとに同す平家一六一 平知盛、同重衡、同忠度等を遣はして以仁王、源頼政等を討たしむ平家一六五 平頼盛を暐子內親王の御所に遣はし道尊を捕ふ平家一七二 道尊の命を助けて出家せしむ平家一七五 宗盛、道尊赦免のとを清盛に乞ふ平家一七五 一族子弟を率ゐて福原の新都に移る平家一〇三 後白河院を幽屏し原田種直を以て守護に宛つ平家一〇三 都を福原に移す萬民喜ばず平家一〇三 平知盛、同忠度を遣はし園城寺を攻めてこれを燒く平家一〇一 福原の都に於て無數の髑髏出現し又は望月といふ馬の尾に鼠巢をつくつて子を生む等怪異のとを多し平家一一〇 大庭景親源頼朝擧兵のとを告ぐ平家一一四 源頼朝の擧兵をきゝ平維盛を大將に、平忠度を副將に、平忠清を侍大將とし東征せしむ平家一一三 富士川の敗軍を聞き平維盛、平忠清を所罰せんとす平家一一九 都を福原より再び平安城に移す平家一二〇 平知盛平忠度を遣して近江源氏を追討す平家一二一 興福寺、清盛が討手を向くるとを聞きて蜂起す平家一二一 福原に都を移したるは延暦寺の僧兵を憂ひたるによる平家一二一 遷都により一族子弟を率ゐて平安城に移る平家一二一 妹尾兼康を奈良に遣はし興福寺の僧徒を鎭撫せしめしが僧徒等益狠籍して命を奉せず平家一二一 平重衡、同通盛を遣はし興福寺を攻めてこれを燒く平家一二一 小督を惜む平家一二四 小督、清盛に惜まれしを知り密に宮中を脫して失踪す平家一二四 小督、命により出京して嵯峨野に住す平家一二六 小督を捕へて出家せしむ平家一二六 後白河院に平清盛の女を納る平家一二九 公通、緒形惟義及び松浦黨等平家に背けるとを清盛に告ぐ平家一二二 平宗盛を大將軍と

して源頼朝、木曾義仲等を征せんとす 清盛の薨去によりて之を停む平家二三 熱病に罹る平家二六 平時子、清盛が悪業の報として閻魔王宮に迎へられしとを夢む平家二四 源頼朝の首を墓前に捧ぐべきとを遺言す平家二五 愛宕にて火葬し遺骨を摂津國經の島に納む平家二六 薨す平家二六 葬送の夜怪異不思議のとあり平家二七 尊惠、閻魔の廳に召され清盛は慈惠僧正の化身なるを告げられしを夢みて後清盛に語る平家二六 平重能を奉行として經の島を築く平家二六 白河院の王子にして母は祇園女御たり、女御清盛を姙娠せる後平忠盛に賜へるなりといふ一説あり平家二七 白河院が平忠盛に夜なきすとの歌をたまひしより清盛と名づけらる平家二四 覺明平清盛入道は平氏の糟糠武家の塵芥と書きて罪を得、北國に落ちくだりて木曾義仲の右筆となる平家二九 松蔭清盛か宋より得たる硯を有す平家四四 後白河天皇、平清盛、源義朝に命じ崇德天皇を討たしめて之を破る正八 源義朝、清盛と權を爭ふ正八 後白河院の勅命を奉じ源義朝藤原信頼等を討つてこれを平ぐ正八 太政大臣に任じて權を專にし一族榮榮領地天下の半を保つ正九 後白河天皇、清盛に命じ藤原經宗、同惟方を捕へて之を流す正九 平重盛は清盛の嫡子たり父の惡行を諫止せると多し正九 藤原基房を太宰權帥に左遷し藤原師長を京外に放逐す正九 高倉天皇に其の女德子を納れて女御とす正九 源頼政、以仁王を奉じて清盛を除かんとし、軍敗れて戰死す正九 薨ず正九 その二子宗盛、暗愚にして平氏の威權を失ふ正九 平時子清盛の後妻たり正九 益威を專らにし奢侈を極む正九 都を福原に移し幾干もなくして又平安に復す正九 保元の功により太宰大貳に任じ平治以來太政大臣となり權を恣にす正二

きよもりのきたのかた 清盛北方 平時忠の女、平時子なり平家六

きらきらしきもの きらきらしき物 大將の御さきれひたる枕一八三

きりつぼのおんかた 桐壺御方 あかしのちうぐう 明石中宮源

きりつぼのかういい 桐壺更衣 大納言(一)の姫君たり源一 桐壺帝の寵を專にし後宮の妬を受く源一 源氏の君を生む源一 桐壺帝に寵ある弘徽殿の女御(一)妬む源二 後宮の嫉妬を受く源二 局を桐壺より後涼殿の曹子に移す源三 内裡を退出する時手車の宣旨を蒙る源三 病によ

り内裡を退出して里亭に下る源三 かぎりとての歌を詠して桐壺帝に勅答す源四 更衣卒す愛宕に葬る源四 更衣の服により源氏君内裏を退出して里亭に下る源四 桐壺帝更衣を追悼し贈らる源五 更衣の母更衣を追悼し靫負命婦を遣して其母君を訪はしむ源五 三位を贈らる源五 更衣の母靫負の命婦に更衣の懐を述ぶ源七 桐壺更衣の母靫負の命婦に更衣の形見を贈與す源八 桐壺帝雲の上もの歌を詠じて追悼す源一〇 所生、源氏君、その里亭より内裡に移る源一〇 更衣卒去せる處の源氏物語の哀れなる節たるとを女等打ち集りて批評す無六

きりつぼのかういのはは 桐壺更衣母 桐壺帝更衣を追悼して靫負の命婦をその母君のもとに遣はす源五 桐壺帝宮城野のゝ歌を贈る源六 桐壺更衣を追悼し靫負命婦に述懐す源七 靫負の命婦に桐壺更衣の形見を贈與す源八 靫負命婦更衣の母を訪問したるとを桐壺帝に復命す源八 靫負の命婦鈴虫のゝ歌を詠みかく源八 いとゞしくの歌を靫負の命婦に詠みかく源八 荒き風の歌を詠じ桐壺帝に答ふ源九 卒す源一一

きりつぼのみかど 桐壺帝 桐壺の更衣を寵す更衣爲に後宮の妬をうく源一 源氏の君を生む、母は桐壺更衣たり源一 弘徽殿の女御(一)帝の寵を受くる桐壺の更衣及び源氏君を妬む源二 弘徽殿の女御(一)を憚る源二 朱雀院は帝の一の宮たり源二 弘徽殿の女御(一)帝の女御たり源二 桐壺更衣かぎりとての歌を詠じて勅答す源四 桐壺の更衣を追悼し靫負命婦を遣はして其母を訪はしむ源五 宮城野のゝ歌を桐壺更衣の母に贈る源六 靫負の命婦、桐壺更衣の母を訪問したるとを復命す源八 桐壺更衣の母荒き風の歌を詠じて勅答す源九 尋ねゆくの歌を詠ず源九 朱雀院その春宮となる源一〇 雲の上もの歌を詠して桐壺更衣を追悼す源一〇 藤壺女御その女御となる源一二 左大臣(一)結びつるの歌を詠じて勅答す源一五 いときなきの歌を祿物に添へて左大臣(一)に賜ふ源一五 左大臣(一)の北方は帝の同母妹たり源一六 源氏の君を召す觸穢の由勅答して參内せず源一七 紅葉の賀の試樂を御覽ず源一六 紅葉賀を朱雀院にて行ふ源一九 藤壺女御(一)桐壺のみかどの皇子冷泉院を生む此の皇子實は桐壺帝の皇子にあらずして源氏の君の子たり源一四 源氏の君が葵上を疎んずるを戒む源一九 讓位の意あり源一五 花の宴を南殿に開く源一六 朱雀院に位を讓る源一七 源氏の君を戒む源一八 前坊は桐壺のみかどの御弟たり源一八 源氏君

この帝の御所に參す源一八七　病む源一四四　朱雀院に源氏の君を以て後見とすべきことを遺詔す源一九九　朱雀院、帝の病を訪ふ源一九九　冷泉院、帝の病を訪ふ源二〇〇　源氏君に朝廷に仕へ奉る心遣ひ幷に冷泉院を後見すべきことを遺詔す源二〇〇　崩ず源二〇〇　藤壺女御(一)此の帝の爲めに御八講を行ふ源二三五　麗景殿女御(二)は之が女御たり源二三五　源氏君なきかげやの歌を桐壺帝の陵にて詠ず源二三六　源氏君桐壺帝の陵に詣でゝ須磨に赴く別れを告ぐ源二三六　源氏君桐壺帝が住吉の神の導き玉ふまゝに早く須磨を去れと宣ひしことを夢む源二四〇　朱雀院桐壺帝を夢む源二七二　一品宮(一)の父君たり源二六七　源氏君帝のために御八講を行ふ源二六三　字治八宮の御父たり源八七　弘徽殿女御(一)宇治八宮を帝の春宮に立てんとして成らず源八七　冷泉院は帝の第十皇子たり源八九

ぎわう　祇王　知名の白拍子にして妓女の姉たり平清盛の寵を受く平家一一　平清盛佛御前を寵して祇王を逐ふ平家一四　平清盛の寵を失し西八條殿を出つる時もえ出づるの歌を障子に書きつく平家一四　平清盛召す平家一五　清盛の召に應じ妓女を具して西八條殿に赴く平家一六　佛も昔は凡夫なりといへる今樣を平清盛に召されし時歌ふ平家一七　尼となり嵯峨の奥なる山里に草庵を結ぶ平家一八　妓女、姉祇王の尼となりしを聞き、尋ねて其草庵に同住す平家一八　佛御前尼となり祇王の草庵を訪ひ罪を謝す平家一九　長講堂の過去帳に祇王、妓女、佛御前の名あり平家二一

ぎをんしやうじや　祇園精舍　三度燒亡す水一〇　祇陀太子之を再興す水一〇　旃育迦王之を恢興す水一〇　六師迦王之を復興す水一〇　須達長者の建立する所たり水一〇　天竺の王に毀たる水一一　忉利天皇第二の御子修繕す水一三　燒亡す水一七　都率天の一院を摸造す大鏡一六　天竺の祇園精舍を摸して唐の西明寺成る、我が國の大安寺はその西明寺を摸造せるなり大鏡一六

ぎをんのにようご　祇園女御　平清盛、白川院の皇子にして母は祇園女御たり、女御が清盛を姙娠せる後平忠盛に賜へるなりといふ一說あり平家二七三　平忠盛白河院より女御を給はる平家二七三

くうかい　空海　こうばふ　弘法大師著

くうかく　空覺　とばほふわう　鳥羽法皇今鏡

くうすけ　くう介　佛師に命じて佛像を造る佛像供養の講師を請ず宇治一九九

くうやしやうにん　空也上人　餘慶祈つて上人の臂の折れたるを治す宇治二〇六　一たびもの歌を詠す著三　念佛宗の開祖たり著三　念佛三昧修することを勸めてより念佛宗盛んとなる著三　孤兒を敎化す著四六

ぐかくばう　具覺房　下部に傷けらる徒三五

くがのだいしやうごく　久我大相國　まさざね　源雅實著

くがのだじやうだいじん　久我太政大臣　みちみつ　久我通光十六夜

くがのないだいじん　久我內大臣　みちもと　久我通基徒

くげう　公曉　實朝を殺す增三　源頼家の子なり源實朝を弑す正九五

くさかべのわうじ　草壁皇子　文武天皇草壁皇子の第二子たり水三三

くさのはなは　草のはなは　撫子枕四八

くさは　草は　菖蒲枕四七

くしいなだひめ　奇稻田姬　素盞烏命奇稻田姬を得正四　素盞烏尊と住む正一五

くすこ　藤原藥子　平城上皇の復位を謀る水八〇　平城天皇、藥子を寵す正九七

ぐせいばう　弘誓房　夜や寒きの歌を詠す今物二六

くだら　百濟　欽明天皇の時はじめて金銅釋迦の像經論幡蓋を貢す著三　應神天皇の時博士經典を貢す著六三　推古天皇の時曆天文地理方術の書を貢す著三五　神功皇后に降服す水一七　欽明天皇の卽位十三年、百濟より佛經を貢す水三　經論を貢す水三四　敏達の朝石造の彌勒を貢す水三五　藤原通憲、天竺、震旦、高麗、新羅、百濟等諸國の語に通ず平治一六　應神天皇の時百濟の博士經文を傳ふ正三三

くだらでら　百濟寺　僧義覺これに住たり水四八

くちめ　口女　彥火々出見尊の鉤をのむ正一九

くちをしきもの　口惜しき物　節會佛名に雪降らで雨のかきくらし降りたる枕八〇

くでうどの　九條殿　もろすけ　藤原師輔徒

くでうどののにようご　九條殿女御　藤原登子蜻

くでうのさきのないだいしん　九條前內大臣　もといへ　藤原基家著

くでうのさきのないだいじむ 九條前内大臣 よしみち 藤原良通著

くでうのだいしやうごく 九條大相國 これみち 藤原伊通著

くでうのだいなごむ 九條大納言 みちいへ 藤原道家著

くでうのだじやうだいじむ 九條太政大臣 かねざね 藤原兼實著

くでうのたじやうだいじん 九條太政大臣 これみち 藤原伊通著

くないきやうのきみ 宮内卿君 和歌を善くす増八

くにかた 佐伯國方 佐伯重文の子なり著一八 馬術に達す著一八

くにこ 源國子 藤原基房の母なり今鏡一〇三 源國信の三女、藤原基房の母なり今鏡一七

くにこないしんなう 邦子内親王 法事を行ふ増八〇 城の崎溫泉に行啓す増八二 童舞、白拍子、田樂等を好む増八二 天の橋立に行啓す増八二 郁芳門院に比せらる増八二 安養壽院にこもる増八二

くにすけ 國資 正月十六日の節會に參す

くにつな 藤原國綱 平德子の御座御誦經の時馬二匹を献す平家一二 安德天皇の降誕を賀し平清盛の六波羅の邸に參す平家二四 内裡造營の奉行となる平家二八 薨す平家二四 大納言の佐は國綱の養女たり平家三二

くにつね 藤原國經 在原業平より藤原高子を奪ひかへす伊二

くにつね 邦經 後嵯峨上皇の宇治の行幸に供奉す増六

くにとき 源邦時 極蔵以下を招きて新藏人の分配を行ふ著三八

くにとこたちのみこと 國常立尊 葦芽の如きものより化生す著四 伊弉諾伊弉冊の二神に勅して天瓊矛を授く正八 伊弉諾伊弉冊の兩尊勅を受く正八 伊弉諾尊、國常立尊に復命す正二

くにとし 國俊 覺猷を訪ふ宇治三三 覺猷を苦む宇治四四

くになが 但見國長 六波羅勢に攻められて切腹す増一七

くにながしんなう 邦良親王 なれにけるの歌を詠ず増一六三 後醍醐の太子となる増一六三 後宇多法皇、東宮邦良に治世の要を遺詔す増一五

後宇多法皇、後醍醐と東宮邦良と相和せざるを歎く増一五 後宇多法皇の佛事を行ふ増一七 おくれゐるの歌を詠ず増一七 薨ず増一七 對の君、東宮邦良の薨去を悼む増一九 薨去により經繼、隆久、敦季、五辻のながとし、公風、俊顯、禖子内親王、對の君、帥の君、兵衛の督、内侍の君出家す増一八〇 薨去により、有忠、鎌倉にて出家す増一八〇 後醍醐天皇、親王に院號を下さず増一八〇 遺詔して院號を停む増一八〇 瑞子女王、禖子内親王、東宮邦良の薨去を悼む増一八三 瑞子女王、親王の一周忌を行ふ増一八三 御息所は通重の女なり増一八五 御息所及び其の若宮薨ず増一八五 後二條天皇の第一皇子たり正一〇五 薨ず後醍醐天皇の太子たり正一〇六

くにのぶ 源國信 和歌を善くす今鏡三六 源信子は國信の一女、源國子は同三女たり今鏡一七 源顯房の子、同雅俊の弟、母は藤原良任の女歌人たり今鏡一七 源顯國、同國敎、同雅國、同信時の父たり今鏡一七 源顯房の子、顯仲の弟たり今鏡一七

くにのり 源國敎 源國信の子たり今鏡一七

くにはるしんなう 邦治親王 ごにでうてんなう 後二條天皇増一九九

くにひろ 丹波國弘 源頼朝か平宗清の許に預けられし時これを守護す平治八三 源頼朝、細野の庄を與へて舊恩に報す平治一〇三

くにふさ 國房 龜山法皇の葬送に供奉す増一三三

くにぶみ 佐伯國文 大江高遠と競馬す著一九三

くにもと 津守國基 天王寺に詣でゝ平等院僧正に謁す著八〇

くのきみ 九君 あきの野のゝ歌を詠ず堤八〇

くのきみ 藤原定方九君 左兵衛督九の君 得大和二七 藤原師尹に嫁す大和二六 藤原師尹と通ず大和二六 藤原定方の女たり大和二六

くのきみ 雅頼九君 あてみや あて宮宇津

くはばら 丹波國桑原 末重供御備進の爲此の御厨に下向して蛇に襲はる著三三

くびせがは 株瀬川 源親行此所に宿りて花洛を出でゝ三日云々の句を障子に書す東四

くまそ 熊襲 景行天皇に叛す正六 景行天皇、日本武尊をして征せしむ正六 日本武尊、熊

襲を征す正六　仲哀天皇熊襲を征す正三

くまの　熊野　増基熊野詣の途につく庵一

くまののしんぐう　熊野新宮　景行天皇之を造立す水一四

くまののほんぐう　熊野本宮　崇神天皇之を造立す水一

くまわう　熊王　僞りて吉野に降り楠正儀を狙ふ芳八六　宇野六郎の子たり芳一六　楠正儀の恩に感じ殺害の意を翻して出家す芳一七　元服して和田小次郎正寛と稱す芳一七

くめのせんにん　久米仙人　物洗ふ女の脛の白きを見て通を失ふ徒三

くもは　雲は　白き、紫枕二三六

くもゐのかり　雲居雁　夕霧と雛遊びす源三九　夕霧雲居雁を戀ふ源三九　頭中將(一)の姫君なり源三九　頭中將(一)、弘徽殿女御(一)に托す源三九　頭中將(一)を雲居雁のとによりて弘徽殿女御(一)恨む源三五　弘徽殿女御(一)夕霧を雲居雁のとに就きて訓戒す源三六　夕霧を戀ふ源三七　夕霧雲居雁を密かに訪ふ源三七　頭中將(一)、雲居雁を弘徽殿女御(一)に托したるを謝して自亭に迎ふ源三八　宰相君、雲居雁を夕霧に媒介す源四〇〇　弘徽殿女御(一)、別を惜む源四〇〇　頭中將(一)の邸に移る源四〇一　夕霧雲居雁に歌を詠みかく源四〇一　頭中將(一)雲居雁を教訓す源四〇五　夕霧雲居雁に歌を贈る源五〇三　頭中將(一)雲居雁の事を案ず源五六　夕霧雲居雁に歌を贈る源五六　夕霧、雲居雁の事を思ひ煩ふ源五六　かぎりとての歌を夕霧に贈る源五六　頭中將(一)歌を夕霧に贈り雲居雁を許すの意を洩らす源五〇　頭中將(一)、雲居雁を夕霧に許す源五一　夕霧後朝の文を贈る源五四　夕霧雲居雁に歌を詠みかく源五四　あさき名をの歌を夕霧に詠みかく源五四　夕霧雲居雁に歌を贈る源五四　夕霧雲居雁と始めて婚す源五四　夕霧雲居雁と交情密なり源五五　夕霧雲居雁に歌を詠みかく源五八　なき人はの歌を夕霧に詠みかく源五八　一條御息所より夕霧に贈りたる消息を奪ふ源七八　夕霧の無情を怨む源七八　あはれをもの歌を夕霧に贈る源七〇　夕霧雲居雁に歌を贈る源七九　落葉の宮のとにより夕霧を怨む源七四　夕霧が落葉宮を一條宮に移し同接せるを聞きて驚く源八〇　夕霧の無情を怨む源八〇　夕霧雲居雁を慰籍す源八四　馴るゝ身をのうたを夕霧に詠みかく源八五　夕霧雲居雁に歌を詠みかく源八五　夕霧を恨み頭中將の邸に方違と稱して移徙す源八八　藤内侍のすけ數ならぬの歌を贈る源八二　人の世にの歌を藤内侍のすけに贈る源八二　夕霧との間に子女八人を設く源八二　藏人少將(一)の母たり源八六　玉蔓、消息を贈る源八六　玉蔓に消息を贈りて髭黑君の大姫君を藏人少將(一)に嫁せんとを乞ふ源八六　玉蔓に消息を贈る源八九　女等打ち集りて其人物を批評す無三　雲居雁、雲居の雁もわがとやと獨言せる處、源氏物語中におけるいとほしき節たるとを女等打ち集ひて批評す無三

くらうど　藏人　滋野眞菅の子、藏人たり宇津八五　滋野眞菅、子木工允をして、あて宮への歌を作らしめんとす、木工允の兄右近少將之を作る宇津四五　眞菅あて宮を迎へんとして果さず憤怒禁ぜずして訴へ文を朱雀帝に奉る帝怒つて眞菅を伊豆權のすけに貶す子少將かつまた長門權のすけに貶せられ藏人亦罪に座す宇津三七

くらうど　藏人　平中納言の子なり妹今上桃花殿女御、年十六かたちいとをかし、二月中の十日庚申の夜、藏人、式部丞と女御ら兄弟物語る式部丞あて宮に並ぶものなきをいふ宇津三四

くらうどのせうしやう(一)　藏人少將　夕霧の子、母は雲居雁なり源八六　髭黑君大姫君に懸想す源八六　人は皆の歌を詠ず源八三　或女、少將に歌を詠みかく源八三　衛門督(一)の弟たり源八七　中將の御許(四)を訪ひて髭黑君の大姫君に對する失望を愁訴す源八六　雲居雁、玉蔓に消息を贈りて髭黑君の大姫君を少將に嫁せんとを請ふ源八六　藤侍從を訪ふ源八六　いつぞやもの歌を詠ず源九六　髭黑君の大姫君が入内に決したるとを聞きて失望愁歎す源八六　いてやなぞの歌を中將の御許(四)に詠みかく源八九　中將御許(四)少將にあはれとての歌を詠みかく源八九　花を見ての歌を玉蔓に贈る源八〇　玉蔓、今日ぞしるの歌を贈る源八〇　中將の御許(四)に消息を贈る源八一　髭黑君の大姫君あはれてふの歌を贈る源八一　生ける世のゝ歌を髭黑君の大姫君に贈る源八一　玉蔓、髭黑君の中の君を嫁せんとす源八三　髭黑君の中の君と婚するの意なし源八三　竹河左大臣の姫君を娶る源八九　三位中將に任す源八九　宰相に任す源八〇　玉蔓を訪ふ源八二

くらうどのせうしやう　藏人少將　とうのうちうじやう　頭中將(一)源(四)

くらうどのせうしやう　藏人少將　權中納言と參内す提二六　ゆくかたもの歌を詠ず提三　わ

らはに密行を見つけらる堤三 貝合を密かに窺ふ堤三 姫君に洲濱を贈る堤四 かひなしとの歌を詠ず堤四 しらなみにの歌を詠ず堤三

くらうどのせうしやう 藏人少將 中納言(一)の三君を娶る落二 中納言(二)の北の方、落窪君に少將の衣服を縫はしむ落六 落窪が左近少將に贈る消息を拾ふ落三 三の君に落窪の消息を示す落三 源中納言の北の方より衣服を受く落三 臨時祭の舞人に選ばる落三 北の方に聟取の事を問ふ落六 兵部少輔を見て洪笑す落六 兵部少輔を聟とせしとを嘲弄す落六 中納言の三の君に漸く疎し落七 兵部少輔の事を以て人々に揶揄せらる落七 左近少將の妹に意あり落七 三の君を疎んず落七 三の君を罵る落七 左近少將の妹(左大將の中の君)と婚す落七 中の君と婚して中納言の怒に觸る落七 三の君と絶つ落七 宰相となる落八 中將に昇進す落八 中納言となる落二四 中納言の八講に參す落二六 左衛門佐をして三の君に意を傳へしむ落二九 中納言の賀にかづけ物す落三三

くらはしまろ 安部倉橋麻呂 はじめて左大臣となる大鏡三

くらべやのにようご 暗部屋女御 たかこ

藤原尊子大鏡

くらもちのみこ 車持皇子 徒らにの歌を詠ず竹六 かぐや姫に玉の枝を贈る竹六 蓬萊島行を僞る竹七 わが袂の歌を詠ず竹八 工匠等に僞を發かる竹九

くるしげなるもの 苦しげなる物 夜泣といふものする見の乳母枕二三

くるまがへし 車返 源親行此の里に宿る東一六

くろぎのはし くろぎの橋 一條兼良白波はの歌を詠ず藤四

くろづかのをんな 黒塚女 大空のゝ歌を詠ず大和一七

くろどのはま 黒戸濱 菅原孝標の女此の地に宿る更三

くろぬし 大伴黒主 さゝら浪の歌を詠ず大和五五

くろひめ 黒姫 履仲天皇の皇后となる水三

くわうかうてんなう 光孝天皇 芹川に行幸あるの時、供奉せる在原行平、翁さびの歌を詠ず伊四四 仁明の第三の御子たり大鏡八 藤原澤子の御腹なり大鏡八 四年位に在り大鏡九 太宰帥となる大鏡九 一品に昇る大鏡九 崩ず大鏡九 上野太守となる大鏡九 式部卿となる大鏡九 宇多天皇、光孝の第三皇子たり大鏡九 藤壺の御局の黒戸を開く大鏡九 藤原基經、光孝の賢明を知る大鏡一〇 藤原基經、源融を排して光孝を立つ大鏡一六 大宅世繼、帝の御即位のことを語る大鏡一六 踐祚の時攝政を改めて關白とすこれ我國關白の始なり正六 基經に迎へらる正六 即位す正六 芹川に行幸す正六 帝の時より攝政、基經の系に歸す正一〇

くわうかもんゐん 皇嘉門院 せいし 藤原聖子今鏡

くわうぎもんゐん 廣義門院 やすこ 藤原寧子增

くわうきよくてんなう 皇極天皇 母は吉備姫なり水四三 三年位に在り水四三 舒明の后たり水四三 即位す水四三 雨を祈る水四三 中大兄皇子、皇極の太子となるを辭す水四六 孝德天皇の姉君たり水四六 重祚して齋明天皇と稱す水四八 明日香河原宮に居る正四六 即位す正四六

くわうごんじやうわう 皇嚴上皇 後村上天皇のために吉野に幽せらる芳三 院の大嘗會に源通顯、前行をつとむ增二五 藤原宣房、藤原定房院に仕ふ增二五 公秀の女三條を寵す增二六 實衡の女今御方を寵せず增二六 後伏見院、光嚴院を花園の太子とせんと欲す增一六三 六波羅に渡る增一九 康仁親王、院の東宮となる增一九 御即位の行幸を行ふ增二七 賀茂の祭に行幸す增二九 御禊の行幸を行ふ增三四 藤原信嗣女、光嚴院御禊行幸の女御をつとむ增三四 六波羅を遁れ出づ增三〇 後伏見院、光嚴院に出家を勸む增三一 伊吹山邊にて法師の宮に要擊せらる增三一 北條仲時、院を番馬の山に隱す增三一 即位す正一〇六 後伏見の勸めらるゝにも出家せず增三三 後伏見院、光嚴院に出家を勸む增三一 北條仲時、院を番馬の山に隱す增三一 即位す正一〇六 後伏見天皇の第一皇子なり後醍醐天皇の太子となる正一〇六 後醍醐天皇、都に還御し光嚴を以て僞主となし復位の儀を用ゐず正一〇八

くわうし 藤原皇子 圓融院の女御たり大鏡九六 稲荷に詣す大鏡九六

くわうじよう 光乘 源仲綱に從ひ六波羅を夜討せんとし曉に及ぶを以て中止す平家一八二

くわうせい 光清 はふ程にいもがぬかごはなりにけりといふ上の句を詠じ小大進と連歌す今物一五

くわうせい 廣清 墳墓に讀經の聲絶ゆ聞ゆ著二六三

くわうたいこうぐう 皇太后宮 嵯峨院の

女二の宮の許にて狹衣中將が忘れきたる懷紙を發見して不審す狹七一 嵯峨院の女二の宮が姙娠したるを覺知し女房達を訊問す狹八一 女二宮を伴ひて里住す狹八五 嵯峨院の女二の宮の姙娠したるを秘して自らのととして嵯峨院に奏す狹八六 嵯峨院の女二の宮の事を愛ひて病を發す狹九四 嵯峨院の女二の宮が狹衣中將の若君を生みし時僞りて己の子なりと嵯峨院に奏問す狹九一 崩ず鏡九三

くわうにんてんなう 光仁天皇 施基親王の御子たり水六七 藤原百川、文屋淨三及び大市を排して光仁天皇を立つ水六七 母は橡姫、紀諸人の女なり水六七 藤原百川に立てらる水六七 弓削淨人を土佐に流す水六六 井上皇后と博奕す水六六 粉河寺を建つ水六六 道鏡を下野に流す水六六 井上の后に呪はる水六六 酒人內親王を東宮とせんとす水七三 讓位して太上天皇と稱す水七四 桓武天皇の父たり水七五 藤原百川、帝の卽位に力を盡す正五五 卽位す正五五

くわうみやうくわうごう 光明皇后 西金堂を建つ水五六 孝謙天皇の母たり水五六 藤原嬉子、光明皇后に比せらる增八三 孝謙天皇を生む大增一六六

くわうみやうぶじどの 光明峯寺殿 みちいへ 藤原道家增

くわざのみや 朱雀第五皇子冠者官 馬の手番ひの試に五番に忠俊に勝つ宇津三六 雅頼馬の手番の試に、二番に冠者の宮に勝つ宇津三六 朱雀院、冠者の宮をして仲忠に酒を強ひしむ宇津四九 朱雀院に東宮のことを奏す宇津四八 朱雀院、冠者の宮をして俊蔭の草子の句を誦せしむ宇津四四 彈正宮と物語す宇津七五 里邸に入れられしを歎く宇津七五 女二宮に文を贈る 宇津七六 女二の宮を盜まむと謀る宇津七七

くわざんてんなう 花山天皇 色香をばの歌を詠ず著七六 繪師をして密かに性空を寫生せしむ著二〇五 藤原道兼より出家せむことを勸めらる著二〇六 女御藤原低子を失ひ悲歎して出家す著二〇七 拾遺和歌集を撰せしむ增七 冷泉第一の皇子たり大鏡一五 二年位に在り大鏡一五 誕生す大鏡一五 太子となる大鏡一五 元服す大鏡一五 出家す大鏡一五 卽位す大鏡一五 安倍晴明、天變によりて院の出家を知る大鏡一六 藤原低子、院の弘徽殿女御となる大鏡四三 藤原諟子、女御となる大鏡朝飼の壺に乘馬す大鏡八八 義懷、惟成輔佐す大鏡八八 驗くらべす大鏡九九 佛法修業す大鏡九九 和歌に長ず大鏡九九 異樣の裝をなす大鏡九一 家作、調度、庭など數寄をこらす大鏡九三 風流を好む大鏡九三 繪を巧みにす大鏡九五 藤原姚子、院の寵衰ふ大鏡九六 藤原隆家と爭ふ大鏡一三六 藤原道兼、院を出家せしむ大鏡一三七 弘徽殿女御の薨去を悲み、花山寺にて出家す正九九

くわざんゐん 花山院 藤忠平邸なり忠平庭に棗を植う花多し由て其の名あり著二四五

くわざんゐむのたじやうだいじん 花山院太政大臣 ただまさ 藤原忠雅著

くわんおんばう 觀音房 勢至房と共に延曆寺の額を切り落す平家二五

くわんが 法印寬雅 源雅俊の子、俊寬の父たり平家二五

くわんきぞんゐん 歡喜園院 かねただ兼忠增

くわんくう 寬空 雨を祈りて驗あり著二九

くわんくう 觀空 藤原得子、成菩提院にて落飾の時戒師たり保五五 藤原得子出家の戒師となる保六

くわんくわい 寬快 六條懺法の時供米の不法なるを憤り奉行を苦む著二六一 文覺と相撲す蓮花王院の供僧たりし時勤仕を怠る著二六三

くわんけい 寬慶 大乘坊と稱す今鏡一三六

くわんけう 觀敎 寵愛の唐猫に守刀を奪はる著三九

くわんげう 寬曉 堀川院の皇子母は隆宗の女、花藏院の大僧正と稱す今鏡一六六 重仁親王、平治亂の時寬曉に就きて出家す今鏡一〇〇 崇德院、重仁親王を寬曉に托して出家せしむ保元九 重仁親王、寬曉の坊にて出家す保元九

くわんけん 勸賢 藤原資澄、醍醐天皇の勅命により勸賢を具して高野山に上り法衣を納む平家四五六

くわんし 藤原歡子 女等打ち集つて其人物を批評す無三七 藤原敎通の女、藤原公任の孫たり無三七 後冷泉の女御となる今鏡一八 大二條殿と稱す今鏡一八 皇后となる今鏡二〇 出家して小野の里に籠居す今鏡八五 後冷泉院の皇后となる今鏡八五 敎通の女なり今鏡八五 後冷泉天皇、歡子の小野の里に雪を賞す今鏡八六 落雷に逢ふ今鏡八七

くわんしう 觀修 藤原道長に命ぜられて南都より奉りたる瓜を檢す著一五一

くわんしうじのそうじやう 勸修寺僧正がけい 雅慶大鏡

くわんしないしんなう 官子內親王 白河

院の皇女、母は源頼綱の女、伊勢齋宮たり今鏡一九五

くわんしないしんなう 懽子内親王 母は後醍醐の皇后禧子たり増一八四 齋宮となる増一八四

くわんしよう 寛勝 源師時の子、同師仲の弟 僧都たり、容貌美にして説法に巧なり今鏡一六四

くわんせい 觀静 加持して業遠を再生せしむ宇治八三

くわんち 觀知 平茸に添へて平らかにの歌を藤原兼實に贈る著三五

くわんちう 寛忠 靈驗すぐれたる人たり著三〇

くわんてう 觀朝 引剝に逢うて武勇を現はす宇治二四五

くわんびん 寛敏 藤原通憲の子たり父のとに關して上總の國に流さる平治二六

くわんべん 寛遍 崇德院、仁和寺内なる寛遍法務の坊に宿す保五五

くわんむてんなう 桓武天皇 宇佐八幡より託宣あり著四 朝政の後常鷹を飼養して樂む著三七 長岡に遷都す水五五 光仁の御子、母は高野新笠なり水五五 二十四年位に在り水五五 雨を祈る早良親王を崇道天皇と追尊す水七 長岡より京都に遷都す水七 早良親王の骨を淡路より迎ふ水七 平城天皇の父たり水七 嵯峨天皇、桓武の第二皇子たり水八三 淳和天皇、桓武の第三皇子たり水八三 郡を長岡に遷し更に平安に移す今鏡三六 平貞盛は、天皇の皇子葛原親王の御子たり増二七 平安城に都を移す將軍塚を建てゝ守護神と爲す平家二〇六 早良親王に崇道天皇と追號す正五五 聖德太子曾て平安の地形を相す正五六 平安城に奠都す正五六 帝の朝遣唐使となるもの多し正五六 坂上田村麿を征東大將軍とす正五六 嵯峨天皇を鐘愛す正七七

けいかい 經海僧正 後嵯峨法皇の最後に參る増一〇三

けいかう 嵇康 山澤に遊びて魚鳥を見て樂ぶ徒九

けいかうてんなう 景行天皇 垂仁第三の御子母は日葉酢媛命なり水三 太子となる水三 武内宿禰を重んず水一四 即位す水一四 穴穂の宮に還都す水一四 熊野新宮を造立す水一四 成務天皇は景行の第四皇子たり水一四 纒向の日代宮に居り正三六 日本武尊をして熊襲を征せしむ正三六 日本武尊をして東夷を征せしむ正三六 東國を巡視す日本武尊の陵を三所に造る正三六

けいしないしんなう 馨子内親王 後三條の后たり今鏡八 藤原威子の姫君たり今鏡八 藤原威子の姫君たり今鏡七一 後三條の皇后となる今鏡七四 出家す今鏡七四

けいしう 慶秀 源頼政に從ひ六波羅を夜討せんとし曉に及ぶを以て中止す平家一八一 以仁王が園城寺出御の時弟子俊秀をして供奉せしむ平家一八四 一來、慶秀の召仕にして太刀の剛の者たり平家一八六

けいたいてんなう 繼體天皇 應神天皇六世の孫、御母は振姫なり水二九 二十五年位に在り水二九 越前より迎へられて天位に即く水三〇 三たび遷都す水三〇 安閑天皇の父たり水三〇 唐土より佛を持ち來る者あり正三一 磐余玉穗宮に居たまふ正四一 隼總別皇子の裔にして皇統を承く正四一 群臣に迎へられて即位す正四一

けいにんしんなう 啓仁親王 龜山の女御位子の皇子たり増二六

げうれん 堯蓮 都人の氣風を論ず徒九五 俗名を三浦某といふ徒九五

けうゑむ 教圓 天台坐主となる著八

けさ 袈裟 女の病を八幡大菩薩に祈る今物一七奥山にの歌を詠ず今物一八

けすみや けす宮 雅頼の十四女母橘太政大臣の女たり宇津九五 雅頼、實忠に配せんとす實忠聽かず、雅頼强ふる所かはとて止む宇津九六 右大辨陶英、八月廿三日雅頼の十四歳三の君けす宮を娶る、陶英年四十、雅頼見どころありと思へり宇津四〇七 雅頼の西北の町のやかたに在り、陶英通ふ宇津四一〇

けつくわもんゐん 月華門院 そうしないしんなう 綜子内親王増九三

けんいう 元祐 尊胤法親王を救ひて吉野を遁走す芳三

けんえい 玄永 源仲綱に從ひ六波羅を夜討せんとし曉に及ぶを以て中止す平家二八

げんえう 顯耀 後三條天皇、顯耀を僧綱とす今鏡三七

けんえう 憲耀 藤原通憲の子たり父のとに坐して陸奥國に流さる平治二六

けんかう 吉山兼好 松翁を訪ひて物語りす芳三 栗栖野を過ぐ徒一四 賀茂の競馬を見る徒一六 行宣より唐土は律の音なく日本は呂の音なきことを聞く徒八〇 阿部有宗より諫めらる徒八 自讃七箇條を作

る徒七二 千本寺に詣づ徒四四 横川龍華院の額の藤原行成なるとを判ず徒四四 賢助に伴ひて加持香水の法式を見る徒四四 八歳の時父に佛は如何なるものぞと質問す徒七七

げんがく 玄覺 奈良の僧たり今鏡一三

げんがく 嚴覺 源基平の子たり今鏡一四四

げんがく 源覺 源仲綱に從ひ六波羅を夜討せんとし曉に及ぶを以て中止す平家一八三 奮戰の後脫走して園城寺に歸る平家一九一

けんき 顯基 世をすてゝの歌を詠ず今鏡一六六 出家して深山に入る今鏡一六六 出家す今鏡一三三

げんきもんゐん 玄輝門院 よしこ 藤原悟子增

げんく 玄駒 龜山院、玄駒の女下野を寵す增二六

げんくう 源空 彌陀如來の化身また勢至菩薩の垂跡なりとの傳說あり著四三 往生の時異相あり著四三 建歷三年正月遷化す著四三 十八歳にして黑谷の上人の禪室に入る著四三 公胤に示現す著四四 平重衡、對面して法談を聽く平家四四一 平重衡、師として受戒す平家四四三

げんくわう 鷲栖玄光 源義朝、玄光の嚮導により尾張國內海に着し、長田忠致の家に入る平治六六 大炊の弟にて隱れなき强盜名譽の大剛者たり平治六六 源義朝が長田忠致に殺されし時奮鬪の後鷲栖に歸る平治六六

げんさいしやう 源宰相 さねただ 源實忠宇津

げんさうさんざう 玄奘三藏 唐土より天竺に入る水四三 智通、渡唐して玄奘三藏に法相宗を受く水四八

けんし 藤原妍子 紫式部歌文を上る紫三三 禎子內親王を生む大鏡一三三 諸堂に詣づ大鏡一四四 出し車に燒香す大鏡一三三 禎子內親王の母たり今鏡一六六 藤原倫子の女たり今鏡七一 道長の第二女、三條院の中宮たり今鏡七一 禎子內親王の生母たり今鏡七一 隆家に扇を賜ふ今鏡七二 枇杷殿の皇太后と稱す今鏡七二 三條天皇の皇后たり今鏡七二 崩ず今鏡七三

けんしないしんわう 妍子內親王 鳥羽院の皇女、母は家政の女、伊勢齋宮たり今鏡一六六

けんし 賢子 白河天皇、中宮賢子の爲に御堂を建立す今鏡一三三 堀河天皇の御母たり今鏡一三三 源顯房の女たり今鏡一三三 師實の養女たり今鏡一三三 令子內親王を生む今鏡一六六 敦文親王を生む今鏡一三三 郁芳門院媞子を生む今鏡一六六 白河天皇の

皇后となる今鏡一六六 白河天皇、圓光院に母后賢子の供養を營む今鏡一三三 白河天皇、白川の御寺に母后賢子の佛事を營む今鏡一三三 內裏にて崩ず今鏡一三三 白河天皇、母后賢子の崩御によりて佛寺を造營す今鏡一三三 白河天皇、母后賢子の崩御により廢朝す今鏡一三三 堀河天皇を生む今鏡一三三 藤原顯房の女たり、藤原師實、養女とす今鏡一六六 堀河院の生母たり今鏡一六六 堀川院の母、源顯房の女、藤原師實の養女たり今鏡一三三 媞子內親王の御母たり今鏡一六七 敦文親王及ひ堀川院の母たり今鏡一六七 令子內親王の母君たり今鏡一六六 賴豪、白川院の勅命により賢子が皇子を生まんとを祈りて驗あり平家一七七 白河院、皇后賢子に皇子なきを憂ひ賴豪に命じて祈禱せしめ敦文親王を生む平家一七七 藤原師實の女、白河院の皇后たり平家一七七 良眞、白河院の命により、賢子が皇子を生まんとを祈る平家一八八 堀川院を生む、父は白河院たり平家一九九

けんしないしんなう 媞子內親王 禎子內親王の姬君たり今鏡七三 源俊房と通ず今鏡七三 源俊房、媞子を盜み取りて北の方とす今鏡一六六

げんし 藤原原子 藤原定子と登華殿にて對面す枕八八 三條天皇が東宮たりしとき妃となる枕八八

げんしないしんなう 嬉子內親王 後朱雀の中宮となる大鏡一三三 母は具平親王の女降姬なり今鏡一〇 藤原賴通、敦康親王の女嬉子を養女とす今鏡一〇 後朱雀の女御となる今鏡一〇 後朱雀の后となる今鏡一一 後朱雀天皇、中宮嬉子の佛事を行ふ今鏡一三 崩ず今鏡一三 祐子內親王を生む今鏡一三 後朱雀天皇、中宮嬉子との契を楊貴妃に比せらる今鏡一三 後朱雀天皇、中宮嬉子を追慕して尋ねゆくの歌を引かる今鏡一三 賴通の養女實は敦康親王の女なり今鏡一六 祐子內親王を生む今鏡一〇 後朱雀院の中宮となる今鏡一〇 嫄子內親王を生む今鏡一一

げんじのきみ 源氏君 源氏のきみ生る、桐壺帝の皇子、母は桐壺更衣たり源一 桐壺帝に寵あるを弘徽殿の女御(こ)妬む源二 袴着を行ふ源三 桐壺更衣の服により內裏を退出し里亭に下る源四 母桐壺更衣の里亭より內裡に移徙す源一〇 容貌才學人に秀づ源一一 讀書始を行ふ源一一 弘徽殿の女御(こ)にはじめて謁す源一一 源姓を賜はり臣籍に列す源三 高麗の相人見て帝王の位に上るべき人としては亂れ憂ふるとあらむを

相す源三 元服す源四 光君と稱す容貌端麗たり源一四 藤壺女御(一)を密に慕ふ源一四 葵上と婚す源一五 淑景舍を賈ゝとす源一六 藤壺の女御(一)を戀ふ源一六 葵上に滿足せず源一六 物忌に籠る源一七 頭中將(一)と親しく交はる源一七 光君の稱高麗人の賞感よりれこる源一七 頭中將(一)、左馬頭(一)、藤式部の丞等と雨の夜女の品定めす源一八 葵上の宿所に退出す源二六 方違の爲葵上の宿所より紀伊守の中川邸に赴く源三七 空蟬の寢處を犯す源四〇 空蟬源氏の語らひに應ぜずして貞操を守る源四一 つれなさをの歌を空蟬に詠みかく源四二 空蟬身のうさをの歌をよみかく源四二 見し夢のゝ歌を小君(一)に托して空蟬に贈る源四四 小君(一)之が文を空蟬に取り次ぐ源四四 小君(一)之に仕ふ源四四 再び紀伊守の中川邸に赴く源四五 空蟬、その語らひを郤けて貞操を守る源四六 歌を空蟬に贈る源四七 空蟬源氏に歌を贈る源四七 空蟬に會すべき謀を小君(一)に依頼す源四八 小君(一)之を誘ひて中川第に赴く源四八 空蟬と軒端荻が碁を圍める處を垣間見る源四九 小君(一)源氏君を空蟬の寢所に導く源五一 再び空蟬の寢所を犯す源五二 空蟬、之が寢所に入り來るを覺りて脱れ出づ源五二 軒端の荻の寢所を犯して契りを結ぶ源五三 空蟬の無情を恨む源五五 小君(一)を具して中川第より二條院に歸る源五五 空蟬、小君が之を寢所に誘へるを責む源五五 小君、空蟬に源氏の詠める空蟬のといへる歌を示す源五五 空蟬のゝ歌を詠ず源五五 六條御息所の許に通ふ源五五 夕顔の花を觀る源五五 大貳乳母の病を訪ふ源五五 藤原惟光をして夕顔の姓名及由緒等を探知せしむ源五七 歌を夕顔に贈る源五八 大貳乳母を訪ふ源五八 藤原惟光之に夕顔のことを探知せるを報告す源五八 伊豫介(一)其許を訪ふ源六〇 歌を中將の御許(三)に詠みかく源六一 六條御息所の第に宿る源六二 中將御許(三)朝露のゝ歌を之に詠みかく源六二 多くの人に戀ひらる源六二 藤原惟光、之に夕顔のことをつぶさに語る源六三 夕顔と通ず源六三 藤原惟光、之に夕顔を媒介す源六三 夕顔を二條院に迎へんとす源六四 夕顔の第に宿る源六五 夕顔と深く契る源六六 歌を夕顔に詠みかく源六七 夕顔を某の院に誘ふ源六七 夕顔源氏に歌を詠みかく源六七 歌を夕顔に詠みかく源六七 夕顔之に山の端のゝ歌を詠みかく源六七 歌を夕顔に詠みかく源六六 夕顔これにひかりありとの歌を詠みかく源六六 夕顔の名を問ふ答へず源六九 妖怪に襲はる源六九 妖怪に襲はれし時直に藤原惟光を召す源七〇 藤原惟光、その召に應じてその院に參る源七〇 某の院より二條院に歸る源七四 夕顔の屍を藤原惟光をして東山の尼の家に移さしむ源七四 父帝之を召す觸穢の由勅答して參内せず源七五 藤原惟光之を訪ひて夕顔の葬送の事を計る源七五 夕顔の死を哀悼して東山に赴く源七七 右近の君(一)を二條院に祇候せしむ源七九 夕顔を追悼愛慕して病に臥す源七九 右近君(一)はじめて之に夕顔の經歷家系を語る源八〇 うつせみのゝ歌を空蟬に贈る源八三 ほのかにもの歌を小君(一)に托して 軒端の荻に贈る源八三 空蟬その病を傳聞して問はぬをもの歌を贈る源八三 夕顔の法會を叡山の法華堂にて行ふ源八四 なくなくも歌を詠ず源八四 軒端荻これに歌を贈る源八四 空蟬が伊豫介(一)に具して任國に下向せる時餞別の品に添へて逢ふまでのゝ歌を贈る源八五 夕顔を夢む源八五 瘧を病みて北山聖僧を訪ふ源八六 過ぎにしもの歌を詠ず源八六 空蟬之に歌を贈る源八六 明石入道及明石上のことを北山に赴ける時從者より聞く源八八 紫上及北山尼の隱れ家をのぞき見る源八九 北山僧都、北山尼を訪ひて源氏の北山に來れるを語る源九一 紫上に懸想す源九二 北山僧都之を訪ふ源九二 北山僧都に請ふ源九三 紫上を執り成さんとを北山僧都に請ふ源九四 紫上の後見たらんとを北山の尼に請ふ尼君辭す源九五 歌を北山の尼に贈る源九五 北山尼之にさしぐみにの歌を詠みかく源九六 吹きまよふの歌を北山僧都に詠みかく源九六 北山聖僧、之に奥山のゝ歌をよみかく源九七 北山聖僧之に優曇華のゝ歌を詠みかく源九七 北山聖僧之を加持す源九七 歌を北山聖僧に詠みかく源九七 頭中將(一)左中辨(一)等と北山より歸らんとせるとき管絃の遊びす源九八 北山僧都之にまことにやの歌を詠みかく源九八 歌を北山尼に贈る源九八 紫上之を見て美しき人と思考しやゝ之を慕ふ源九九 參内して北山聖僧の行法を奏聞す源九九 紫上雛遊に人形を作り、かく名づけて弄ぶ源九九 左大臣之を私宅に誘ふ源九九 紫上を慕ひて迎へ取らむとす源一〇〇 葵上の無情を恨む源一〇〇 北山尼之にあらしふくの歌を贈りて紫上の後見せんとを辭退す源一〇一 藤原惟光を使として淺香山の歌を北山尼に贈る源一〇一 北山尼源氏に歌を贈る源一〇一 歌を北山尼に贈り紫上を後見せんとを請ふ源一〇一 歌を藤壺の女御(一)に詠みかく源一〇三 藤壺女御(一)源氏に世がたりにの歌を詠みかく源一〇三 藤壺女御(一)と密通す源一〇三 王命婦、藤

壺女御(一)を之に媒介す源一〇三　藤壺女御(一)懷姙す、まことは源氏の胤たり源一〇三　北山尼を訪ふ源一〇四　歌を少納言乳母に詠みかく源一〇七　藤原惟光納言乳母源氏に歌を詠みかく源一〇七　少をして紫上を訪はしむ源一一　兵部卿宮紫上を迎へ取るよしを傳聞し急に二條院に迎ふ源一一三　歌を紫上に詠みかく源一一五　紫上を教導す源一一五　紫上之に馴れ睦ぶ源一一六　紫上之にかこつべきの歌を詠みかく源一一六　紫上の雛遊の爲に屋ども作りて弄ぶ源一一六　夕顔を追慕す源一一七　空蟬を懷ふ源一一七　軒端荻を懷ふ源一一八　大輔命婦、之に末摘花のことを語る源一一八　左衞門乳母は之が乳母、筑前守(一)の妻たり源一一八　末摘花が琴を彈ぜるを竊かに垣間見る源一一九　歌を頭中將(一)に詠みかく源一一〇　頭中將(一)源氏に諸共にの歌を詠みかく源一一〇　末摘花の家にて頭中將(一)と邂逅す源一一〇　中務君之を戀ふ源一一一　頭中將(一)と共に左大臣(一)の亭に至り管絃の遊びす源一一一　頭中將(一)と互に末摘花を挑む源一一一　瘧を病む源一一一　末摘花を媒介せんとを大輔命婦に促す源一一二　はじめて末摘花を訪ふ源一一四　末摘花と通ず源一一四　大輔命婦之に末摘花を媒介す源一一四　大輔命婦、之が爲に末摘花を說く源一一四　歌を末摘花に詠みかく源一一六　歌を侍從(一)に詠みかく源一一六　待從かねつきての歌を末摘花に代りて源氏に詠みかく源一一六　末摘花之にはれぬ夜のゝ歌を贈る源一一七　歌を末摘花に贈る源一一七　頭中將(一)源氏を訪ひ共に携へて參內す源一一七　大輔命婦之を訪ふ源一一八　末摘花を訪ふ源一一九　歌を末摘花に詠みかく源一一九　末摘花之に唐衣の歌をまめやかに音信す源一二〇　末摘花を憐みて裝束に添へて贈る源一二〇　歌を末摘花に贈る源一二〇　末摘花に裝束を贈る源一二〇　末摘花を訪ふ源一二一　紫上と戲遊す源一二一　紫上之と雛遊びす源一二一　頭中將(一)と共に紅葉賀の試樂の時青海波を舞ふ源一二一　物思ふの歌を藤壺女御(一)に贈る源一二一　葵上、之が紫上を迎へたるを嫉妬す源一二四　正三位に叙す源一二四　藤壺女御(一)を三條のみやに訪ふこのときたまたま兵部卿の宮また來り會す源一二四　紫上を養育す源一二四　源氏の君は葵上よりは四歲の弟なり源一二四　葵上源氏を恨む源一二四　左大臣(一)源氏を優待す源一二四　冷泉院の容貌この君に似たり源一二四　藤壺の女御(一)と私通して冷泉院を生む源一二四　歌を王命婦に詠みかく源一二四　藤壺女御(一)冷泉院を生む父は桐壺のみかどの體にてまことはこの源氏

の君の子たり源一二四　王命婦源氏の君に歌を詠みかく源一二四　よそへつゝの歌を撫子の花に添へて王命婦に贈る源一二七　紫上源氏を慕ふ源一二八　紫上に琴を教ふ源一二八　桐壺帝源氏君が葵上を疎んずるを戒む源一二九　源內侍のすけと戲る源一三〇　歌を源內侍のすけに詠みかく源一三一　源內侍のすけ、源氏に歌を詠みかく源一三一　源內侍のすけが溫明殿にて琴を彈ぜるを窺ひ寄りて物語りす源一三一　頭中將(一)源氏が源內侍のすけと物がたりせるを嫉す源一三一　源內侍のすけ、源氏にたちぬるゝの歌を詠みかく源一三一　歌を源內侍のすけに詠みかく源一三一　源內侍のすけに歌を詠みかく源一三一　頭中將(一)源氏に歌を詠みかく源一三一　源內侍のすけ、源氏に歌を贈る源一三四　歌を頭中將(一)に贈る源一三四　歌を頭中將(一)に詠みかく源一三四　歌を源內侍のすけに贈る源一三四　宰相に任ず源一三五　頭中將(一)源氏に歌を贈る源一三五　花宴に春鶯囀を舞ふ源一三七　歌を朧月夜の內侍のかみに詠みかく源一三七　朧づく夜の內侍のかみと密通す源一三八　歌を朧づく夜の內侍のかみに詠みかく源一三九　朧月夜の內侍のかみ、源氏に歌を詠みかく源一三九　紫上を訪ふ源一四〇　左大臣(一)を訪ひて花宴のことを物語る源一四〇　右大臣(一)源氏に歌を贈りて藤花の宴に招待す源一四一　右大臣(一)の招きに應じて藤花の宴に赴く源一四二　冷泉院の後見となる源一四二　朧月夜尙侍源氏に歌を詠みかく源一四二　大將たり源一四四　朝顏姬君、源氏に靡き隨はず源一四四　桐壺帝の女三の宮の御禊の行啓に供奉す源一四五　紫上を誘ひて賀茂祭を觀る源一四六　六條御息所が葵上と車所を爭ひしを聞きて訪問す源一四六　歌を紫上に詠みかく源一四七　源內侍のすけ源氏に歌を詠みかく源一四七　紫上源氏に歌を詠みかく源一四七　源內侍のすけ、源氏に歌を詠みかく源一四七　歌を源內侍のすけに詠みかく源一四七　六條御息所源氏君の無情を恨む源一四七　六條御息所を訪ふ源一四七　六條御息所源氏に歌を贈る源一四七　歌を六條御息所に贈る源一四七　夕霧を生む、母は葵上たり源一四七　葵上葬送の時昇りぬるの歌を詠ず源一四七　六條御息所歌を菊の枝につけて源氏に贈り葵上の逝去を吊ふ源一四八　歌を六條御息所に贈る源一四八　頭中將(一)源氏を吊問す源一四八　頭中將(一)に詠みかく源一四八　歌を頭中將(一)源氏に歌を詠みかく源一四八　歌を左大臣(一)の北の方に贈る源一四八　左大臣(一)家の女房達を

集めて物語りす源一八三　左大臣(一)の北の方、源氏に歌を贈る源一八三　歌を朝顔姫君に贈る源一八三　左大臣、源氏の朝顔姫君に歌を贈る源一八三　桐壺帝の御所に參す源一八七　紫上とはじめて通ず源一八九　紫上と篇繼して遊ぶ源一八九　新枕の翌日に當り歌を紫上に贈る源一八九　亥子餅を紫上に贈る源一九〇　紫上に三日の夜餅を贈る源一九〇　朧月夜内侍の督源氏を慕ふ源一九一　紫上源氏の行爲に嫌焉たり源一九二　左大臣(一)の北の方源氏に歌を贈る源一九三　歌を左大臣(一)の北の方に贈る源一九三　六條御息所を野宮に訪ふ源一九四　歌を六條御息所に詠みかく源一九六　六條御息所源氏に歌を詠みかく源一九六　歌を六條御息所に詠みかく源一九六　六條御息所旅に裝束及諸調度を贈る源一九七　六條御息所源氏に歌を詠みかく源一九七　歌を前坊姫宮に贈る源一九八　前坊姫宮源氏に歌を贈る源一九九　歌を六條御息所に贈る源一九九　桐壺帝朱雀院に源氏を以て後見にすべきを遺詔す源一九九　六條御息所、源氏に歌を贈る源一九九　桐壺帝源氏に朝廷に奉仕する心遣ひ並に冷泉院の後見すべきことを遺詔す源二〇〇　歌を兵部卿宮に詠みかく源二〇一　藤壺女御を三條宮に訪ふ源二〇一　兵部卿宮、源氏に歌を詠みかく源二〇一　勢力を失ふ源二〇二　紫上を寵す源二〇三　朧月夜の内侍のかみ、源氏に歌を詠みかく源二〇四　朧月夜の内侍のかみと密通す源二〇四　朧月夜の内侍のかみに歌を詠みかく源二〇四　藤壺女御(一)に情を訴ふ源二〇六　逢ふとのゝ歌を藤壺女御(一)に贈る源二〇七　雲林院の講議を聽聞す源二一〇　歌を朝顔の姫君に贈る源二一〇　朝顔姫君源氏に歌を贈る源二一〇　紫上源氏に歌を贈る源二一〇　歌を紫上に贈る源二一〇　雲林院に詣でゝ誦經す源二一一　藤壺女御(一)に雲林院の紅葉を贈る源二一三　月かげはの歌を藤壺女御(一)に贈る源二一四　藤壺女御(一)源氏に歌を贈る源二一四　朧月夜内侍のかみ源氏に歌を贈る源二一四　歌を藤壺女御(一)に贈る源二一五　歌を朧月夜の内侍のかみに贈る源二一五　藤壺女御(一)源氏に歌を贈る源二一五　藤壺女御(一)の落飾を惜む源二一六　藤壺女御(一)に佛具等を贈る源二一七　末摘花源氏に歌を詠みかく源二一七　藤壺女御(一)に代りて歌を冷泉院に贈る源二一七　藤壺女御(一)を佛堂に訪ふ源二一八　歌を藤壺女御(一)に詠みかく源二一八　藤壺女御源氏に歌を詠みかく源二一九　頭中將(一)と韻ふたぎの遊びを行ふ源二二〇　頭中將源氏に歌を詠みかく源二二一　朧月夜内侍のかみ源氏と密會す源二二二　右大臣(一)源氏が朧月夜内侍のかみと密會せることを發見して弘徽殿女御(一)に告ぐ源二二四　弘徽殿女御(一)源氏が朧月夜内侍のかみと密通せることを聞きて源氏を惜む源二二四　麗景殿女御(一)源氏に歌を詠みかく源二二七　花散里上を訪ふ源二二七　麗景殿女御(一)を訪ふ源二二七　歌を麗景殿女御(一)に詠みかく源二二七　須磨に赴くことを決心す源二二八　左大臣(一)を訪ひて須磨に赴く暇乞ひす源二二九　三月廿日京を發して須磨への旅程に就く源二二九　左大臣(一)の北方源氏に歌を贈る源二二二　須磨に赴かんとして紫上に別を惜む源二二三　紫上源氏に歌を詠みかく源二二四　麗景殿女御(一)及び花散里上を訪ひて須磨に赴く別をなす源二二四　歌を紫上に詠みかく源二二四　花散里上源氏に歌を詠みかく源二二五　歌を花散里の上に詠みかく源二二五　歌を朧月夜の内侍のかみに贈る源二二六　紫上に領地の券を預けれく源二二六　須磨に赴かんとして朧月夜内侍のかみと告別す源二二六　朧月夜内侍のかみ、源氏に歌を贈る源二二六　藤壺女御(一)源氏に歌を詠みかく源二二七　歌を藤壺女御(一)を訪ひて須磨に赴く別を告ぐ源二二七　桐壺帝の陵にて歌を詠す源二二八　冷泉院に須磨へ赴く別を奏す源二二八　王命婦源氏に歌を詠みかく源二二九　歌を冷泉院に上る源二二九　歌を紫上に詠みかく源二三〇　須磨に赴かんとして紫上と別を惜む源二三〇　紫上源氏に歌を詠みかく源二三〇　からくにゝの歌を詠ず源二三一　須磨より使を出して紫上、藤壺女御、朧月夜の内侍のかみ等に消息を贈る源二三一　歌を詠ず源二三一　歌を藤壺女御(一)に贈る源二三二　北山僧都、源氏の歸京せんことを祈念す源二三二　紫上源氏を慕ふ源二三二　歌を朧月夜の内侍のかみに贈る源二三二　藤壺女御(一)源氏に歌を贈る源二三二　朧月夜内侍のかみ源氏に歌を贈る源二三二　六條御息所源氏に歌を贈る源二三四　六條御息所源氏に歌を贈る源二三四　歌を六條御息所に贈る源二三五　花散里上源氏に歌を贈る源二三五　須磨の秋景色に對して悲觀を催す源二三六　須磨に在りて手習ひし繪を認めて悶を散す源二三七　八月十五夜須磨にありて故郷を想ふ源二三八　故郷を回想し藤原惟光、右近丞等と海樓に臨み詠歌して欝を散す源二三八　筑前守源氏を須磨に訪ふ源二三九　五節君源氏に歌を贈る源二三九　歌を五節君に贈る源

二九 須磨の冬景色に對して琴を彈ず源三五 明石入道、明石上を源氏に配せんの意あり源三三 須磨の春色に對して都を想ふ源三三 頭中將(一)源氏を須磨に訪ふ源三三 歌を頭中將(一)に詠みかく源三四 頭中將(一)源氏君に歌を詠みかく源三五 三月の上巳に須磨の海邊にて祓を行ふ源三五 歌を頭中將(一)に詠みかく源三五 頭中將(一)源氏に歌を詠みかく源三五 紫上源氏に歌を贈る源三七 須磨にて風雨の難に遭ひ諸神に祈願す源三八 須磨謫居の住吉に雷落ちて廊燒く源三九 桐壺帝が住吉の神の導き玉ふまゝに早く須磨を去れと宣ひしとを夢む源三九 明石入道源氏を明石に迎ふ源三九 紫上に消息を贈る源三九 明石の夕月夜に琴を彈す源三九 明石入道源氏君の前にて琴を彈す源三九 明石入道、明石上を源氏に進む源三七 明石入道源氏に歌を詠みかく源三九 明石入道明石上に代りて源氏に歌を贈る源三九 歌を明石上に贈る源三九 明石入道に詠みかく源三九 歌を明石上に贈る源三九 明石上源氏に歌を贈る源三七 弘徽殿女御(二)朱雀院がこの君の罪を赦さんとするを諫止す源三七 朱雀院源氏の罪を赦さんとを弘徽殿女御(二)に圖る源三七 明石の上を訪ふ源三七 歌を明石上に詠みかく源三七 明石上と通ず源三七 紫上に消息を贈る源三八 明石上、源氏の無情を怨む源三七 歌を紫上に贈る源三五 紫上源氏に日比の狀況を繪がきて贈る源三五 紫上に日頃の狀況を繪がきて贈る源三五 紫上源氏に歌を贈る源三九 朱雀院源氏の罪を免ず源三九 赦免の宣旨を蒙る源三九 歌を明石上に詠みかく源三七 明石上源氏と別るゝに臨み琴を彈ず源三七 明石上と留別す源三七 明石上源氏に歌を詠みかく源三七 歌を明石上に詠みかく源三九 歌を明石上に贈る源三九 明石上源氏に歌を贈る源三九 明石入道源氏に歌を贈る源三九 明石入道源氏に歌を詠みかく源三九 明石入道源氏に歌を贈る源三九 明石入道源氏に歌を贈る源三九 明石入道に詠みかく源三〇 歌を明石上に贈る源三〇 明石上源氏との別を悲む源三〇 赦免の後始めて參內す源三一 本位に復し員外の權大納言に任す源三一 歌を五節君に贈る源三一 歌を明石上に贈る源三一 歌を朱雀院に詠みかく源三一 五節君、源氏に歌を贈る源三二 朱雀院源氏に歌を詠みかく源三二 桐壺帝の爲めに御八講を行ふ源三三

內大臣に任ず源三四 明石中宮を生む、母は明石上たり源三六 二條東院を修理す源三六 子三人あるべきとを陰陽師相す源三六 明石乳母を以て明石中宮の乳母とし明石に下す源三七 歌を明石乳母に詠みかく源三八 明石上、源氏の厚遇を喜ぶ源三八 明石乳母源氏に歌を詠みかく源三八 明石上源氏に歌を贈る源三九 紫上に明石上が明石中宮を生みたるとを告ぐ源三九 歌を明石上に贈る源三九 紫上源氏に歌を詠みかく源三九 紫上、明石上のとを源氏より聞きて暗に嫉妬を含む源三九 明石上源氏に歌を贈る源三九 花散里上を訪ふ源三九 歌を花散里の上に詠みかく源三九 花散里上、源氏に歌を詠みかく源三九 淑景舍を以て內裏の曹子と爲す源三九 五節君源氏を戀ふ源三九 五節君を想ふ源三九 朧月夜の內侍のかみを想ふ源三九 兵部卿の宮と不和たり源三四 左大臣(一)と共に天下の權を握る源三四 住吉に詣でゝ明石上に邂逅す源三四 七瀨祓を行ふ源三九 歌を明石上に贈る源三九 惟光源氏に歌を詠みかく源三九 六條御息所が出家せるとを聞きて訪問す源三八 六條御息所源氏に前坊姫宮の後見を遺托す源三八 六條御息所の第にて密かに前坊姫宮を覗ふ源三九 六條御息所の爲めに精進を行ふ源三〇 歌を前坊姫宮に贈る源三〇 前坊姫宮を養ひて入內せしめんと欲す源三〇 前坊姫宮入內のとを藤壺女御(一)に謀る源三〇 末摘花源氏を戀ふ源三〇 醍醐阿闍梨、末摘花に源氏が御八講を行へるとを告ぐ源三〇 末摘花を訪ふ源三四 歌を末摘花に詠みかく源三七 末摘花を憐れみ、其の第宅を修理し物を贈る源三八 末摘花を二條東院に移す源三九 石山に詣づ源三〇 伊豫介(一)源氏と逢坂にて相逢ふ源三〇 小君(一)を遣はして空蟬に消息を贈る源三一 歌を空蟬に贈る源三一 空蟬源氏に歌を贈る源三一 紫上に明石上の繪日記を示す源三七 歌を紫上に詠みかく源三七 紫上源氏に歌を詠みかく源三七 頭中將(一)等と冷泉院の御前にて繪合を催す源三一 螢兵部卿宮源氏君と物語す源三三 榮を極めて隱退の意あり源三四 二條東院の造營落成す源三五 花散里の上を二條東院に移す源三五 嵯峨の御堂を造營す源三五 明石上の上洛を勸む源三五 嵯峨御堂の造營落成す源三七 明石上、源氏に、大井山莊に住居せんとするとを告ぐ源三七 紫上に消息を贈る源

三一　明石上を大井山荘に訪ふ源三四　契りしにの歌を明石尼君に詠みかく源三四　嵯峨御堂に詣づ源三四　明石尼君源氏に歌を詠みかく源三四　歌を明石尼君に詠みかく源三四　明石上源氏に歌を詠みかく源三四　明石中宮源氏を慕ふ源三四　桂殿に赴き大井川上にて宴を開く源三四　歌を冷泉院に上る源三六　冷泉院源氏に歌を贈る源三六　紫上に明石中宮を子養せんとを囑す源三六　明石の上に二條東院に移らんとを勸む源三九　明石上に明石中宮を紫上の養女とせんとを圖る源三九　明石上を訪ひて明石中宮を二條東院に迎ふ源三三　明石上源氏に歌を詠みかく源三三　歌を明石上に詠みかく源三三　紫上源氏に歌を詠みかく源三四　歌を紫上に詠みかく源三四　明石上を訪ひて箏を吹き明石の上の琵琶と合奏す源三五　藤壺女御(一)の病を訪ふ源三五　冷泉院、源氏の君の子たることを僧都より聞く源三〇　冷泉院、位を讓らんとを内諭す源三三　冷泉院源氏を親王となさんとす辭して拜せず源三三　牛車の宣旨を蒙る源三三　王命婦に藤壺女御(一)との秘密を冷泉院に告げたることなきかを尋問す源三三　太政大臣たるべき内旨を受けて固辭す源三三　前坊姫宮を曹子に訪ふ源三四　前坊の姫宮と春花秋葉の優劣を論ず源三五　歌を前坊姫宮に詠みかく源三六　明石上を訪ふ源三七　歌を明石上に詠みかく源三六　明石上源氏に歌を詠みかく源三六　歌を朝顔姫君に詠みかく源三六　朝顔姫君を訪ふ源三六　歌を朝顔に添へて朝顔姫君に贈る源三七　朝顔姫君源氏に歌を贈る源三七　紫上、朝顔姫君のとによりて源氏を恨む源三七　朝顔姫君を訪ふ源三四　歌を源内侍のすけに詠みかく源三五　源内侍のすけ源氏に歌を詠みかく源三五　朝顔姫君の第にて源内侍のすけに逢ふ源三五　朝顔姫君源氏に歌を詠みかく源三六　朝顔姫君に切に情を訴ふ源三六　歌を朝顔姫君に詠みかく源三六　朝顔姫君、源氏の戀を卻く源三六　紫上と、朧月夜の内侍のかみ及び明石上等のとを物語す源三九　雪山を作らしむ源三九　藤壺女御(一)を夢む源三〇　藤壺女御(一)の爲に冥福を祈る源三一　先帝の女五の宮、朝顔姫君に勸むるに源氏に從はんとを以てす源三二　歌を朝顔姫君に贈る源三二　朝顔姫君源氏に歌を贈る源三二　朝顔姫君、先帝の女五宮が源氏に從はんとを勸めしを聽かず源三三　夕霧を訓戒す源三三　前坊

んとする前源氏まづ其學識を試驗す源三七　太政大臣に任す源三九　五節の舞姫を召して溫習を爲す源四〇　五節の舞姫を奉る源四〇　五節君源氏に歌を贈る源四四　歌を五節君に贈る源四四　花散里上に夕霧を托す源四六　花散里上、源氏の依頼によりて夕霧の後見となる源四六　六條院を造營す源四〇　六條院に移る源四一　右近君、初瀬にて玉蔓に邂逅せるとを源氏に語る源四三　玉蔓源氏に歌を贈る源四三　歌を玉蔓に贈る源四三　玉蔓を六條院に迎へて花散里に托す源四四　玉蔓の家司を定む源四七　紫上、玉蔓、花散里上、末摘花、明石上、空蟬等に春衣を配與す源四六　末摘花源氏に歌を贈る源四九　歌を末摘花に贈る源四一　紫上を訪ひて齒固めの祝す源四一　明石中宮を訪ひ子日遊びす源四二　紫上、源氏のきみに歌を詠みかく源四三　くもりなきの歌を紫へに詠みかく源四三　玉蔓を年のはじめに訪ふ源四三　花散里上を年のはじめに訪ふ源四四　臨時客を催す源四五　末摘花を東院に訪ふ源四六　空蟬を訪ふ源四七　紫上、及び前坊姫宮と六條院にて舟遊を催す源四二　歌を螢兵部卿宮に詠みかく源四九　玉蔓源氏に歌を詠みかく源四九　歌を玉蔓に詠みかく源四九　紫上に玉蔓の事を語る源四六〇　玉蔓源氏に歌を詠みかく源四六一　歌を玉蔓に詠みかく源四六一　竊かに玉蔓に懸想し意中を語る源四六二　螢を放つ源四六六　玉蔓、源氏君の懸想せるを愛ふる序に訪ふ源四六八　玉蔓を馬場殿に出てたる　花散里上に歌を詠みかく源四七一　歌を花散里上に詠みかく源四七一　玉蔓源氏と繪物語を翫ぶ源四七一　歌を玉蔓に詠みかく源四七二　紫上と繪物語を翫ぶ源四七四　玉蔓源氏に歌を詠みかく源四七四　明石の中宮の教育に注意す源四七四　頭中將(一)が近江君を養ふを笑ふ源四七七　釣殿にて納涼す源四七七　玉蔓を訪ひて和琴を彈す源四八〇　玉蔓源氏に歌を詠みかく源四八二　頭中將(一)、玉蔓を養ふを貶す源四八三　頭中將(一)を毀る源四九一　玉蔓の許にて篝火を燒かしむ源四九二　歌を玉蔓に詠みかく源四九二　玉蔓と琴を枕にして副伏す源四九二　柏木君・夕霧等と篝火を燒きて樂を翫ふ源四九三　玉蔓源氏に歌を詠みかく源四九三　夕霧、野分の甚しき日、源氏を六條院に訪ふ源四九四　夕霧、前坊姫宮を訪ひて源氏が野分を見舞へる消息を傳ふ源四九六　夕霧に祖母左大臣(一)北方に孝養すべきとを教訓す源四九六　前坊姫宮に夕霧を使として野分を見舞ふ源四九六

前坊姫宮を訪ふ源四九　明石上を訪ふ源五〇　玉蔓を訪ふ源五〇　夕霧、源氏が玉蔓に戯るゝを見て怪しむ源五〇　玉蔓吹き亂るの歌を源氏に詠みかく源五〇　したつゆにの歌を玉蔓に詠みかく源五〇　花散里上を訪ふ源五〇三　冷泉院源氏に歌を贈る源五〇七　大原野の行在所に酒菓物等を献す源五〇七　玉蔓に宮仕へのことを勸む源五〇七　歌を冷泉院に献る源五〇七　玉蔓源氏に歌を贈る源五〇八　歌を玉蔓に贈る源五〇八　左大臣(一)北方の病を訪ふ源五〇一　左大臣(一)北方に玉蔓は頭中將(一)の姫君にして今吾が養へるとを告ぐ源五一〇　頭中將(一)に玉蔓を養へるとを告ぐ源五一四　玉蔓の裳着を行ふ源五一八　歌を末摘花に贈る源五一八　寄る邊なくの歌を玉蔓に代りて頭中將(一)に詠みかく源五一九　玉蔓歌を源氏に詠みかく源五一九　玉蔓を訪ふ源五二四　歌を玉蔓に詠みかく源五二四　兵部卿宮の北方、怨む源五二四　琴を彈じて玉蔓を懷ふ源五二七　歌を玉蔓に贈る源五二七　玉蔓源氏に歌を贈る源五二三　歌を玉蔓に贈る源五二三　西の對に赴きて山吹花を覩る源五二三　玉蔓に鴨の卵を贈る源五二四　鬚黑君歌を玉蔓に代りて源氏に贈る源五二四　薫物會を催す源五二六　螢兵部卿宮、源氏を訪ふ源五二七　朝顏姫君薫物を贈る源五二七　螢兵部卿宮、源氏君か薫物會を催せるとき判者となる源五二八　朝顏姫君源氏に歌を贈る源五二八　歌を螢兵部卿宮に詠みかく源五二一　紫上と書法の事を語る源五二二　螢兵部卿宮、源氏を訪ひて草紙を示す源五二四　夕霧を敎訓す源五二六　夕霧を敎訓す源五二四　太上天皇に准ず源五二〇　冷泉院及び朱雀院の行幸を六條院に仰ぐ源五二一　朱雀院、朱雀院の女三の宮の後見を源氏に托す源五二六　今上、朱雀院の女三の宮の後見を源氏君に托すべきとを朱雀院に奏す源五二六　朱雀院に拜謁す源五二九　朱雀院、朱雀院の女三の宮のことを更に托す源六〇〇　朱雀院の勅により朱雀院の女三の宮を後見ずるとを諾す源六〇一　紫上に朱雀院の女三宮後見の事を語る源六〇三　玉蔓、源氏に若菜を贈る源六〇四　玉蔓源氏に歌を詠みかく源六〇五　朱雀院の女三宮を六條院に迎へて婚す源六〇七　朱雀院の女三の宮、六條院に移り、源氏君に嫁す源六〇七　歌を紫上に詠みかく源六〇九　紫上源氏に歌を詠みかく源六〇九　紫上、朱雀院の女三の宮が源氏君に降嫁せるとにつきて憂欝す源六一〇　紫上に梅の花を見しむ源六一三　歌を朱雀院の女三の宮に贈る源六一三　朱雀院の女三の宮源氏に歌を贈る源六一三　朝顏姫君源氏に歌を贈る源六一六　夜の内侍のかみを二條宮に訪ひて密通す源六一六　歌を朧月夜の内侍のかみに詠みかく源六一七　朧月夜の内侍のかみ源氏に歌を詠みかく源六一七　朧月夜の内侍のかみに詠みかく源六一八　歌を朧月夜の内侍のかみに詠みかく源六一八　紫上源氏に歌を詠みかく源六二三　歌を紫上に詠みかく源六二三　紫上、源氏君の四十賀の爲に嵯峨の御堂にて藥師佛を供養す源六二三　四十賀を行ふ源六二三　前坊姫君、源氏君の四十の賀を祝して平城の七大寺、都の四十寺に命じて誦經せしむ源六二五　明石中宮を訪ひて明石上が持參せる明石入道所贈の文箱を見る源六二六　明石上、明石入道の消息を示す源六二四　螢兵部卿宮、夕霧、柏木君等と六條院にて蹴鞠す源六二五　六條院にて蹴鞠する時諸卿に椿餅を供す源六二六　六條院にて賭弓を催す源六二七　紫上、源氏に出家を乞ふ許されず源六二八　紫上、明石上、明石中宮を具して住吉社に詣づ源六二九　明石尼君源氏に歌を贈る源六二一　たれかまたの歌を明石尼君に贈る源六二一　朱雀院の五十の賀の爲に準備す源六二五　朱雀院の女三の宮に琴を敎ふ源六二五　六條院にて試樂を催す源六二七　夕霧と音樂を評論す源六二七　紫上を訪ひ重厄の年齡なれば祈禱などすべきとを勸告す源六二八　紫上、出家の意を漏ちす源六二九　紫上を看護し且つ僧を召して加持祈禱せしむ源六三一　朱雀院の女三の宮を訪ふ源六三一　紫上、源氏君の多情を怨み憂欝す源六三一　紫上、頻に出家の事を乞ふ許されず源六三二　紫上の病を憂ひ二條院に移す源六三二　明石中宮、二條院に移り源氏君と共に紫上を看護す源六三二　童わが身とその歌を源氏に詠みかく源六三三　紫上の病を憂ひて憔悴す源六三六　朱雀院の女三の宮を訪ひ乳母より懷姙したるとを聞きて驚く源六三六　契りれかんの歌を紫上に詠みかく源六三六　まつさとものの歌を朱雀院の女三の宮に詠みかく源六三九　朱雀院の女三の宮夕霧にの歌を詠みかく源六三九　柏木君が朱雀院の女三の宮に贈れる艶書を發見す源七〇〇　柏木君が朱雀院の女三の宮に贈れる艶書を見て懊惱す源七〇一　柏木君、朱雀院の女三の宮に贈りたる艶書を源氏君が發見したるとを小侍從より聞きて大に畏る源七〇三　明石中宮及び玉蔓を評す源七〇五　朧月夜の内侍のかみ源氏に蜉船にの歌を贈る源七〇六　朧月夜の内侍のかみ源氏に消息を贈る源七〇六　あまの世をの歌を朧月夜の内侍のかみに贈る源七〇九　朱雀院の女三の宮を諷戒す源七〇九　六條院にて朱雀院

御賀の試樂を催す源七二　柏木の君を六條院の試樂に召す源七三　朱雀院の女三の宮、薫君を生む父は源氏君、但し實は柏木君の子たり源七三　朱院の女三の宮、出家の許可を請ふ聽されず源七四　朱雀院の女三宮薫君を生みたるを聞きて訪ふ源七四、柏木君朱雀院の女三の宮に通ぜるとを源氏君に謝せんとを夕霧に遺托す源七三　五十日餅を薫君に贈る源七四　薫君を見る源七四　たが世にかの歌の詠ず源七五　柏木君を追悼し追善供養の爲黄金百兩を施入し且つ誦經す源七四　うきふしもの歌を詠す源七七　夕霧、源氏を訪ふ源七三　夕霧、源氏に隨ひて紫上を訪ふ源七四　夕霧、源氏に柏木君が臨終の際にれける遺托を語る源七五　夕霧、柏木君を夢みしとを語る源七五　朱雀院の女三の宮へだてなくの歌を詠みかく源七六　はちすばの〻歌を朱雀院の女三の宮に詠みかく源七六　朱雀院の女三の宮を訪ふ源七八　柏木君を追想す源七八　朱雀院の女三の宮大方の〻歌を詠みかく源七八　心もての歌を朱雀院の女三の宮に詠みかく源七八　月かげはの歌を冷泉院に上る源七九　螢兵部卿宮、夕霧等の諸卿を率ゐて冷泉院に參じ和歌作文の興を催す源七九　冷泉院源氏の君に歌を贈る源七九　前坊姫宮を訪ふ源七九　前坊姫宮、出家のとを乞ふ許されず源七四　夕霧が落葉宮に通へるとを聞きて憂ふ源七五　夕霧、源氏を訪ふ源八〇　紫上病勞益す〻み再三出家せんとを請ふ、許されず源八二　や〻もせばの歌を詠す源八八　夕霧をして紫上の髮を剃らしむ源八八　紫上の逝去を悲む源八二　頭中將(一)いにしへの〻歌を贈り紫上の逝去を弔ふ源八三　露けさはの歌を頭中將(一)に贈る源八三　のぼりにしの歌を前坊姫宮に贈る源八三　前坊姫宮かれはつるの歌を源氏に贈りて紫上の逝去を弔ふ源八三　螢兵部卿宮源氏を訪ひて紫上の逝去を弔ふ源八四　螢兵部卿宮香をとめての歌を源氏に詠みかく源八四　わが宿はの歌を螢兵部卿宮に詠みかく源八四　紫上を哀悼す源八五　浮世にはの歌を詠ず源八六　紫上の往事を語りて女房等と追悼す源八六　紫上を追悼し客を謝して籠居す源八七　植ゑて見しの歌を詠ず源八六　紫上を四季の風物に感じて追悼す源八六　今はとての歌を詠ず源八九　朱雀院の女三の宮を訪ふ源八九　明石上を訪ふ源八〇　明石上かりがねしの歌を贈る源八三　羽衣の〻歌を花散里上に贈る源八三　泣くなくもの歌

を明石上に贈る源八三　花散里上夏衣の歌を更衣の裝束に添へて贈る源八三　夕霧源氏を訪ふ源八三　中將君(一)さもこそはの歌を贈る源八三　大方はの歌を中將の君(一)に詠みかく源八三　なき人をの歌を夕霧に詠みかく源八四　夕霧時鳥の歌を詠みかく源八四　七夕の〻歌を詠す源八三　つれづれとの歌を詠す源八三　夜をちるの歌を詠す源八三　紫上の一周の法事を行ひ曼荼羅を供養す源八三　宮人はの歌を詠す源八五　大空をの歌を詠す源八五　人戀ふるの歌を詠す源八五　出家の用意す源八五　諸共にの歌を詠す源八五　死出の山の歌を詠す源八七　かきつめての歌を詠す源八七　紫上より贈りし消息を破棄す源八七　春までの〻歌を導師に詠みかく源八五　導師千世の春の歌を詠みかく源八五　物思ふの歌を詠す源八五　薨す源八五　人々に追慕せらる源八四　宇治八宮の御兄たり源八七　明石中宮、源氏君及び紫上の爲に御八講を行ふ源二七　女等集りて其の人物を批評す無二四　須磨、明石に赴く處源氏物語の哀れなる節たるとを女等集まりて批評す無二八　六條邊を忍び歩きする處、源氏物語中にれけるいみじき節たるとを女等集まりて批評す無二三　末摘花を尋ぬる處、源氏物語中にれけるいみじき節なるとを女等集まりて批評す無二三　野分の朝に夕霧を尋ぬる處、源氏物語中にれけるいみじき節なるとを女等集まりて批評す無二三　須磨に赴きし後の紫上の有樣、源氏物語中にれけるいとほしき節たるとを女等集まりて批評す無二三　須磨へ赴ける後の紫上の有樣源氏物語中はれける心やさしき節たるとを女等打ち集ひて批評す無二四　朱雀院の女三の宮を娶りたるとを紫上聞きて思ひ沈める處、源氏物語中にれける心やましき節たるとを女等打集りて批評す無二四

げんじのみや　源氏宮狹衣中將より藤の花を受く狹一　先帝の皇女、母は中納言の御息所狹六　幼にて父母を失ひ前齋宮に養育せらる狹六　狹衣中將源氏宮を慕ふ狹六　後一條院源氏宮を戀慕す狹七　狹衣中將源氏宮に意中を明す狹九　狹衣中將を戀慕す狹三　狹衣中將源氏宮を訪ふ狹四　雪山を作らせて遊ぶ狹一〇　狹衣中將に對面す狹一〇　いつまでかの歌を詠ず狹一〇　狹衣中將の代作せし歌を後一條院に奉る狹一四　後一條院より歌を賜はる狹一四　狹衣の中將と管絃を合奏す狹一五　齋院たるべきよし賀茂の明神の神託を蒙る狹一七　齋院に定まる狹一九　大貳

の乳母の家に移る狭二九　御禊の爲めに御手洗川に赴く狭三三　狭衣中將を從へて御手洗川に赴く狭三三　前齋宮と常に同居す狭三四　賀茂祭の御禊の爲め河原に行啓す狭三〇　狭衣に贈る返歌を前齋宮をして代らしむ狭三四　齋院に狭衣中將に面す狭三三　いはずともの歌を詠す狭三三　能書なり狭三六　齋院の櫻を賞し一重づゝの歌を詠ず狭三七　時しらぬの歌を嵯峨院の女一の宮に贈る狭三七　容貌致仕大納言の姫君に酷似す狭三四　容貌式部卿宮の姫君に酷似す狭三五　狭衣中將源氏宮を訪ふ狭三五　狭衣に訪はれ共に名殘を惜む狭三九　月だにもの歌を詠す狭三〇　あはれそふの歌を狭衣中將に贈る狭三九　あふぎてふの歌を狭衣中將に贈る狭三九

げんしん　元槙　不是花中偏愛菊といふ秀句を作る著四

げんしん　源信　大江定基、源信を師として法文を學ぶ今鏡三三

げんしん　源親　日吉の社にて法華經一萬部の轉讀を行ふ平家二九　日吉の社にて法華經萬部の轉讀を行ひし時、後白河院行幸す平家二九

げんしんもんゐん　顯親門院　すゑこ　藤原季子

げんじものがたり　源氏物語　勝れて心にしみてめでたく覺ゆる卷々を女等集りて批評す無九　物語中に現はれたる女性を女等集りて批評す無一〇　物語中に現はれたる男性を女等打ち集りて批評す無一四　桐壺更衣の卒去せる處、物語中にれける哀なる節たるとを女等打集りて批評す無一六　物語中にれける哀なる節々を女等打集りて批評す無一六　夕顔の卒去せる處、物語中にれける哀なる節たるとを女等集りて批評す無一七　葵上の薨去の處、物語中における哀なる節たるとを女等ち打集りて批評す無一七　源氏の君が須磨明石へ赴く處物語中に於ける哀なる節たるとを女等集りて批評す無一八　柏木君薨去の處、物語中にれける哀なる節たるとを女等集りて批評す無一九　紫上薨去の處、物語中にれける哀なる節たるとを女等集りて批評す無二〇　物語中にれけるいみじき節々を女等集りて批評す無二一　源氏の君が六條邊忍び歩きの處、物語中にれけるいみじき節たるとを女等集りて批評す無二二　宇治大君の薨去の處、物語中にれける哀なる節たるとを女等批評す無二三　源氏の君が末摘花を尋ぬる處、物語中にれけるいみじき節たるとを女等集りて批評す無

二三　朱雀院が山に隱れ給へる處、物語中にれけるいみじき節たるとを女等打集りて批評す無二三　前坊姫宮が齋宮となりて伊勢へ下れる處、物語中にれけるいみじき節たるとを女等打集りて批評す無二三　源氏の君が野分の朝に夕霧を尋ねし處、物語中にれける いみじき節たるとを女等打集りて批評す無二三　物語中にれけるいとほしき節々を女等打集りて批評す無二三　宇治八宮の中の君が匂宮に移香をとがめられし處、物語中におけるいとほしき節たるとを女等打集りて批評す無二三　雲居雁が雲居の雁もわがとやと獨言せる處、物語中にれけるいとほしき節たるとを女等打集りて批評す無二三　源氏の君が須磨に赴きし後の紫上の有樣、物語中にれけるいとほしき節たるとを女等打集りて批評す無二三　物語中における心やましき節々を女等打集りて批評す無二四　源氏の君が須磨へ赴きし後の紫上の有樣、物語中にれける心やましき節たるとを女等打集りて批評す無二四　紫上が、源氏の君が朱雀院の女三の宮を娶りたるを聞きて思に沈める處、物語中における心やましき節たるとを女等打集りて批評す無二四　紫式部選子內親王の囑によりて源氏物語を草す無二五　嫗これを批評す今鏡三三

げんしやう　元性　夜もすがらの歌を詠す今鏡二〇一　うきながらの歌を覺性法親生に贈る今鏡二〇一

げんしやう　崇德院の皇子、仁和寺の僧たり今鏡二〇二

げんしやう　玄象　撥面に珠を打つもの要目に珠さして舞ひたる姿の繪樣なり著二八　藤原貞敏入唐の時廉承武より傳はりて歸朝す永く朝廷の寶物たり平家三三

げんしやう　玄上　紛失す徒二九　博雅の三位玄上の琵琶を彈じ得ず大鏡二九

げんしやうのさいしやうのむすめ　玄上宰相女　藤原文範、宰相の女を室とす大鏡二五

げんしやうてんなう　元正天皇　養老の瀧を命名す著二六　帝の朝、藤原不比等大臣たり大鏡二五　養老と改元す水三七　美濃國不破山溫泉に行幸す水三七　母は元明なり水三七　大隅日向の不逞を討つ水三七　百官に笏を持たしむ水三七　九年位に在り水三七　文武の姉なり水三七　放生會を始む水三七　靈龜と改元す水三七　元明天皇の禪を受く水三七　聖武に讓位す水三六　北圓堂を建つ水三六　太上天皇と稱す水三六　百官に笏を持たしむ正三

げんしゆんもんゐん　建春門院　しげこ　平滋子今鏡

けんじよ　賢助　吉田兼好を伴ひて加持香水の法式を見る徒然

けんじよそうじやう　賢助僧正　愛染王の法を修す増一六

げんしよう　源承　あだにのみの歌を詠す

けんせいのしやうじ　賢聖障子　賢聖の名、所在、畫像の變遷著三〇三　字多天皇の時畫かしめらる著三〇三　清涼殿にあり平家三四

げんせう　顯照　日本紀の歌の注釋を著す十六夜三　小二

げんせうしやう　源少將　なかより　源仲頼宇津

げんせうなごん　源少納言　よしきよ　源良清源

げんそう　唐玄宗　楊貴妃を寵す唐一七　すがたこそはの歌を詠す唐一九　蜀に遁る唐一九　楊貴妃を慕ふ唐三　崩ず唐三五　上陽人を寵せず大鏡一四三　楊貴妃を寵す大鏡一四三

けんそうてんなう　顯宗天皇　三年位に在り水鏡三六　郡司の酒宴に王孫たることを明かす水三七　幼時、王兄と丹波播磨に匿る水三七　父皇の仇雄略の陵を毀たむとす水三六　曲水宴を開始す水三六　仁賢天皇の弟たり水三六　王兄億計に諫めらる水三六　王兄億計と天位を相讓る水三六　近明日香八釣宮に居る正四〇

げんぞくのみや　遠俗宮　しんしやう　眞性平家

げんだ　とし矢の源太　源爲朝に隨ひて上洛す保三

げんだ　梶原源太　かげすゑ　梶原景季平家

げんだいなごん　源大納言　きよかげ　清蔭大和

けんたうし　遣唐使　虎を殺して子の讐を報す宇治三六

げんだのうぶきぬ　源太産衣　源家相傳の鎧たり保一六　源家嫡子相傳の鎧たり保一六　源氏重代の鎧たり、源義家が幼時着用せるを以て名付く胸板に天照大神正八幡大神と鑄付け左右の袖に藤花ををどしたり平治三三

げんちうじやう　源中將　散る花をの歌を詠ず堤三

げんちうなごん　源中納言　はままつのちうなごん　濱松中納言源

げんちうなごん　源中納言　ちうなごん中納言落

げんちうなごん　源中納言　きよかげ　清蔭大和

げんちうなごん(一)　すゞし　源涼宇津

げんちうなごん(二)　源中納言　朱雀帝春宮菊の宴の夜、源中納言等數人と女子を品評す宇津三〇八　菊の宴の夜、源中納言等數人朱雀東宮の傍に侍す宇津三〇

げんてい　漢元帝　王昭君の故事唐三四　王昭君を夷の王に送る唐三四

けんとくこう　謙德公　これただ　藤原伊尹大鏡七六

けんとくゐん　顯德院　ごとばてんなう後鳥羽天皇増三九

げんないしのすけ　源内侍のすけ　源氏君之と戯る源一五　源氏君源内侍のすけが温明殿にて琴を彈ぜるを窺ひ寄りて物語す源一五　君し來ばの歌を源氏の君に詠みかく源一五　頭中將(一)源内侍のすけと情交を結ぶ源一五　源氏君源内侍のすけにさゝわけばの歌を詠みかく源一五　頭中將(二)源氏君が源内侍のすけと物語せるを驚かす源一五　たちぬるゝの歌を源氏君に詠みかく源一五　源氏君之にあらだちしの歌を贈る源一五四　恨みてもの歌を源氏の君に贈る源一五四　悔しくもの歌を源氏の君に詠みかく源一六九　源氏君源内侍のすけにかざしけるの歌を詠みかく源一六九　はかなしやの歌を源氏の君に詠みかく源一六九　源氏君朝顔姫君の第にて源内侍のすけに逢ふ源三七五　尼となる源三七五　年ふれどの歌を源氏の君に詠みかく源三七五　源氏君みをかへての歌を詠みかく源三七五

けんにんじ　建仁寺　京都に於ける禪院の始めなり野三五

げんのしきぶ　源式部　紫式部源式部の容貌を評す紫三五

けんのみやうぶ　監命婦　大澤のゝ歌を兼親明王に贈る大和四　逢ふことのゝ歌を詠ず大和四　兼明親王と通ず大和四　中務宮と通ず大和四　大澤のゝ歌を詠ず大和四　故家を過ぎ故郷をの歌を詠ず大和五　かしは木のゝ歌を良峯義方に贈る大和七　良少將と通ず大和七　柏木のゝ歌を詠ず大和七　良峰義方と通ず大和七　良少將監命婦に大刀の緒を求む大和八　忠文の子に通ず大和二〇　忠文の子に山桃を贈る大和二〇　藤原大七と通ず大和二〇　忠文の子の死を悲む大和二一　しのづかのゝ歌を詠す大和二一　賀茂川のゝ歌を藤原大七に贈る大和二一　彈正親王監命婦に懸想す大和

三 うちつけにの歌を彈正の皇子に贈る大和三
こりずまにの歌を彈正の皇子に贈る大和三

げんぼう 玄昉 太宰府の觀音寺供養の時其頭上に落雷す平家三〇三 法相宗を唐より傳ふ正五〇

げんぱち 佐野源八 源鶴若の傳たり保七一
げんぱち 海老名源八 すゑさだ 海老名季定保

げんぴん 玄賓 僧都に任せられし時外つ國はの歌を詠じて失踪す著七五

げんぷく 元服 源氏の君元服す源一四 左大臣(一)、源氏君の元服の加冠を勤む源一四 夕霧元服して六位に叙す源三六三 今上行はせらる源五六一 匂宮二條院に住し、元服の後兵部卿に任す源八三九 薫君元服す源八四一

げんみんぶきやう 源民部卿 としかた源俊賢大鏡五七

げんみやうてんなう 元明天皇 帝の朝、藤原不比等大臣たり大鏡一五五 文武天皇の母たり水五三 天智第四の御女、母は、蘇我山田石川麿の女嬪姪娘なり水五六 武藏銅を貢す水五六 和銅と改元す水五六 大和の平城に遷都す水五六 七年位に在り水五六 諸國の郡名產物を錄せしむ水五七 元正天皇の母たり水五七 維摩會を山階寺に移す水五七 元正天皇に讓位す水五七 平城帝とは平城天皇のみならず元明天皇をも稱す今鏡三六 和銅三年奈良に遷都す今鏡三六 飛ふ鳥のゝ歌を詠す今鏡三六 龍田川の歌を詠す今鏡三〇 平城宮に居り正五一

けんれいもんゐん 建禮門院 とくこ 平德子增

げらふのかうい 下蔦更衣 落葉宮の母たり源六四

こいかめばう 子いかめ坊 ゑけい 慧慶平家

ごいちでうてんなう 後一條天皇 藤原彰子の出たり紫六 生る紫六 藤原道長帝の產養す紫一〇 一條天皇後一條の產養す紫一三 藤原賴通帝の產養す紫一四 一條第二の御子たり大鏡一九 外戚の後見多し大鏡二〇 藤原彰子の御腹なり大鏡一三五 崩ず大鏡一四 一條第二の御子たり今鏡四 敦明親王を太子とす今鏡四 三條帝の位を嗣ぐ今鏡四 親王の宣旨を蒙る今鏡四 母は上東門院彰子たり今鏡四 藤原威子帝の女御たり今鏡五 法成寺に行幸す今鏡六 高陽の院に競馬を覽る今鏡六 太皇太后、彰子に朝覲す今鏡六 上東門院彰子に朝覲す今鏡七 章子內親王、菩提樹院に、天皇の御像を畫かしむ今鏡九 司天記取蓖稀色の詩を吟ず今鏡九 崩ず今鏡九 皇兄敦康親王に先ちて卽位す今鏡一〇 藤原彰子の御子たり今鏡一五 御母は藤原彰子たり今鏡七一 藤原威子中宮たり今鏡七一 道長攝政す、後ちその子賴道に讓る正八〇 小一條院皇太子を辭す正八〇 賴通攝政す正八〇 元服の加冠理髮は道長賴通父子之を勤む正八〇 元方の惡靈に襲はる正八一

こいちでうのおとど 小一條大殿 もろただ 藤原師尹大鏡

こいちでうのさだいじん 小一條太政大臣 ただひら 藤原忠平大鏡

こいちでうのおほきおとど 小一條左大臣 もろただ 藤原師尹蜻

こいちでうのたいしやう 小一條大將 なりとき 藤原濟時蜻

こいちでうのたいしやう 小一條大將 もろただ 藤原師尹枕

こいちでうのゐん 小一條院 今內裏といふ枕三 東宮を辭す大鏡三一 元方民部卿の靈に犯さる大鏡三四 能信を召す大鏡三五 源俊賢藤原敎通、藤原道長に勸めて東宮敦明を廢せんとす大鏡三九 藤原道長、東宮敦明を廢す大鏡三九 藤原道長、院に奉仕す大鏡四〇 高松殿の御匣殿、小一條院に參る大鏡四九 藤原兼隆、小一條院の東宮を退かしむ大鏡一三 後一條天皇、敦明を太子とす今鏡四 東宮を辭す今鏡四 敦明親王小一條院と號す今鏡四 源基平の父たり今鏡一八三

こいちでうのゐんのみくしげどの 小一條院御匣殿 卒す大鏡一四七

ごいちでうのゐん 後一條院 源氏宮を戀慕す狹七 雪の氷り付きたる呉竹の枝にためつゝの歌を結び付けて源氏の宮に贈る狹一四 嵯峨院より位を受く狹二三 今姫君の入內を欲せず狹一四 狹衣と一品宮(一)との婚を許す狹一六 わが身にぞの歌を詠ず狹二〇三 嵯峨院の女一の宮の腹に姫君を生ましむ狹二五 女王又は一世源氏いづれかの中に讓位せんとを堀川大臣に語る狹二五 讓位して一條院に移徙するに決す狹二九 狹衣中將に讓位すべきよし天照大神の神託を蒙る狹二九 一條院に移徙す狹二九 天照大神の神託により狹衣中將を猶子として八月に讓位するに決す狹二九 位を狹衣中將に讓る狹三〇三

こいんしゆ 胡飲酒 多資忠死後中絕した

るを源雅定再興す著三三　多忠方の家に傳ふ今鏡一五五

こういん　公胤　源空上人の示現を蒙る著四四

こうう　項羽　王陵、其招に應ぜずして漢高祖の臣となる平治四六　漢高祖、項羽と位を爭ふ平家四五四

こううん　公雲　藤原通季の子、僧都たり今鏡一四四　藤原實能の子、母は藤原通季の女廊の御方たり今鏡一五五

こうえん　公演　衛の懿公に殉す著三八

こうきう　孔丘　こうし　孔子著

こうけん　公顯　高倉院が嚴島に行幸ありて繪會を行へる時結願の導師となる平家一五七　雲ゐよりの歌を詠ず平家一六六

こうざん　唐衡山　聖德太子の前生は唐の衡山にあり水四一　聖德太子、小野妹子を衡山に遣す水四一

こうし　孔子　帽子叟と問答す宇治一三　仁義の道を履む著六三　懿德天皇の三十二年に歿す水九　綏靖天皇の時、支那に生る正四四

こうせうてんなう　孝昭天皇　懿德第一の御子、母は天豐津媛なり水九

こうせん　勾踐　范蠡勾踐の爲に會稽の耻を雪ぐ平治八六

こうたうのないし　勾當內侍　春は花の歌を妹に贈る著四四　雁がねにの歌を後醍醐天皇に上る著四四　いにしへをの歌を後醍醐天皇に上る著四四

ごうだてんなう　後宇多天皇　月見の遊を催す中二　嵯峨殿に幸す中三　嵯峨殿より還幸す中三　土御門少將をして左中將を訪はしむ中四　思ひやるの歌を左中將に贈る中四　音樂の遊を催す中六　位を伏見天皇に禪り劍璽を授く中三五　謎を作りて遊ぶ徒四四　藤原佶子の御子たり增八四　和氣氏成、同春成、東宮後宇多の病に侍す增一〇五　龜山天皇、東宮後宇多の御病の祈をなす增一〇五　定實、東宮後宇多に灸治を行ふ增一〇六　龜山天皇、後宇多に讓位す增一〇七　大嘗會を行ふ增一〇八　御禊を行ふ增一〇八　蒙古襲來す增一〇八　後深草の皇子伏見を後宇多の太子とす增二〇　龜山院、後宇多と親和す增二〇　藤原兼平、後宇多の加冠を行ふ時、基顯理髮の後、藤原信嗣總角の役を勤む增二六　石清水の社に行幸す增二六　龜山殿に朝覲す增二六　賀茂の社に行幸す增二六　女御更衣まゐらず增二九　儉約の制を布く增二三

蒙古の襲來を伊勢大神宮に告ぐ增二四　近衛殿に行幸す增二五　山法師日吉の神輿を宮中にふりすう增二五　萬里小路の內裏に遷る增二五　通成の第に滯留す增二五　東の御方基子を寵す增二五　北山の准后貞子九十の賀に笛を吹く增二三　行く末をの歌を詠ず增二三　北條氏より讓位を促さる增二四　伏見天皇に讓位し太上天皇と稱す增二五　大政を執る增二七　中納言典侍の腹の皇子內親王を愛す增二五　龜山法皇の葬送に供奉す增二五　龜山法皇の喪に服す增二四　特に玲子內親王を寵す增二七　そのかみにの歌を詠ず增二七　藤原瑣子を寵す增二七　遊義門院玲子の佛事を行ふ增二六　女房を近づけず增二六　密宗を學ぶ增二六　如法經を寫す增二六　出家す增二六　政を攝す增二六　我すめばの歌を詠ず增二四　安福殿にて歌合を催す增二六　後醍醐天皇法皇に朝覲す增二七　小大納言、讃岐、生駒、新兵衛、廉子、夏引、いはねを、少將の內侍、尾張の內侍、青柳、今參等法皇の舞樂に參る增二六　公泰、兼季、壽王、後醍醐天皇、兼季、實衡、大宮大納言、公賢、右宰相中將光忠、實泰、冬忠等後宇多法皇の舞樂の後宴にあそびす增二六　藤原定房、法皇の命を奉じて鎌倉に使す增二六　藤原定房、院政を後醍醐天皇に讓る增二六　性圓法親王に莊園御牧を賜ふ增二七　東宮邦良に治世の要を遺勅す增二七　後醍醐と東宮邦良と內相和せざるを歎く增二七　病重し增二七　崩ず增二七　爲藤に續後拾遺集を撰せしむ增二七　邦良親王、後宇多の佛事を行ふ增二七　後醍醐天皇、後宇多の佛事を大多勝院に行ふ增二七　後醍醐天皇、隱岐にて夢に後多宇院に逢ふ增二七　卽位す龜山天皇の皇子、母は藤原收子たり正二〇　後二條天皇の崩後世を厭うて嵯峨の大覺寺に隱棲す正二〇　賢明にして文學に達す正二〇　玲子內親王の薨去を悲みて出家し禪助を戒師として東寺にて灌頂を受く正二〇　位を遁る正二〇　崩す正二五　後二條天皇は後宇多の第一皇子たり正二四　後醍醐天皇は後宇多の第二皇子たり正二五　稽古の君たり眞言を學び禪助につきて灌頂を受く正二五

こうでん　功田　功に從ひ大上中下の四級に分ちて田地を賜ふ正二四

こうとくこう　恒德公　ためみつ　藤原爲光大鏡

こうとわう　江都王　藤原成通、江都王と稱せらる今鏡一五五

こうのじじゆう 江侍從　紫式部江侍從を評す紫四　あやめの草はありながらといふ上の句を詠じて辨のめのとと連歌す徒六　むらさきの丶歌を詠ず今鏡六　わが身にはの歌を詠ず今鏡七三

こうのそち 江帥　ただふさ　大江匡房今鏡

こうばいどの 紅梅殿　燒亡す平家四七

こうばいのおんかた 紅梅　御方　紅梅君の中の君たり源一〇七　匂宮紅梅の御方を戀ふ源一〇七

こうばいのきみ 紅梅君　頭中將(一)の二郎君、母は右大臣(二)の四の君なり源三一　容貌美麗なり源三一　霞だにの歌を詠す源五四　恨めしやの歌を詠す源四一　按察大納言たり源八四　眞木柱の上と通して北の方となし大夫を設く源八四　頭中將(一)の次郎たり源八四　麗景殿女御(四)この君の姫君たり源八四　匂宮紅梅を贈る源八三　心ありての歌を匂宮に贈り中の君を嫁せんとを諷す源八三　もとつ香の丶歌を匂宮に贈る源八四　匂宮花の香にの歌を贈る源八四　右大臣に任す源八〇　任大臣の大饗を行ふ源八二　紅梅の御方は、紅梅の君の中の君たり源一〇七　世のつねの丶歌を詠す源一〇九　女等打集りて其人物を批評す無二六

こうばいのきみのなかのきみ 紅梅君中君　紅梅御方源

こうばいのれんかた 紅梅御方源

こうばいのだいなごん 紅梅君無　紅梅大納言　こうばいのきみ

こうふくじ 興福寺　松翁この寺に詣づ芳園　隆覺此の別當となる著三　隆覺この寺を攻む著三　春日大明神此の寺の僧徒を助く著三　不比等この寺を山科より奈良に移す水三六　額打のことによりて延暦寺と爭ふ平家三五　延暦寺の僧徒と爭鬪す平家三五　園城寺に通牒し以仁王の令旨を奉して平清盛を討たんとに同意す平家一六　僧徒等以仁王の令旨を奉し平等院に合戰せんとし途に以仁王敗北のことをきゝて止む平家一三　平清盛が討手を向けたることを聞きて蜂起す平家二四一　燒く平家二四三　藤原不比等の御願、藤原氏累代の寺たり平家二四四　不比等之を平城に移す正五〇

こうふくじのそうと 興福寺僧徒　延暦寺の僧徒と爭鬪す平家三五　源頼朝、平重衡を僧徒の請により源頼兼をして奈良に護送せしむ平家三三

こうぼふだいし 弘法大師　嵯峨天皇大疫の流行を憂ひ金字の心經を書寫し供養せしめらる著六　嵯峨天皇と筆蹟の憂劣を爭ふ著四五　内裡南面三門の額を書す著四六　五筆和尚と稱せらる著三〇　玉造小町壯衰書を著す徒九　藤原道長、大師の再生と稱せらる大鏡一六三　讃岐より京に上る水七　渡唐す水七　口手足五行並び書す水七　應天門の額を書く水七　眞言宗を弘む水七　寂す水四　平清盛、大師の示現を蒙りて嚴島明神を修理し且つこれを信仰す平家一六　高岳親王、大師の弟子となる正七　渡唐の時五筆の藝を施す正七　潟瓶たり正七　五日に生る正六　延暦二十三年勅を承けて唐に到る正六

こがう 小督　藤原隆房小督に通ず平家三五　高倉院に召されし後も藤原隆房尚慕ふ平家三五　平德子、高倉院に參らせて妃となす平家三五　藤原高倉院に召れてより藤原隆房と絶つ平家三五　重憲の女にして禁中第一の美人、琴の名手たり平家三五　宮中を脱れ出でたる後、高倉院悲歎憂鬱す平家三四　平清盛小督を憎む平家三四　平清盛に憎まれしを知り密に宮中を遁れ出て丶失跡す平家三四　藤原隆房思ひかねの歌を贈る平家三四　高倉院仲國をして嵯峨野に尋ねしむ仲國尋ねて之を得たり平家三五　平清盛、捕へて出家せしむ平家三六　高倉院の召により嵯峨野より再び出て丶宮中に入り寵を受けて範子内親王を生む平家三六　平清盛の命により出家して嵯峨野に住す平家三六

ごがついつか 五月五日　くもりくらしたるいとをかし枕九　菖蒲を葺くと年中行事たり陸奥國にては薦を葺く今鏡三三

こがはでら 粉河寺　光仁天皇之を建立す水六

こがらす 小烏　平貞盛以來平家重代の大刀にて嫡子相傳す平家四九

こきでん 弘徽殿　嵯峨院の女宮弘徽殿に居る狹七　狹衣中將女二宮と此に契る狹七　嵯峨院女一宮後一條院の女御となりて弘徽殿に住す狹二〇六　一品宮(二)入内して弘徽殿に居り狹三三

こきでんのおほぎさき 弘徽殿大后　こきでんのにようご　弘徽殿女御(二)源

こきでんのにようご(一) 弘徽殿女御　右大臣(二)の姫ぎみにして桐壺帝の女御、朱雀院の御母たり源三　桐壺更衣及び源氏の君が桐壺帝

に寵あるを妬む源二　桐壺帝女御を憚る源二　源氏の君始めて女御に謁す源二　桐壺帝の女三宮、女御の姫君たり源一六五　威を恣にす源三〇三　曹子を弘徽殿より梅壺に移す源三〇二　大納言(一)は右大臣(一)の子女御の兄たり源三三　右大臣(一)源氏君が朧月夜内侍のかみと密會せるとを發見して之を女御に告ぐ源三四　源氏君が朧月夜の内侍のかみと密通せるとを聞きて源氏の君を憎む源三四　朱雀院、源氏君の罪を赦さんとをこの女御にはかる源三五　朱雀院が源氏の君の罪を免さんとするを諫止す源三五　病む源三五　頭中將(一)女御に雲井雁を托す源三九　頭中將(一)女御を訪ふ源三九　頭中將(一)、雲井雁のとによりて女御を恨む源三九　夕霧を雲井雁のとに就きて訓戒す源三九　頭中將(一)雲井雁を托したるを謝して自亭に迎ふ源三九　雲井雁と別を惜む源四〇　夕霧の爲めに元日の裝束を調ふ源四〇　冷泉院女御に朝覲す源四〇　宇治八宮を桐壺帝の春宮に立てんとして成らず源八七

こきでんのにようご(一)　弘徽殿女御　頭中將(一)の姫君たり源二四　冷泉院の女御となりて入内す源二四　前坊姫宮と繪合の遊びす源三八　冷泉院女御を寵す源三四　頭中將(一)、女御に近江君を托す源四六　近江君、消息を贈る源四六　近江君草若みの歌を贈る源四六　中納言君(一)常陸なるの歌を女御に代りて近江君に贈る源四九　近江君、内侍のかみたらんとを依頼す源五〇　玉蔓に消息を贈つて鬚黒君の大姫君の入内を勸む源八六　鬚黒君の大姫君と寵を爭うて隙あり源八九

こきでんのにようご　弘徽殿女御　をんないちのみや　嵯峨院女一宮狭

ごきでんのにようご　弘徽殿女御　もとこ藤原源子著

こきでんのにようご　弘徽殿女御　よしこ藤原義子枕

こきでんのにようご　花山弘徽殿女御　花山院、女御の死を悼みて出家す正九

こぎみ(一)　小君　衛門督(一)の子、空蟬の弟たり源六　源氏の君に仕ふ源四四　源氏君の文を空蟬に取り次ぐ源四四　源氏君見し夢をの歌を小君に托して空蟬に贈らす源四四　源氏の君を誘ひて中川の第に赴く源四八　源氏君空蟬に面會すべきを小君に依頼す源四八　源氏の君を空蟬の寢所に導く源五一　源氏君、小君を具して中川第より二條院に歸る源五一　空蟬に源氏の君が詠みたる空蟬のといへる歌を示す源四四　空蟬、小君が源氏君を寢所に誘へるを責む源四四　源氏君小君に托してほのかにもの歌を軒端荻に贈る源八三　衛門佐たり源三〇　源氏君、小君を空蟬に使して消息を贈る源三二

こぎみ(二)　小君　陸奥守の子たり源一三八　薫君の命を奉じて浮舟を訪ふ源一四一　小野僧都、小君を小野尼君に紹介す源一四一　薫君、浮舟に消息を小君に托して贈る源一四四

こきんしふ　古今集　女等打集りて批評す無四四

ごきやうごくどの　後京極殿　よしつね藤原良經著

こくだちのひじり　穀斷聖　不實露現す宇治二〇九

こくふ　遠江の國府　源親行此の地にて浪の音もの歌を詠ず東二〇

こくふ　伊豆の國府　源親行此所に至る東一六

こくふ　國府　尾張の國に在り增基此所に宿りてねらるやとの歌を詠ず庵一五

こくふ　越後國府　木曾義仲國府の兵五萬余騎を派す平家二八

こくふ　越前國府　木曾義仲、國府に家の子郎等を集めて評定す平家三〇三

ごくらくじ　極樂寺　頭中將(一)夕霧と共に詣づ源五九

ごくらくじ　極樂寺　藤原兼通建立す宇治二

ごくらくじ　極樂寺　藤原基經建つ大鏡一六

こくりうじ　黑龍寺　親長建立す宇治六

こけきみ　こけ君　あきのぶ　藤原顯信大鏡

こころよげなるもの　心地よげなるもの卯杖のことぶき枕四四

こころのそぞのが　九十賀　藤原貞子行ふ增二六　北山の准后貞子、九十賀を行ふ增二七

こころづきなきもの　心つきなきもの　物へ行き寺へも詣づる日の雨枕一四

こころときめきするもの　心ときめきするもの　雀のこがひ枕四四

こころみのだい　試題　陶英朱雀の神泉の紅葉の賀に試みの題を給り獨舟に乘せられ文を作り進士にあげられ方略の宣旨下る宇津二九

こころもとなきもの　心もとなきもの　人の許にとみの物縫ひにやりて待つ程枕一四

こころゆくもの　心ゆくもの　よくかいた

る女繪の詞をかしうつゝけてれほかる枕三四

こさいしやう 小宰相 一品の宮(一)の女房たり狭一六三 常盤尼君の女たり狭一六三 狭衣中將と語る狭一六三 長門守の子にあらず狭一六三 常盤尼君、小宰相に後事を托す狭三四 飛鳥井姫君の書き遺したる繪及び一品の宮(二)の產衣などの入りたる櫃を內裏に持參して狭衣中將幷に一品の宮(二)に示す狭三五

こさいしやう 小宰相 見田時員、小宰相に平通盛の戰死を告ぐ平家四三〇 平通盛戰死のことを見田時員よりきゝて悲歎す平家四三〇 屋島へ渡る途舟中海に投じて死す平家四三〇 藤原憲方の女、統子內親王の宮に仕ふ 禁中第一の美人たり後平通盛に嫁す平家四三四 統子內親王歌を小宰相に代りて平通盛に贈る平家四三四 平通盛我が戀はの歌を贈る平家四三六

こさいしやうのきみ 小宰相君 今上の女一の宮の女房たり源二六二 歌を薫君におくる源二六二 薫君、懸想す源二六二 歌を薫君より受く源二七七 明石中宮、薫君に小宰相君をして浮舟が小野尼君に救はれしを告げしむ源三三三

こさいしやうのつぼね 小宰相局 後深草天皇より鳴門中將の北の方の書きし「を」文字の意義を問はる鳴四四 藤原家隆の女たり鳴四四 藤原家隆の女たり著一七二

ごさがてんなう 後嵯峨天皇 歌を藤原實氏に贈る著一七七 石清水八幡の示現を蒙る著一七七 土御門天皇の皇子たり著一七七 北條氏の計らひによりて卽位す著一七七 大井の山庄に仙宮を造營す著一六六 密に鳴戸中將の北の方を召す著一六六 歌を鳴戸中將の北の方に贈る著一七七 祝部成茂が七十の賀の時歌を贈る著一四五 源通方、後嵯峨を養育す増三五 母は通宗の女通子たり増四四 北條泰時、後嵯峨を冊立す増四三 最勝講を行ふ増四六 後深草の三夜五夜の儀式を行ふ増四九 宗尊親王五十日の儀を行ふ増五〇 後深草の五十日の儀を行ふ増五〇 石清水の社に行幸す増五三 賀茂の社に行幸す増五三 土御門院十三年の法事を行ふ増五三 後深草に讓位す増五四 いはしみづの歌を詠ず増五六 宇治に御幸す増五六 實氏の山莊に行幸す増五七 影うつすの歌を詠ず増五七 川舟のの歌を詠ず増五八 天王寺、住吉に詣づ増五九 熊野川の歌を詠ず増五八 吉田院に行幸す増六六 嵯峨の龜山の麓に山莊を造る増六六 鳥羽殿に蹴鞠す増六六 淨金剛院、多寶院を建つ増六七 大多勝院を建つ増六七 爲氏、房名、基具、隆行、顯方、道世、時繼、邦經、親嗣、成敏、伴氏、親朝、具實、隆親、定雅、實雄、顯定、實藤、通成、定嗣、師繼、雅家等後嵯峨上皇の宇津の行幸に供奉す増六六 兼經の宇治の第に行幸す増六六 公相、平棟子、大納言の典侍等、後嵯峨上皇の宇治の行幸に供奉す増七〇 まきの島、梅の島、橘の小島を覩る増七一 藤原兼經、上皇に手本、和琴、馬を奉る増七一 兼經に馬を賜ふ増七一 兼經の宇治の第より還御す増七一 百官の朝賀を受く増七二 承明門院へ行幸す増七二 藤原公相、同實雄、同兼經、同兼平、同忠家、同實基、同顯家、同道良、爲常、良敎、資季、冬忠、實藤、公光、道成、定嗣、道行、師繼、顯朝、後嵯峨上皇に朝賀す増七二 曦子內親王、後嵯峨の皇后たり増七四 藤原實氏、今出川の第より歌を上る増七五 色も香もの歌を詠ず増七五 火災を避く増七六 石清水に籠る増七七 深く神佛を敬す増七七 陰陽師をして火災を占はしむ増七七 蓮華王院の供養に行幸す増七七 御修法祈禱を行ふ増七七 賀茂、平野、北野に行幸す増七七 清涼寺、法輪、太秦に行幸す増七七 基平、家經、良敎、資季、通成、師繼、通雅、公藤、長雅、通敎、經俊、時繼、資平、宗雅、雅時、具氏、實經、兼平、家經等後嵯峨上皇の龜山殿に於ける如法經供養に列す増八〇 後嵯峨上皇の龜山殿にて如法經供養の時、通賴、房名、公藤、宗雅笙を吹き師親、相保、長雅、相保、笛を吹き、實成、光顯篳篥を吹く増八〇 龜山殿にて御如法經供養を行ふ増八〇 基平、小直衣馬等を奉る増八一 大納言の二位殿を寵す増八一 後嵯峨の龜山殿に於ける如法供養齋會の時、後深草上皇琵琶を彈じ、大納言の二位殿、良敎、笋を彈ず増八一 聖武天皇に比せらる増八一 基平の日野の山莊に行幸す増八一 御經を北野に奉納す増八一 三部經を八幡に奉納す増八一 梅が枝にの歌を詠ず増八八 龜山殿にて歌合をなす増八八 如法經を淨金剛院に納む増八八 延喜帝御筆の手本を龜山に上る増八八 龜山殿にて如法經を書寫す増八八 如法經の十種供養を行ふ増八八 外よりはの歌を詠ず増八九 續古今集の竟宴を行ふ増八八 經任、上皇の御使として鎌倉に下る増九〇 二條富小路殿に御遊をなす増九一 後宇多の五十日の儀を行ふ増九二 試樂を行ふ増九二 五十の賀を行ふ増九二 富小路殿に舞樂を觀る増九五 後深草上皇、藤原姞子、藤原公子、覺助法親王、宗尊親王、性助、最助法親王、綜子內親王、藤原貞子、平棟子、基平、基忠、家經、隆親、良敎、通成、師繼、道雅、基具、公藤、長雅、道賴、隆顯、信嗣、有資、經平、經俊、具氏、公季、具守、公雄、實雄、經